福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告

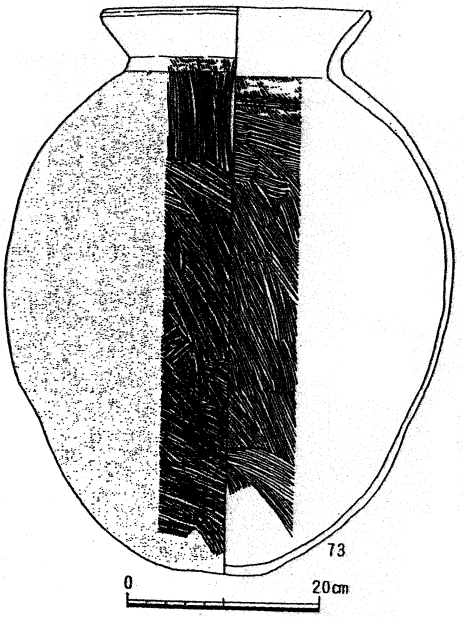
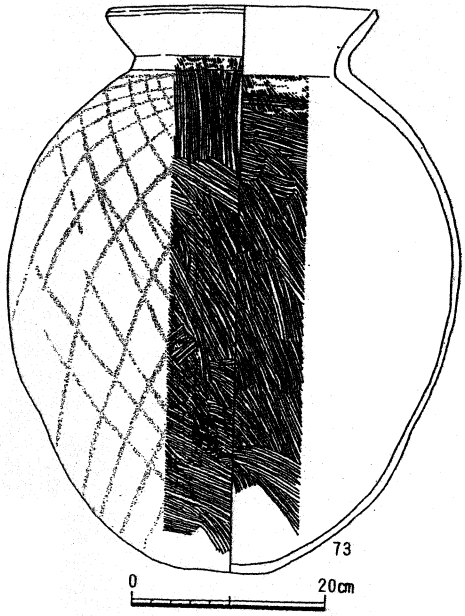
雀居遺跡ⅰ

福岡市埋蔵文化財調査報告書第６３５集

２０００

福岡市教育委員会

正　誤　表

		誤		正
◦例言	第7次調査 調査期間	940735～949031	⇒	940801～941226
◦P75	Fig.67		⇒	

雀居遺跡 5

福岡市埋蔵文化財調査報告書第６３５集

遺跡調査番号　9435
　　9506
遺跡略号　SAS 7
　　SAS 9

２０００

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから東アジアとの交流が盛んに行われ、その結果として、今日の国際感覚に優れた都市として発展してきました。昨今、国際化が叫ばれ、特にアジアに開かれた国際都市福岡を目指して努力し、文化、交通、経済の情報発信基地の地位を築いているところです。また福岡空港も国際化の波が訪れ、乗降客数、物流の著しい増加に伴い、その機能が充分に発揮できなくなろうとしています。そのため新たな海上空港の構想も検討されています。しかし、当面の需要に対応するため空港の西側地区が整備がなされています。　今回調査を実施しました地区は国際線の空港設備の移転に伴う埋蔵文化財調査であります。第４次・第５次調査では縄文時代の終り頃から弥生時代の後期にかけての集落跡で農耕具をはじめとする多くの木製品や大型掘立柱建物等貴重な文化財が発見されました。大型組合せ式机や短甲等あまり類例の無い木製品は当時の技術水準の高さを垣間見ることができました。今回報告する地点は弥生時代前期の墳墓と古墳時代前期の集落跡です。弥生時代の土壙墓からは人骨が良く残って出土し、弥生人を復原するにあたり貴重な資料となりました。古墳時代前期の集落は沖積地の微高地上に築かれ、その周囲に大量の土器等を投棄していました。濠は巡らせていませんが環濠的性格をもっていたものでしょう。平成３年度から調査を実施してまいりましたが、発掘調査は平成１０年度で終了いたしました。長い期間にわたり、暖かく見守っていただいた運輸省第四港湾建設局の皆様をはじめ福岡空港の関係者の方々のご協力をもちまして、ここに報告書を刊行することができました。皆様方に感謝の意を表するとともに、本書が文化財保護の普及、教育等に活用いただければ幸甚に存じます。

平成１２年３月２４日

福岡市教育委員会

教育長　西　憲一郎

例　　言

1．本書は福岡空港西側整備に伴い発掘調査を実施した福岡市博多区雀居（福岡空港西側地区）に所在する雀居遺跡の第７次・第９次の調査報告書である。
2．発掘調査は運輸省第四港湾建設局の委託を受けて福岡市教育委員会が実施した。
3．発掘調査で検出した遺構は土壙、井戸、竪穴住居址は第７次・９次調査を通し番号とした。ただし欠番が幾つかある。溝状遺構だけは区・面毎に番号を付した。
4．本書の遺構全体図及び出土石器の調査の中でSCは住居跡、SKは土壙、SEは井戸、SDは溝、SBは掘立柱建物、SRは土壙墓の略号を用いた。
5．本書に使用した遺構実測図の作成はおもに調査担当者及び調査員が行い、人骨の実測は九州大学の中橋先生とその研究生の方々による。遺物の実測図のうち主に土器を濱石正子、撫養久美子、久住猛雄、石器は二宮忠司、大庭友子、その他を松村・白井が行った。
6．本書に使用した図の製図は濱石正子、撫養久美子、大庭友子が行った。
7．本書に使用した遺構の写真撮影は松村・白井、遺物写真撮影は松村が行った。
8．本書の執筆は主に松村が行い、石器を二宮忠司、大庭友子、他に付論とした「雀居遺跡出土の弥生前期人骨」を中橋先生にご執筆いただいた。
9．本書に使用した方位はすべて磁北である。
10．本書に関する実測図・写真の記録、遺物類は平成11年度中に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
11．本書に関するデーターは以下の通りである。

遺跡調査地地籍　福岡市博多区雀居（福岡空港内）　　分布地図番号　23　雀居

調査次数	調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間	担当者
第７次調査	９４３５	ＳＡＳ－７	3,500㎡	940735～949031	松村・白井
第９次調査	９５０６	ＳＡＳ－９	8,000㎡	950508～960325	松村

本 文 目 次

1．はじめに

（1）調査に至る経過 …… 1

（2）調査の組織 …… 1

2．遺跡の位置と環境 …… 3

3．調査の記録

（1）第7次調査

1）土層 …… 6

2）土壙墓・甕棺墓の調査 …… 6

3）土壙の調査 …… 16

4）井戸の調査 …… 22

5）溝状遺構の調査 …… 31

（2）第9次Ⅰ区Ⅱ面の調査

1）土壙の調査 …… 48

2）竪穴住居跡の調査 …… 55

（3）第9次Ⅱ区Ⅰ面の調査

1）竪穴住居跡の調査 …… 57

2）掘立柱建物の調査 …… 63

3）土壙の調査 …… 63

4）井戸の調査 …… 87

5）溝状遺構の調査 …… 89

（4）第9次Ⅱ区Ⅱ面の調査

1）土壙の調査 …… 118

2）竪穴住居跡の調査 …… 145

3）ピットの調査 …… 147

4）溝状遺構の調査 …… 150

（5） 出土石器の調査

1）第7次調査の石器 …… 153

2）第9次調査の石器 …… 163

4．付論 雀居遺跡（第7・9次調査） …… 183

出土の弥生前期人骨 九州大学 中橋 孝博

挿 図 目 次

Fig. 1　周辺遺跡分布図(1／25,000) …… 2

Fig. 2　遺跡周辺地形測量図及び調査地点位置図(1／8,000) …… 4

Fig. 3　第７次調査遺構配置図(1／300) …… 5

Fig. 4　土層実測図(1／80) …… 6

Fig. 5　土壙墓・甕棺墓配置図(1／100) …… 7

Fig. 6　１～４号土壙墓実測図(1／20) …… 8

Fig. 7　５・６号土壙墓実測図(1／20) …… 9

Fig. 8　７～９号土壙墓・５号土壙墓副葬小壷実測図(1／20, 1／3) …… 10

Fig. 9　甕棺墓実測図(1／20) …… 11

Fig.10　甕棺実測図（１～４号）(1／4, 1／8) …… 12

Fig.11　２号甕棺墓副葬小壷実測図(1／3) …… 13

Fig.12　５～７号甕棺実測図(1／4, 1／8) …… 14

Fig.13　７・８号甕棺墓実測図(1／20) …… 15

Fig.14　８号甕棺実測図(1／8) …… 15

Fig.15　１～７号土壙実測図(1／40) …… 17

Fig.16　土壙出土土器実測図１（１～６号）(1／4) …… 18

Fig.17　８～17号土壙実測図(1／40) …… 19

Fig.18　土壙出土土器実測図２（６～15号）(1／4) …… 20

Fig.19　土壙出土土器実測図３（16・17号）(1／4) …… 21

Fig.20　井戸実測図（1～5号）(1／40) …… 23

Fig.21　井戸出土遺物実測図1（1・2号）(1／4) …… 24

Fig.22　井戸出土遺物実測図2（3・4号）(1／4) …… 25

Fig.23　井戸出土遺物実測図3（4号）(1／4) …… 26

Fig.24　井戸出土遺物実測図4（4号）(1／4) …… 27

Fig.25　井戸出土遺物実測図5（4号）(1／4) …… 28

Fig.26　井戸出土遺物実測図6（4号）(1／4) …… 29

Fig.27　井戸出土遺物実測図7（4号）(1／4) …… 30

Fig.28　溝状遺構全体図(1／500) …… 31

Fig.29　1・4号溝状遺構土器出土状況実測図(1／60) …… 32

Fig.30　1号溝状遺構出土土器実測図1(1／4) …… 33

Fig.31　1号溝状遺構出土土器実測図2(1／4) …… 34

Fig.32　1号溝状遺構出土土器実測図3(1／4) …… 35

Fig.33　1号溝状遺構出土土器実測図4(1／4) …… 36

Fig.34　1号溝状遺構出土土器実測図5(1／4, 1／6) …… 37

Fig.35　1号溝状遺構出土土器実測図6(1／4) …… 38

Fig.36　1号溝状遺構出土土器実測図7(1／4) …… 39

Fig.37　1号溝状遺構出土土器実測図8(1／2, 1／4) …… 40

Fig.38　1号溝状遺構出土土器実測図9(1／4, 1／6) …… 41

Fig.39　2号溝状遺構出土土器実測図1(1／4) …… 43

Fig.40　2，3，4号溝状遺構出土土器実測図(1／4) …… 44

Fig.41　4号溝状遺構出土土器実測図1(1／4) …… 45

Fig.42　4号溝状遺構出土土器実測図2(1／4) …… 46

Fig.43　4号溝状遺構出土土器実測図3(1／4) …… 47

Fig.44　第9次調査Ⅰ区Ⅱ面の遺構配置図(1／300) …… 48

Fig.45　17～23号土壙実測図(1／40) …… 50

Fig.46　17～27号土壙出土土器実測図(1／4, 1／6) …… 51

Fig.47　24～29号土壙実測図(1／40) …… 52

Fig.48　30～39号土壙実測図(1／40) …… 53

Fig.49　28～37号土壙・1号竪穴住居跡出土土器実測図(1／4) …… 54

Fig.50　1号竪穴住居跡実測図(1／80) …… 55

Fig.51　第9次調査Ⅱ区Ⅰ面の遺構配置図(1／300) …… 56

Fig.52　竪穴住居跡実測図（2～7号）(1／80) …… 58

Fig.53　2～5号竪穴住居跡出土遺物実測図(1／6, 1／4) …… 59

Fig.54　竪穴住居跡実測図（8～11号）(1／80) …… 60

Fig.55　竪穴住居跡出土遺物実測図(1／4) …… 61

Fig.56　竪穴住居跡実測図（12・13号）(1／80) …… 62

Fig.57　1号掘立柱建物実測図(1／80) …… 63

Fig.58　51～56号土壙実測図(1／40, 1／80) …… 65

Fig.59　51～54号土壙出土土器実測図(1／4) …… 66

Fig.60　57～65号土壙実測図(1／40) …… 67

Fig.61　56～59号土壙出土土器実測図(1／4) …… 68

Fig.62　59号土壙実測図(1／40) …… 69

Fig.63　59号土壙出土土器実測図1(1／4) …… 70

Fig.64　59号土壙出土土器実測図2(1／4) …… 71

Fig.65　59号土壙出土土器実測図3(1／4) …… 73

Fig.66　59号土壙出土土器実測図4(1／4) …… 74

Fig.67　59号土壙出土土器実測図5(1／4, 1／8) …… 75

Fig.68　59号土壙出土土器実測図6(1／4) …… 76

Fig.69　59号土壙出土土器実測図7(1／4, 1／8) …… 77

Fig.70　59号土壙出土土器実測図8(1／4) …… 78

Fig.71　62・64号土壙実測図(1／40) …… 79

Fig.72　60～62号土壙出土土器実測図(1／4) …… 80

Fig.73　62・63号土壙出土土器実測図(1／4) …… 81

Fig.74　63号土壙出土土器実測図(1／4) …… 82

Fig.75　64・65号土壙出土土器実測図(1／4) …… 83

Fig.76　66～71号土壙実測図(1／40) …… 84

Fig.77　66号土壙出土土器実測図(1／4) …… 85

Fig.78　67～70号土壙出土土器実測図(1／4) …… 86

Fig.79　8～10号井戸実測図(1／30) …… 87

Fig.80　8～10号井戸出土土器実測図(1／4) …… 88

Fig.81　1号溝状遺構東側土器出土状況実測図(1／40) …… 90

Fig.82　1号溝状遺構西側出土土器実測図1(1／4) …… 91

Fig.83　1号溝状遺構西側出土土器実測図2(1／4) …… 92
Fig.84　1号溝状遺構西側出土土器実測図3(1／4) …… 93
Fig.85　1号溝状遺構西側出土土器実測図4(1／4) …… 94
Fig.86　1号溝状遺構西側出土土器実測図5(1／4) …… 95
Fig.87　1号溝状遺構西側出土土器実測図6(1／4) …… 96
Fig.88　1号溝状遺構西側出土土器実測図7(1／4) …… 98
Fig.89　1号溝状遺構西側出土土器実測図8(1／4) …… 99
Fig.90　1号溝状遺構西側出土土器実測図9(1／4) …… 100
Fig.91　1号溝状遺構西側出土土器実測図10(1／4) …… 101
Fig.92　1号溝状遺構西側出土土器実測図11(1／4) …… 102
Fig.93　1号溝状遺構西側出土土器実測図12(1／4) …… 103
Fig.94　1号溝状遺構西側出土土器実測図13(1／8) …… 104
Fig.95　1号溝状遺構西側出土土器実測図14(1／6) …… 105
Fig.96　1号溝状遺構西側出土土器実測図15(1／6) …… 106
Fig.97　1号溝状遺構西側出土土器実測図16(1／4, 1／6) …… 107
Fig.98　1号溝状遺構西側出土土器実測図17(1／4) …… 108
Fig.99　1号溝状遺構西側出土土器実測図18(1／4) …… 109
Fig.100　1号溝状遺構西側出土土器実測図19(1／4) …… 110
Fig.101　1号溝状遺構西側出土土器実測図20(1／4) …… 111
Fig.102　1号溝状遺構東側出土土器実測図21(1／4) …… 112
Fig.103　1号溝状遺構東側出土土器実測図22(1／4) …… 113

Fig.104 ピット・溝状遺構実測図(1／30, 1／60) …… 114

Fig.105 ピット・溝状遺構出土土器実測図(1／4) …… 115

Fig.106 14号溝状遺構出土土器実測図(1／4) …… 116

Fig.107 第９次調査Ⅱ区Ⅱ面の遺構配置図(1／300) …… 117

Fig.108 72号～77号土壙実測図(1／40, 1／60) …… 119

Fig.109 72号～79号土壙出土土器実測図(1／4) …… 120

Fig.110 78号～89号土壙実測図(1／40) …… 121

Fig.111 80号～85号土壙出土土器実測図(1／4) …… 122

Fig.112 88号･90～98号土壙実測図(1／40) …… 123

Fig.113 87号～93号土壙出土土器実測図(1／4) …… 124

Fig.114 99号～109号土壙実測図(1／40) …… 126

Fig.115 94号～109号土壙出土土器実測図(1／4) …… 127

Fig.116 105号～121号土壙実測図(1／40) …… 128

Fig.117 110号～118号土壙出土土器実測図(1／4) …… 129

Fig.118 105号～121号土壙実測図(1／40) …… 130

Fig.119 119号～126号土壙出土土器実測図(1／4) …… 131

Fig.120 122号～137号土壙実測図(1／40, 1／60) …… 132

Fig.121 127号～133号土壙出土土器実測図(1／4) …… 133

Fig.122 136号～143号土壙実測図(1／40) …… 134

Fig.123 136号～143号土壙出土土器実測図(1／4) …… 135

Fig.124 144号～149号土壙実測図(1／40) …… 136

Fig.125 144号土壙出土土器実測図(1／4) …… 137

Fig.126 147号～157号土壙実測図(1／40) …… 138

Fig.127 145号～152号土壙出土土器実測図(1／4, 1／8) …… 139

Fig.128 156号～164号土壙実測図(1／40) …… 140

Fig.129 153号～162号土壙出土土器実測図(1／4) …… 141

Fig.130 165号～174号土壙実測図(1／40) …… 142

Fig.131 164号～172号土壙出土土器実測図(1／4) …… 143

Fig.132 169号土壙出土土器実測図(1／4) …… 144

Fig.133 14号～17号竪穴住居跡・出土遺物実測図(1／80, 1／4) …… 145

Fig.134 ピット・ピット出土土器実測図(1／30, 1／4) …… 146

Fig.135 ピット出土土器実測図(1／4, 1／8) …… 147

Fig.136 ピット出土土器実測図(1／4) …… 148

Fig.137 1～3号溝状遺構実測図(1／60) …… 149

Fig.138 1～3号溝状遺構出土土器実測図(1／4) …… 150

Fig.139 包含層出土土器実測図(1／4) …… 151

Fig.140 包含層出土遺物実測図(1／2, 1／4) …… 152

Fig.141 第7次調査1号溝状遺構出土石器実測図1(1／1, 1／2, 1／3) …… 154

Fig.142 第7次調査1号溝状遺構出土石器実測図2(1／3, 1／4) …… 156

Fig.143 第7次調査土壙・ピット出土石器実測図(1／2, 1／3, 1／4) …… 158

Fig.144 第7次調査包含層出土石器実測図1(1／1, 1／2, 1／3, 1／4) …… 160

Fig.145 第7次調査包含層出土石器実測図2(1／1, 1／2, 1／3) …… 162

Fig.146 住居跡内出土石器実測図1(1／1, 1／2, 1／3) …… 164

Fig.147 住居跡内出土石器実測図2(1／4) …… 165

Fig.148 土壙出土石器実測図1(1／1, 1／2, 1／3) …… 167

Fig.149 土壙出土石器実測図2(1／3, 1／4) …… 169

Fig.150 井戸・ピット・包含層出土石器実測図1(1／1, 1／2, 1／3, 1／4) …… 171

Fig.151 第9次調査1号溝状遺構出土石器実測図1(1／1, 1／4) …… 172

Fig.152 第9次調査包含層出土石器実測図1(1／1, 1／2) …… 175

Fig.153 第9次調査包含層出土石器実測図2(1／1, 1／2) …… 177

Fig.154 第9次調査包含層出土石器実測図3(1／1, 1／2, 1／3, 1／4) …… 178

Fig.155 第9次調査包含層出土石器実測図4(1／1, 1／2, 1／3, 1／4) …… 180

Fig.156 第9次調査包含層出土石器実測図5(1／1, 1／2, 1／3, 1／4) …… 181

図　版　目　次

PL. 1　（上）第７次調査全景（東から）

（下）第７次調査全景（東から）

PL. 2　（上）第７次調査中央全景（南から）

（下）第７次調査北側全景（南から）

PL. 3　（上）第７次調査墳墓群全景（北から）

（下）１・６号土壙墓（北から）

PL. 4　（上）２号土壙墓人骨出土状況（南西から）

（下）２号土壙墓人骨出土状況（北東から）

PL. 5　（上）２号土壙墓（東から）

（下）３号土壙墓（西から）

PL. 6　（上）５号土壙墓（南から）

（下）５号土壙墓副葬小壷

PL. 7　（上）４号土壙墓（東から）

（下）７・８号土壙墓（南から）

PL. 8　（上）１・４号甕棺（南から）

（下）２号甕棺（南から）

PL. 9　（上）４号甕棺（南から）

（下）５号甕棺（南から）

PL. 10（上）６号甕棺（北東から）

（下）７号甕棺（東から）

PL. 11（上）１号土壙（東から）

（下）８号甕棺（東から）

PL. 12（上）５号土壙（南から）

（下）８号土壙（南東から）

PL. 13（上）９号土壙（東から）

（下）12号土壙（北から）

PL. 14（上）15号土壙（東から）

（下）17号土壙（南西から）

PL. 15（上）2号井戸（西から）

（下）3号井戸（西から）

PL. 16（上）4号井戸土器出土状況（西から）

（下）4号井戸（北から）

PL. 17（上）4号井戸下層遺物出土状況

（下）土層

PL. 18（上）第9次調査Ⅰ区Ⅱ面全景（南東から）

（下）第9次調査Ⅰ区Ⅱ面全景（南西から）

PL. 19（上）1号竪穴住居跡（南西から）

（下）1号竪穴住居跡出土鹿角製品

PL. 20（上）25号土壙（西から）

（下）29号土壙（東から）

PL. 21（上）30号土壙（東北から）

（下）32号土壙（東から）

PL. 22（上）第9次調査Ⅱ区Ⅰ面全景（北東から）

（下）竪穴住居跡群南東部（東から）

PL. 23（上）3号竪穴住居跡出土土器

（下）3号竪穴住居跡（南から）

PL. 24（上）2号竪穴住居跡（東から）

（下）4号竪穴住居跡、56号土壙（南東から）

PL. 25（上）6号竪穴住居跡、70号土壙（北西から）

（下）10号竪穴住居跡（北西から）

PL. 26（上）7～9号竪穴住居跡（北西から）

（下）11号竪穴住居跡（南東から）

PL. 27（上）12号竪穴住居跡（北西から）

（下）13号竪穴住居跡（北西から）

PL. 28（上）1号掘立柱建物（西から）

（下）1号掘立柱建物柱出土状況

PL. 29 （上）59号土壙（南から）
（下）57号土壙（南から）
PL. 30 （上）59号土壙土器出土状況（西から）
（下）59号土壙土器出土状況
PL. 31 （上）63号土壙（東から）
（下）68号土壙（北東から）
PL. 32 （上）9号井戸（西から）
（下）1号溝状遺構（東側）
PL. 33 （上）1号溝状遺構遺物出土状況
（下）1号溝状遺構（西側）
PL. 34 （上）第9次調査Ⅱ区Ⅱ面全景（北東から）
（下）169号土壙（東から）
PL. 35 （上）144号土壙（西から）
（下）16号竪穴住居跡（西から）
PL. 36 1～3号甕棺、5号土壙墓、2号甕棺墓副葬小壷、5号甕棺墓副葬小壷
PL. 37 5～8号甕棺
PL. 38 土壙、井戸出土土器（2・3・9・16号土壙、1・2号井戸）
PL. 39 2～4号井戸出土土器
PL. 40 4号井戸出土土器
PL. 41 4号井戸出土土器
PL. 42 4号井戸、1号溝状遺構出土土器
PL. 43 1号溝状遺構出土土器
PL. 44 1，4号溝状遺構出土土器
PL. 45 竪穴住居跡、土壙出土土器（22・52・54・57号土壙、1～3・8・10・13竪穴住居跡）
PL. 46 59号土壙出土土器
PL. 47 59号土壙出土土器
PL. 48 59号土壙出土土器
PL. 49 62～69号土壙出土土器
PL. 50 土壙、井戸出土土器（66・68・71号土壙、8・9号井戸）

PL. 51　井戸、1号溝状遺構出土土器（9・10号井戸、1号溝状遺構）

PL. 52　1号溝状遺構出土土器

PL. 53　1号溝状遺構出土土器

PL. 54　1号溝状遺構出土土器

PL. 55　1号溝状遺構出土土器

PL. 56　1号溝状遺構出土土器

PL. 57　1号溝状遺構出土土器

PL. 58　1号溝状遺構出土土器

PL. 59　1号溝状遺構出土土器

PL. 60　1号溝状遺構出土土器

PL. 61　1号溝状遺構出土土器

PL. 62　1号溝状遺構出土土器

PL. 63　1号溝状遺構出土土器

PL. 64　1号溝状遺構出土土器

PL. 65　1号溝状遺構、Ⅱ面土壙出土土器（1号溝状遺構、112・144号土壙）

PL. 66　1・2・4・8号井戸出土木器、第7次調査出土石器

PL. 67　第7次調査出土石器

PL. 68　第7次調査出土石器

PL. 69　第7次調査出土石器

PL. 70　第9次調査出土石器

PL. 71　第9次調査出土石器

PL. 72　第9次調査出土石器

PL. 73　第9次調査出土石器

PL. 74　第9次調査出土石器

PL. 75　第9次調査出土石器

PL. 76　第9次調査出土石器

1．はじめに

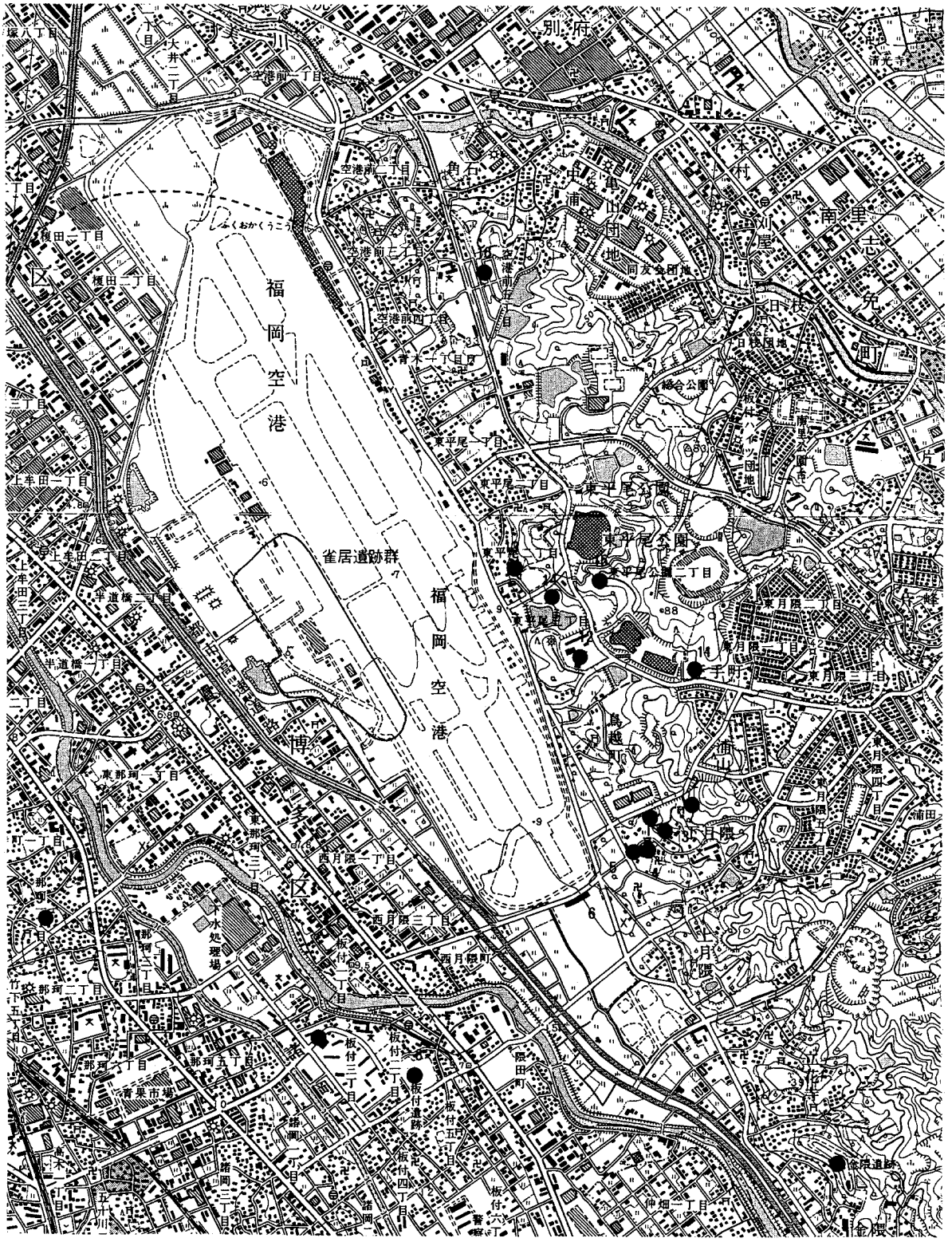
（1）調査に至る経過

近年、国際化が進み、航空機需要は急速な高まりをみせ、さらにはバブル景気により福岡空港の機能が飽和状態に近づき、その解消の為、米軍キャンプ跡地の空港西側地区の整備が計画された。埋蔵文化財の調査開始から10年が過ぎようとしている現在では国際線のターミナルも完成し、アジアに開かれた空の玄関口となっている。

空港が建設された当時は戦時中ということもあり、時代的にも文化財について云々するような時ではなかった。高度成長期になり日本全国で埋蔵文化財の調査が行われ、市民の関心も高まり開発側との調整等の必要性が生じてきた。そのため文化財の周知化の一貫として埋蔵文化財分布地図が作成され、福岡市内の大部分についてはその概要を把握できるようになっていたが、この地区については、空港用地ということもあり遺跡の空白地帯となっていた。空港西側地区の整備が実施されるのに伴い、関係部局と協議を行ない、試掘調査を平成3年度に実施した。その結果三個所の地点から弥生時代、古代の集落、水田跡を確認でき、本調査を実施することとなった。今回調査した地点は古代の集落とされた地区である。

（2）調査の組織

調査委託	運輸省第四港湾建設局			
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	西　憲一郎	町田　英俊（前任）
調査総括	文化財部長	柳田　純孝	平塚　克則（前任）	
	埋蔵文化財課長	山崎　純男	柳田　純孝（前任）	
	埋蔵文化財課第二係長	力武　卓治	山口　譲治（前任）	
調査庶務	文化財整備課長	上村　忠明	柳田　純孝（前任）	
	文化財管理係	河野　淳美	小森　彰（前任）	
	埋蔵文化財課			
	事前審査係長	田中　壽夫		
	事前審査係	宮井　善郎	中村啓太郎	調査担当
	主任文化財主事	松村　道博（現大規模事業等担当主査）		第7次・9次調査
	文化財主事	白井　克也（現東京国立博物館）		第7次調査
試掘調査	主任文化財主事	井澤　洋一		
	埋蔵文化財課第二係	常松　幹夫（現福岡市博物館）		
人骨調査	中橋　孝博（九州大学）　金　宰賢（九州大学）			
調 査 員	濱石　正子　撫養　久美子　大庭　友子			
調査作業	広田熊雄　別府俊美　蒲池雅則　山口守人　小川博　藤川健　村本義雄　井上義也　尾中貞夫　富永利幸　渡辺純男　氷川カツエ　内山和子　奥田弘子　嶋ヒサ子　本多ナツ子　村上エミ子　平田百合子　草場里恵　黒木佐知子　岸原昭子　濱フミコ　堤正子			
整理作業	牟田恵子　飯田千恵子　前原真理　柿本美江　江田のり子　山野祥子　富永優子　稲富良子　池村留美			



1．天神森遺跡３次
2．天神森遺跡２次
3．下月隈遺跡２次
4．下月隈Ｂ遺跡
5．下月隈遺跡３次
6．下月隈Ｃ遺跡
7．板付遺跡66次
8．板付遺跡
9．那珂遺跡
10．金隈遺跡
11．宝万尾東遺跡
12．宝万尾遺跡
13．席田久保園遺跡
14．席田赤穂ノ浦遺跡
15．席田大谷遺跡
16．席田青木遺跡

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

2．遺跡の位置と環境

雀居遺跡は福岡空港西側整備に伴い、事前の試掘調査により遺跡を確認し、平成４年度から発掘調査を開始し、平成10年の第13次調査をもって終了した。また平成４年度に「雀居１」を刊行し、これまで「雀居４」まで刊行されている。

近年周辺の調査も多くなり、周辺の歴史については報告書に記載されているので、最近の調査を中心に簡略に位置と環境についてのべる。雀居遺跡は御笠川の東岸にあたり標高５ｍ前後を測る沖積地に位置する。諸岡丘陵と月隈丘陵に挟まれた低湿地の水田地帯であったが、現在ではほとんど宅地化されている。調査地点はこのような宅地化が進み密集化している中に広大な空間を造りだす福岡空港の南西端、空港内の外周道路の内側にある。大部分が米軍の各施設の跡地であり、平坦地となっているが、当時の建設、造成工事によるものであり、明治時代の地図によると水田の中に微高地が数箇所あり、そこに幾つかの集落が展開してる様相が窺われる。戦時中に空港工事に携わった人々によれば工事中に甕棺や土器が出土したとの事であり、試掘調査前から遺跡の存在が予想されていた。

比恵台地から月隈丘陵に囲まれた地帯には多くの遺跡が立地している。月隈丘陵は空港の東側に展開する低い丘陵で弥生時代から古代、中世に至る多くの遺跡が存在する。その中で空港に隣接するだけでも学校、公園、道路建設に伴い席田遺跡群、天神森遺跡、下月隈遺跡等が調査されている。近年空港南側の緑地が調査され、弥生時代から中世に至る水田跡や集落等をはじめ多くの遺構、遺物が出土し、現在でも調査が進められている。宝満尾では弥生時代前期の貯蔵穴や甕棺を検出し、甕棺から日光鏡が出土し、上月隈遺跡群第５次調査では細形銅剣が出土している。また、久保園遺跡では弥生時代の５間×８間の大規模な掘立柱建物が調査され、赤穂ノ浦遺跡では小銅鐸の鋳型が発見されている。空港の南東隅から150ｍ東の丘陵裾部の天神森遺跡第３次調査では弥生時代の木棺墓が列状に確認できた。20数基が二列に埋葬され、棺外には副葬の小壷が見られた。さらにその南には金隈遺跡がある。弥生時代全期にわたる墓地群で大規模な遺跡ではあるが副葬品は貧弱でゴホウラ製の腕輪があるに過ぎない。雀居第４・５次調査地点は空港敷地内にあり、今回の調査地点の南300ｍに位置し、縄文時代の終りころから弥生時代の後期にかけての農耕具を始めとする多くの木製品や大型掘立柱建物などが確認されている。夜臼式期の溝から機織具と考えられる木製品や無文土器が出土し、当時の大陸文化との交流が窺え、さらには弥生時代後期には環濠集落が築かれ、大型掘立柱建物があり、環濠からは大型の組合せ式机や、繊細な線刻を施す木製短甲等あまり例を見ない遺物が出土し、当時の技術水準の高さを窺うことができる。今回の調査地点では古墳時代前期の集落が調査され、多くの遺物が出土している。このように空港内の微高地上には縄文時代終末から弥生時代、古墳時代前期に及ぶ遺跡が点在するものと考えられる。おそらく集落の周辺には水田が展開し、小高い地点には墓地が営まれていたものであろう。

御笠川西岸には大規模な遺跡が数多く展開している。南1.5㎞の初期水田跡と環濠で知られる板付遺跡や、そのさらに西の諸岡丘陵には旧石器時代以降の遺跡が拡がる。無文土器等も出土し大陸との交流が色濃く現れている。また那珂・比恵遺跡群は宅地化が進み旧地形を残す地点は少なく、細切れの調査が多く、全体を理解するには困難な点が多いが、弥生時代から古墳時代に至る良好な遺跡が豊富に存在する。那珂37次調査では縄文時代晩期の二重環濠が検出され、20、23次調査では弥生時代中期後半の環濠、37次調査では大型掘立柱建物が検出されている。那国にふさわしい遺跡の宝庫と言える。

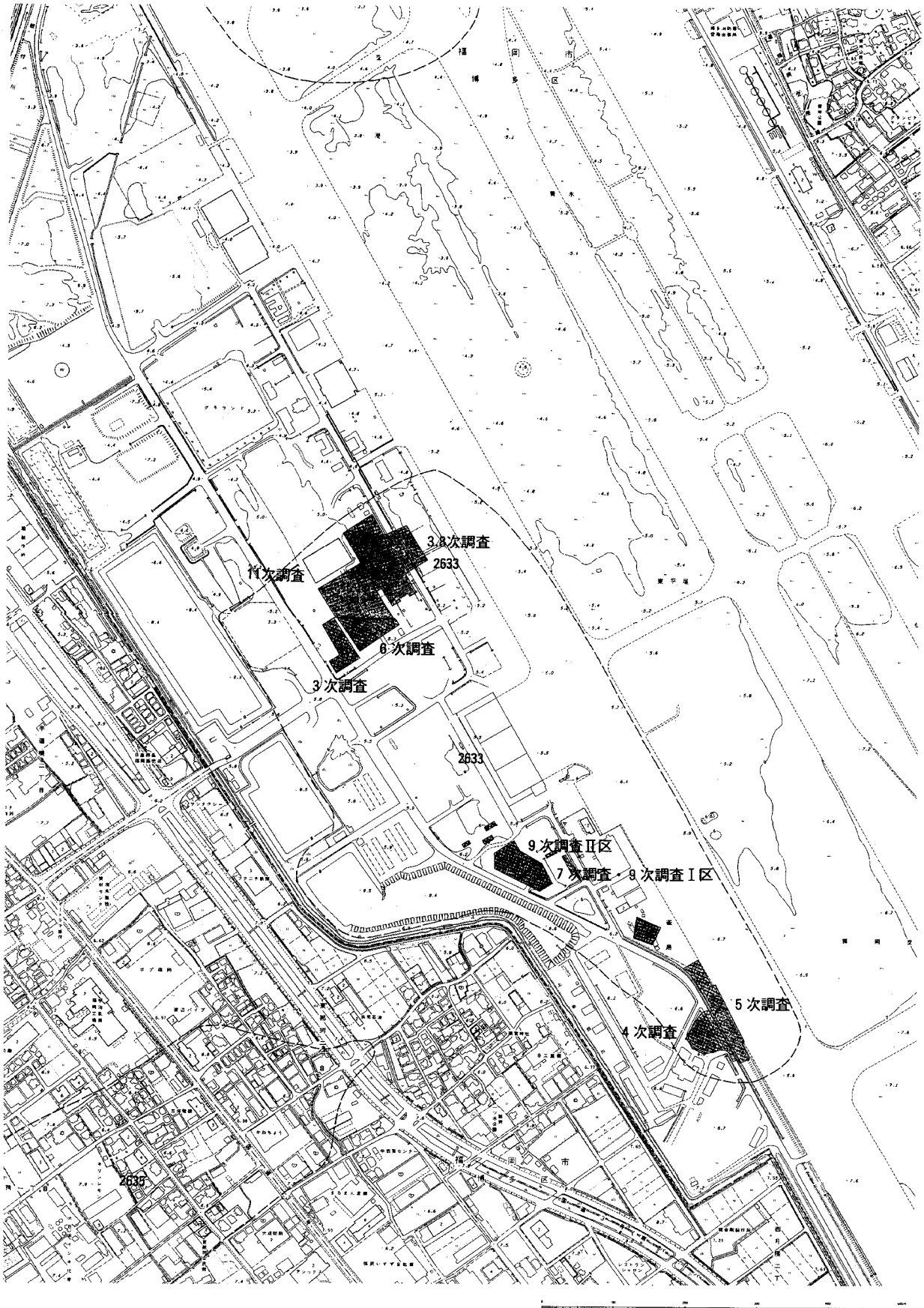


Fig. 2　遺跡周辺地形測量図及び調査地点位置図（1/8,000）

3．調査の記録

（1）第7次調査

第7次調査は空港の南西部、弥生時代環濠の第4・5次調査と古代水田跡を検出した第3・6次調査区のほぼ中間に位置する。空港の工事の関係上、第7次調査のⅠ面を終了後、第8次調査に着手したため同じ調査区でありながらⅠ面を第7次調査としⅡ面を第9次調査1区とした。

調査区の中央部が縁に比べて高まりをもち、その微高地上に遺構が展開する。Ⅰ面の調査では弥生

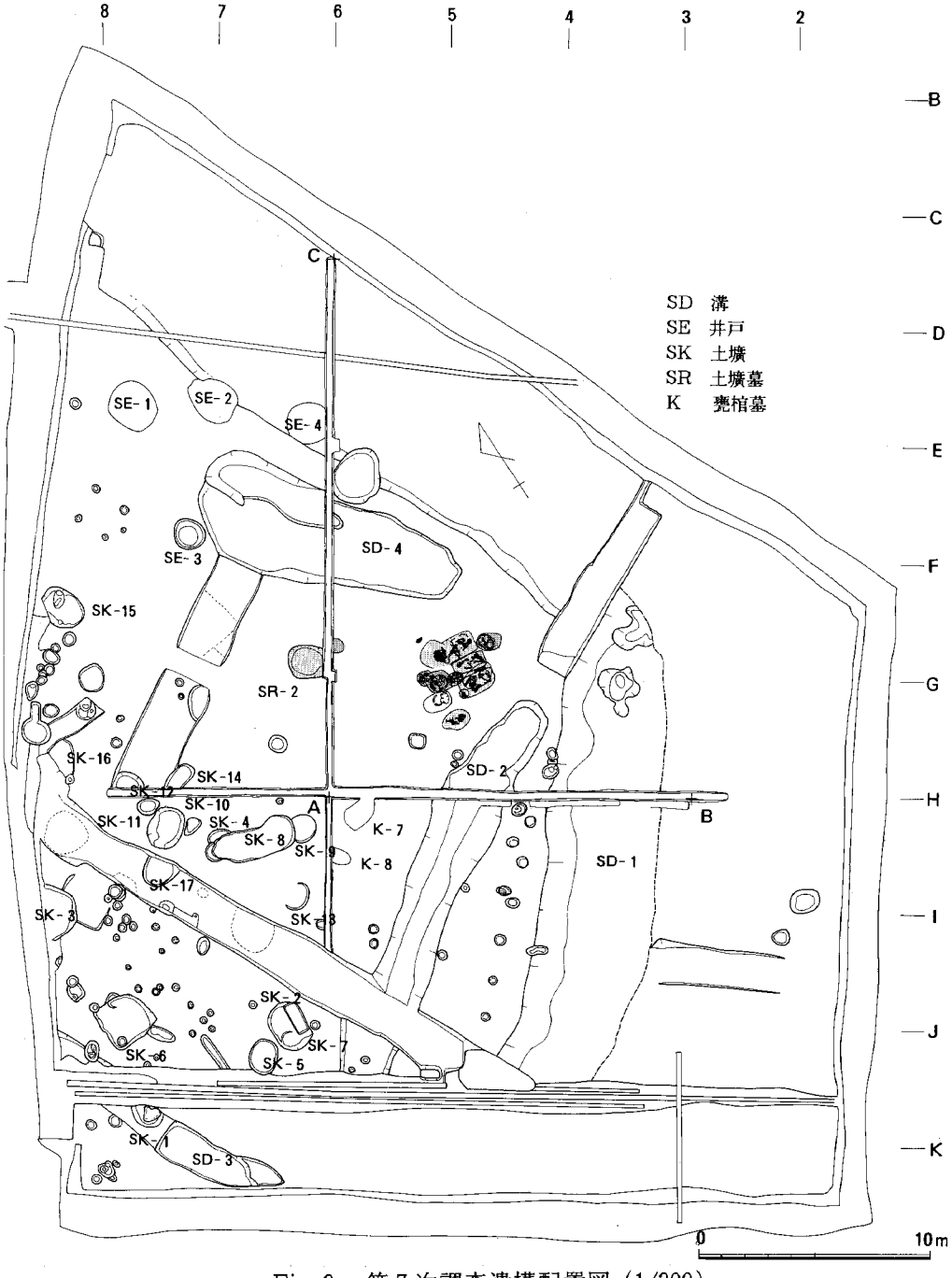


Fig.3　第7次調査遺構配置図（1/300）

時代前期の土壙墓、甕棺墓、弥生時代から古墳時代前期前半の土壙、古墳時代の井戸があり、台地の縁の溝状遺構からは大量の土器が出土した。

1）土層(Fig.4)

図示した柱状図は最も高い第7次調査区と第9次調査区のと境の状況である。50cmほどの盛り土がありその下に1層の旧耕作土が約10cmあり、2層水田床土と続く。3層は黄灰～白灰色微砂質土で所により幾つかの層に分離できるところもある。4層は粗砂で一時的に埋まった洪水によるもの考えられる。厚さは40～80cm中ほどで下には鉄分が集積した層が見られる。この粗砂層は部分的に5層を流出させ6、7層まで侵食しており、大規模な洪水が想定できる。第12次・13次調査ではこの下の面から水田跡が検出されているが今回の調査区においては面としては確認できていない。微高地の高い部分は洪水により消失したためであろうか。5層は部分的にしか確認できないが灰褐色粘質土である。6層は黒褐色粘質土ないしは暗褐色粘質土である。厚さ10cm前後で、土師器を始めとして多くの遺物を含んでいる。調査はこの面から実施し、この層の中ほどで遺構を確認できたのでⅠ面とした。なおⅡ面は包含層を取り除いた粗砂層ないし青灰色粘土層とした。

2）土壙墓・甕棺墓の調査

土壙墓9基、甕棺墓8基を調査した。ただし土壙墓のうち3基（7～9号）はⅡ面掘り下げ中に確認したが一連の墓地を形成するものと考えられるのでここで一括して述べる。土壙墓群は東西に長い微高地上の南西隅に集中して分布している。2号が離れて位置するが、それでも6×10mの狭い範囲に重複している。検出面と覆土の土壌にほとんど差異を認めることは困難で、土壙の掘り込みはいずれも不明瞭で、掘り下げ途中で人骨が出土し、初めて墓地と認知するほどであった。これらの土壙墓からは副葬遺物は1点出土、板付Ⅱ式の段階と考えられ、2号甕棺に切られているので、それに先行すると考えられる。甕棺も8基で構成されるがほぼ重複し同様な分布状況を示すが7、8号は西側に

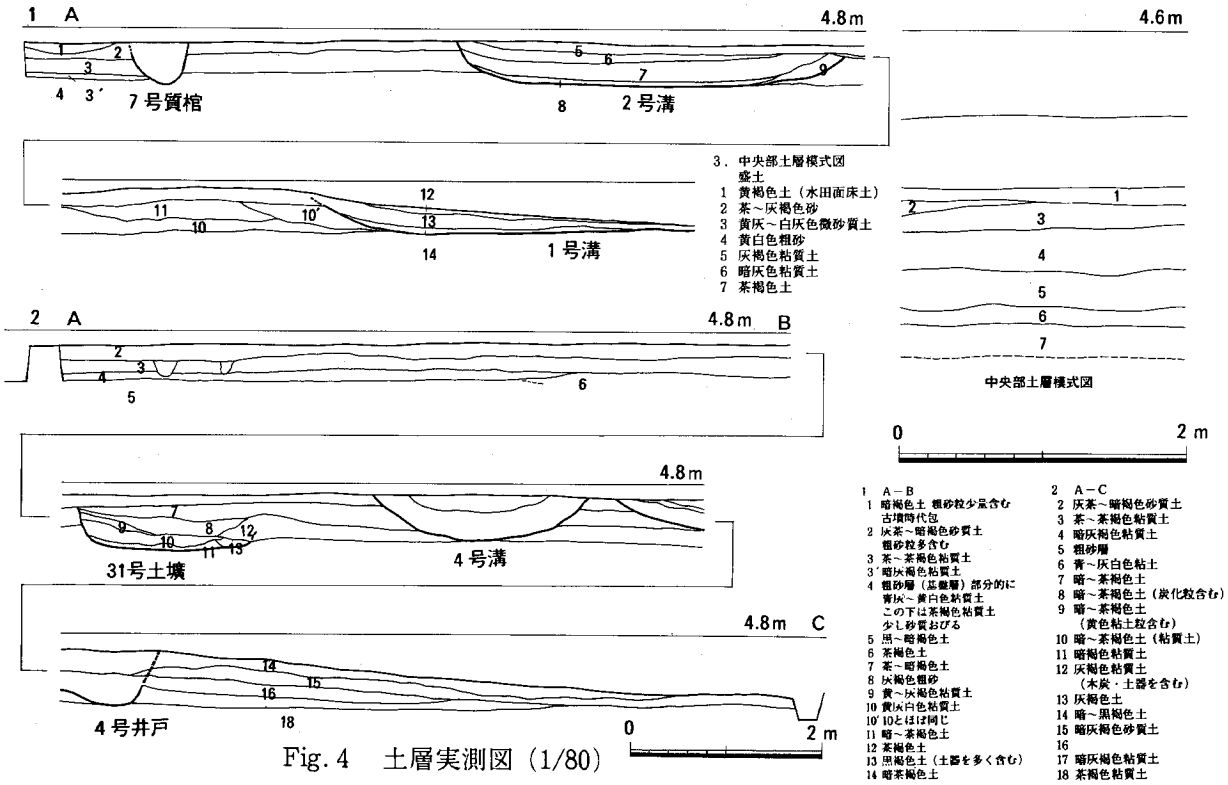


Fig. 4　土層実測図（1/80）

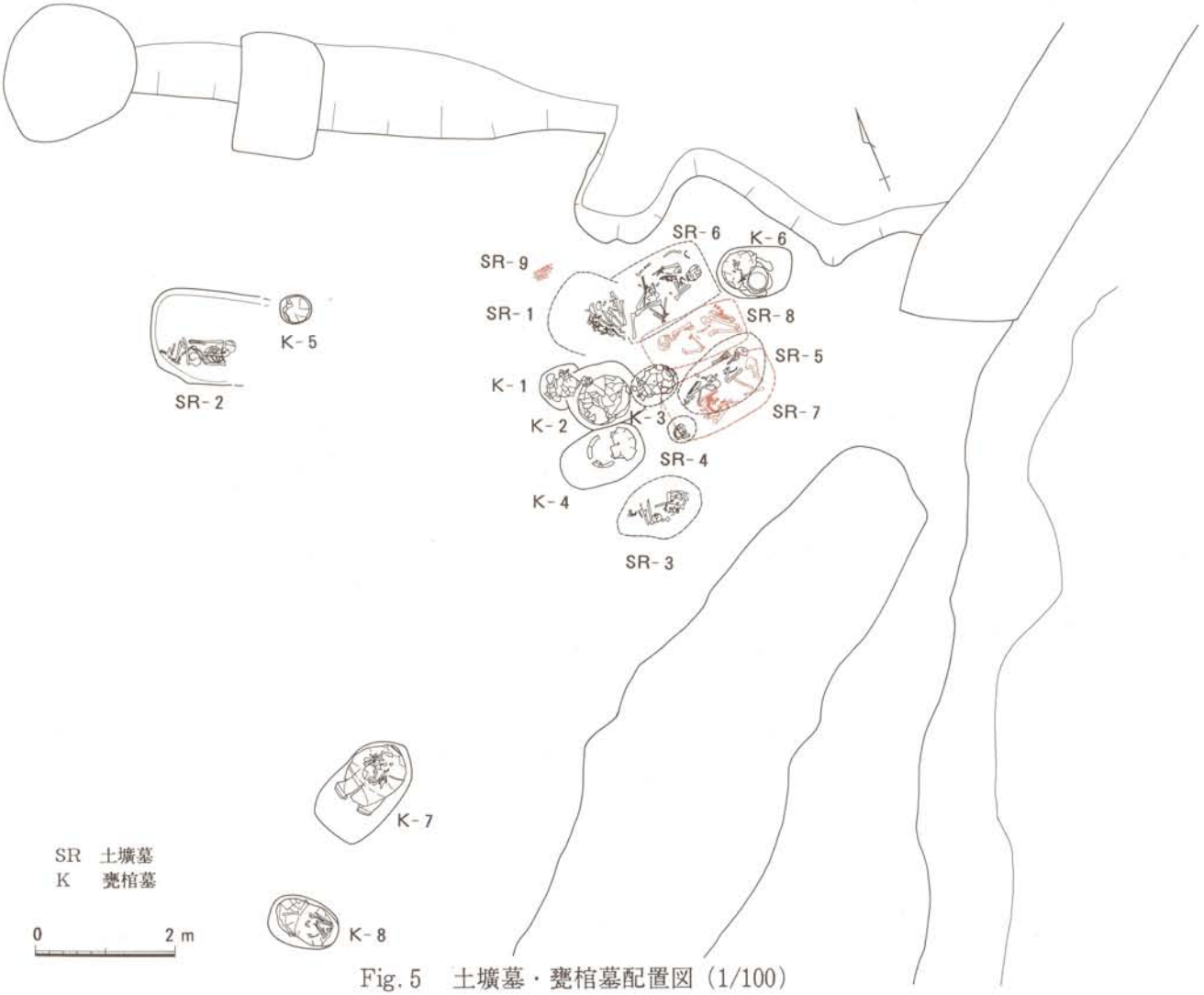


Fig. 5　土壙墓・甕棺墓配置図（1/100）

離れて位置する。板付Ⅱ式から前期末の範疇で考えられれよう。

1）土壙墓

1号土壙墓(Fig.6,PL.3)

土壙墓、甕棺墓が集中する北西隅に位置する。南西部を2号甕棺に、南東部を6号土壙墓に切られ上半部だけの遺存である。主軸はN-76°-Wにとり、幅1.1m前後、長さ1.2m以上の規模を示す。骨は四肢骨を除き劣化が激しく保存状態は悪い。全体に雑然としているが体幹骨は本来の位置を保っているものと考えられる。東を向く横臥屈葬と考えられる。

2号土壙墓(Fig.6,PL4)

墓域の中で最も西端に1基だけ離れて位置し、独立したように検出した土壙墓である。主軸はS-57°-Eにとり、幅1.32m前後、長さ1.64m、深さ0.35mの規模である。全体に劣化が激しく人骨の保存状態はあまり良好ではないが指骨等の細部まで遺存しており、全形を窺うことができる。仰臥屈葬で足を屈げ、左手を腹部に載せ、右手は真っ直に体に沿わせている。頭部は東方を向くが後の変化であろう。体部中央に直径15cmの自然木を横たえている。丁度腰部から斜めに指し渡され左腕の下をくぐり、左上腕部の上を通り、土壙の壁際まで達している。全長約1.4mを測る。

3号土壙墓(Fig.6,PL.5)

土壙墓・甕棺が集中する南端、4号甕棺の南に隣接する。主軸をE-6°-Sにとり、幅0.8m前後、長さ1.3m前後の歪な楕円形と推測される。人骨は全体が雑然として纏まりを欠き、欠損する骨も多い。中央部に頭蓋骨、その東に肋骨、北側に上腕骨が見られる。西側が下肢骨か。埋葬された姿を留めていないものであろう。

4号土壙墓(Fig.6,PL.7)

3号土壙墓と5号土壙墓の間に位置する土壙墓である。頭蓋骨だけの遺存である。墓壙の掘り方は径0.3mのほぼ円形である。頭蓋骨の遺存状況は極めて悪く、体部の骨も一部見られ、頭部だけの埋

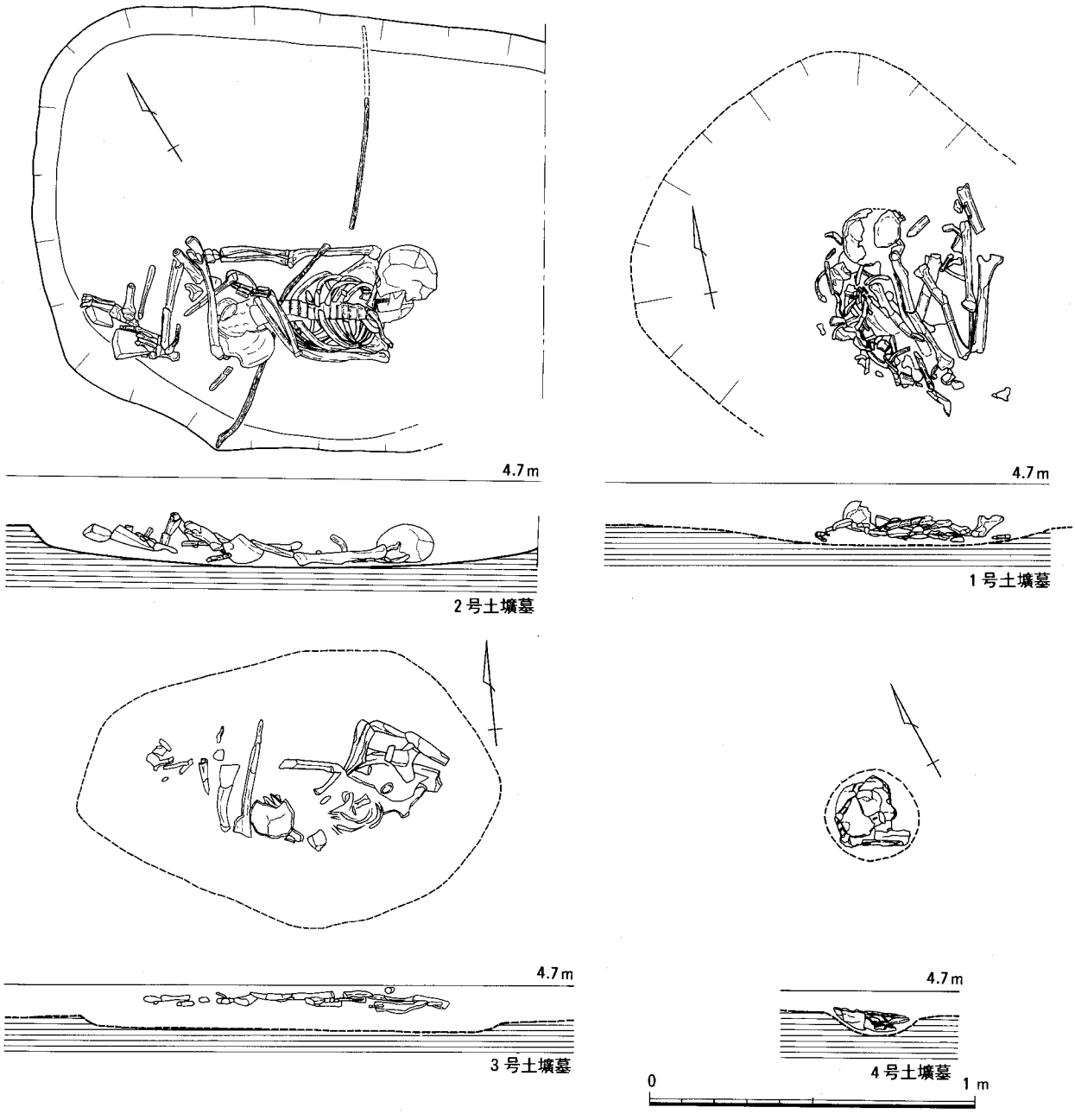


Fig.6　1～4号土壙墓実測図（1/20）

葬ではないと考えられる。

5号土壙墓(Fig.7,PL.6)

4号土壙墓と西側で隣接し、6号土壙墓の南側に位置する土壙墓である。頭蓋骨から下肢骨まで遺存しているが劣化が激しく保存状態は悪い。主軸はE-4°-Sにとり、最大幅 0.57m、長さ1.37mの規模を示す。頭部を東方に置く仰臥屈葬で足を屈げ、両腕を折り曲げ、左手を胸に載せている。頭部の南側に副葬と考えられる小壷が1点出土している。口径8cm、器高11.9cmを計り、最大径を胴部中位におく。底部は厚く、肩部に沈線を巡らしその下に羽状文を篦描きするがその幅は一定ではない。

6号土壙墓(Fig.7,PL.3)

西側で1号土壙墓と重複し、東側に6号甕棺墓があり、その間に位置する。主軸をE-7°-Nにとり、長方形の平面形を示す土壙と考えられる。遺存している人骨の分布から幅1.0m前後、長さ1.5m前後の規模と推定される。骨は四肢骨を除き劣化が激しく保存状態は悪い。肋骨が四散していたり、全体に雑然としているが体幹骨は本来の位置を保っているものと考えられる。顔面は少し南を向くが仰臥屈葬と思われる。

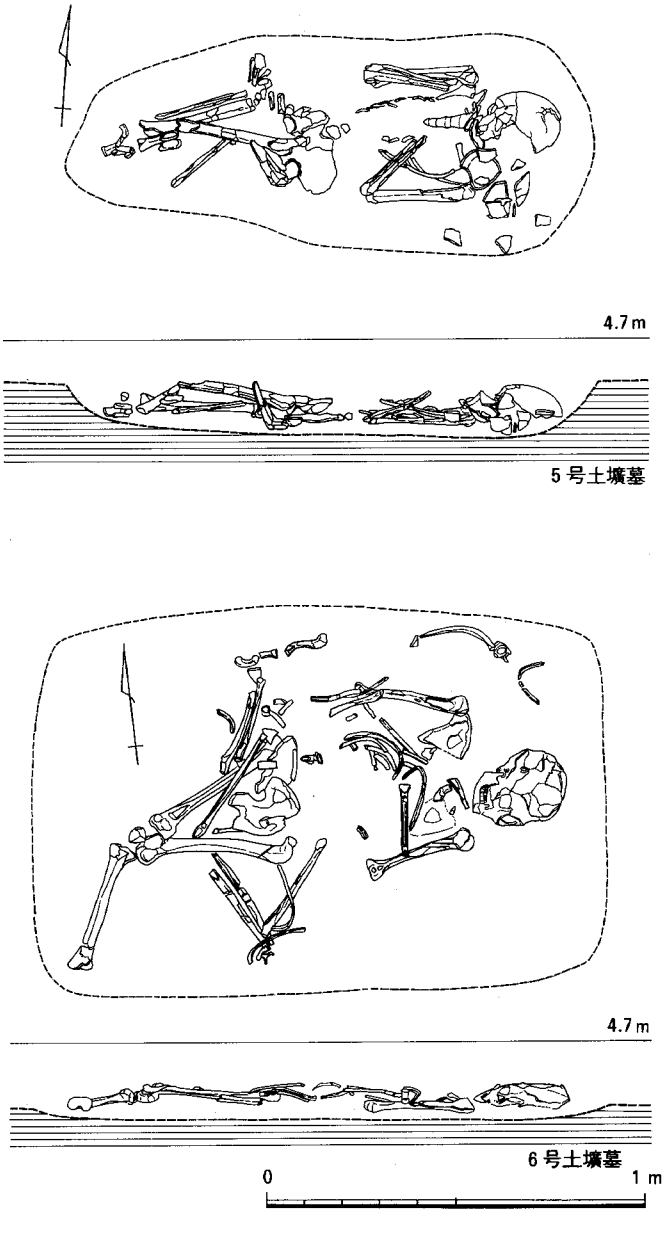


Fig.7　5．6号土壙墓実測図（1/20）

7号土壙墓(Fig.8,PL.7)

7号～9号土壙墓はⅡ面を掘り下げる途中で検出した土壙墓群である。5号土壙墓と一部重複してその南に位置し、頭位を5号と逆で主軸はN-85°-Wにとる。土壙の掘り方は不明瞭であるが幅0.7m前後、長さ約1.6mの規模を示すものであろう。人骨の遺存は悪く四肢骨以外は肋骨と顎骨しか確認できなかった。頭部を西方に向けた仰臥屈葬で足を屈げ、両腕を折り曲げ右手甲手骨が肋骨の上に残っている。頭蓋骨は無く、下顎骨だけが遺存している。北側から6号、8号、5号、7号土壙墓の順番に一列に並んでいる。ただし7、8号土壙墓は埋葬方位が逆である。

8号土壙墓(Fig.8,PL.7)

7号土壙墓のすぐ北側に検出した。頭位を7号と同方向にとり、主軸はN-76°-Wにとる。土壙の掘り方は不明瞭であるが

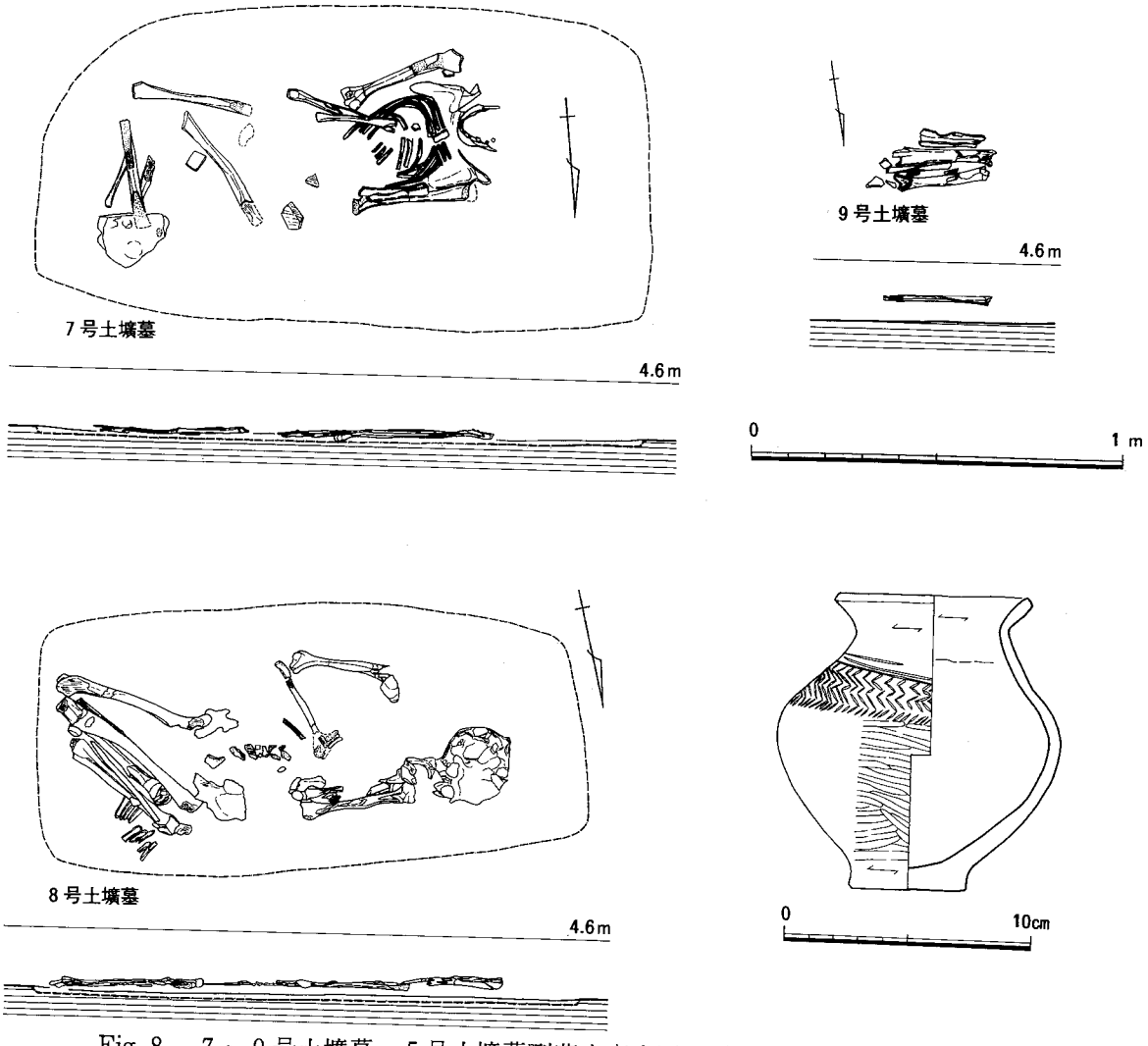


Fig.8　7～9号土壙墓・5号土壙墓副葬小壷実測図（1/20,1/3）

幅0.7m前後、長さ約1.5mの規模を示すものであろう。人骨の遺存は悪く頭蓋骨と四肢骨以外は脊椎骨の残欠しか確認できなかった。頭部を西方に向けた仰臥屈葬で足を屈げ、両腕を折り曲げている。下顎骨は体部にずれている。

9号土壙墓(Fig.8)

8号土壙墓の北西部に確認した土壙墓である。下肢骨だけの遺存である。主軸はN-79°-Wにとる。土壙の掘り方は不明である。骨は埋葬された当初の状況ではなく二次的に移動しているようで平行にそろっている。他の部位の骨が認められないことからその可能性が高い。

2）甕棺墓

甕棺墓の分布は7号、8号甕棺墓を除き土壙墓の分布とほぼ重なる。総計8基からなる小規模な甕棺墓群で土壙墓群に後続すると考えられる墓であるが、土壙墓と共に弥生時代前期の墓地を形成していたものである。

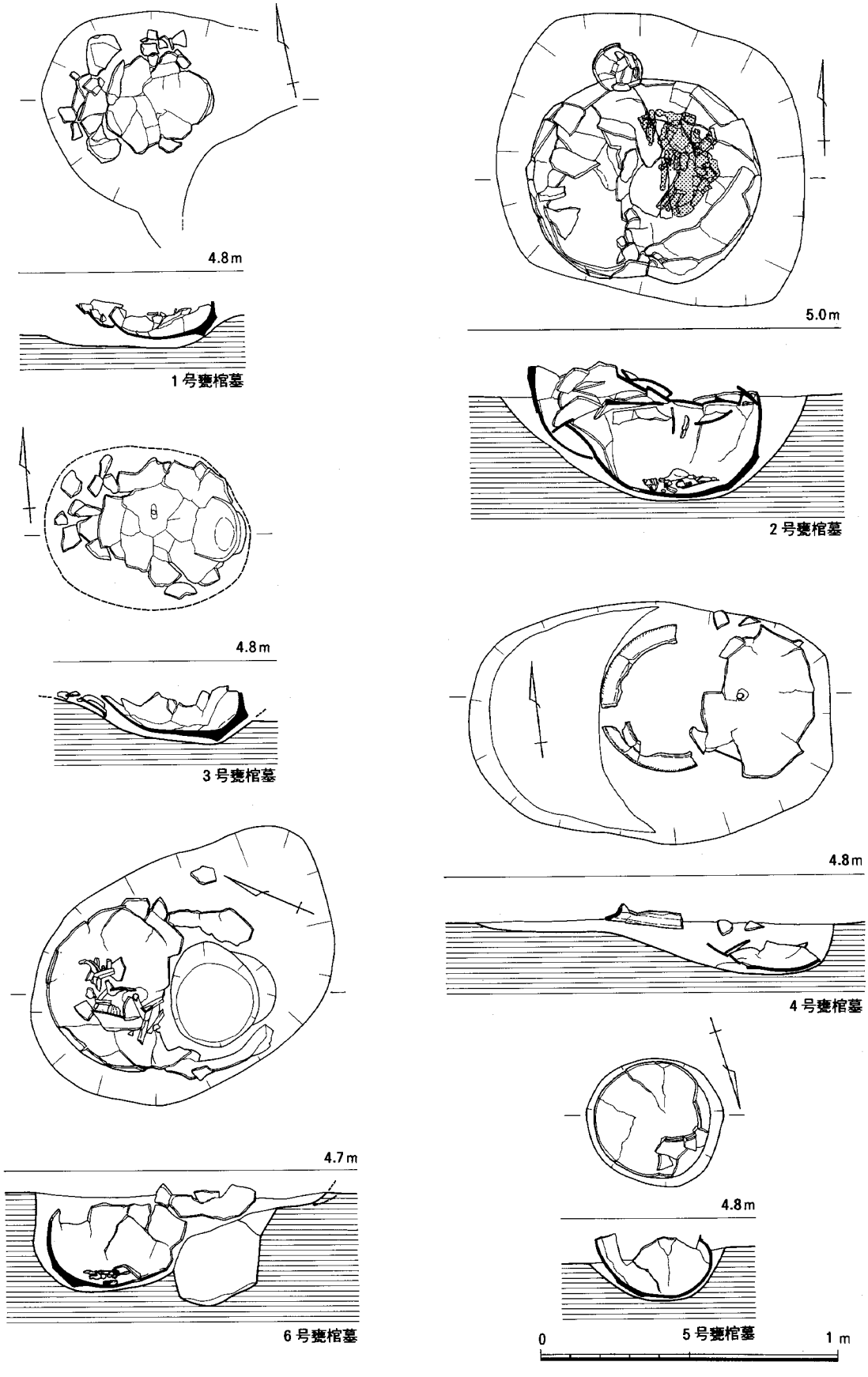


Fig. 9　甕棺墓実測図（1/20）

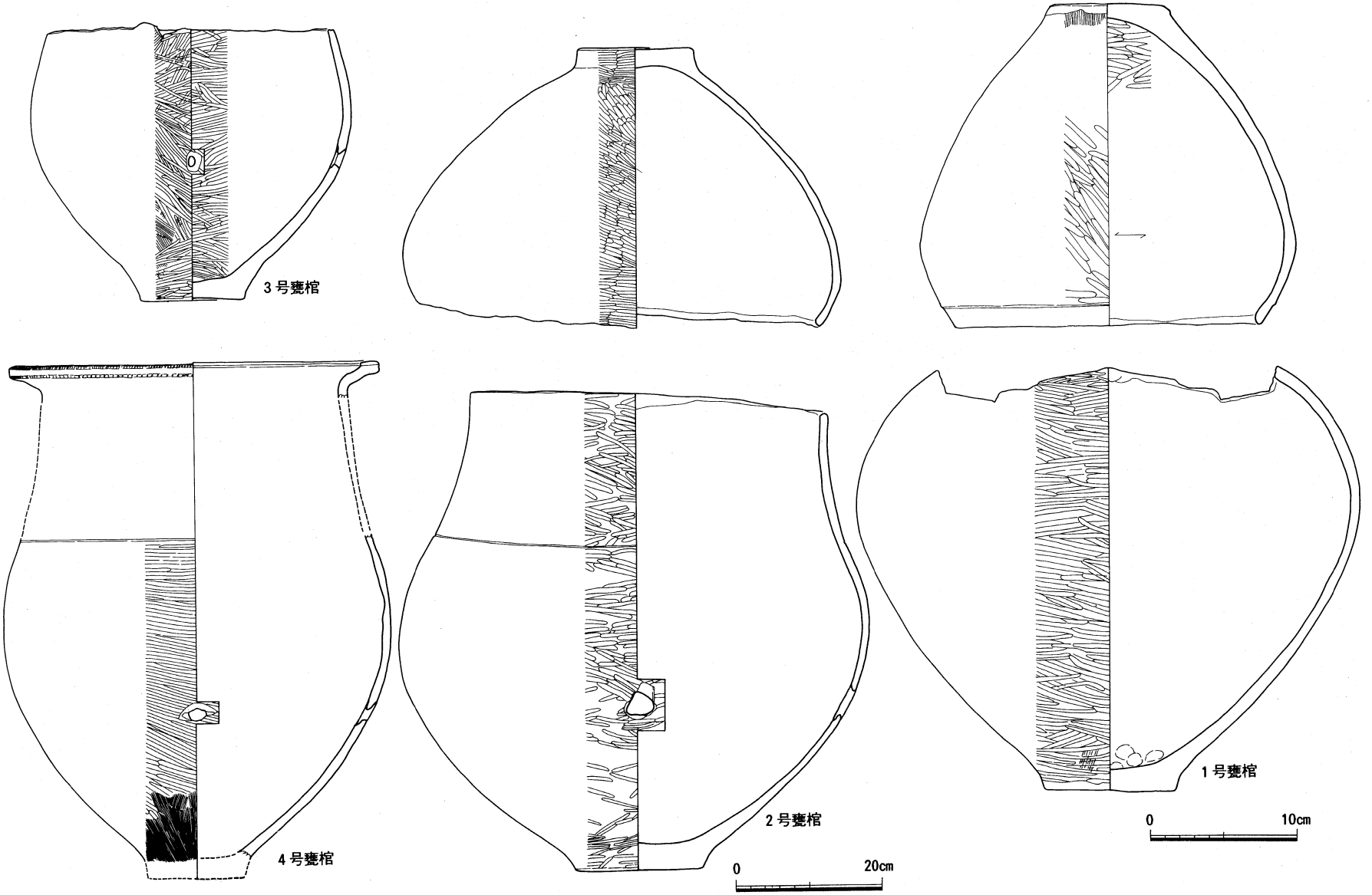


Fig.10　甕棺実測図（1～4号）(1/4,1/8)

1号甕棺(Fig.9,10,PL.8)

1号土壙墓と隣接してその西側に位置する甕棺墓である。上、下甕とも壷を用い、頸部から口縁部を打ち欠いた覆口式甕棺で遺存状況はあまり良好ではなく、上甕の一部と下甕の半分しか確認できなかった。浅い掘り込みで2号甕棺の上甕の深さまでしか墓壙を掘り込んでいない。主軸をN-32°-Wにり、埋置角度は38° を測る。

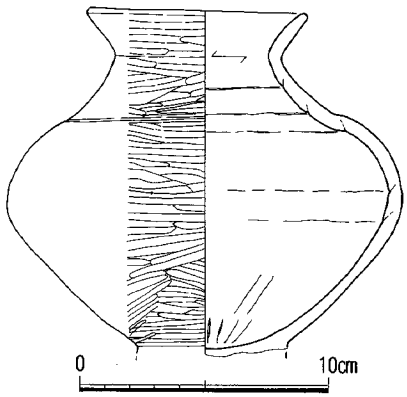


Fig.11　2号甕棺副葬小壷実測図（1/3）

上甕(Fig.10,PL.36)　小型の壷で器高22.6cmを計る。頸部から口縁部を打ち欠く。少し歪で、対称形を示さない。外面は研磨し底部際に刷毛目が残る。肩部に黒班がある。

下甕(Fig.10,PL.36)　小型の壷で器高28.9cmを計る。外面は刷毛目の後研磨を施すが研磨がまばらな底部近くには刷毛目が残る。内面は指撫でで底部には指頭跡が残る。

2号甕棺(Fig.9,10,PL.8)

1号と4号甕棺の間に位置する覆口式甕棺で押し潰されたような状況で出土した。内部には人骨が残るが海綿状で遺存状況は悪い。上甕と下甕の合わせ口部分の北側に小壷を1点副葬している。主軸をN-88°-W、埋置角度は40° を測る。墓壙は隅丸長方形に近く甕棺より一回り大きく掘り込む。

上甕(Fig.10,PL.36)　胴部上半から口縁部を打ち欠いた壷である。大型の壷で残存器高38.8cmを計る。焼成は良く胎土に白砂粒を多く含み、胴部の最大部に黒班が認められる。

下甕(Fig.10,PL.36)　壷の口縁部を打ち欠いて下甕としている。最大径を胴部上半にもち頸部との境に沈線を巡らす。胴部下半には焼成後の穿孔をもつ。胴部中位には黒班がある。

副葬小壷(Fig.11,PL.36)　ほぼ完形品の小壷で外底部を一部欠損する。最大径を胴部中位にとり、頸部との境には不明瞭な段が認められ、頸部内面には粘土紐接合痕が残る。口縁部は外反気味に開く。口径8.7cm、器高13.7cm、胴部最大径15.5cmを計る。古い形態の小壷であるが甕棺の副葬品である。

3号甕棺(Fig.9,10)

2号甕棺の東に位置し、一部重複する。土壙は不明瞭である。遺存状況は極めて悪く上甕の一部と下甕の下面が残るだけである。主軸をN-85°-W、埋置角度は40° 前後を測る。

上甕　胴部だけの破片で図示していない。

下甕(Fig.10,PL.36)　胴部上半を打ち欠いた壷を用いている。内外面とも研磨し、外面の底部近くに刷毛目が残る。胴部下半には焼成後の穿孔があり黒班も見られる。

4号甕棺(Fig.9,10,PL.9)

2号甕棺を切りその南に位置する単棺の甕棺である。西側に一段浅い土壙を掘り込み、さらに甕を埋置するため斜めに掘りむ。棺内は撹乱を受け胴部の一部しか本来の位置を保っていない。

下甕(Fig.10)　頸部を欠損するが推定器高71.5cmを計る。最大径を胴部中位に置き頸部がさほどすぼまらない形態である。胴部下半には焼成後の穿孔があり黒班も見られる。

5号甕棺(Fig.9,10,PL.9)

1基だけ離れて2号土壙墓の東で確認した壷を用いた単棺の甕棺である。口縁部を打ち欠く。一応甕棺としたがこの時期の成人棺は無く疑問が残る。主軸をN-73°-W、埋置角度は55° 前後を測る。

下甕(Fig.12,PL.37)　中期初頭の壷である。球形に近い胴部に外反する口縁部となる。肩部に三

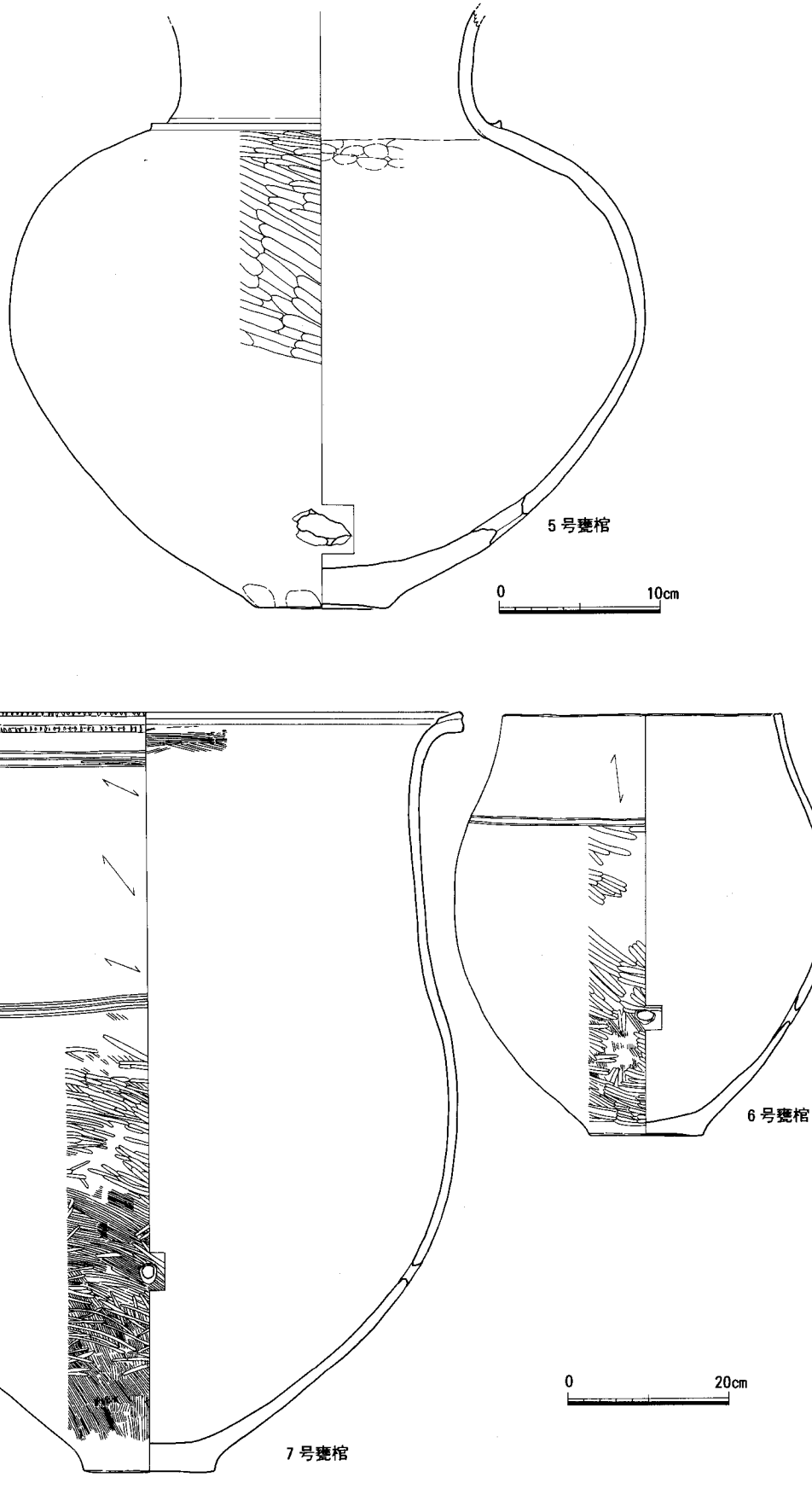


Fig.12　5～7号甕棺実測図（1/4,1/8）

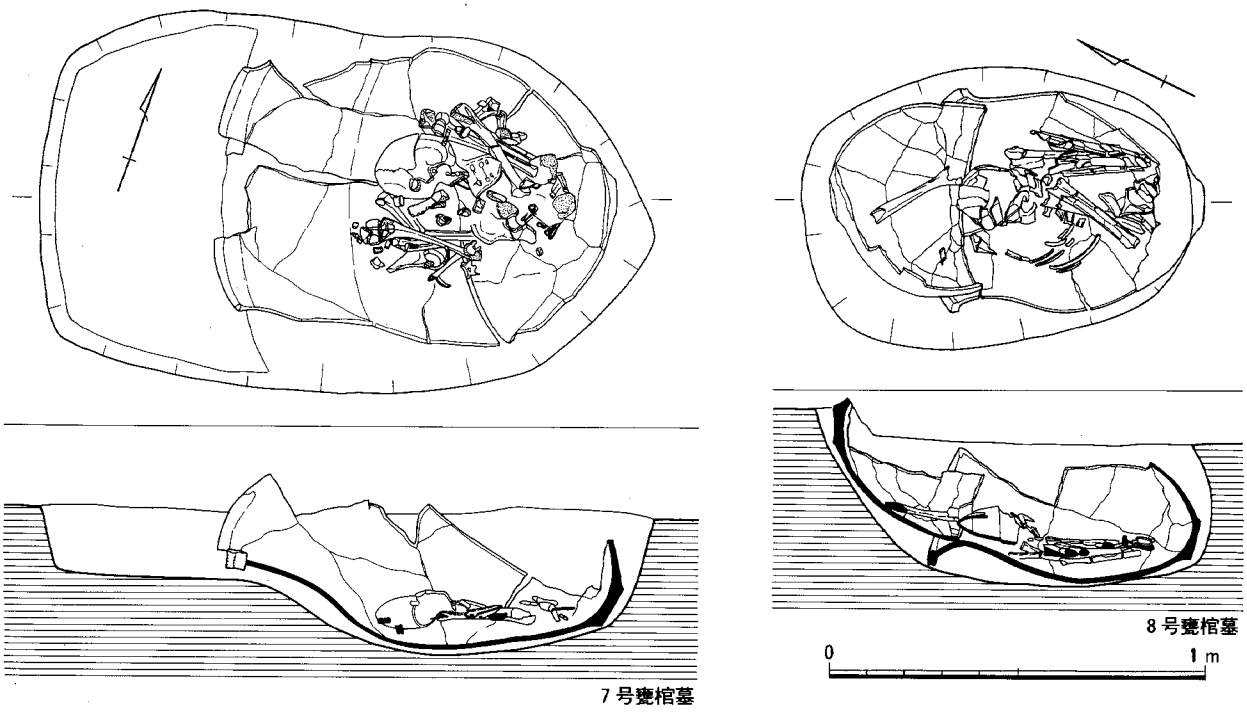


Fig.13　7．8号甕棺墓実測図（1/20）

角突帯を貼付る。

6号甕棺(Fig.9,12,PL.10)

6号土壙墓の東に位置する甕棺で、下甕しか遺存しないが口縁部を打ち欠くなど合せ口の可能性が強い。主軸はS-24°-E、埋置角度は50°前後を測る。

下甕(Fig.12,PL.37)　頸部を欠損するが推定器高52cmを計る。最大径を胴部中位に置き頸部がさほどすぼまらない形態で、肩部に2条の沈線を巡らす。胴部中位には黒班が認められる。

7号甕棺(Fig.10,13,PL.10)

土壙墓、甕棺墓群が集中する所から西に離れて二基ある中の一基である。掘り方は大きく幅0.98m、長さ1.6mの規模で、西側に一段浅い土壙を掘り込み、さらに甕を埋置するため斜めに掘り込む。主軸はW-23°-S、埋置角度は40°前後を測る。人骨が比較的残りが良く検出できた。

下甕(Fig.12,PL.37)　大型品で器高93.3cm、胴部最大径76cmを計る。肩部に三条の沈線を巡らす。口縁部上端は肥厚させ、内面に稜をもつ。

8号甕棺(Fig.13,14,PL.11)

7号甕棺の南西に位置する。呑口式の合せ口で人骨も遺存していた。主軸はN-25°-W、埋置角度は25°前後を測る。墓壙は楕円形で長軸1.02m、短軸0.73

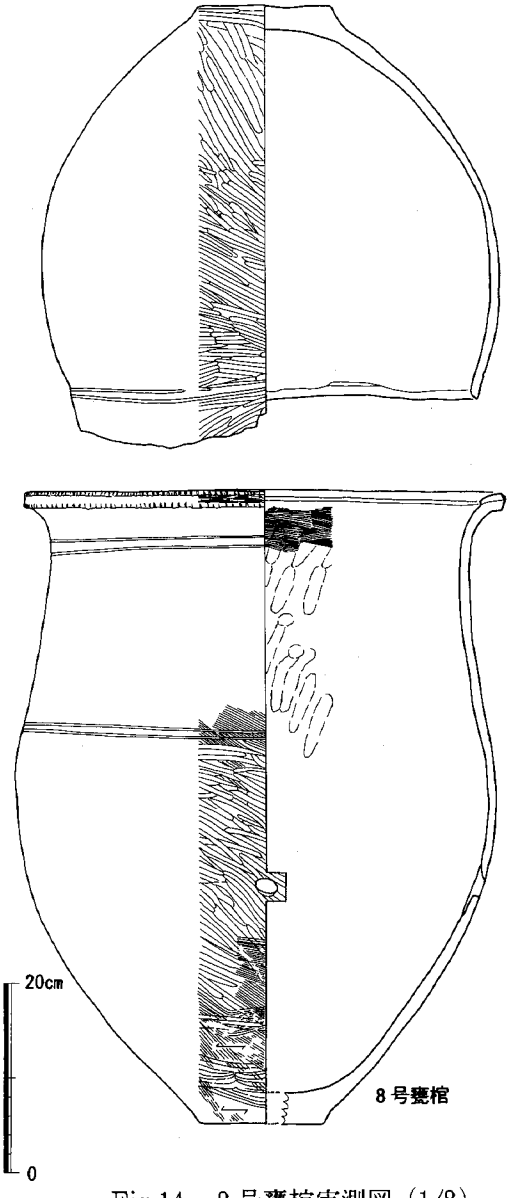


Fig.14　8号甕棺実測図（1/8）

mを計る。

上甕(Fig.14,PL.37)　胴部上半から口縁部を打ち欠いた壷である。大型の壷で残存器高46.3cmを計る。肩部に2条の沈線を巡らし、胴部の中位下に黒班が認められる。

下甕(Fig.14,PL.37)　中型品で器高66.5cm、胴部最大径50cmを計る。口縁部下と肩部に2条の沈線を巡らす。外面は粗い篦研磨で、沈線部分と底部近くに刷毛目が残る。内面の口縁部にも刷毛目が残り、上端は肥厚させ、内面に段をもつ。また口縁部外面は中央部を窪ませ、その上、下に刻目文様を巡らせている。

3）土壙の調査

土壙は調査区の南西部、微高地部の中央寄りに確認した。総計17基の土壙を調査した。平面形は不定形を呈し、出土遺物も多くない。大きく弥生時代前期と古墳時代前期の2時期に分類できる。

1号土壙(Fig.15,16－1,PL.11)　調査区の西端に検出した土壙で北東部を撹乱溝にきられ、半円径を呈する。覆土は暗褐色土で浅い掘り込みである。最大径1.46cm、深さ0.35cmを計る。図化出来るのは1点だけである。1は弥生時代前期の壷の底部である。底部近くの外面には篦調整の痕が残る。

2号土壙(Fig.15,16－2,PL.38)　隅丸長方形の土壙である。長さ1.29m、幅0.52m、深さ0.18mを計る。覆土は他の遺構と異なり軟質で灰混じりの灰白色土が上層にあり下層には暗、灰褐色の粘質土である。2は古墳時代前期の小型丸底壷で口縁部を欠損する。内面篦削り、外面刷毛目調整である。

3号土壙(Fig.15,16－3～5,PL.38)　9次調査Ⅱ区の69号土壙と接合し1基の略円形の土壙となる。断面は皿状の浅い土壙である。径2.35m、深さ0.35mを計る。出土遺物から古墳時代前期、住居跡と同時期の遺構である。3は小型丸底壷、4は椀である。5は器台の坏部で、内外面とも篦研磨。

5号土壙(Fig.15,16－6～12,PL.12)　弥生時代前期の楕円形の浅い土壙である。西側を油送管の溝に切られる。長径1.3m、短径1.23mを計る。床面より少し上で全体に土器の破片が出土している。6～9は甕で内外面とも刷毛目調整で口縁部外面を撫で消し、口唇端部に刻みを巡らす。11は鉢、12は小壷の口縁部破片で口縁部との境に僅かな段を残す。

6号土壙(Fig.15,16－13～18-21)　調査区の西端に検出した歪な四角形の土壙である。覆土は暗褐色土で0.32mの浅い掘り込みである。最大幅2.2m、長さ2.4mを計る。遺物は床面から浮いた状態で小破片であるが比較的多く出土している。いずれも弥生時代前期の土器で13～15は口縁部と胴部に刻目突帯を巡らし17、18は口縁部に刻目をもつ甕、20、21は壷である。

8号土壙(Fig.17,18－23～26,PL.12)　7号甕棺の北西に位置する縦長の土壙である。最大幅1.5m、長さ3.7mを計る。覆土には青灰色の粘土塊を含んでいる。4、9号土壙と切り合うが先後関係は明らかではない。遺物は少なく図示したのは4点である。23、24は小型の甕で外面は刷毛目調整で口縁部に刻目突帯を貼付る。25は鉢で篦研磨を施す。26は土製紡錘車で厚さ1.5cmで中央部が厚くなる。

9号土壙(Fig.17,18－27～29,PL.38)　8号土壙の東側で重複する略楕円形の浅い土壙である。出土土器は少ないが27はほぼ完形品に復原出来た。口径22.4cm、器高26.6cmで口縁部と胴部に刻目突帯を貼付る。外面は刷毛目で内面は板目調整である。底部は僅かに上げ底で外面は外に開く。

11号土壙(Fig.3,18－30,31)　12号土壙の北側に位置する小型の土壙で、突帯文土器と壷が2点出土。

12号土壙(Fig.17,18－32,PL.13)　長楕円形の土壙で長軸1.85m、短軸1.4mを計る。遺物は壷の肩部から胴部にかけての破片で肩部に刻目突帯を貼り付け、その下に据歯紋を篦描する。

14号土壙(Fig.15,18－33～35)　隅丸長方形の土壙で長軸1.4m、短軸0.75mを計る。遺物は壷の肩部から胴部、甕の胴部から底部の破片である。

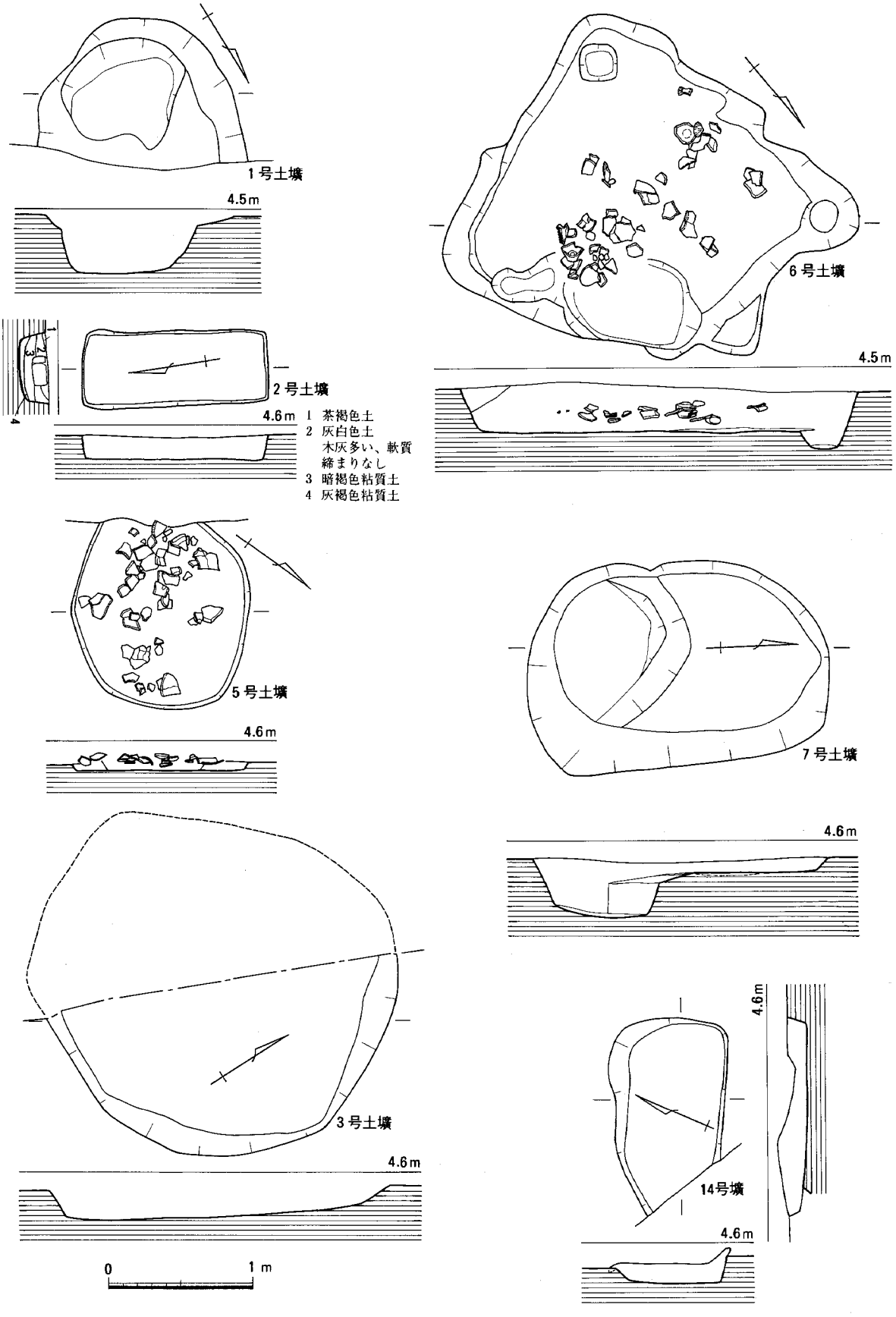


Fig.15　1～7号土壙実測図（1/40）

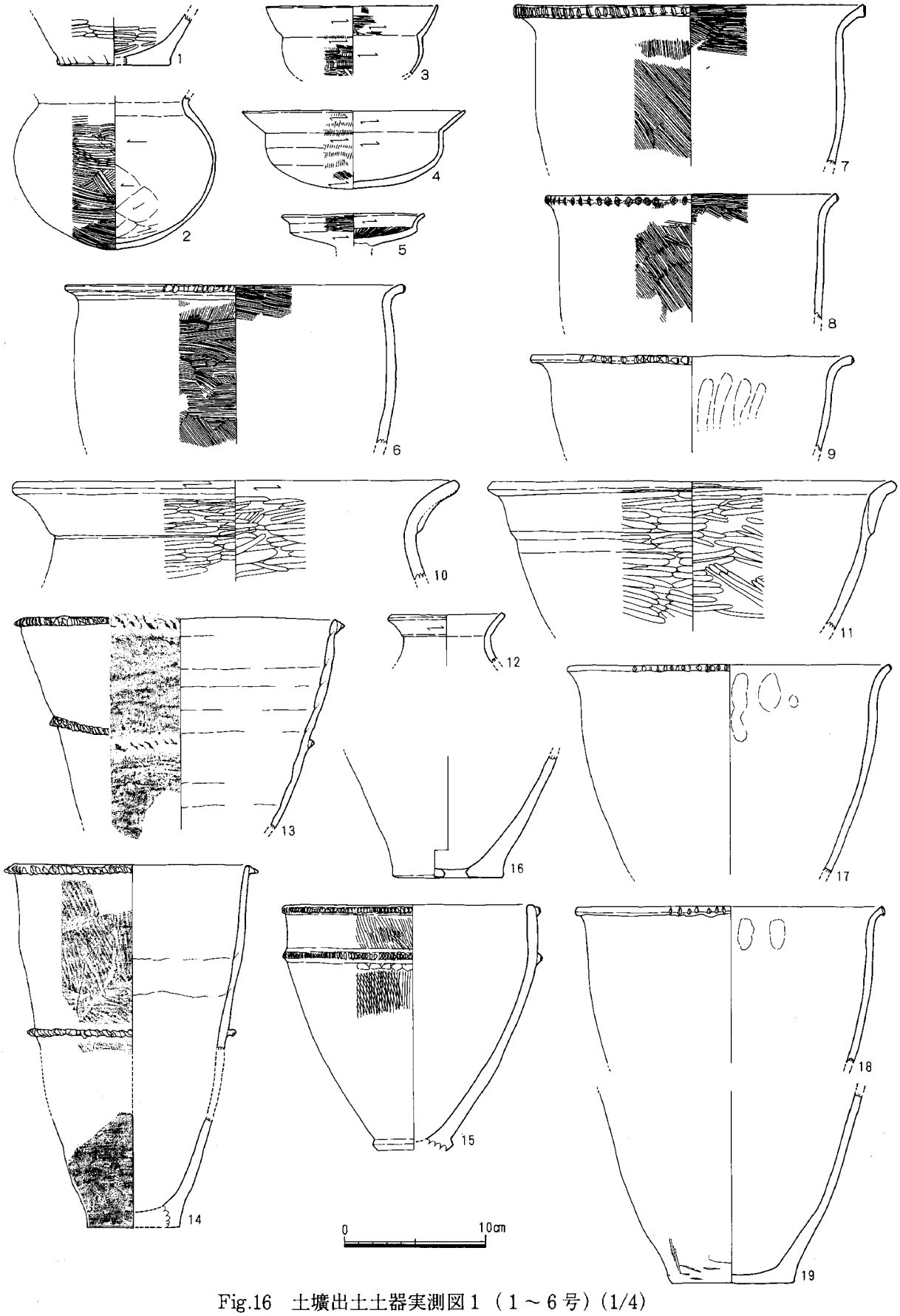


Fig.16　土壙出土土器実測図１（１～６号）(1/4)

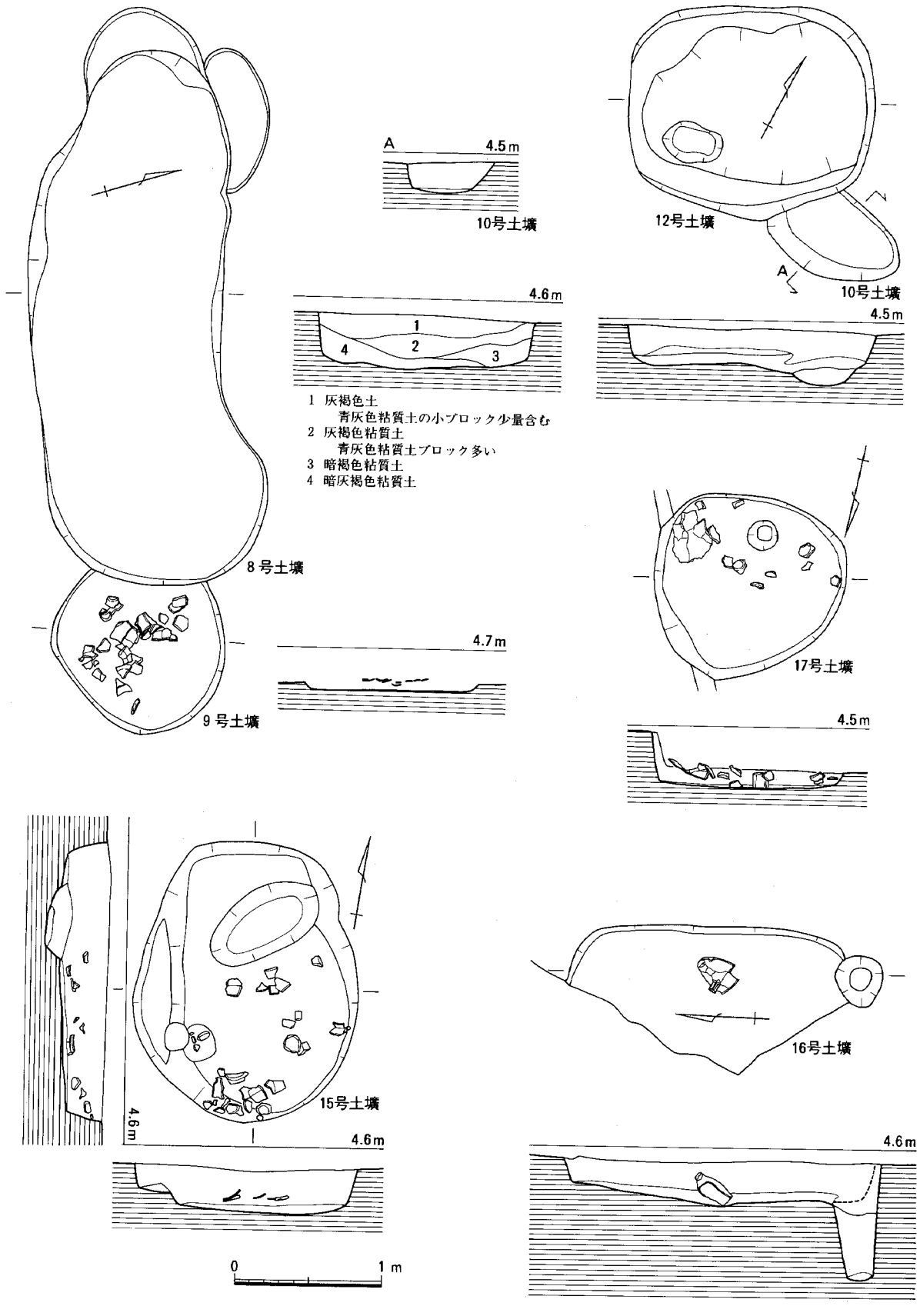


Fig.17　8～17号土壙実測図（1/40）

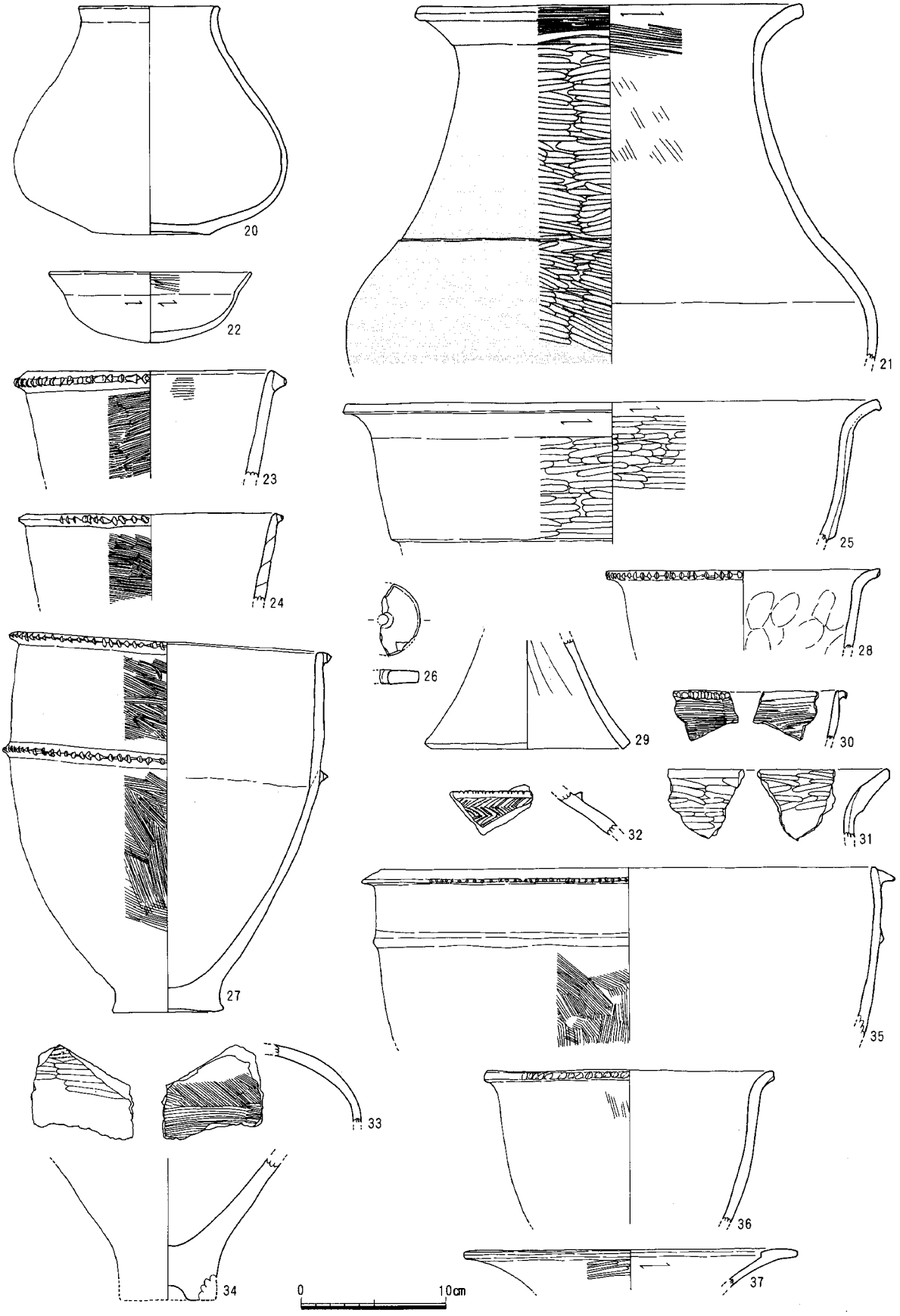


Fig.18　土壙出土土器実測図２（６～15号）(1/4)

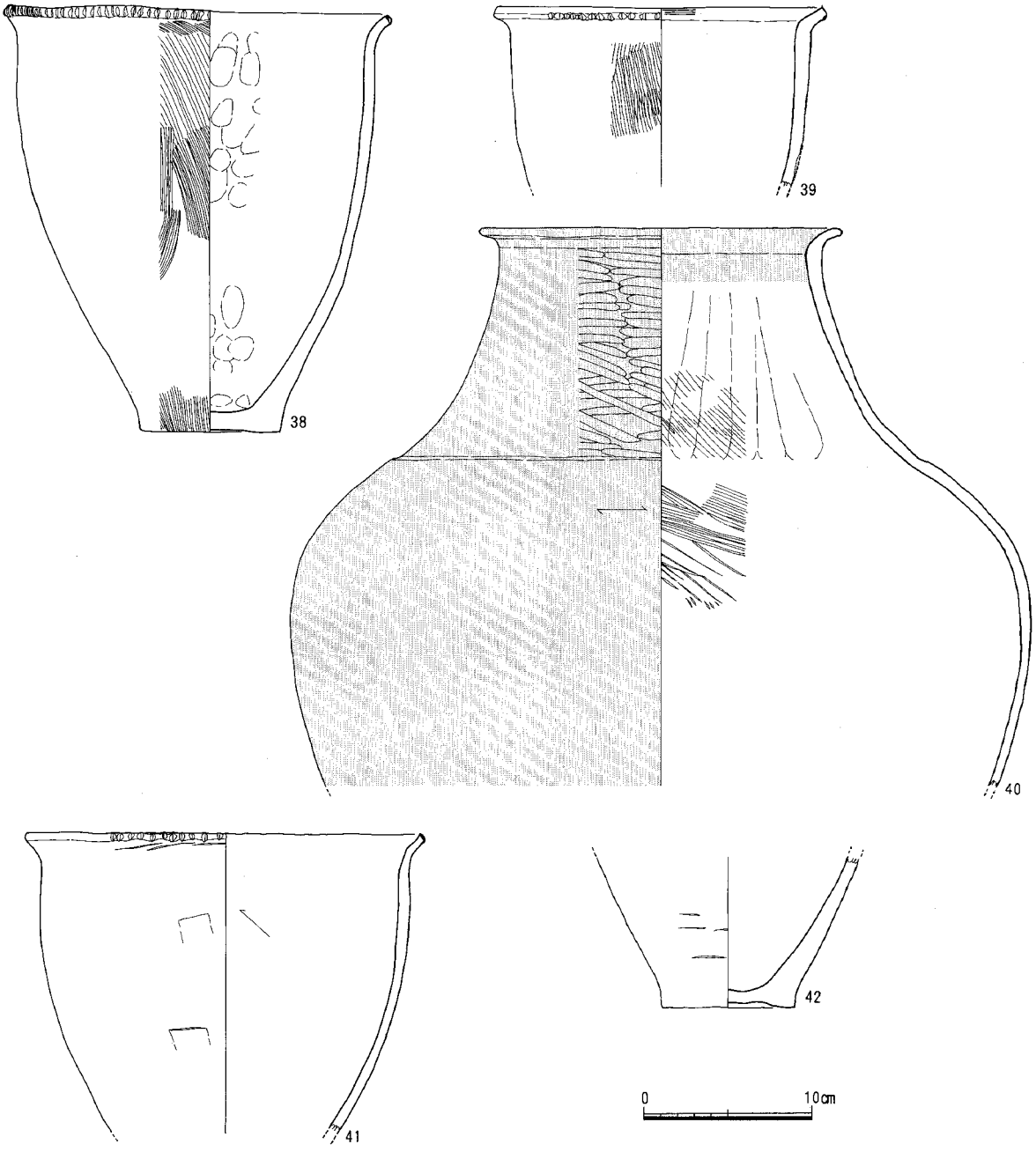


Fig.19　土壙出土土器実測図３（16・17号）(1/4)

15号土壙(Fig.17,18－36,37,PL.14)　調査区の北側に位置する略楕円形の土壙で長軸1.9m、短軸1.52mを計る。覆土は暗褐色土で土器片が少量出土している。36は甕で口縁部に粘土を貼り付け端部に刻み目をもち、板目調整を行なう。37は高坏の口縁部で内外面とも研磨調整を行なう。

16号土壙(Fig.17,19－38,39)　西側を撹乱溝により削平されるが、隅丸長方形の土壙で貯蔵穴である。長さ1.9m、幅1m以上、深さ0.28mを計る。壁面はほぼ垂直に立上り床面はほぼ平坦である。床面には甕が横転した状態で１点出土した。38はほぼ完形品の甕で口径23cm、器高25.6cmを計る。外面は刷毛目調整で、口唇部に刻目をもつ。また外面には煤が、内底面には炭化物が付着する。

17号土壙(Fig.17,19－40,PL.14)　撹乱溝の下で確認したため遺存状態は不良。略円形の土壙で長軸1.35m、短軸1.25mを計る。覆土は暗褐色土で土器片が少量出土。40は丹塗磨研の壷である。

4）井戸の調査

井戸は調査区の北東寄りに集中して計5基検出した。いずれも素掘の井戸で平面形は歪な楕円形を呈し規模も1.5m～2.0m、深さも2m前後である。1号、3号井戸の底からは甕が完形品のまま検出され、4号井戸からは大量に投棄された状態で出土した。出土した土器は古墳時代前期、布留期と考えられ、台地縁に大量に投棄された土器とほぼ一致する。以下各遺構ごとに述べる。

1号井戸(Fig.20,21,PL.38)

調査区の北東に位置する。平面形は歪な楕円形～台形で角が丸味をもつ。断面形は逆台形を示し、床面は平坦である。壁面は上から0.3m位までと床面近くが垂直に近く半ば傾斜がゆるくなっている。覆土は1層が暗茶褐色土、2層が茶褐色砂質土、3層が黒褐色土で少し粘質を帯びる。この層から鋤の柄の基部が出土している。4層黒灰色粘質土、5層は茶～暗褐色粘質土で全体に締まりが無く、植物遺体を多く含む。6層は5層に基盤層の細砂が混じったものである。出土遺物は少なく底から完形品の甕が1点出土している。明らかに甕を底に据えていることから祭祀に伴う土器と考えられる。

出土遺物(Fig.21－1～4)　1は底から出土した甕で口縁部を一部欠損するがほぼ完形品である。少し長めの球形に近いの胴部から外に開く口縁部となる。外面は縦、斜めの刷毛目調整、口縁部内面は粗い横方向の刷毛目調整で外面の底部近くは粗い篦削りである。現存器高25.9cm、胴部最大径23cmを計る。2は二重口縁の壷で頸部から外反して口縁部が真っ直に立上り、その境に稜をもつ。3、4は外面が横方向の刷毛目、内面を篦削りする甕である。他に一木を刳り抜いた平面三角形の鋤の柄がある。

2号井戸(Fig.20,21,PL.15,38,39)

1号井戸の東に位置する歪な略楕円形の井戸である。床面はほぼ平坦で0.6mの高さまで壁面はほぼ垂直に近く、その上は西側はゆるやかな傾斜、東側は途中で平坦面を形成する。床面は南北に長い長楕円形をなし、北壁は崩落のためか抉れている。覆土は上から灰褐色土、暗、黒褐色土、茶、暗褐色土となり、下層には草様の植物遺体が多く含まれる。

出土遺物(Fig.21－5～18)　5～13までが5、6層出土、それ以外が上層出土である。5は中型の甕で口縁部と胴部を一部欠損するがほぼ完形品である。尖り気味の底部から球形に近い胴部で頸部の上にゆるやかな稜線をもち口唇部は指押さえのため肥厚し、上面は平坦で中央部が窪む。内面は篦削り、外面は刷毛目調整で、全面に煤が付着している。6は小型の甕で口縁部は直線的に開き、口唇部端は丸く収まる。外面の下半部には煤が付着する。7は二重口縁の壷で口縁部は垂直に立上り、口縁部の上端は平坦である。10、11は高坏、12～16は小型の鉢である。17は木製の二又の鍬で刃部は短く二又のところから3.5cmの長さしかなく、両側から薄く削り出している。本来の二又鍬の刃部が折損品を再利用しているものか。18は円盤状の土製品で中央部に有孔の摘みをもつ。円盤面は縁が反り弧を描き、表面は擦れているようである。

3号井戸(Fig.20,22,PL.15,39)

1号井戸の南、微高地中央部に位置する円形の井戸である。床面は丸味を帯び、壁面はほぼ垂直で上半部で傾斜がゆるくなる。径1.32m、深さ1.05mを計る。覆土は上から黒～暗褐色土、暗褐色土、灰褐色粘質土、暗褐色粘質土となり、下層には草様の植物遺体が少量含まれる。

出土遺物(Fig.22－19～21)　19は球形に近い胴部に内湾して立ち上がる口縁部の甕で井戸の底から出土した完形品である。口唇部は内側に肥厚している。20は倒卵形の胴部に外反して開く口縁部となる。21は高坏で内外面とも刷毛目調整である。

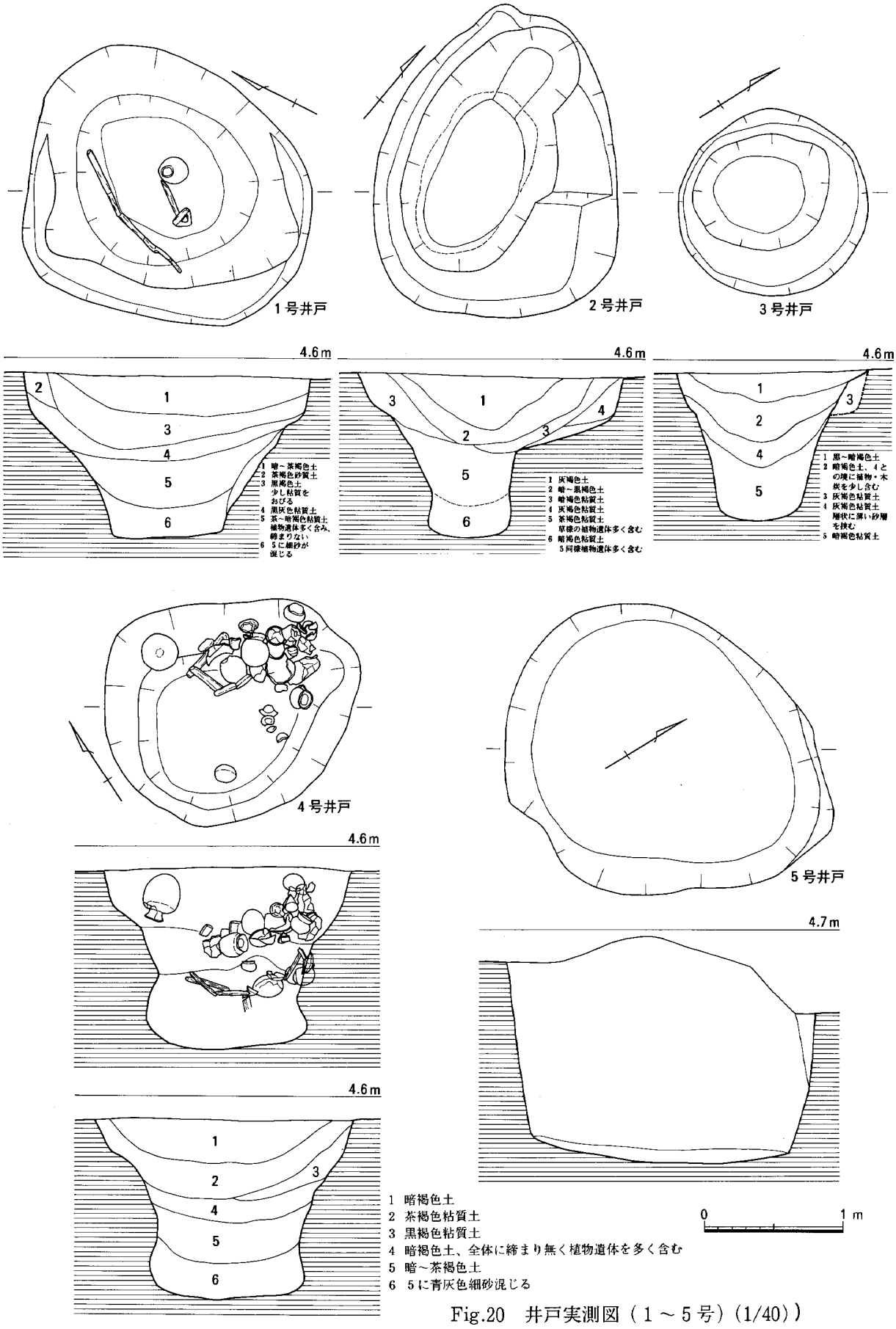


Fig.20 井戸実測図（1～5号）(1/40)）

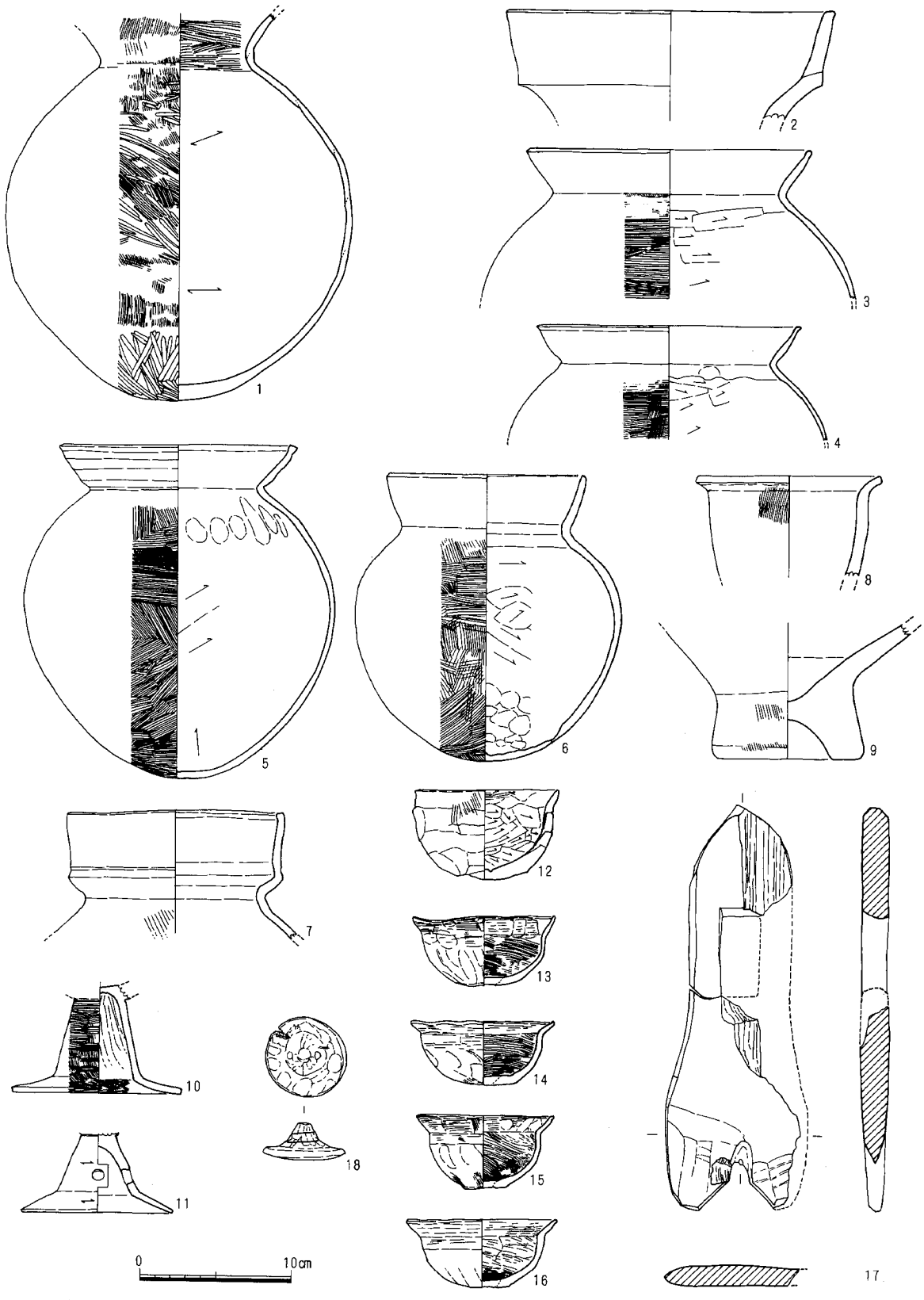


Fig.21　井戸出土遺物実測図１（１・２号）(1/4)

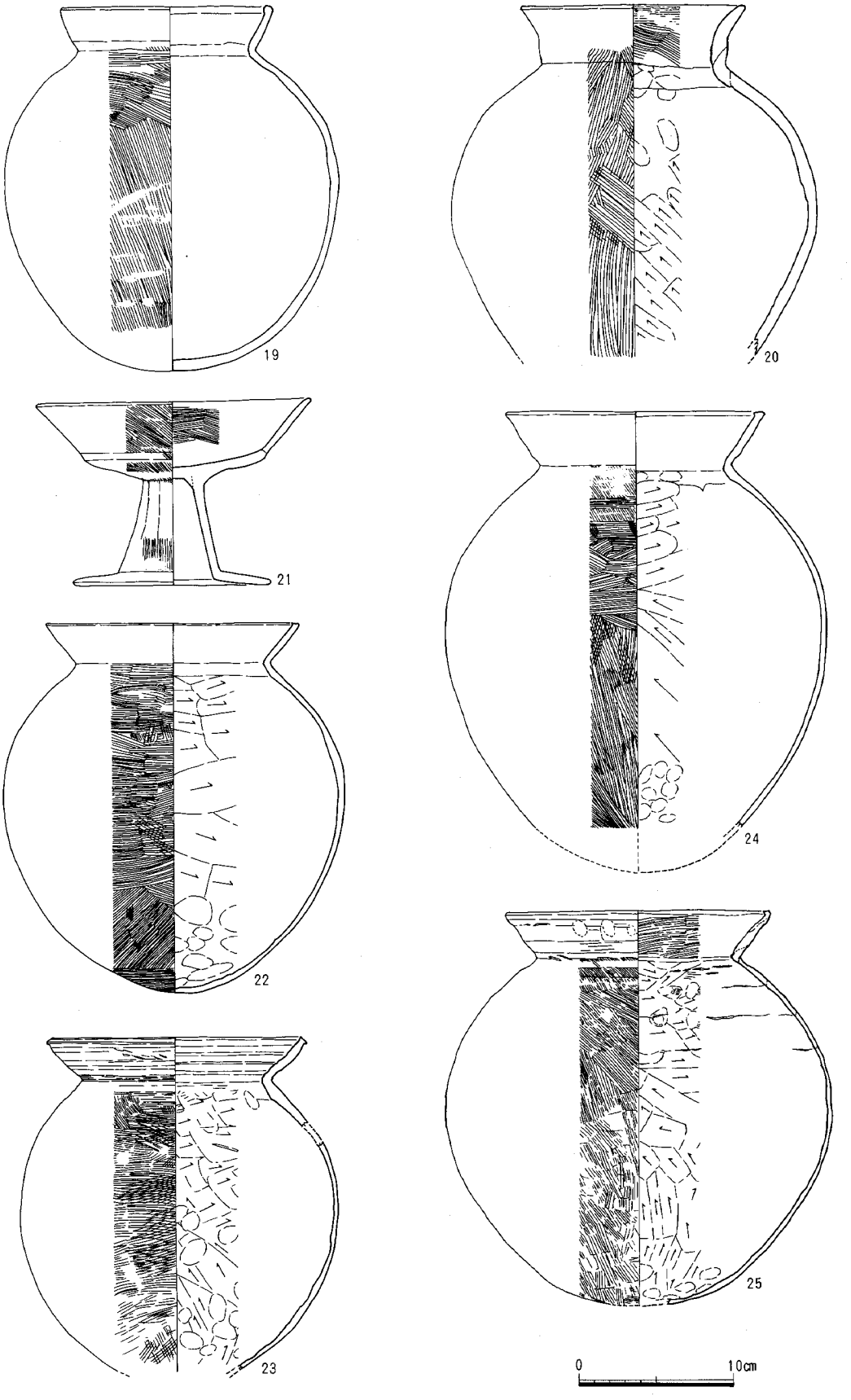


Fig.22　井戸出土遺物実測図２（３・４号）(1/4)

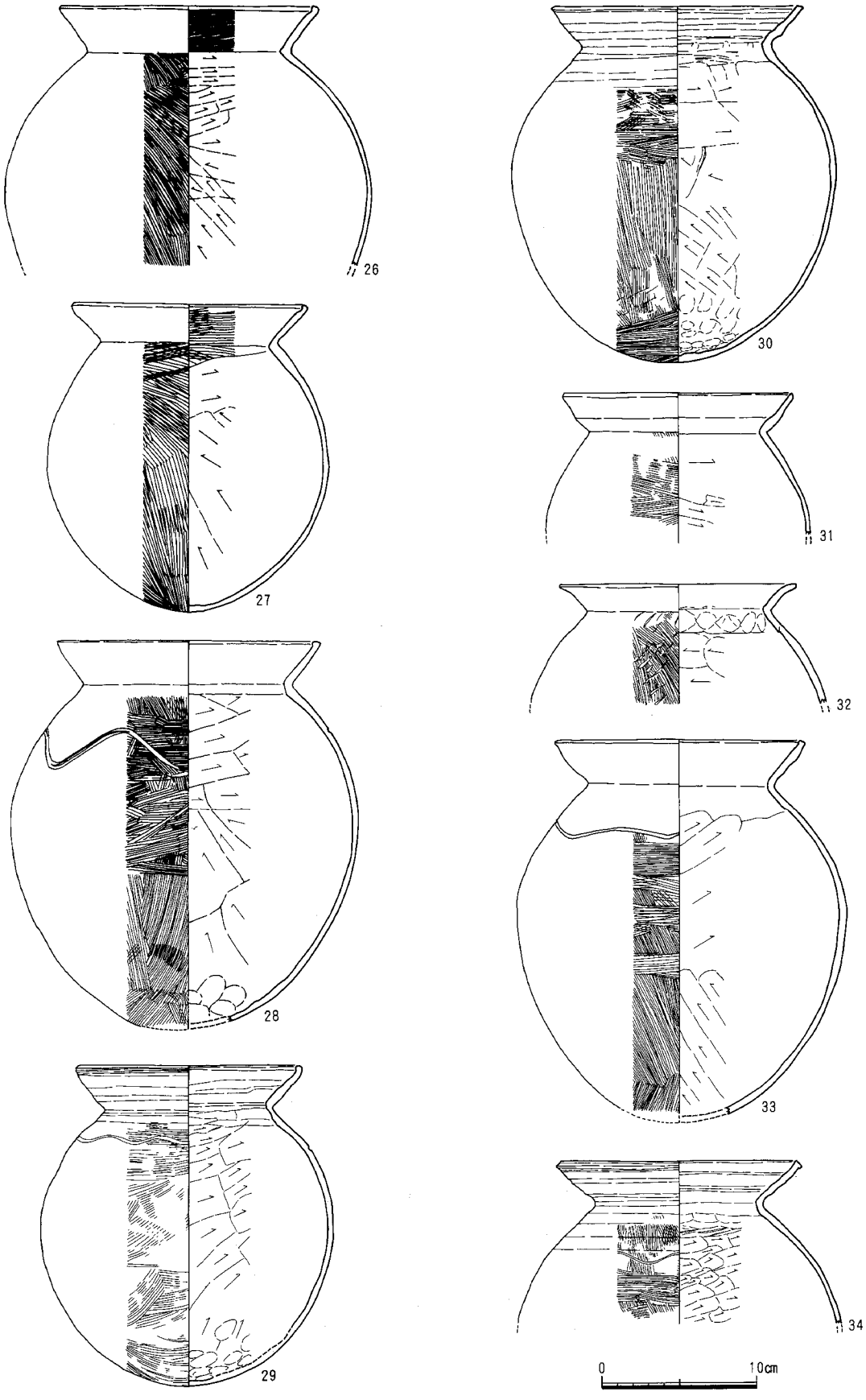


Fig.23　井戸出土遺物実測図３（４号）(1/4)

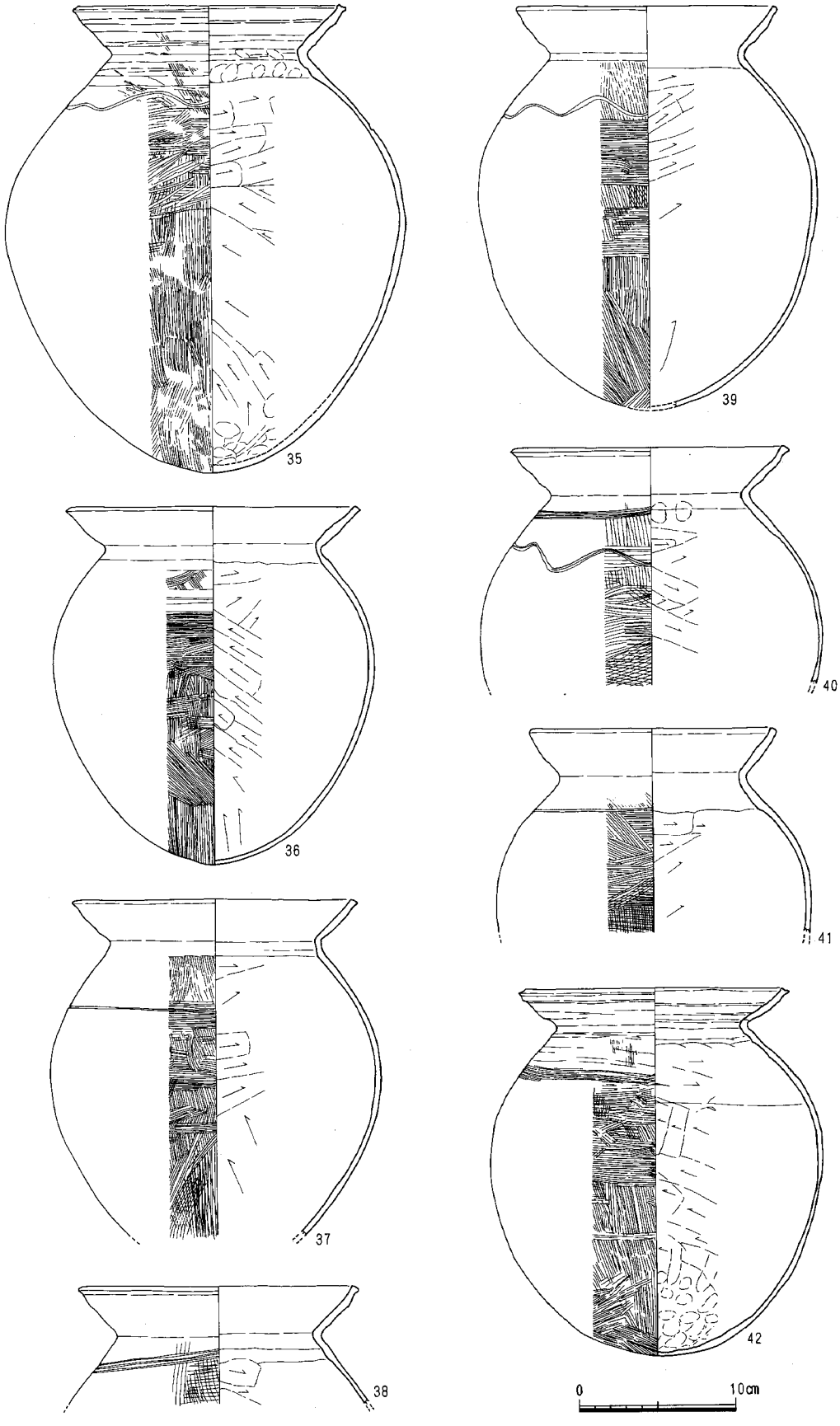


Fig.24　井戸出土遺物実測図４（４号）(1/4)

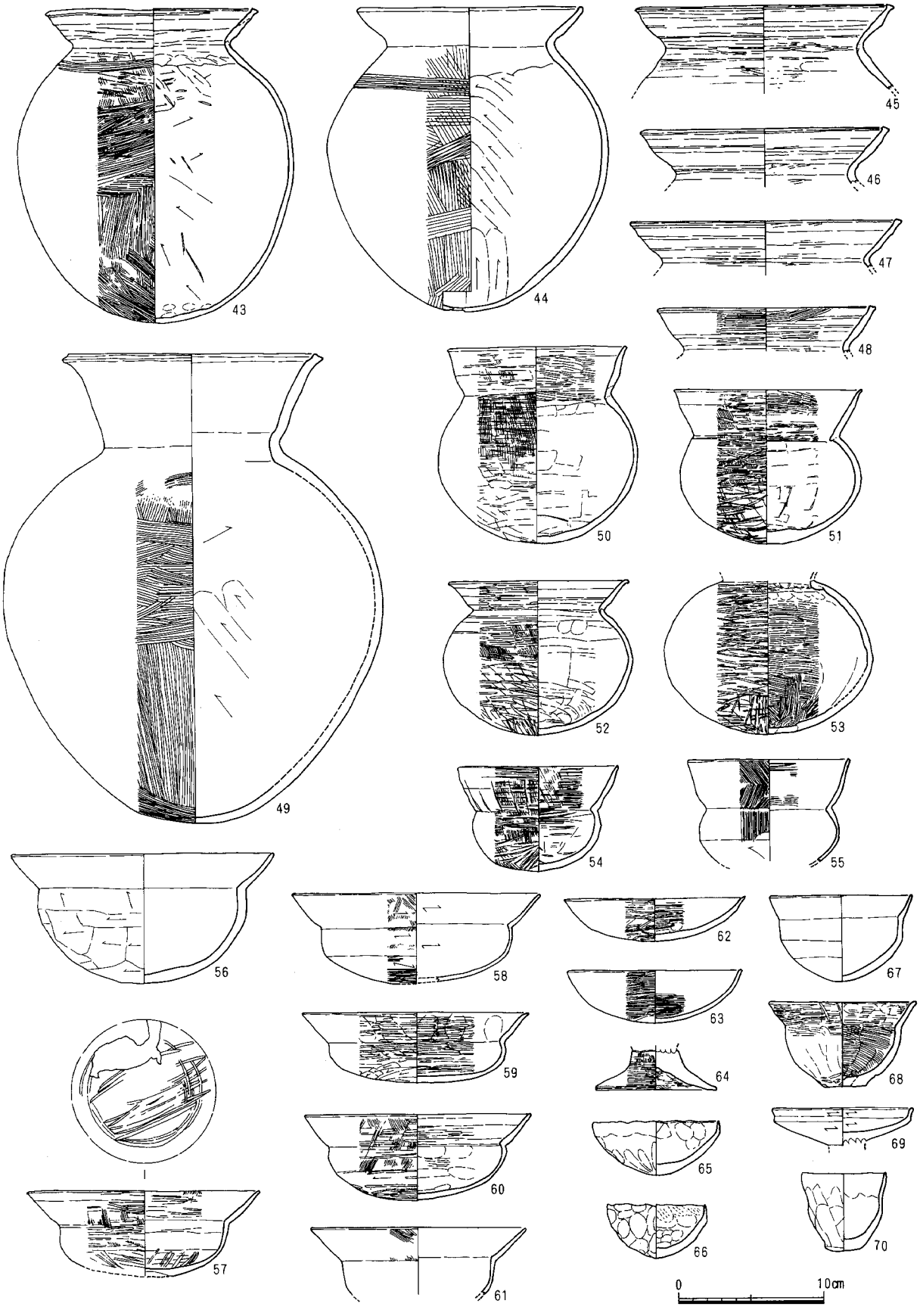


Fig.25　井戸出土遺物実測図５（４号）(1/4)

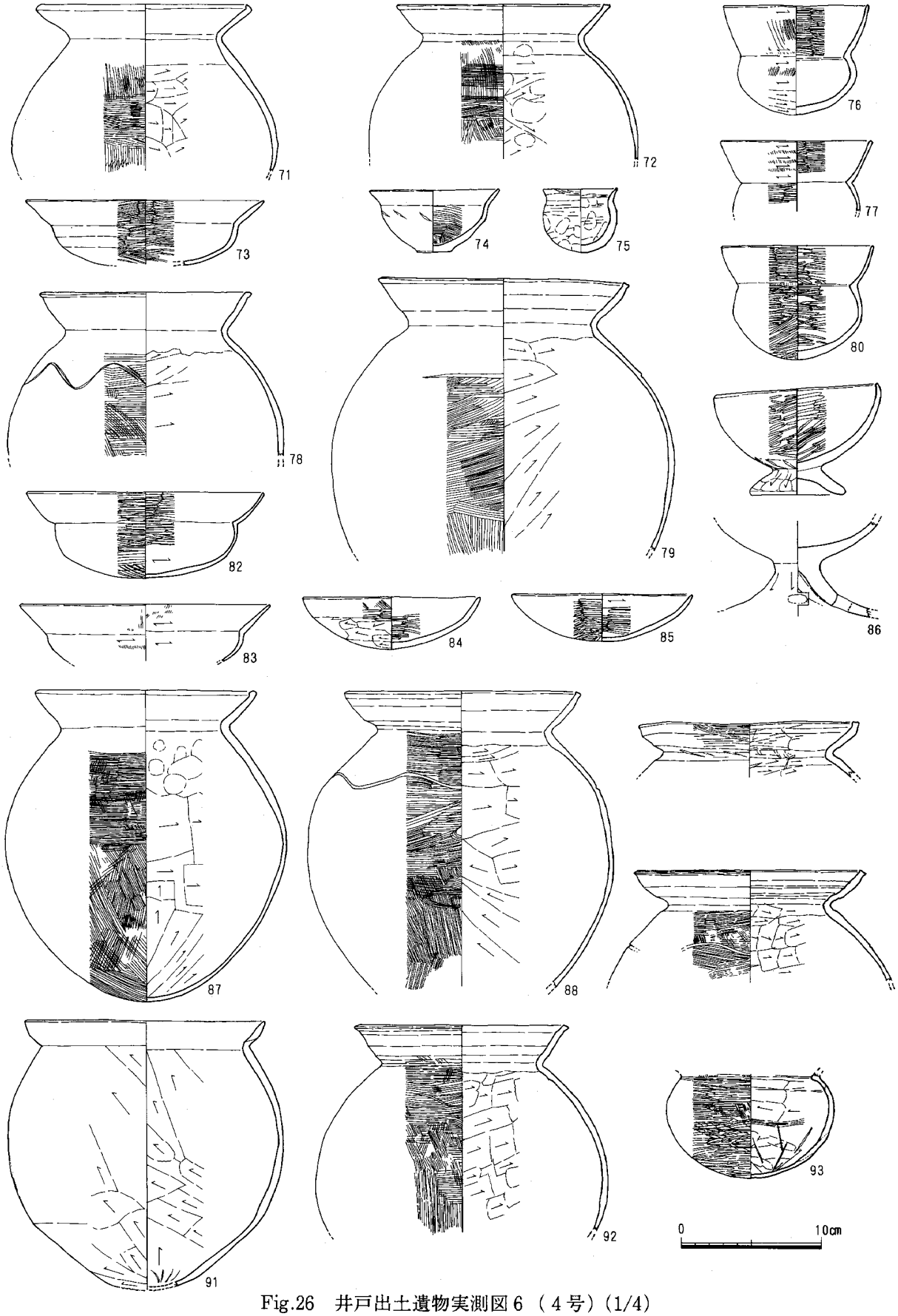


Fig.26　井戸出土遺物実測図６（４号）(1/4)

4号井戸(Fig.20,22)

2号井戸の南西5m、5号井戸のすぐ北東に位置する。略円形の歪な井戸で壁面の半ばより下はほぼ垂直となるが上半は傾斜がゆるくなる。この井戸からは多量の遺物が出土している。井戸が埋没していく途中で東側から二度に亘り一括廃棄しているものであろう。

出土遺物(Fig.22－22～Fig.27,98,99) 遺物は多く器種は甕、小型の壷、鉢、木製品等である。高坏、器台等の出土はない。22～71は1 ～3 層、71～86、98は4 、5 層、87～93、99は下層の一括出土である。

5号井戸(Fig.20,27)

2号井戸の南西に位置する。調査中の壁面の崩落で上面の規模が大きくなったが、全体の形状にはさほど変化はない。径2.1m前後の略円形で、深さ1.5mを測る。

出土遺物 (Fig.27－94～97)

いずれも甕の胴部から口縁部にかけての破片である。球形に近い胴部に外に開く口縁部となる。口縁端部は94､95は平坦、96､97は内面が尖る。

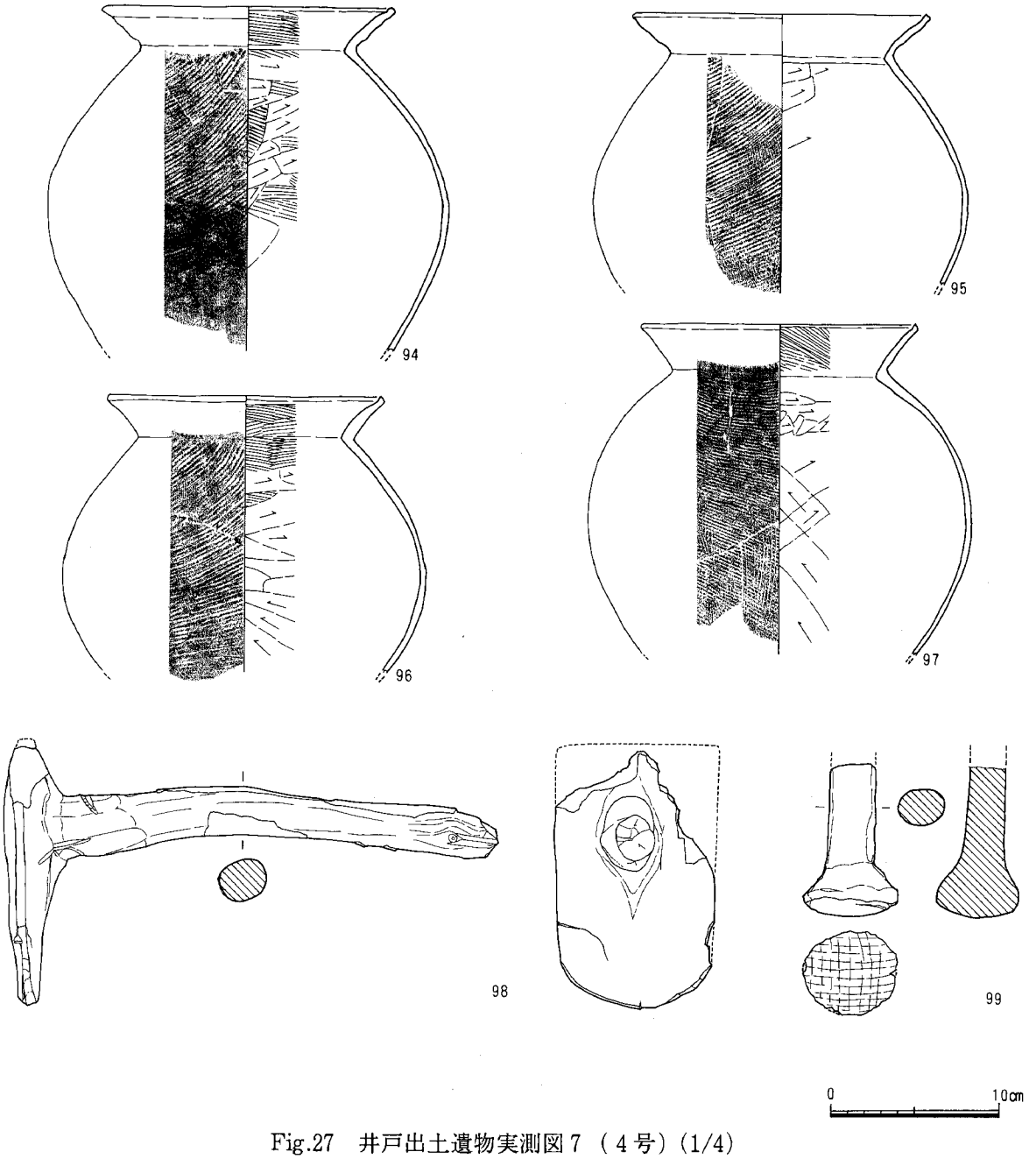


Fig.27 井戸出土遺物実測図7 (4号)(1/4)

5）溝状遺構の調査

7次調査では計4条の溝状遺構を検出した。古墳時代前期の1号溝状遺構としたのは調査区の南側において僅かな窪みを確認したためであるが、それ以外では確認出来出来なかったので溝とは言い難いが数箇所で纏まって遺物が出土した等もありここでは溝として取り扱う。2、4号溝状遺構は弥生時代中期初頭の時期で調査区内で収まる。

1号溝状遺構(Fig.4,28,29, PL. 32,33)

微高地の縁を巡る溝状遺構で東から東南部にかけて確認した。西側ではその縁が確認されていないので明確には出来ないが、微高地（生活空間）の広さは第7次調査区で北東-南西48m、北西-南東62mで約2,200㎡の広さである。土器を包含している土層は暗～黒褐色、暗灰褐色砂質土である。台地縁と微高地との比高差は0.35m前後であるが、当時の生活面はもっと高い位置と考えられるので相当の高低差が考えられる。南側では台地縁から2 ～3 mの範囲で遺物が出土しているが、東側と比較すると土器の小破片のみで、その量も極めて少ない。東側は遺物が集中(PL.32)して出土している。縁から0.5m～4 mの幅に分布し、微高地部分が高く、周辺に向かって遺物密度も薄く、低くなっている。いかにも台地から縁へ投棄した状況を窺わせる。土器は布留並行期の土師器が主体であるが一部弥生式土器も含まれる。

出土遺物(Fig.30～38, PL. 43,44)

1 ～43は甕である。最も多く見られるのは胴部が球形よりも少し長めで内湾気味に立ち上がる口縁部となる形態である。外面は胴部下半は縦、斜め方向の刷毛目調整が主で胴部上半は横方向の刷毛目調整が一部みられる。内面は下から斜め上に篦削り調整を行ない器壁を薄くしている。肩部には沈線や波状沈線、櫛状工具による波状文もみられる。口縁部は端部が肥厚するものや、口唇部中央が窪む

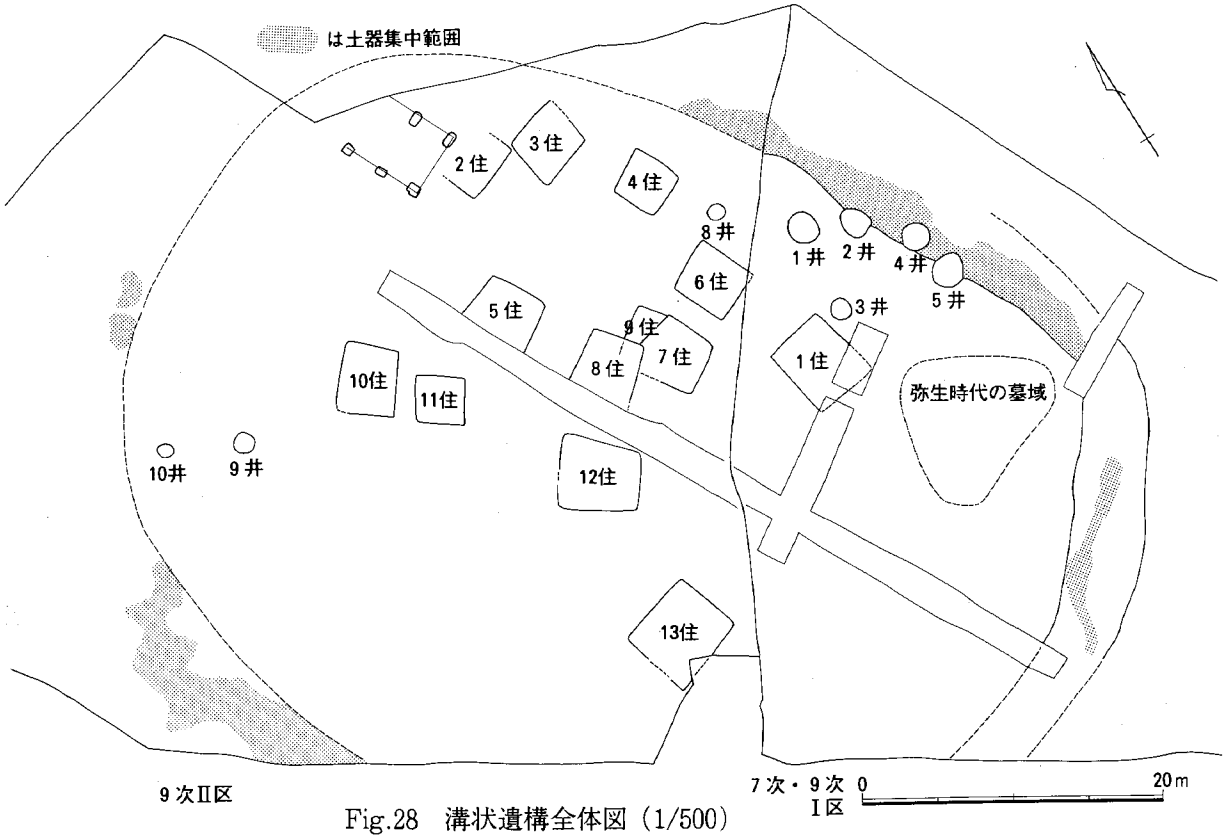


Fig.28 溝状遺構全体図（1/500）

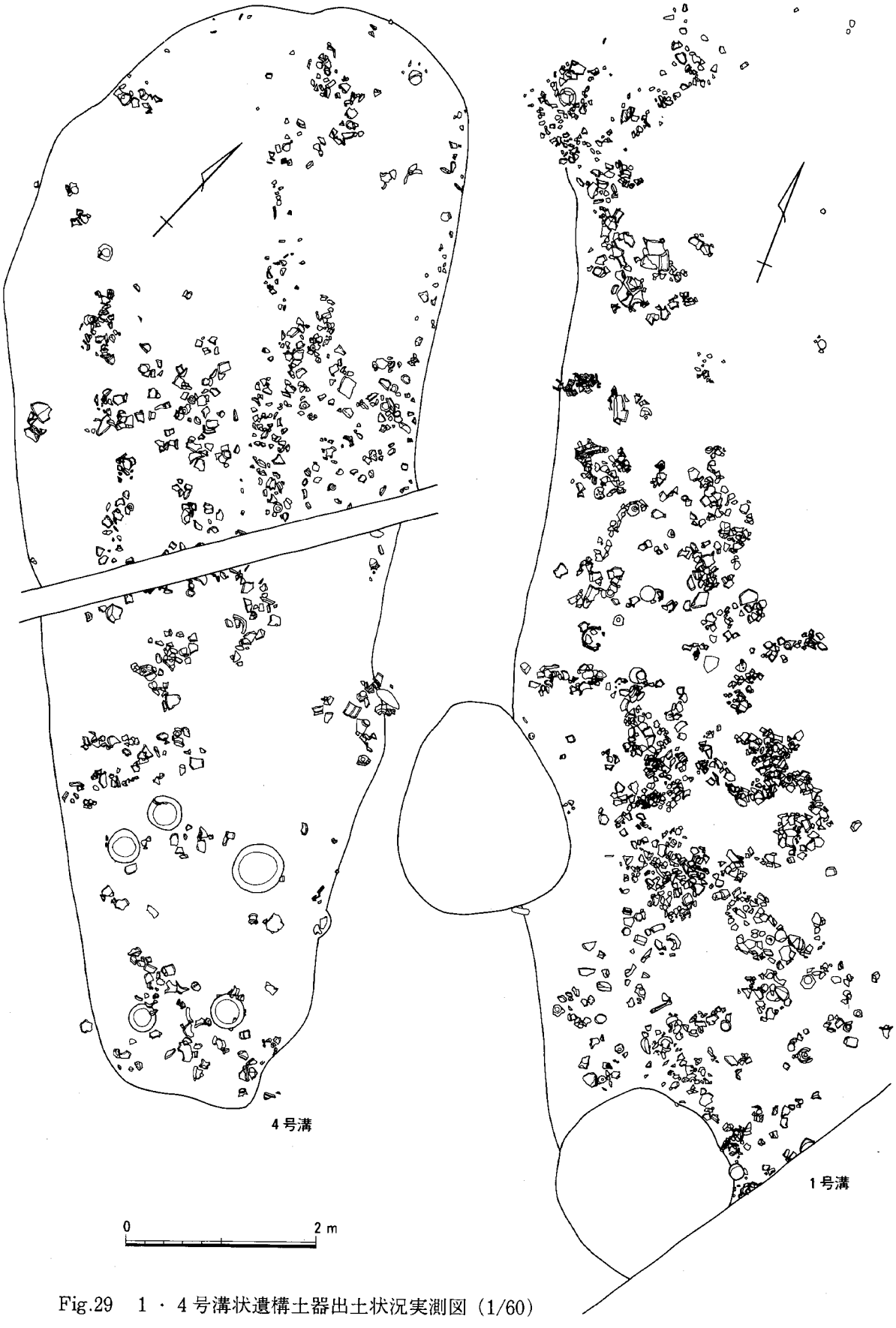


Fig.29　1・4号溝状遺構土器出土状況実測図（1/60）

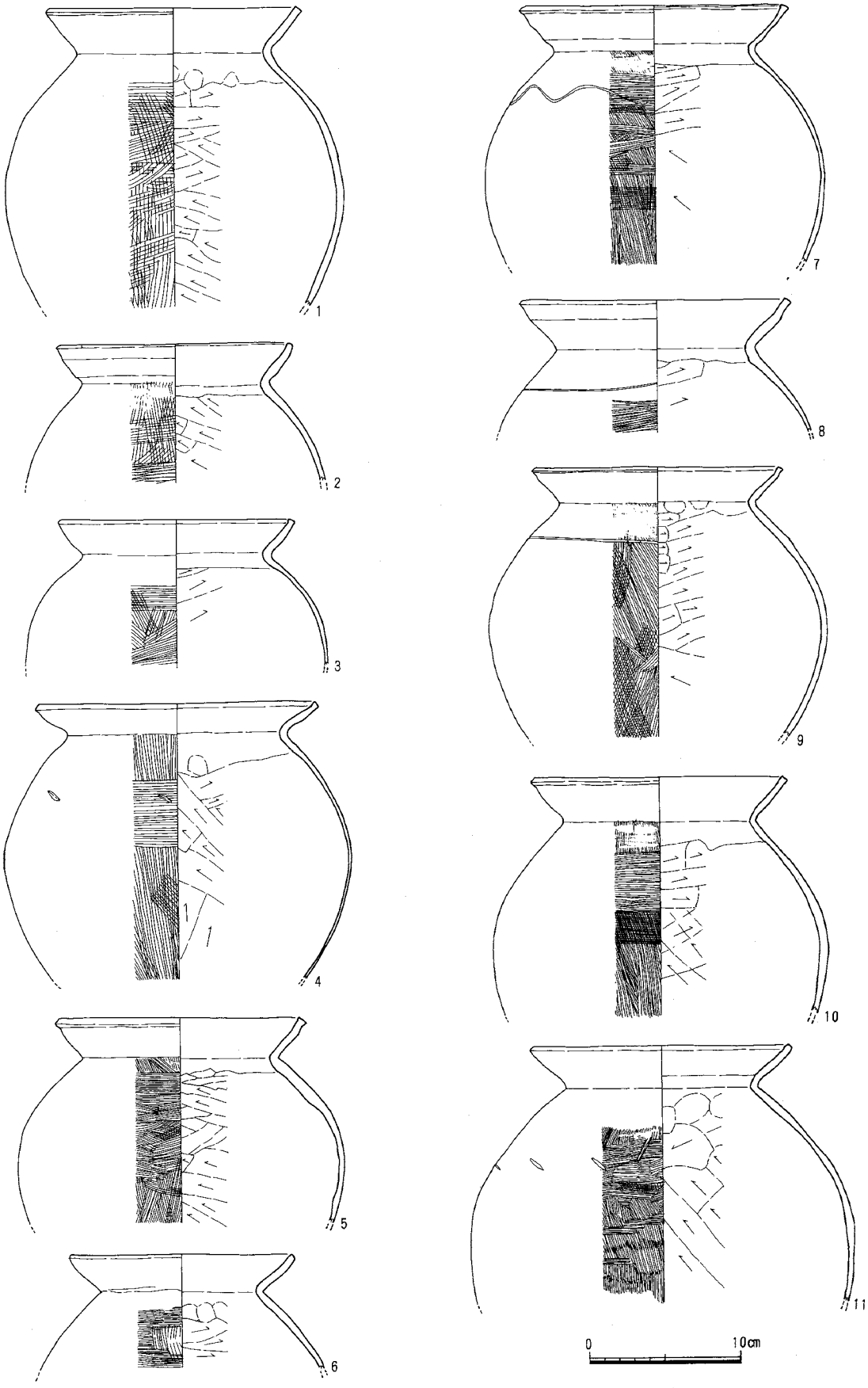


Fig.30　1号溝状遺構出土土器実測図1（1/4）

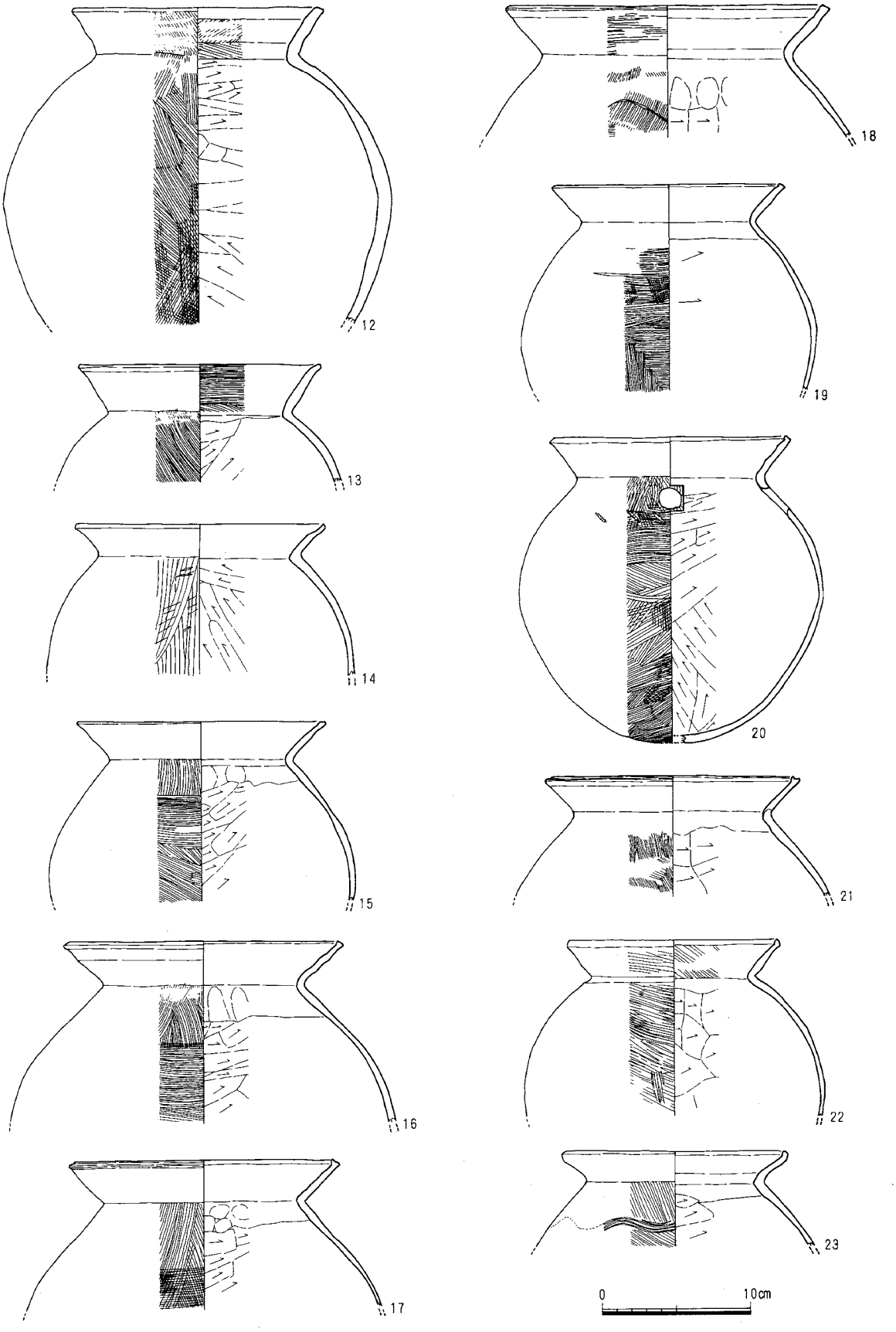


Fig.31　1号溝状遺構出土土器実測図2（1/4）

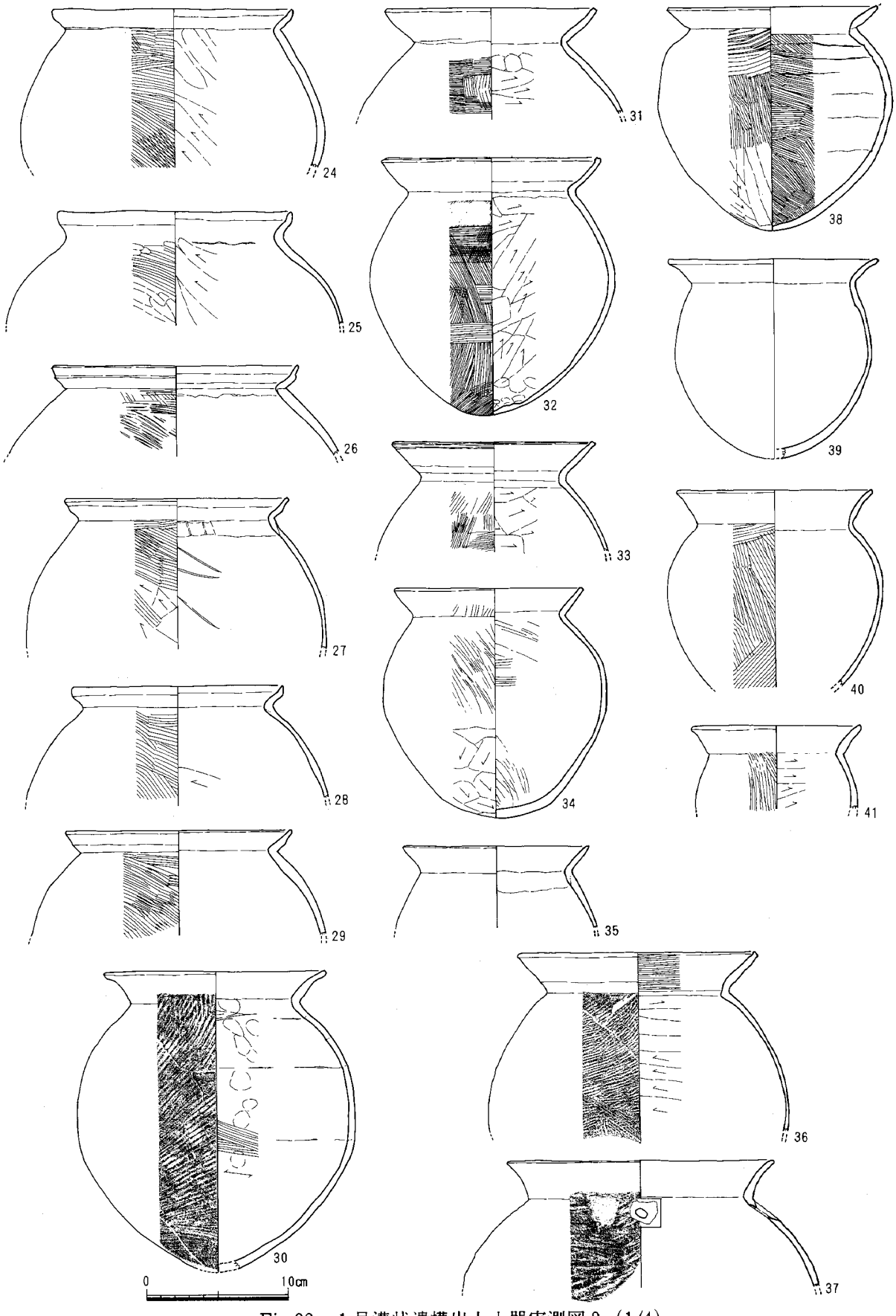


Fig.32　1号溝状遺構出土土器実測図3（1/4）

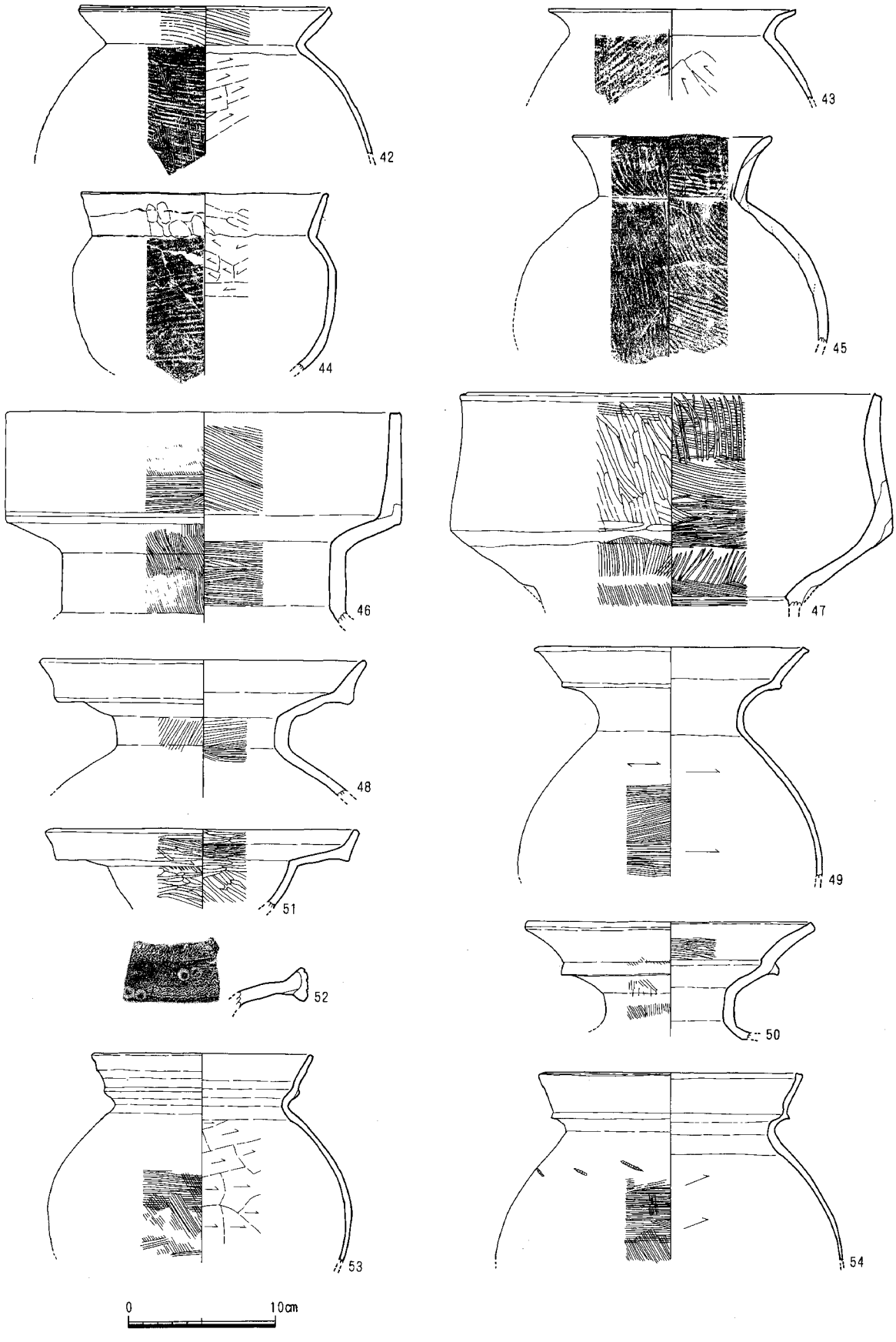


Fig.33　1号溝状遺構出土土器実測図4（1/4）

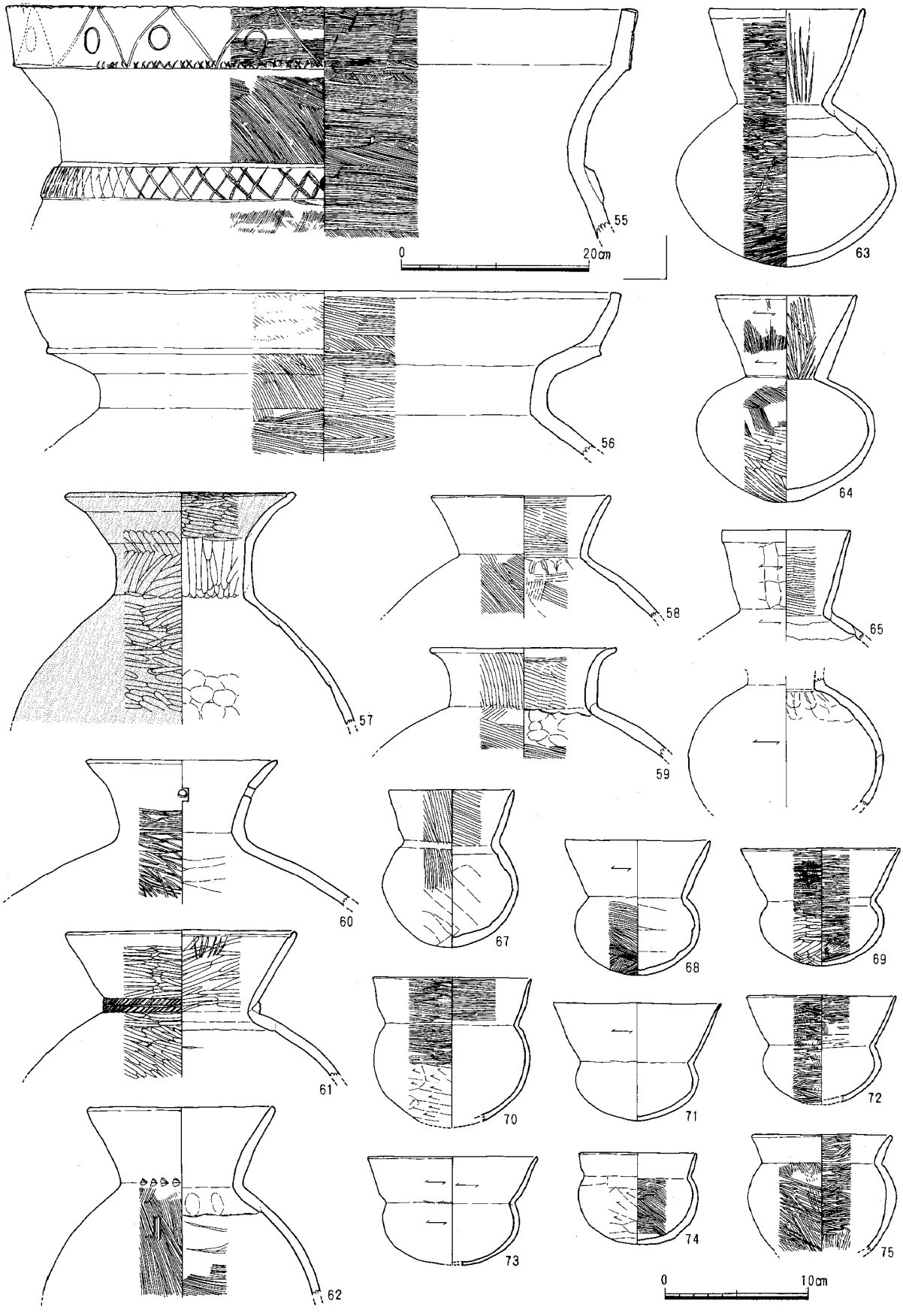


Fig.34　1号溝状遺構出土土器実測図5（1/4,1/6）

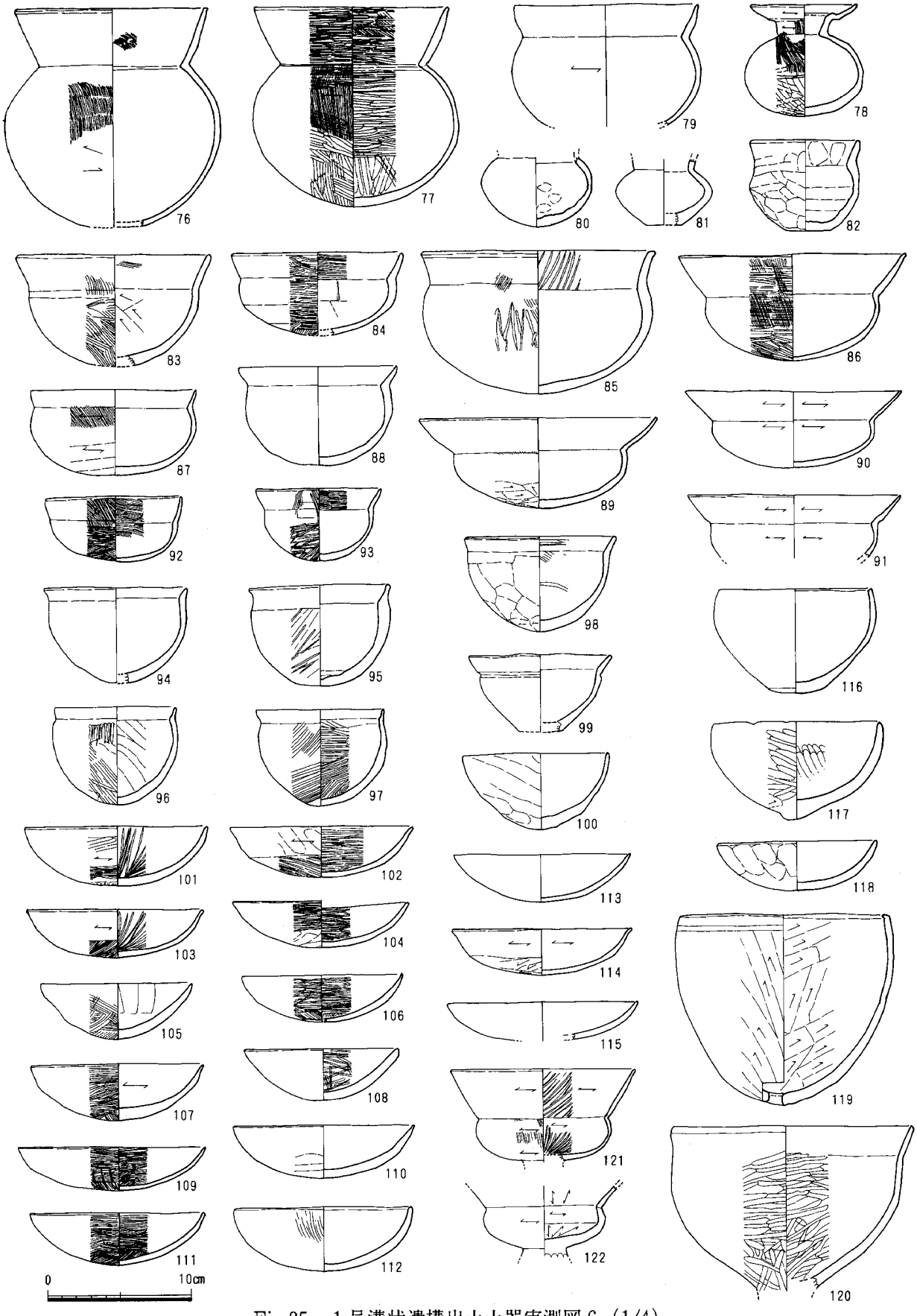


Fig.35　1号溝状遺構出土土器実測図6（1/4）

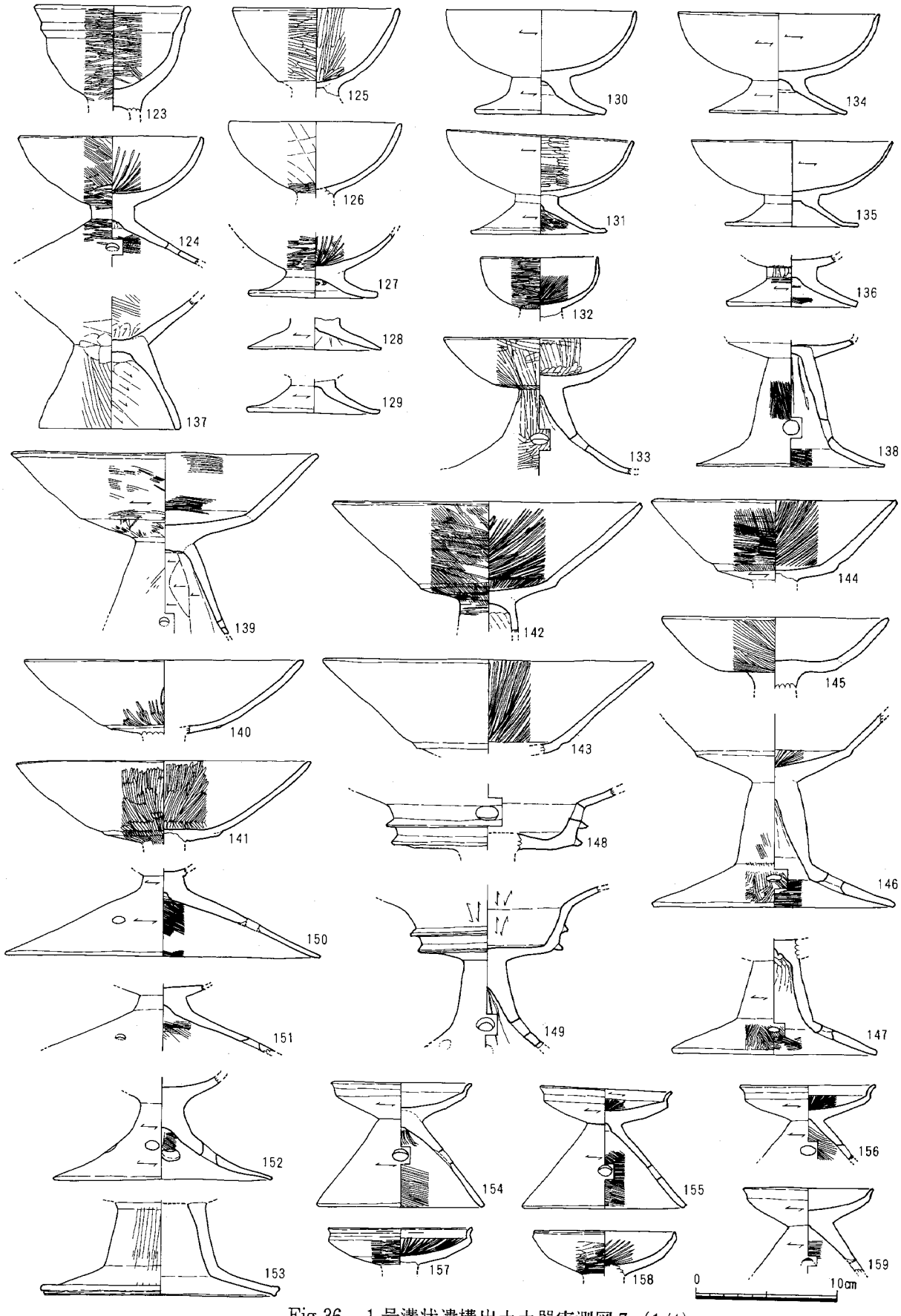


Fig.36　1号溝状遺構出土土器実測図7（1/4）

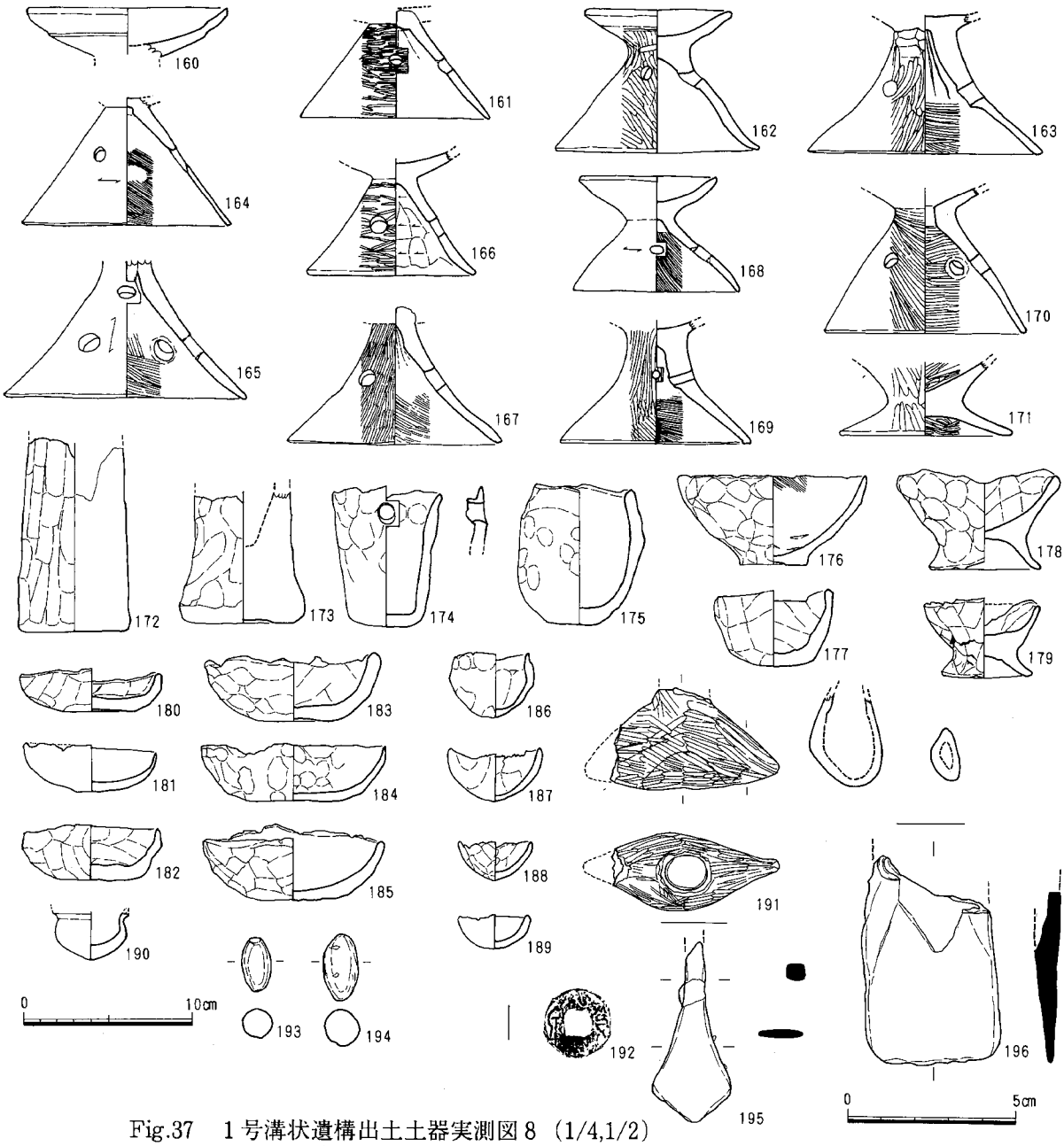


Fig.37　1号溝状遺構出土土器実測図8（1/4,1/2）

もの、内面が尖るものや、あるいは端部が角張るものも見られる。25～29は胴部上半に最大径をもち、内湾して立ち上がる短い口縁部となる。42は内面は篦削り、外面は叩きの後刷毛目調整をおこなうが叩き痕が明瞭に残る。45～59は壷である。45は球形の胴部で外反して開く口縁部となる。46、47、52～56は二重口縁の壷である。46は口縁部が垂直に立上り、頸部がすぼむ。47は口縁部端が内傾して立ち上がる。内外面とも刷毛目調整の後から研磨を行なう。55は大型の壷で頸部はあまりすぼまらず肩部に粘土帯を貼り付け篦で文様を描く。口縁部にも三角紋の中に竹管紋を描き、上端部にも線刻している。56は口縁部と頸部の境に稜をもち内外面とも刷毛目調整である。48、49は口縁部が朝顔形に開く壷で口縁部と頸部の接合部に明瞭な段をもつ。51は高坏であろう。57～59は倒卵形の胴部から外反して開く口縁部となる。60は口縁部に穿孔、61は頸部の突帯に篦による線刻、62は刺突文を巡らせる。6

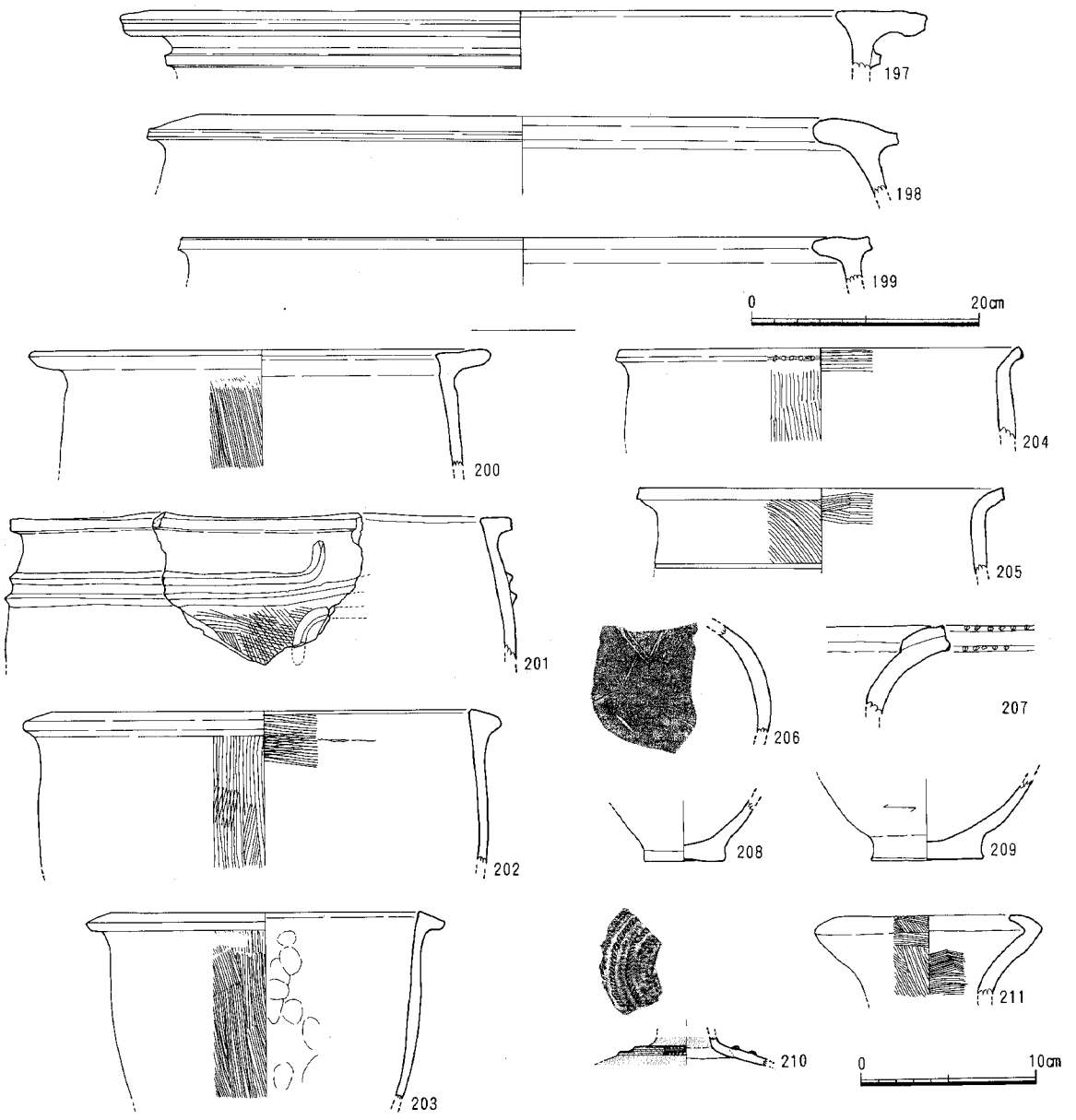


Fig.38　1号溝状遺構出土土器実測図9（1/4,1/6）

3～66は偏球形の胴部に直線的に開く長い口縁部の小型壷である。68～79も小壷であるが口縁部が大きく開く一群である。78は小型の二重口縁壷でほぼ完形品で、器高7.5cmを計る。全体に研磨するが胴部外面は粗く刷毛目調整が明瞭に残る。83～93までは扁平な体部に大きく開く口縁部となる鉢である。内面には稜線を明瞭に残す。内外面とも刷毛目の後研磨を行ない、粗い研磨では刷毛目が遺存している。94～99は深い椀に僅かに屈曲する口縁部となる深鉢である。101～115は坏で研磨を施す丁寧な造りである。119は底部に焼成前の穿孔がみられる甑である。内外面とも削りに近い篦なでである。121～136は脚付きの椀類である。低い脚部に深い椀部をもつ。133は脚部に円孔をもち、高坏かも知れない。139～153は高坏である。坏の底部と体部の境に稜をもち、体部は直線的に大きく開く。坏部は内外面とも丁寧な篦研磨を施す。脚部に円孔を複数もつ。148、149は坏底部が平坦で体部は垂直に立上り外面に突帯を貼り付け、その上部から口縁部が大きく開く形態の高坏である。小破片であるので全形は不明であるが、148は坏部、149は脚部に円孔を穿つ。154～170は器台である。浅い皿状の坏に直

線状に開く脚部をもつ。数箇の円孔を穿つ。口縁部は底部からそのまま拡がるものと、外反して立ち上がる形態のものがある。坏部は研磨、脚部内面には刷毛目が残る。172、173は土製の支脚、174は口縁部直下に孔をもつ蛸壷であろう。175～189は手捏土器で内外面に成形痕を残す。191は土師質の皮袋形土製品である。中空で口縁部と左の先端部を欠損する。前面の胴部は底部からの加圧で膨らみ断面はつぶれている。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好で色調は淡褐色ないし灰褐色をなす。横方向の粗い刷毛目の後同方向の篦研磨で表面を平滑にする。193、194は土製投弾、192は貨泉、195は鉄鏃、196は包含層出土の鉄斧である。196～211は古墳時代の遺物の中に混在して出土した弥生式土器である。前期から後期の土器が含まれる。201は甕の胴部から口縁部の破片である。胴部に螺旋上の突帯を貼り付け、その起点と終点を上下に直角に折り曲げている。

2号溝状遺構(Fig.4)

1号溝と並行してその北側に位置する。西側では撹乱溝に切られ、その西側では溝が確認出来ないので、撹乱溝の中で終息するものであろう。規模は幅3m前後、長さ約16m、深さ0.4mを測る。覆土は上から黒～暗褐色土、茶褐色土、灰褐色粗砂層となり、自然堆積状況を示す。土器は小破片だけで各層から出土しているがその量は少ない。弥生時代中期前半の土器しか出土していないのでその時期と考えられよう。

出土土器(Fig.39,40)

1 ～25は甕の胴部から口縁部と底部の土器である。3 のように口縁部に三角突帯を貼り付け、その直下に小さな突帯を貼り付け、刻み目を施すものから1のように口縁部上面を平坦にし、中央部を窪ませ、直下に二条の突帯を巡らせる形態まで存在する。18～25は上げ底の厚い底部で前述の甕に符合する。外面は刷毛目調整で内面はなで調整である。27～31は壷の口縁部とその底部である。26は口縁部で上面を平坦にし、端部を外側へ傾斜させている。外面は摩耗が激しく調整は不明、内面は篦なで状の研磨である。

3号溝状遺構(Fig.4)

調査区の西隅に検出した遺構で1号土壙に切られる。幅1.5m、長さ10m、深さ約0.3mを測り、直線的に延びるとⅡ区へと続くが、Ⅱ区で確認出来なかったので、屈曲して西側へ延びるものであろう。覆土は上から暗褐色粘質土、灰褐色粘質土、灰～暗褐色粘質土で少し砂粒を含んだ層となる。

出土土器(Fig.40－33～35)

出土土器は少なく実測可能な遺物は3点のみである。前期の土器で33は壷の口縁部で内外面とも研磨、口縁部と頸部の境に明瞭な段をもつ。34は同底部、35は外反した口唇部に篦による刻目をもつ。

4号溝状遺構(Fig.29)

調査区の微高地の東縁に沿うように南北に延びる溝である。当初二条の溝と考えたが土層の検討の結果一条の溝であることがわかった。北側で最も幅を広げ4.5mを測り、長さは11.6m、深さは0.35mを測る浅い溝状遺構である。土器は全体から出土しているが小破片が多い。

出土土器(Fig.40－36～43－104, PL.44)

36～82は甕の口縁部、底部である。36は前期後半の甕で外反する口唇部下端に浅い刻みをもつ。外面から口縁部内面にかけて刷毛目調整である。37～39は口縁部断面が三角形で、その下に三角突帯を貼付る甕である。37は口唇部、胴部突帯に刻み目をもつ。40～48は同様な口縁部の形態であるが胴部に突帯をもたない。49～62は口縁部上面を平坦にし、中央部を窪ませるものもあり、直下に突帯を巡らせる形態まで存在する。63～82は同様な形態の甕の底部である。

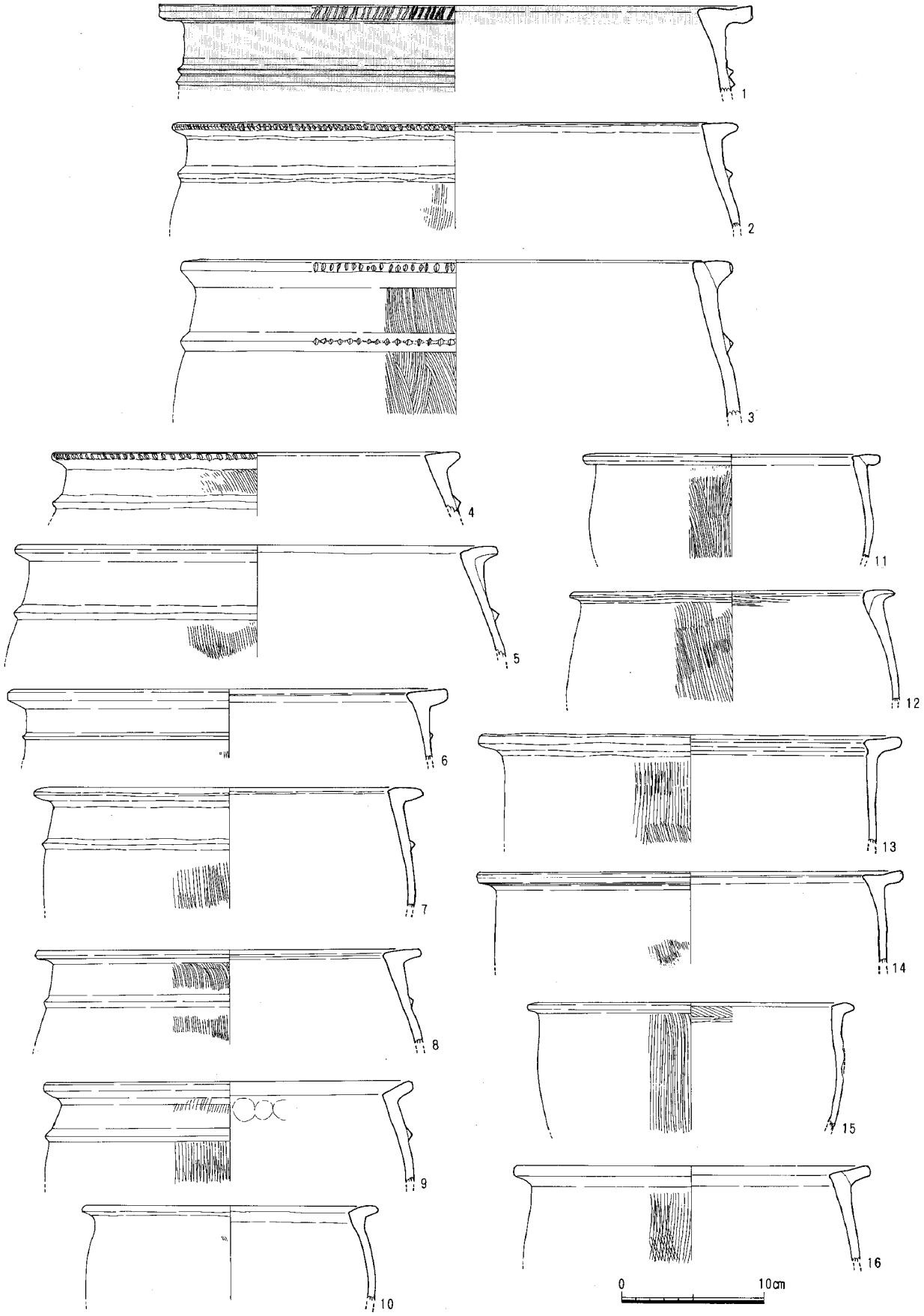


Fig.39　2号溝状遺構出土土器実測図1（1/4）

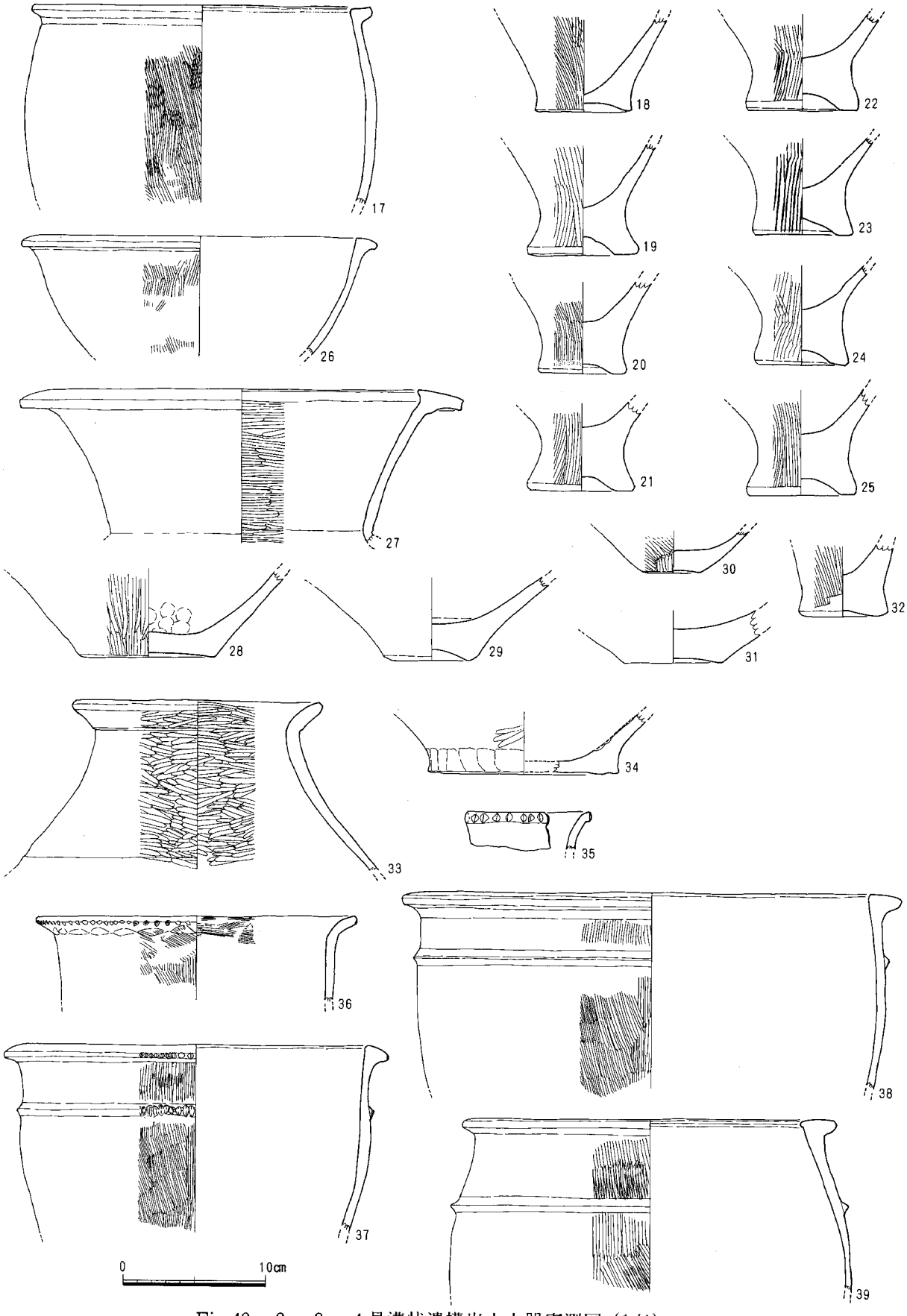


Fig.40　2，3，4号溝状遺構出土土器実測図（1/4）

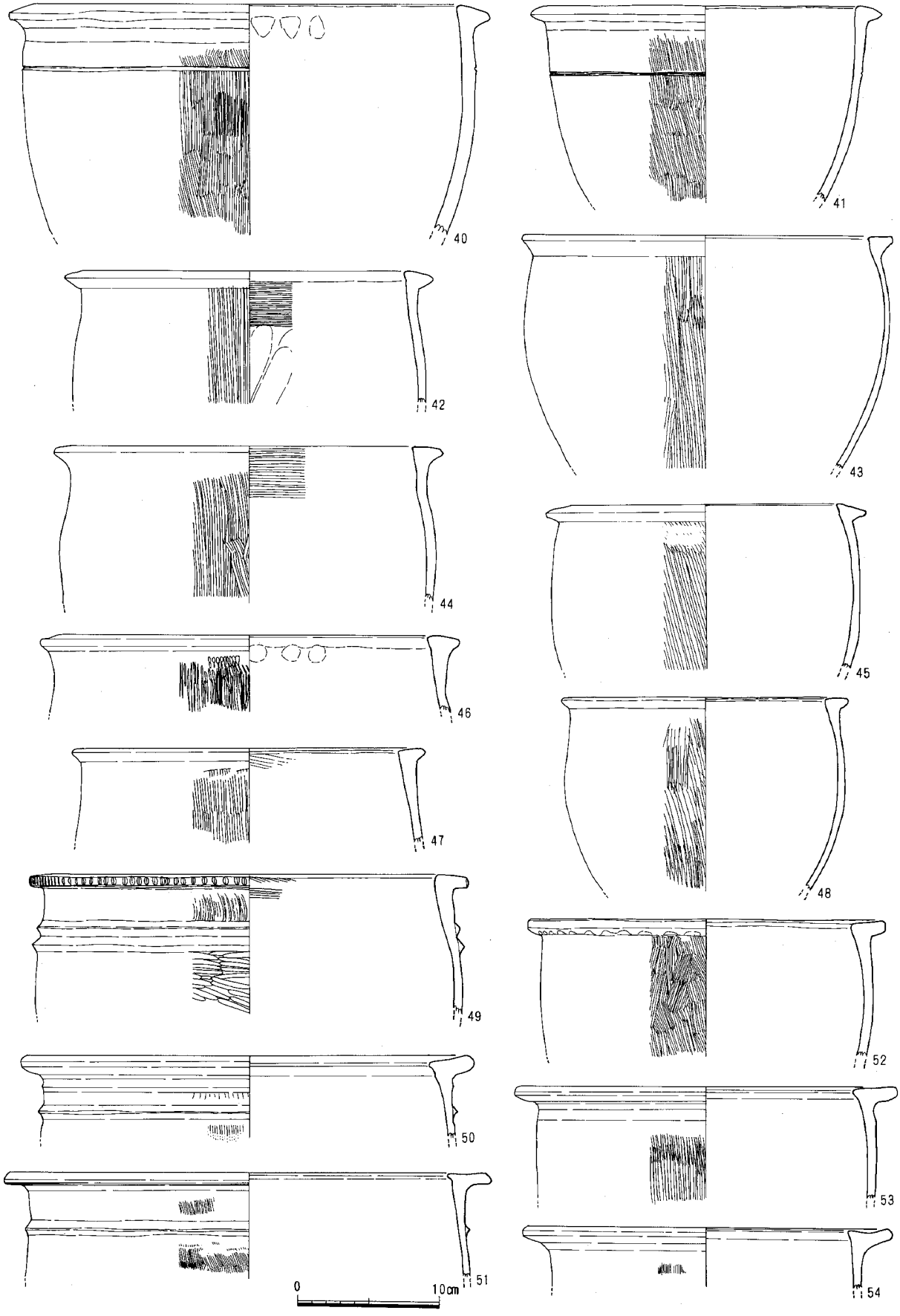


Fig.41　4号溝状遺構出土土器実測図1（1/4）

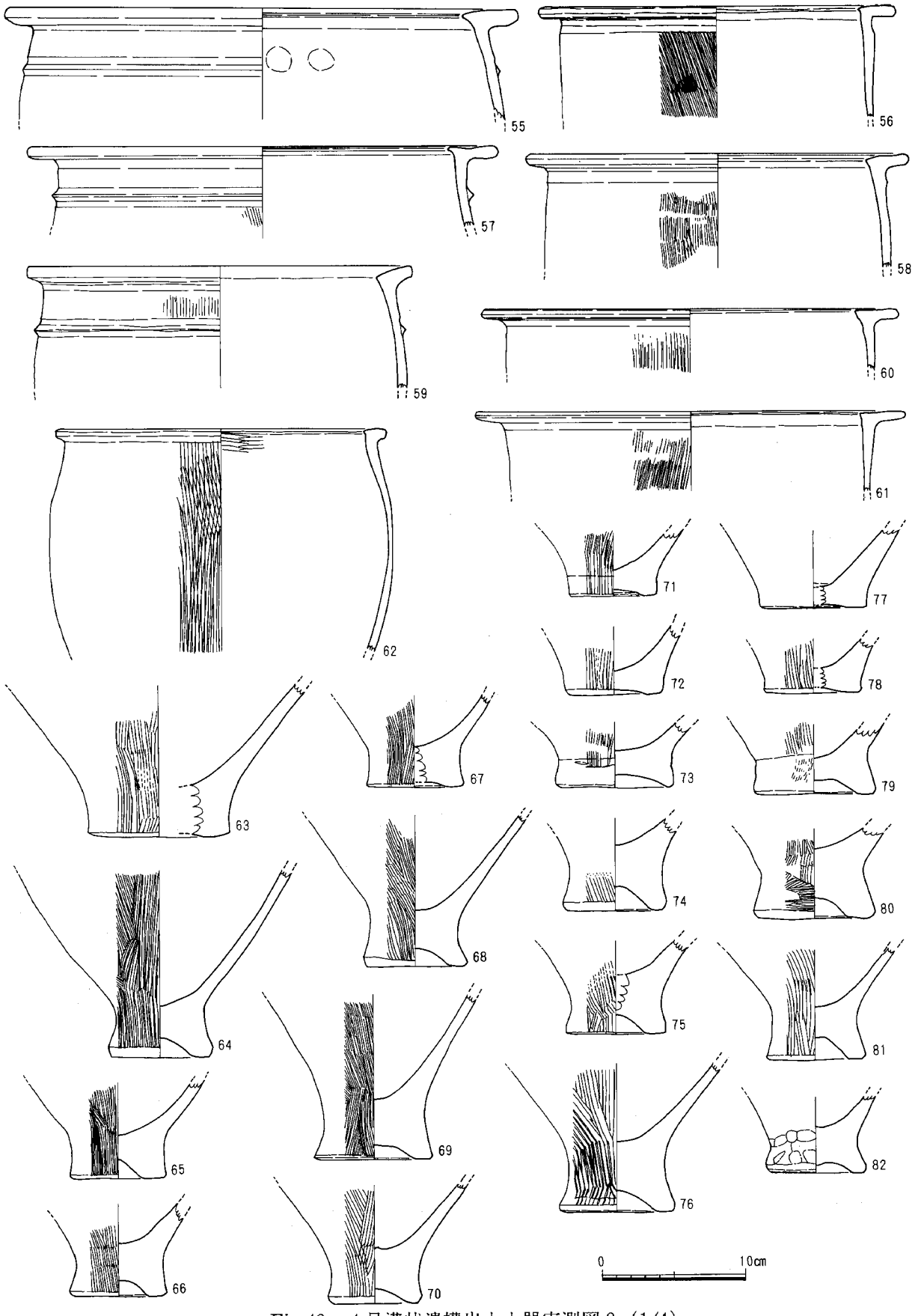


Fig.42　4号溝状遺構出土土器実測図2（1/4）

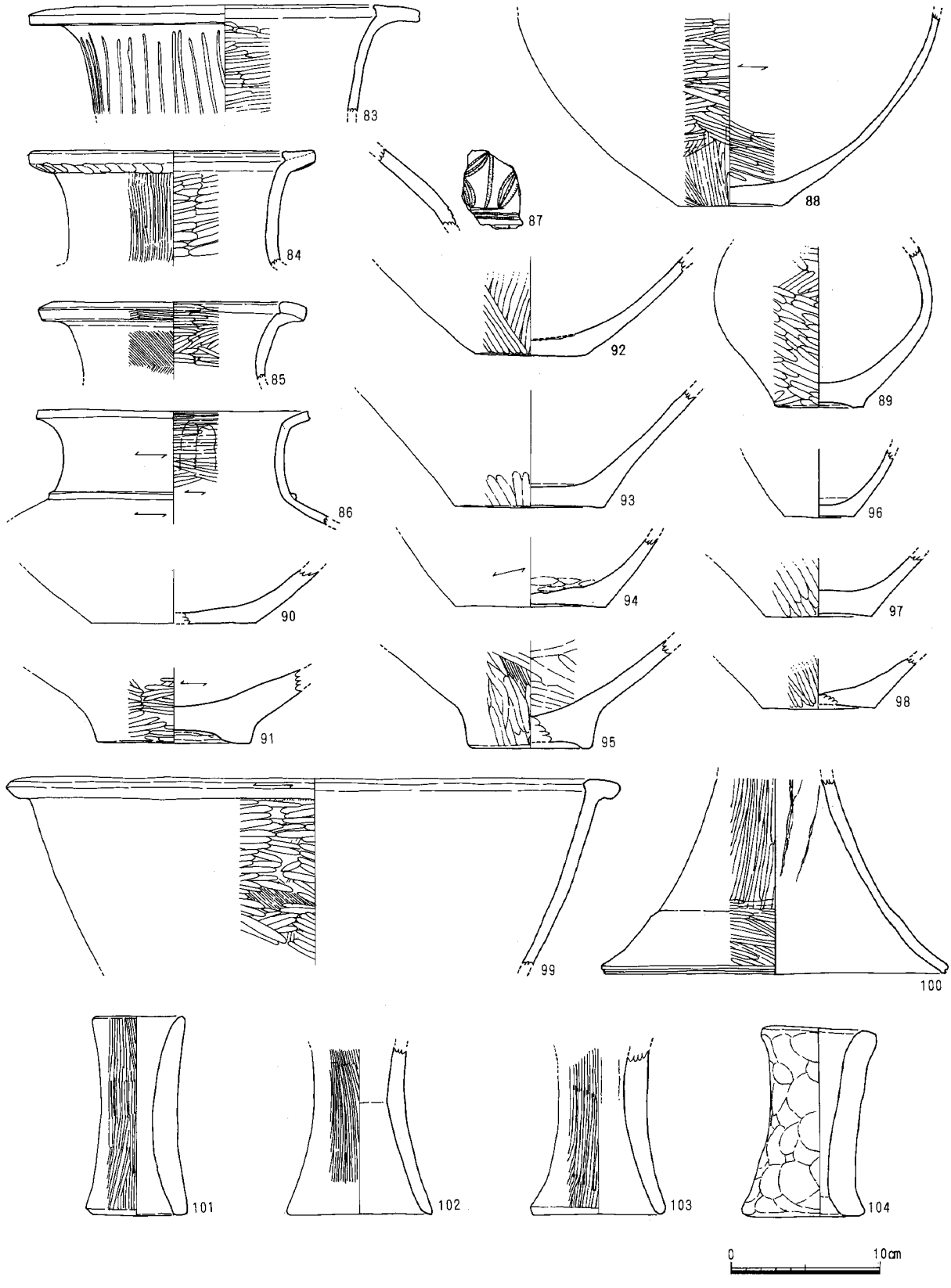


Fig.43　4号溝状遺構出土土器実測図3（1/4）

（２）第９次Ⅰ区Ⅱ面の調査

前述したように第９次Ⅰ区Ⅱ面の調査は第７次調査のⅡ面目の調査である。基本的にはⅠ面の遺構より古い時期の遺構であるが、土層の見極めが困難な状況であり、一部新しい時期の遺構も含まれる。この面で検出出来たのは土壙と竪穴住居跡である。

１）土壙の調査

17号土壙(Fig.45,46－1)

調査区の西端に位置する不整形の小土壙である。規模は86×76cm、深さ19cmで中央部が丸く窪む。

Fig.44　第９次調査Ⅰ区Ⅱ面の遺構配置図（1/300）

遺物は弥生時代の高坏が1点出土している。

18号土壙(Fig.45,46－2,3)

17号土壙の東に位置する略円形の土壙である。規模は100×105cm、深さ20cmで、壁面は垂直に近く立上り、床面は平坦で内部にピットを掘り込む。二点の夜臼式土器が出土している。2 は胴部の屈曲部に刻目突帯を巡らし、口縁部は外反して立上り口縁部端にも刻み目突帯を巡らす。外面は条痕が残り胴部下半には煤が付着している。内面は板状工具による擦痕が見られる。3 は胴部での屈曲はなく内湾して口縁部となる。口縁部の刻目は棒状工具による。外面の胴部下半は条痕の後刷毛目調整を行なう。内面はなで調整。

19号土壙(Fig.45,46－4)

31号土壙の西に隣接する不整形の土壙である。規模は121×150cm、深さ32cmで、壁面はゆるい傾斜を示し床面は北側に傾斜している。壷の底部が1点出土している。

20号土壙(Fig.45,46－5)

19号土壙の南にある大型の土壙である。隅丸長方形の平面形で規模は153×200cm、深さ24cmで、壁面はゆるやかである。南側で別の遺構と切り合う。甕の底部が1点出土している。

21号土壙(Fig.45,46－6～9)

20号土壙のさらに南に位置する小型の土壙である。略隅丸長方形の平面形で規模は87×136cm、深さ15cmである。6 は甕の底部で刷毛目調整、7 は木葉痕のある上げ底の底部で外面に赤色顔料が見られ、8 は壷の口縁部で内面に赤色、外面に黒色の顔料を塗布している。

22号土壙(Fig.45,46－10,11,PL.45)

微高地の中央部に位置する小型の土壙である。隅丸長方形の平面形で規模は100×116cm、深さ22cmで、壁面はゆるやかである。床面より少し上で土器は出土している。10は甕で口径21.8cmを計り、丸味をもつ胴部から口縁部は外反し口唇部全体に刻目を巡らす。外面は板状工具による調整で、木口痕が残る。11は復原完形品の鉢である。口径30cm、器高20.7cmを計り、内外面とも篦研磨である。

23号土壙(Fig.45,46－12,13)

南側で22号土壙と重複する大型の不整形土壙である。略楕円形で規模は197×300cm、深さ16cmで、壁面はゆるやかである。出土遺物は少ない。12は底部、13は口縁部に突帯を貼り付ける甕である。

24号土壙(Fig.47)

23号土壙の東に位置し、重複している。不整形の長楕円形土壙である。規模は140×160cm以上、深さ32cmで、壁面はゆるやかで、中央にピットがある。出土土器は少量の破片だけである。

25号土壙(Fig.47,46－14,15,PL.20)

1号住居跡に隣接し、その南側に位置する土壙である。隅丸長方形で規模は125×162cm、深さ35cmで、壁面は垂直に立ち上がる。14は甕の胴部から口縁部の破片である。外反する口縁部端には刻み目を施す。15は高坏の脚部で坏部との境に突帯を巡らす。

26号土壙(Fig.47)

隅丸長方形の土壙で規模は101×128cm、深さ10cmで、壁面は垂直に立ち上がる。北側のピットは土壙より新しいものである。出土遺物は22号土壙の鉢11と接合した。

27号土壙(Fig.47,46－16,17)

微高地縁に位置する楕円形の土壙である。規模は183×212cm、深さ25cmで、壁面は垂直に立ち上がる。床面は中央部が丸く窪む。出土遺物は二点あり、いずれも壷で胴部上半部に最大径をもつ。胴部外面は研磨、内面は刷毛目調整が残る。

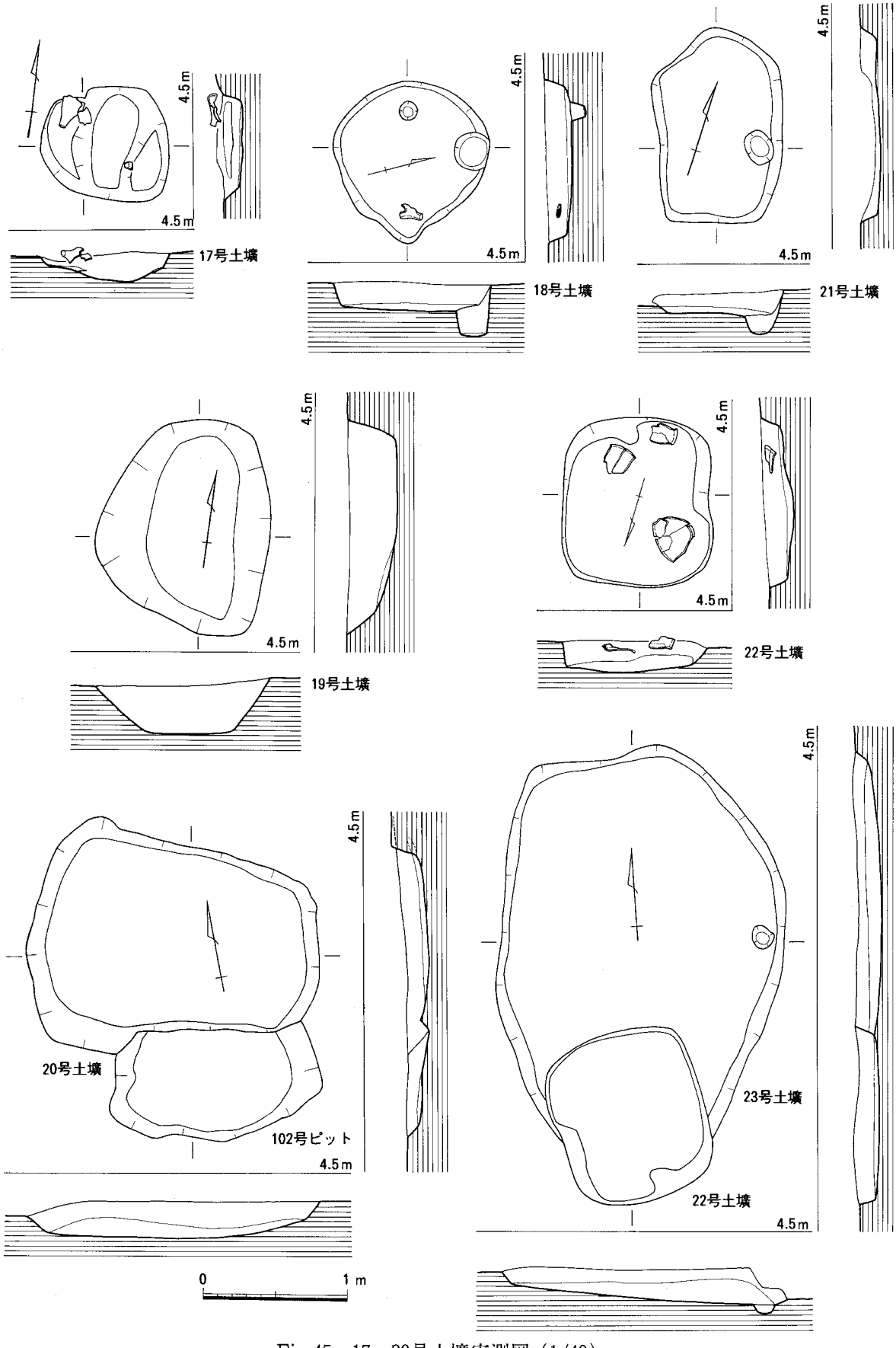


Fig.45　17～23号土壙実測図（1/40）

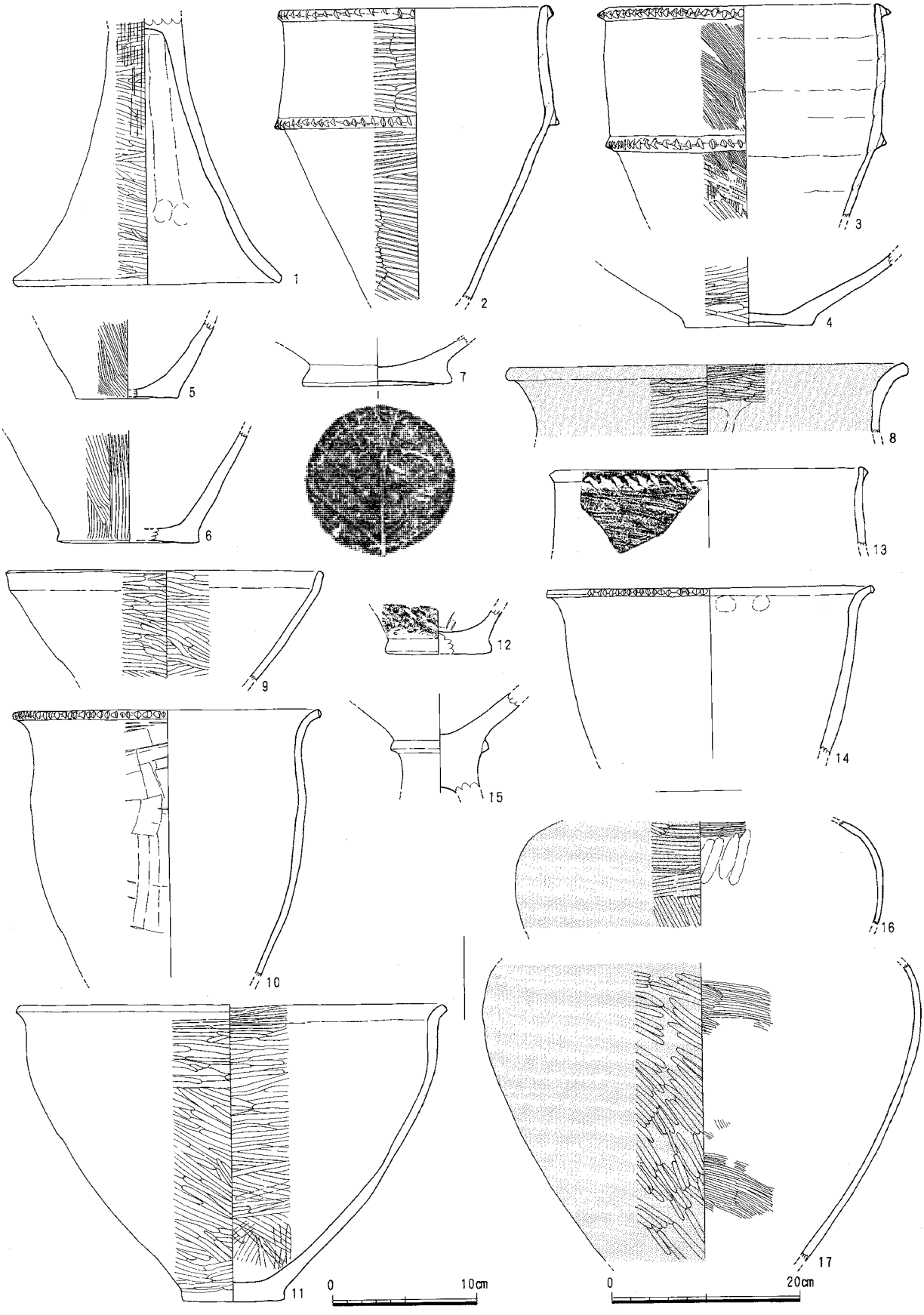


Fig.46　17～27号土壙出土土器実測図（1/4,1/6）

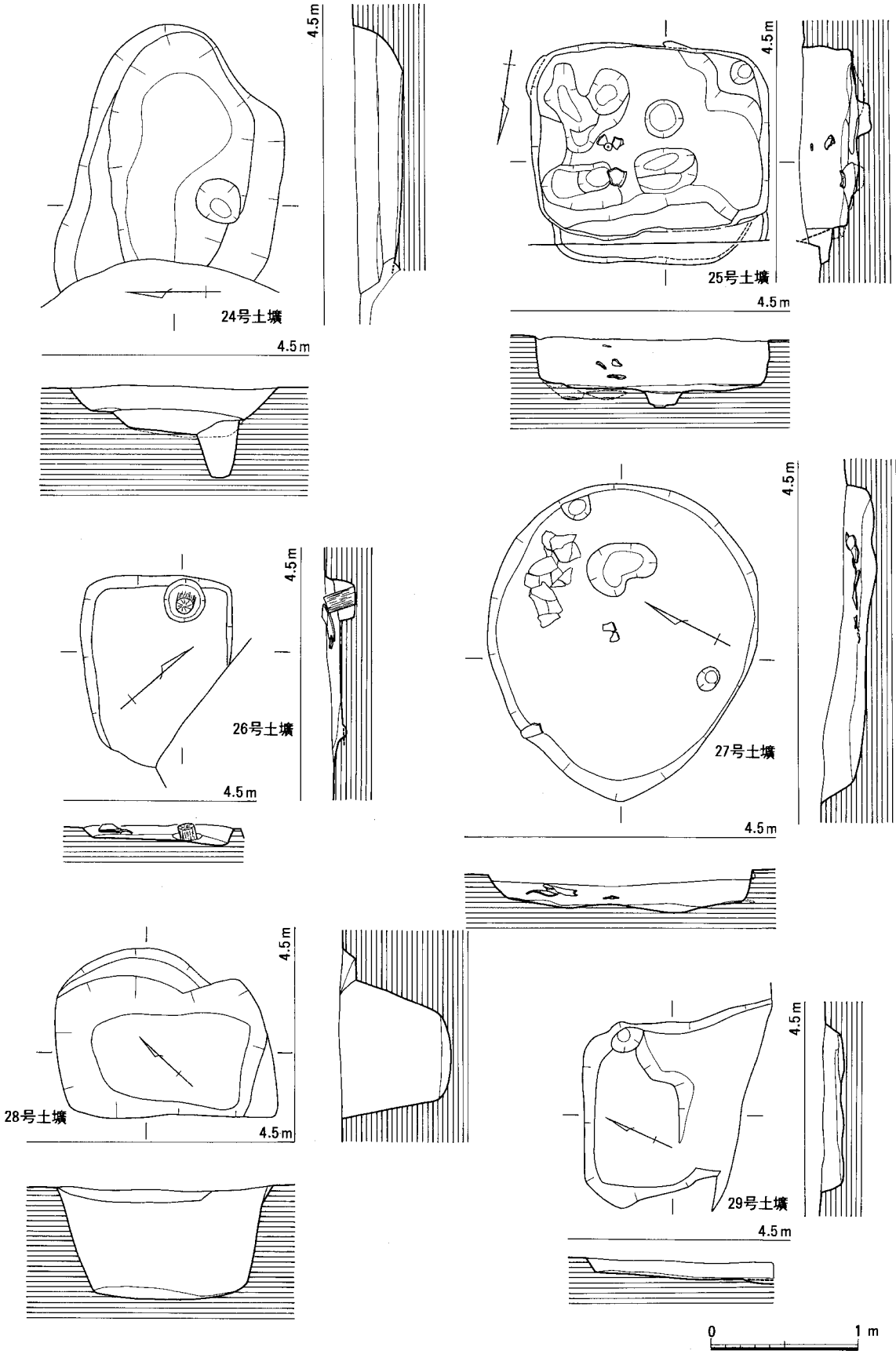


Fig.47　24～29号土壙実測図（1/40）

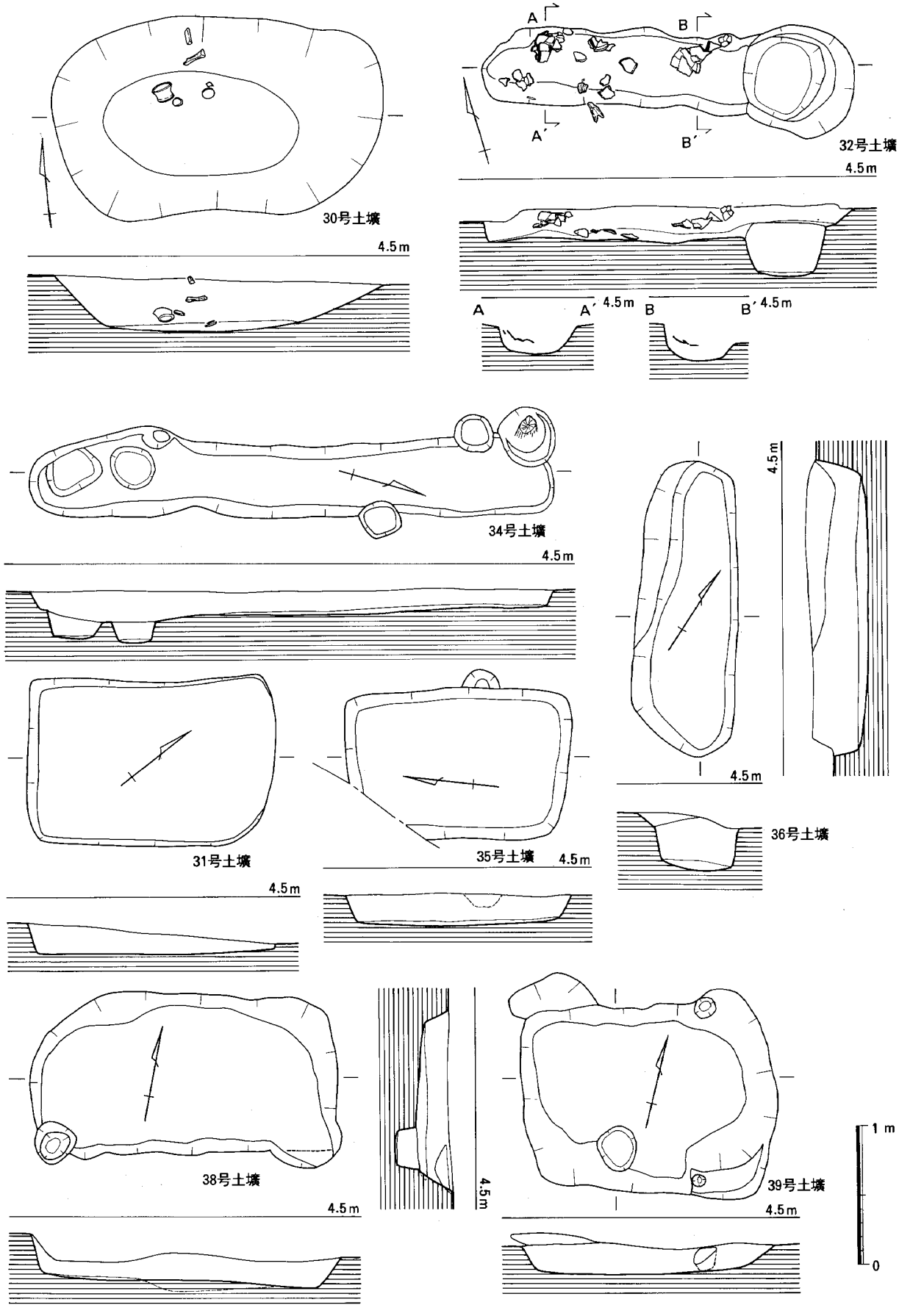


Fig.48　30～39号土壙実測図（1/40）

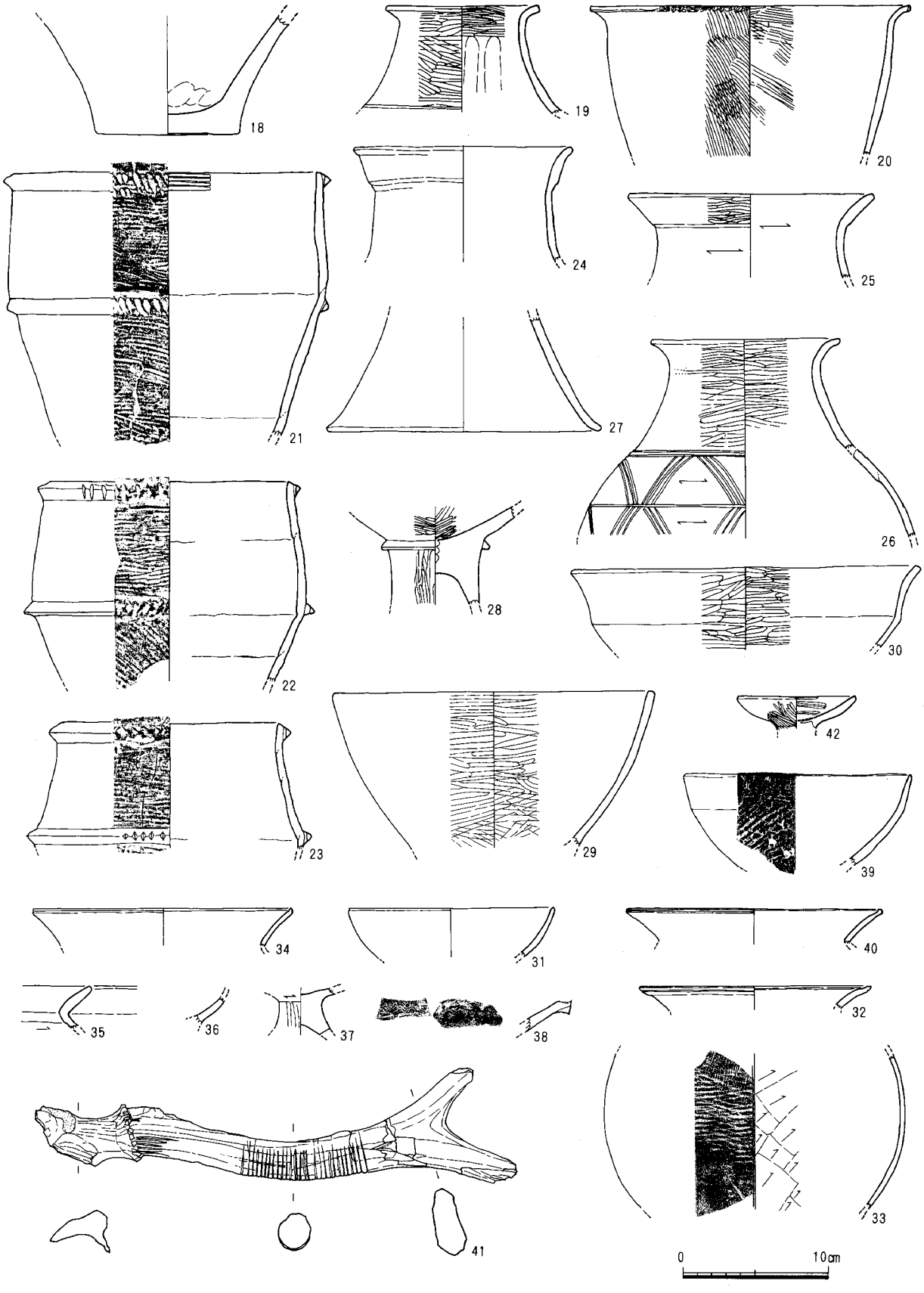


Fig.49　28～37号土壙・1号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

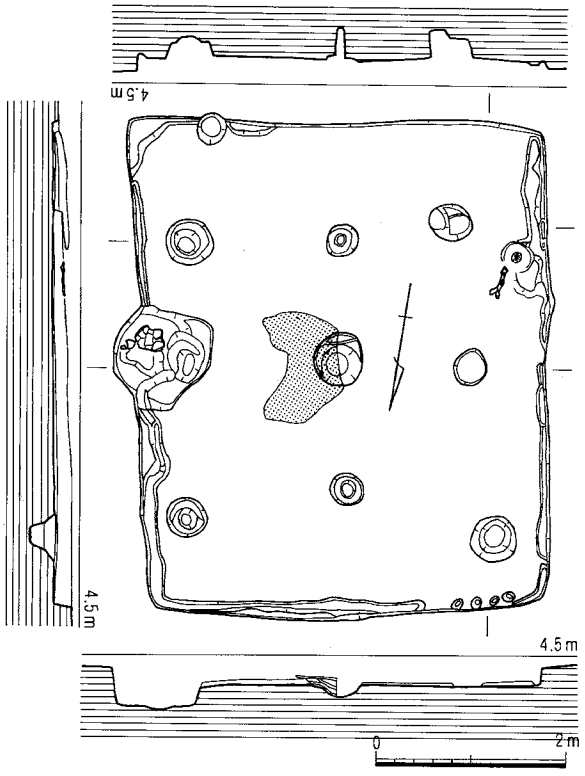


Fig.50　1号竪穴住居跡実測図（1/80）

28号土壙(Fig.47,49－18)

27号土壙の東側に位置する略隅丸長方形の土壙である。規模は96×143cm、深さ75cmで、壁面は垂直近くに立ち上がる。床面は中央部が丸く窪む。出土遺物は一点だけで甕の底部から胴部にかけての破片である。

29号土壙(Fig.47,PL.20)

南側を1号住居跡に切られる隅丸長方形の土壙である。規模は114×125cm以上、深さ10cmで、壁面は丸味をもち立ち上がる。全面から炭化米が出土しており貯蔵穴と考えられる。

30号土壙(Fig.48,49－19,PL.21)

調査区の南側に位置する長楕円形の土壙である。規模は68×120cm、深さ18cmで、壁面はなだらかに立ち上がる。床面は中央部が丸く窪む。壷の口縁部一点が出土している。

31号土壙(Fig.48)

北東部への傾斜面に位置する隅丸長方形の土壙である。規模は118×176cm、深さ21cmで、壁面垂直に立ち上がる。

32号土壙(Fig.48,49－20～31)

調査区の西端に位置する。東側でピットと重複するが前後関係は不明。規模は50×277cm、深さ25cmで、床面は少し波状を呈する。20は口唇部全体に刻目をもつ甕、21～23は胴部の屈曲部に刻み目突帯を貼り付け、更に口縁部にも突帯をもつ。21は垂直に、22は内湾、23は外反して口縁部となる。外面は条痕、内面は条痕となで調整である。24～26は壷の胴部から口縁部にかけての破片である。口縁部は肥厚し頸部との境に浅い段をもつ。26は頸部に二条と胴部に一条の沈線を描いてその間に連弧文を二段に描く。28は外面に赤色顔料が残る高坏である。

2）竪穴住居跡の調査

1号住居跡(Fig.50,PL.19)

この調査区で唯一検出した住居跡である。当初覆土からの遺物は弥生時代中期の土器しか見当らなかったのでその時期のものと考えていたが、遺物整理時幾つかの土師器が確認されその時期と考えられる。調査区の北西に位置する隅丸長方形住居跡である。規模は521×434cm、深さ20cm前後である。壁下には周溝が巡るが、全周はしない。西壁で土壙と切り合うが住居跡の方が新しい。床面には張り床がなされ、中央に焼土を僅かに含む層が広がる。柱穴は六本確認され主柱穴と考えられる。

出土遺物（Fig.49－34～41,PL.19）

34、35は甕の口縁部の破片である。35は少し時期が下がる。41は鹿角製品である。基部から二又まで遺存する。先端は破損している。線刻のある部分は表面を削り平滑にして、その角の中央部の8.8cmの幅の中に1㎜前後の線刻をほぼ等間隔に28本入れる。線刻は全周はしなく2/3ほど巡る。

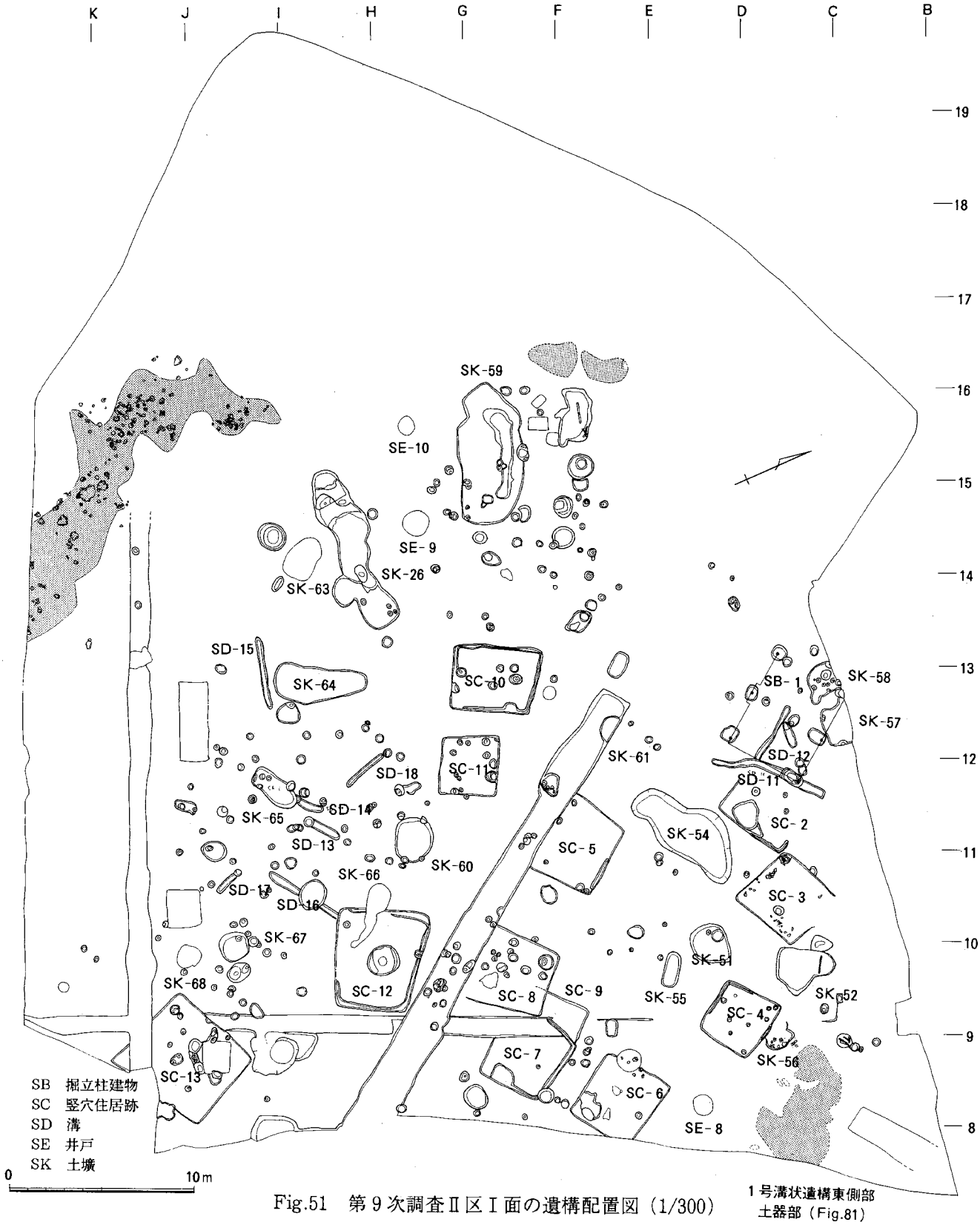


Fig.51　第9次調査Ⅱ区Ⅰ面の遺構配置図（1/300）

3．第９次Ⅱ区Ⅰ面の調査

第７次・９次Ⅰ区の西側にあたる。この面の調査では竪穴住居跡12棟、土壙20基、井戸３基、掘立柱建物１基、溝状遺構７条を確認した。住居跡・井戸は古墳時代前期に限られ、土壙は弥生時代と古墳時代前期のものがある。溝は７次調査で確認した１号溝状遺構の続きが確認され、楕円形の微高地の縁を廻ることが判明した。主軸を北西－南東にとる長径62m、短径48m位の小規模な集落と推定できる。遺物は数箇所に集中している部分があり、場所によりその機能の違いを窺わせる。

１）竪穴住居跡

竪穴住居跡は台地中央部に検出した。２号～13号の計12基がある。平面形は隅丸長方形で、形が歪な形態を示すのもある。屋内に主柱穴はほとんど認められない。

２号住居跡(Fig.52,53－1～5, PL.24)

調査区の北端に確認した隅丸長方形の住居跡である。北側は台地の縁に当たり遺構の掘り方が不明瞭となる。東西4.2m、南北２m以上、深さ約10cmを測る。南壁寄りに略三角形の土壙があり、土器は主にその中から出土している。壁下の周溝は東側に５cmほどの幅で巡るが全周はしない。ピットは大小二個が確認でき、主柱穴と考えられよう。１～３は略三角形の土壙から出土した。１は甕の胴部から口縁部にかけての破片である。胴部は球形に近く肥厚気味に開く。口唇端部は僅かに肥厚し上面の中央部が窪む。肩部に波状の沈線を巡らすが一周はしない。沈線の下から胴部中位にかけて横方向の刷毛目調整、他は縦方向の刷毛目調整で一部叩きの痕が残る。３～５は四角錐状の土製支脚である。断面四角形で先端が内側へゆるやかに弧を描く。粘土塊を手捏して成形し、表面を粗く篦なでをおこなうが、表面は凹凸が見られる。底部に籾圧痕が見られる。

３号住居跡(Fig.52,53－6～11, PL.23)

２号住居跡の南西に隣接する。北東の隅が不明であるが比較的良好な遺存状態である。東西4.2m、南北3.84m、深さ約16cmを測る。隅丸長方形の住居跡で東側が少し幅を狭める。床面はほぼ平らで柱穴は南壁近くに１個だけ検出した。遺物は床面直上から出土している。６は肩部に四条の櫛描波状文の甕で縦、横方向の刷毛目が残る。口唇部端は僅かに肥厚する。７は丸底の鉢で内面は刷毛目、外面はなで調整である。８は内面に暗文状の研磨を行なう高坏、11は同様な高坏の脚部である。10は甑で胴部上半に縦方向の管状把手、底部近くに三角突帯を巡らしその上に横位置に同様な管状把手を貼付るが片方の把手は欠損する。把手は器壁に円孔を穿ち、その中に突起を埋込内面から粘土で蓋をし平滑に仕上げる。外面は叩きの後なで、内面は刷毛目調整である。９は底部近くで「ハ」の字状に開く、胴部は円筒形で口縁部に向かって開き、口唇部は内面が僅かに外反する。外面は叩きの後縦の刷毛目調整である。内面はなで調整で下半に粘土の接合痕が明瞭に残る。

４号住居跡(Fig.52,53－12, PL.24)

３号住居跡の南に位置する小型の住居跡である。東西3.3m、南北3.28m、深さ約５cmを測る。床面は平坦で小さなピットが９個確認できた。周溝は西側だけに認められる。遺物の出土は少なく図化出来るのは１点だけである。12は器台の脚部で内外面とも刷毛目調整である。

５号住居跡(Fig.52,53－13,14)

２号住居跡の南西５mに位置する隅丸長方形の住居跡である。東西3.6m以上、南北4.68m、深さ約８cmを測る。床面は平坦で小ピットが数個確認でき、周溝も一部確認できた。出土遺物は少ない。13は二重口縁の壷で内外面とも刷毛目調整で口縁部は外反し、口唇部は角張る。14は甕の口縁部で内面は篦削り、外面は刷毛目調整である。口縁は強く外反して開く。

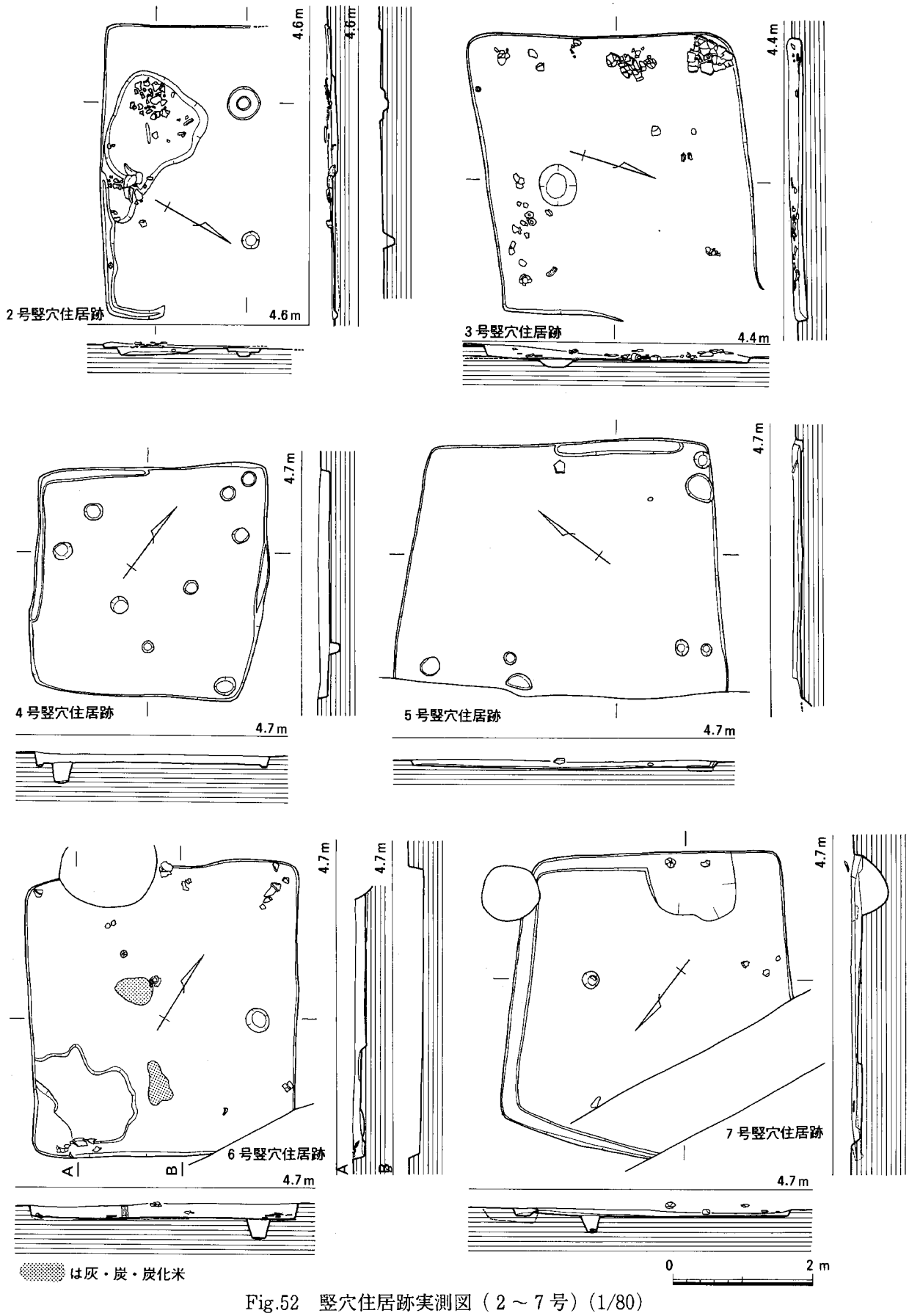


Fig.52　竪穴住居跡実測図（2～7号）(1/80)

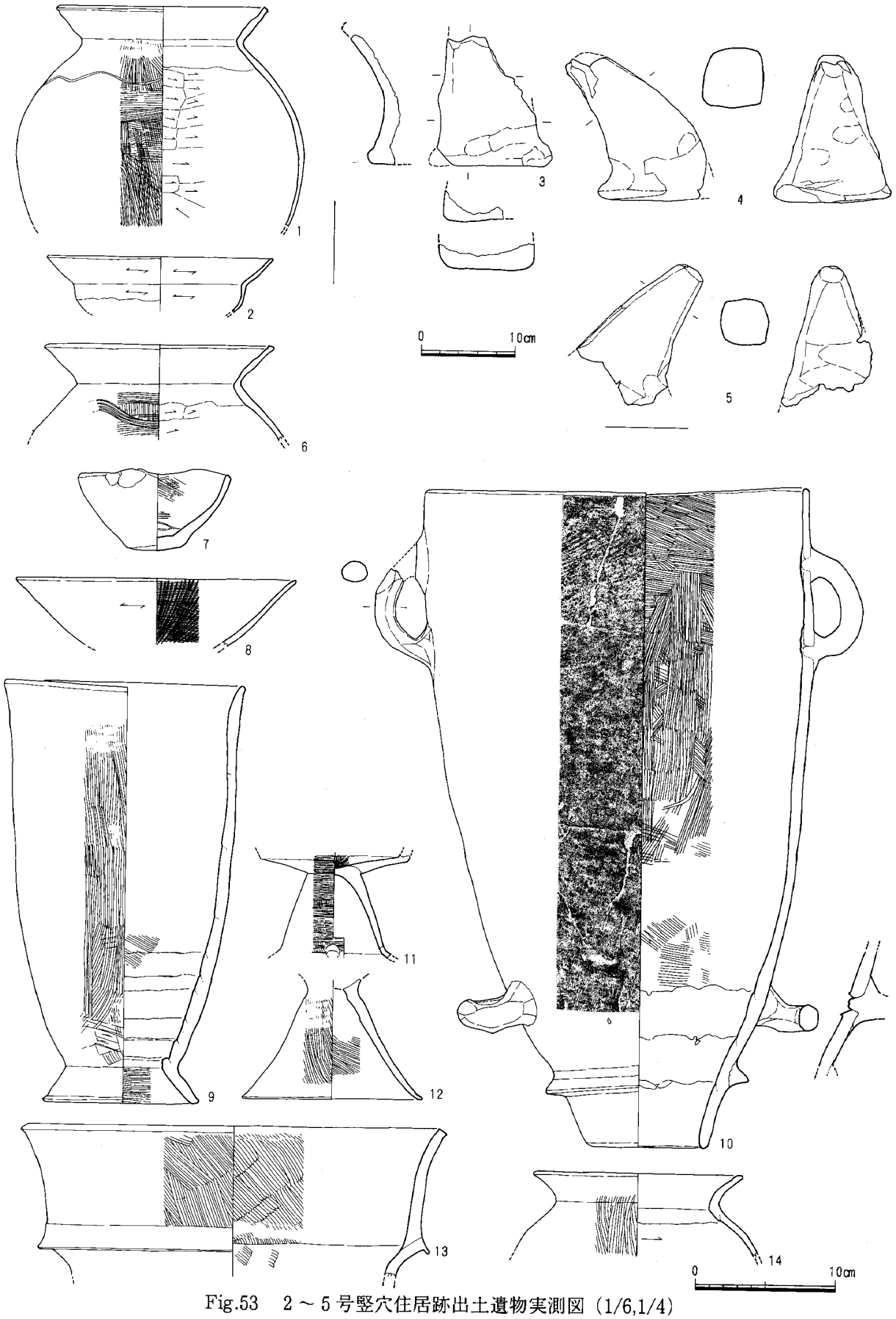


Fig.53　2～5号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/6,1/4）

6号住居跡(Fig.52,55－15～19,PL.25)

4号住居跡の南3mに位置する隅丸長方形の住居跡である。東西3.86m、南北4.16m、深さ約20cmを測る。床面は平坦で小ピットが1個確認できた。中央部と東壁寄りに灰、炭化物、南隅は一段高くなり、灰が確認できた。15は肩部に波状沈線を廻らす甕、16は小型丸底壷、17､18は鉢である。19は土製の勾玉で頭部を一部欠損し残存長2.4cmを測る。色調は灰色で焼成はあまり良くない。

7号住居跡(Fig.52,55－20～22)

6号住居跡の西に位置する少し歪な隅丸長方形の住居跡である。東西4.02m、南北4.34m、深さ約8 cmを測る。床面は平坦で小ピットは確認出来なかった。南西の壁に沿って大きな土壙を掘り込む。東半部には周溝が巡る。20は小型丸底壷、21は鉢、22は高坏の坏部である。高坏の内面には暗文状の研磨が見られる。

8号住居跡(Fig.54,55－23)

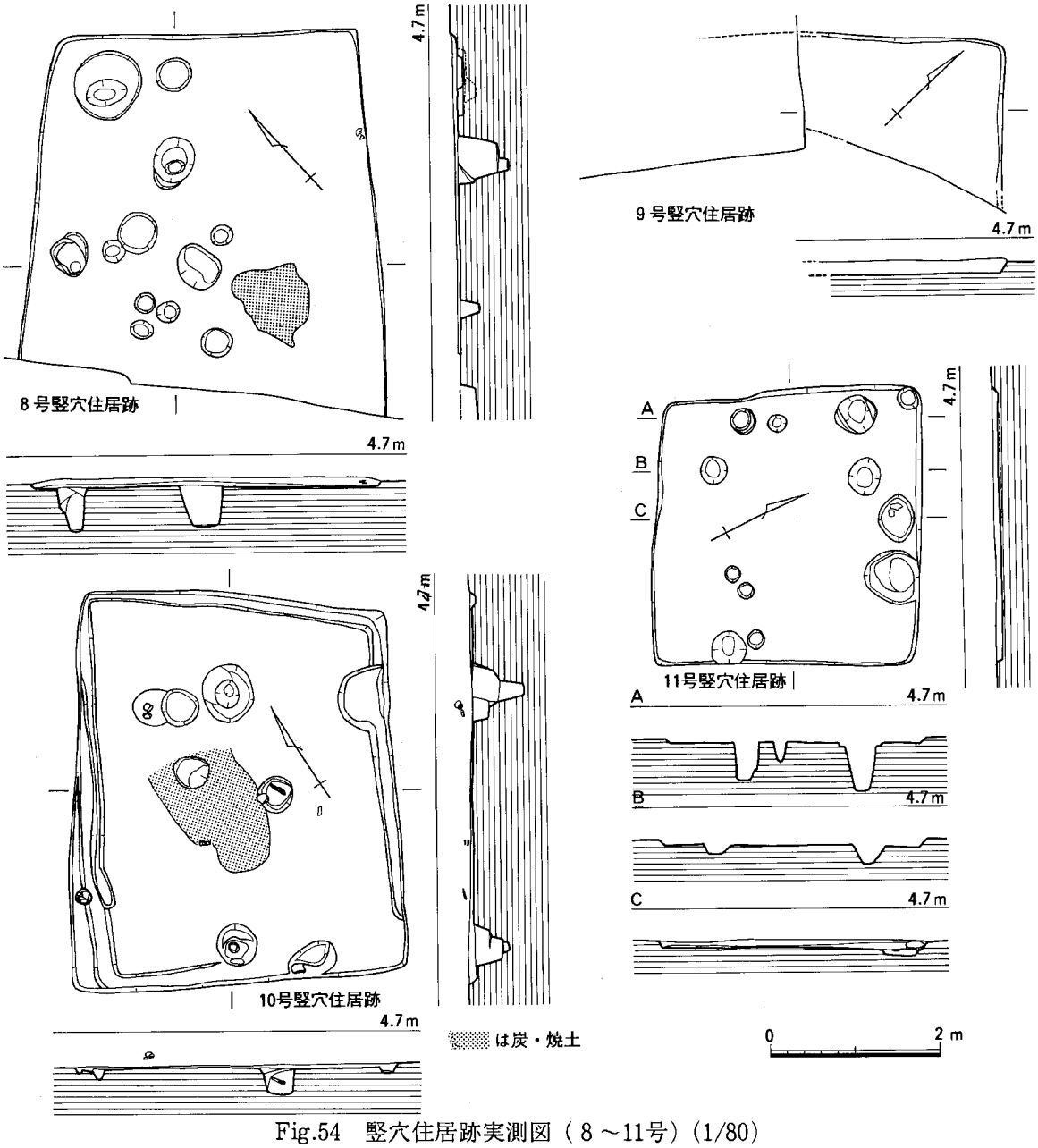


Fig.54　竪穴住居跡実測図（8～11号）(1/80)

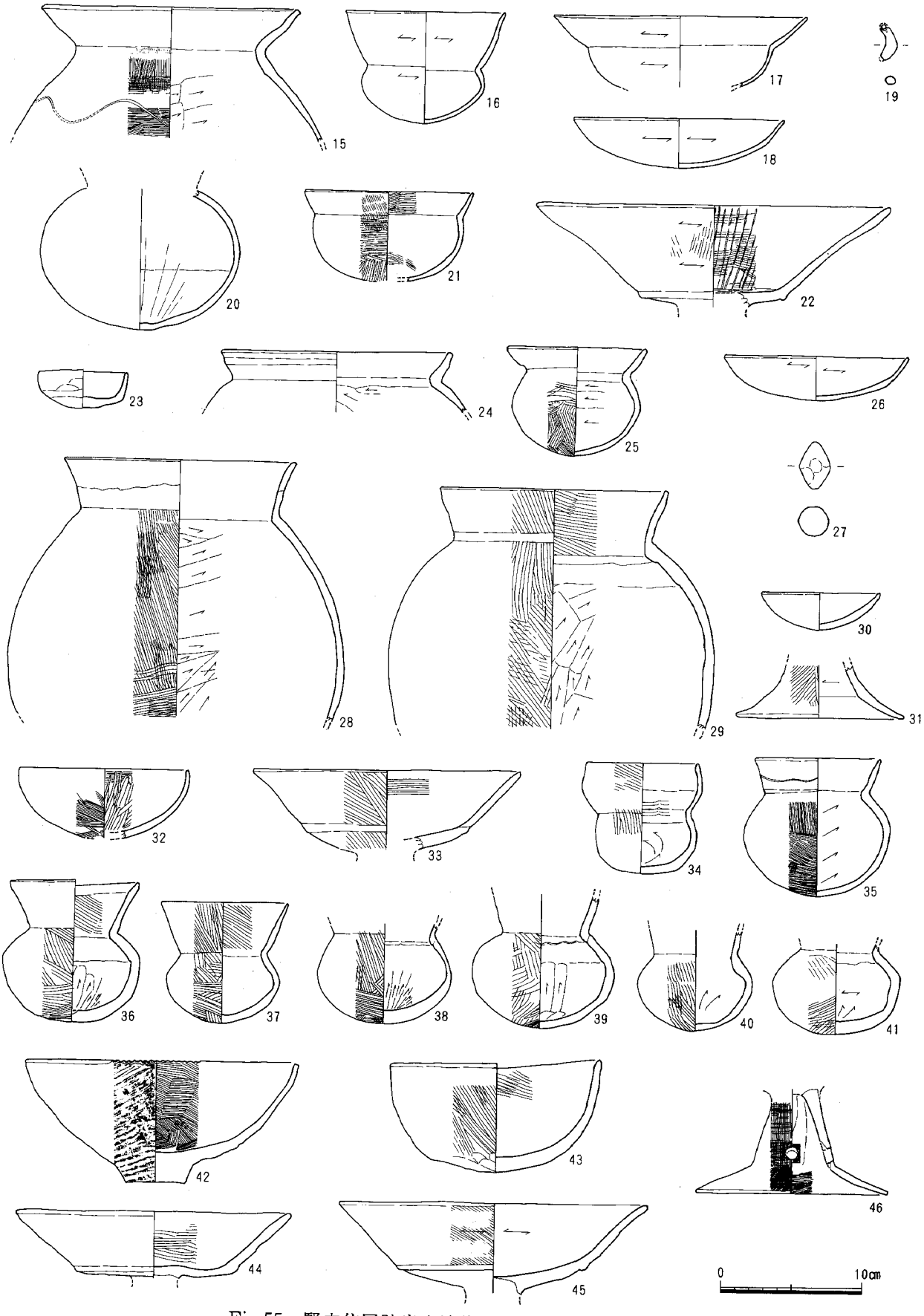


Fig.55　竪穴住居跡出土遺物実測図（1/4）

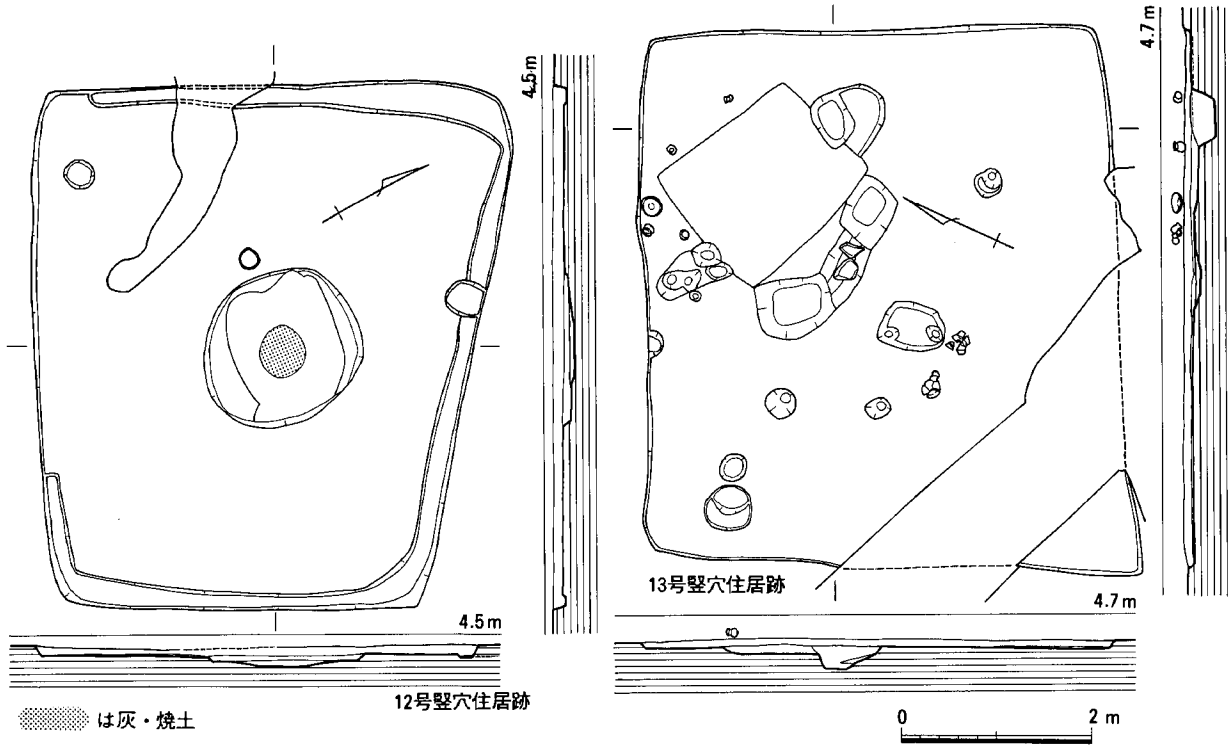


Fig.56　竪穴住居跡実測図（12・13号）（1/80）

7号住居跡と重複しその西に位置する隅丸長方形の住居跡である。西側は撹乱溝に切られる。東西4.22m、南北4.5m以上、深さ約6cmを測る。床面は平坦でピットは北西部に多く確認できるが、主柱穴は不明である。南寄りに灰が分布していた。23はミニュチアの鉢で外面には篦の跡が残る。

9号住居跡(Fig.54)

南を7号、西を8号住居跡に切られ、北側の隅が遺存する住居跡である。現存長1.96×2.4m、深さ16cmを測る。遺物は出土していない。

10号住居跡(Fig.54,55－24～27)

調査区のほぼ中央部に位置する歪な隅丸長方形の住居跡である。東西3.84m、南北4.64m、深さ約6cmを測る。浅い周溝が巡るが西側は二重になり建て替えの可能性がある。南、北壁寄りに深い掘り方のピットがあり、主柱穴と考えられる。中央部には焼土、灰が広く分布する。24は甕の口縁部で内面篦削りの胴部から短く外に開く口縁部となる。口唇部を薄くし外面には稜がつく。25は小型丸底壷、26は鉢、27は投弾で弥生時代のものであろう。

11号住居跡(Fig.54,55－28～33,PL.26)

10号住居跡のすぐ南に位置する隅丸方形の小規模な住居跡である。3.24m×3.14m、深さ約6cmを測る。周溝は認められない。床面はほぼ平坦でピットは幾つか見られるが主柱穴がどれになるか不明。28､29は甕の胴部から口縁部の破片である。器壁は厚く長胴で口縁部は外反する。内面は篦削り、外面は刷毛目調整である。33は高坏で体部との境が不明瞭となる。

12号住居跡(Fig.56,PL.27)

8号住居跡の西に位置する台形状の住居跡である。南辺5.34m×西辺4.8m､深さ約10cmを測る。周溝は南壁の一部を除き全周する。床面は平坦で中央部に径1.6mほどの浅いピットがあり、その中心部には焼土、灰が確認できた。出土土器は少なく、図化出来るものはない。

13号住居跡(Fig.56,55－34～46,PL.27)

調査区南端に確認した隅丸長方形のやや歪な住居跡である。東西5.64m､南北4.98m、深さ約8cm

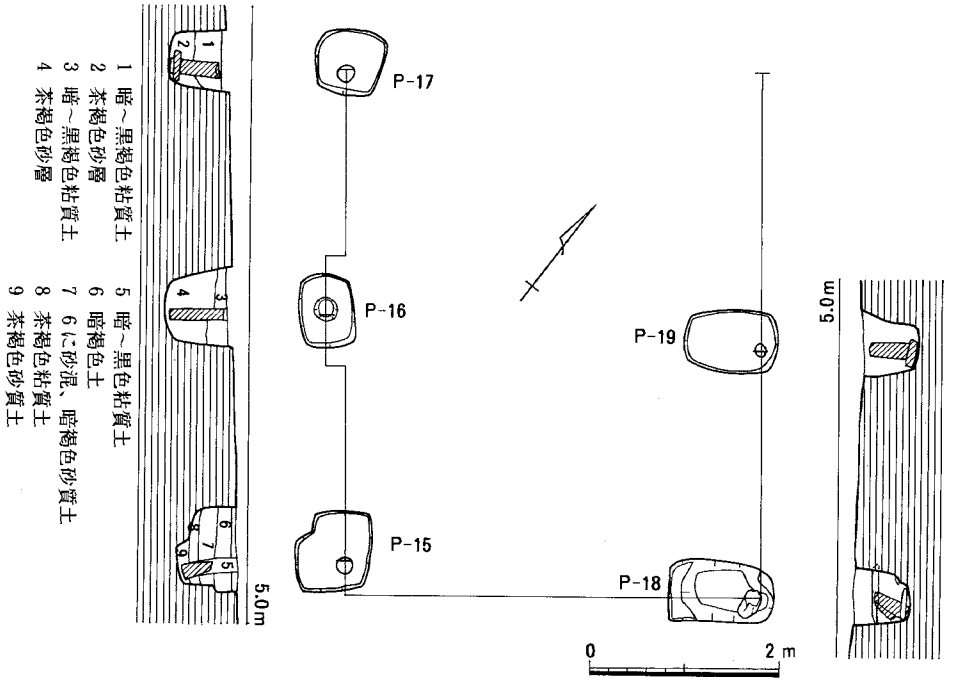


Fig.57　1号掘立柱建物実測図（1/80）

を測る。周溝は認められない。床面はほぼ平坦でピットは幾つか見られるが主柱穴がどれになるか不明である。土器は床面より少し浮いた状態で出土している。小型丸底壷、鉢、高坏が出土しているが甕の出土はない。34は小型の丸底壷であるが口縁部が内湾して立上り瓢状を呈する。36～41は扁球形の胴部から直線上に開く口縁部となる。外面から口縁部内面にかけて刷毛目調整、胴部内面は篦削りである。42は時期的に古い鉢でこの住居跡に伴うものではない。外面は叩き、内面は刷毛目調整である。口唇部には棒状工具による押圧文をもつ。45､46は高坏の脚部と坏部である。

2）掘立柱建物の調査

1号掘立柱建物(Fig.57, PL.28)

今回の調査では掘立柱建物は一棟しか確認出来なかった。調査区の北端、2号住居跡の北側に位置する建物である。微高地の縁から湿地部に当たり北側に向かって低くなっている。北端の柱穴は調査区外に拡がるが1間×2間の建物である。梁行4.25m、桁行5.2mを測る。柱間距離はP15－P16、P16－P17が2.65m、P15－P18が4.25m、P16－P19が4.55mを測る。柱の掘り方は隅丸長方形を示すものが多く、P17は方形である。柱は全部のピットに遺存しておりP15、P16の柱は一木をそのまま使用しているが、P17～P19の三本の柱は貫穴を設け、そこに割り材の横木を通して沈下防止を計っている。柱は最大部でP16が径25cm、他は30cmを超える材を使用している。ピットの掘り方はP15とP18は二段に掘り込むが、他は一段である。ピットの掘り方からは弥生式土器及び土師器の小破片しか出土していないが、古墳時代前半の時期と考えられる。

3）土壙の調査

この面で検出した土壙は51号～71号土壙の計20基がある。54号土壙を除き古墳時代前期の遺構である。ほとんどが布留期のもので一部古くなるのもある。59号土壙には大量の土器が幾重にも重なって出土した。器種では甕が多く祭祀とするには疑問がある。

51号土壙(Fig.58,59－1,2)

3 号住居跡の南に位置する歪な楕円形の土壙である。長軸2.6m、短軸2.1m、深さ0.26mを測る。床面は平坦で、北西隅にピットが2個ある。土器は小さな破片が出土している。1 は甕で口唇部が肥厚し、中央部が窪む。2 は壷で口縁部の接合点で段が付く。内面には篦描で模様を描く。内外面とも刷毛目調整である。

52号土壙(Fig.58,59－3～12)

当初二基の土壙と考え南を52号、北側を53号土壙としたが、その切り合いが認められなかったので一基の土壙とした。遺物は念の為北側を53号としている。平面形は不整形で西辺と南辺は直線的で直角になり、南東部が三角形に尖り、北側は丸くなる。床面はほぼ平坦で、遺物は北側から自然木が見られる。3､4は球形に近い胴部に直線的に開く口縁部となる。口唇部端の内面は内側にはみ出す。 3 は肩に沈線、 4 は沈線というよりも篦で撫でつけ、ほとんど窪みが無い波状文を描き、刷毛目調整、内面は篦削りで、口縁部は刷毛目が撫で消される。11は口縁部が丸く収まり、肩部には櫛描波状文を描く。9､10は高坏で暗文状の研磨を行なう。

54号土壙(Fig.58,59－13～20)

2､3号住居跡の南西に位置する不整形の土壙である。東西に長く最大長3.32m、最大幅1.47m、深さ0.15mを測る。壁面はゆるやかな傾斜を示し、床面は平坦である。弥生時代中期前半の土器である。口縁部は平坦で僅かに内側へ傾斜する。胴部は少し膨らむ。外面は刷毛目、内面は撫で調整である。16～18は甕の底部で17は上げ底となる。19は壷の底部で篦研磨している。

55号土壙(Fig.58)

51号土壙の南に位置する隅丸長方形の小規模な細長い土壙である。長軸1.93m、短軸0.79m、深さ0.21mを測る。遺物は土師器の小破片だけである。

56号土壙(Fig.58,61－21,22)

4 号住居跡の東側に検出した小規模な土壙である。瓢形に中央部がくびれ、西側は浅くなり消滅する。長軸1.2m以上、短軸1.48m、深さ0.14mを測る。遺物は遺構確認面の高さで出土しており、 1 号溝と隣接していることから或いは、この土壙でない可能性もある。21は甕で胴部上半を横刷毛調整、内面は篦削りをおこなう。口縁部は肥厚し、中央部が窪む。22は小型の丸底壷で内外面を研磨する。

57号土壙(Fig.60,61－23～26,PL.29)

調査区の北端、1 号掘立柱建物の柱穴に接して位置する隅丸長方形の土壙である。長軸2.11m、短軸1.55m以上、深さ0.14mを測る。土器は床面直上で高坏、壷などが出土している。23は扁球形の胴部に直立する口縁部となる直口壷である。胴部上半は縦の研磨、下半は横の篦削りである。24は鉢で底部は粘土を貼り付け輪高台状となる。内面底部には刷毛目が残る。25、26は高坏で内外面とも刷毛目調整の上から縦に研磨し暗紋状となる。脚には円孔を穿ち内面にはしぼり痕が残る。

58号土壙(Fig.60)

57号土壙の北西に位置する浅い掘り込みの不整形土壙である。床面は平坦で、大小のピットが数多く確認できた。出土遺物は無い。

59号土壙(Fig.62,61－27～Fig.70,PL.29,30,46～48)

調査区の北西部に検出した縦長の土壙である。一旦浅い土壙を掘り、更に南西部に外側の土壙と並行に溝状の掘り込みを設ける。上面の土壙の規模は長軸7.73m、短軸3.57m、深さ0.18mを測る。下面の掘り込みは最大幅1.12m、長さ約4.98m、深さ0.30mを測る。中央部が細く、両端は弧状を描き幅を広めている。上面は土器で全面覆われており、幾重にも重なった状態で出土している。別々の甕

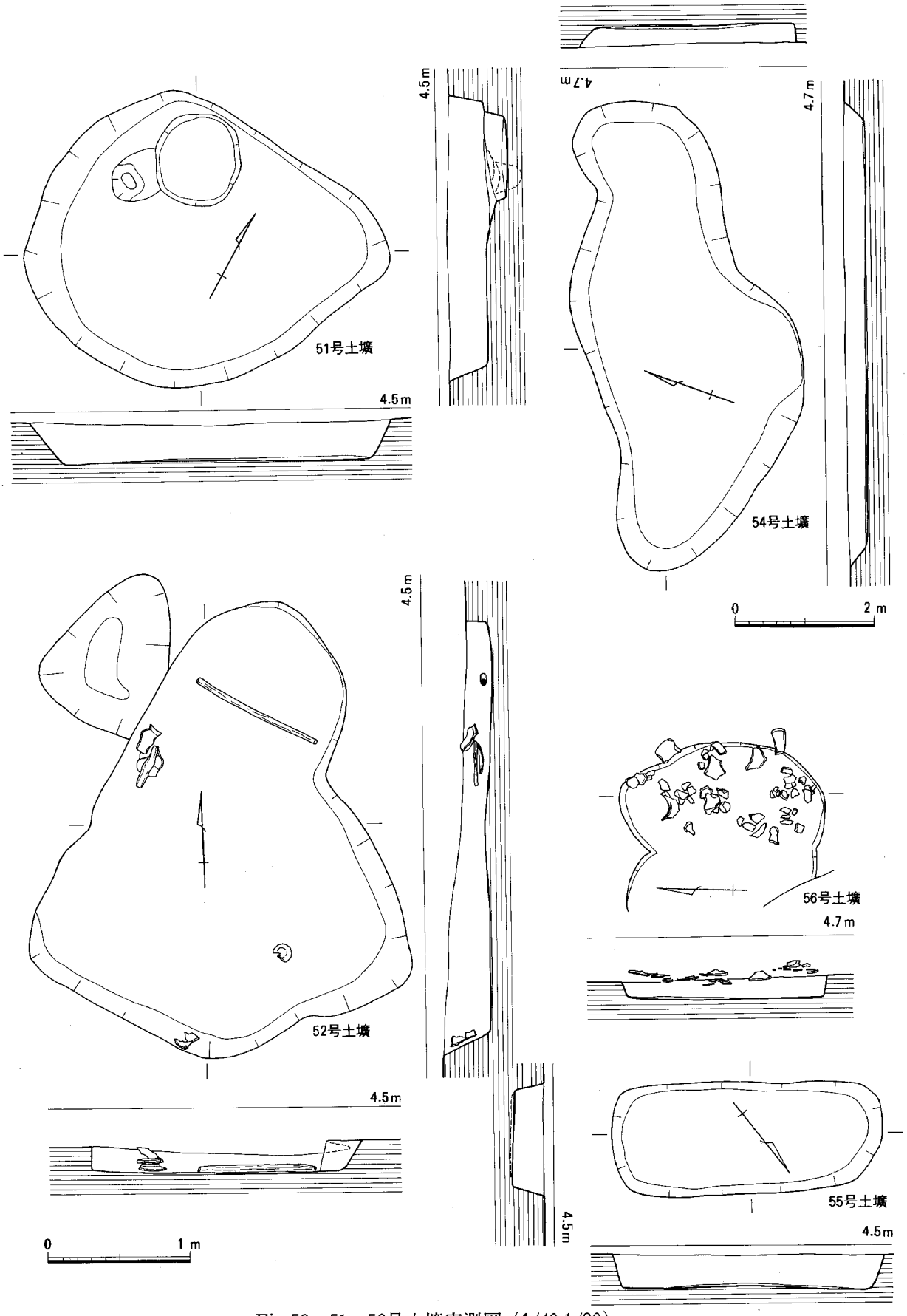


Fig.58　51～56号土壙実測図（1/40,1/80）

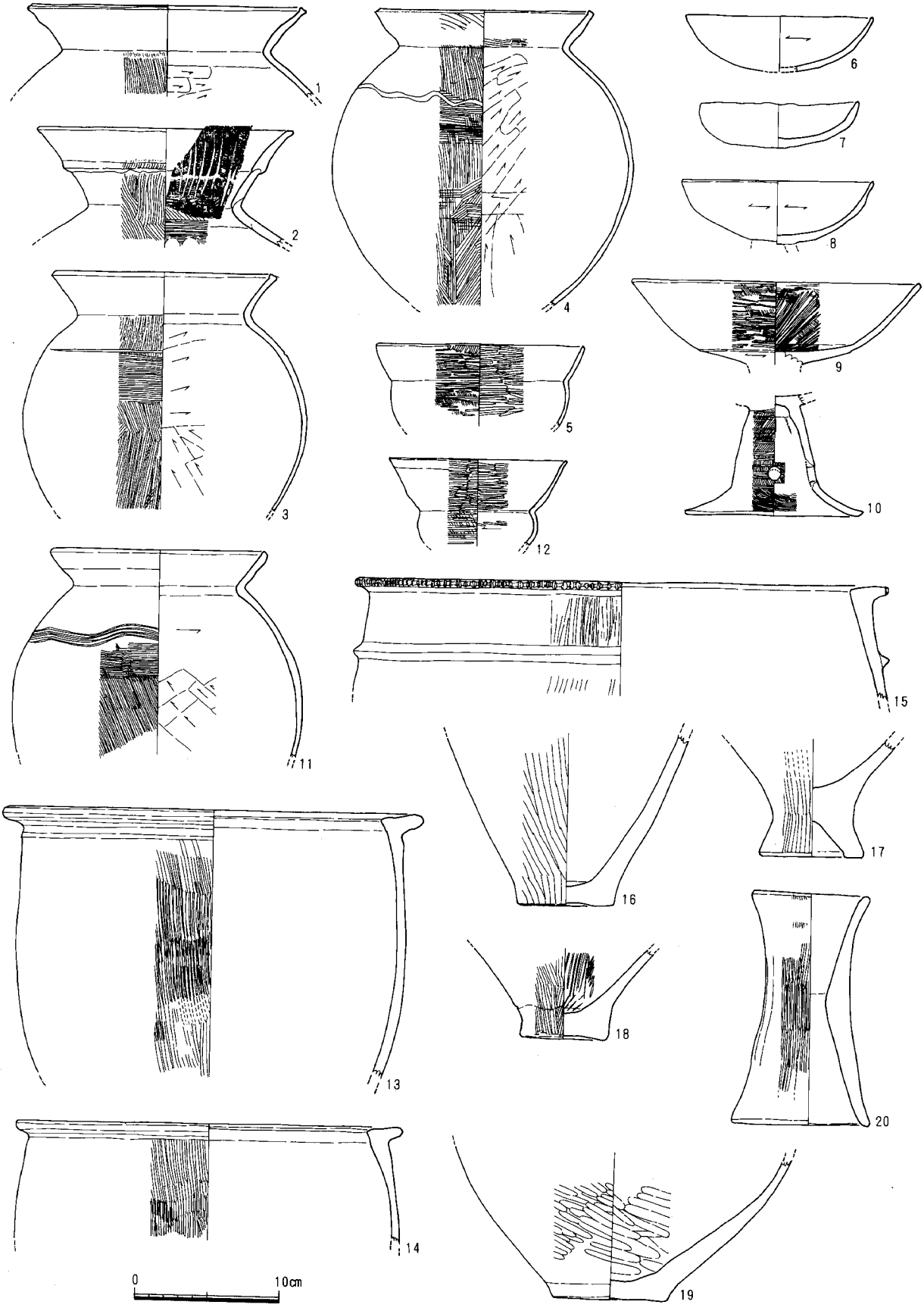


Fig.59　51～54号土壙出土土器実測図（1/4）

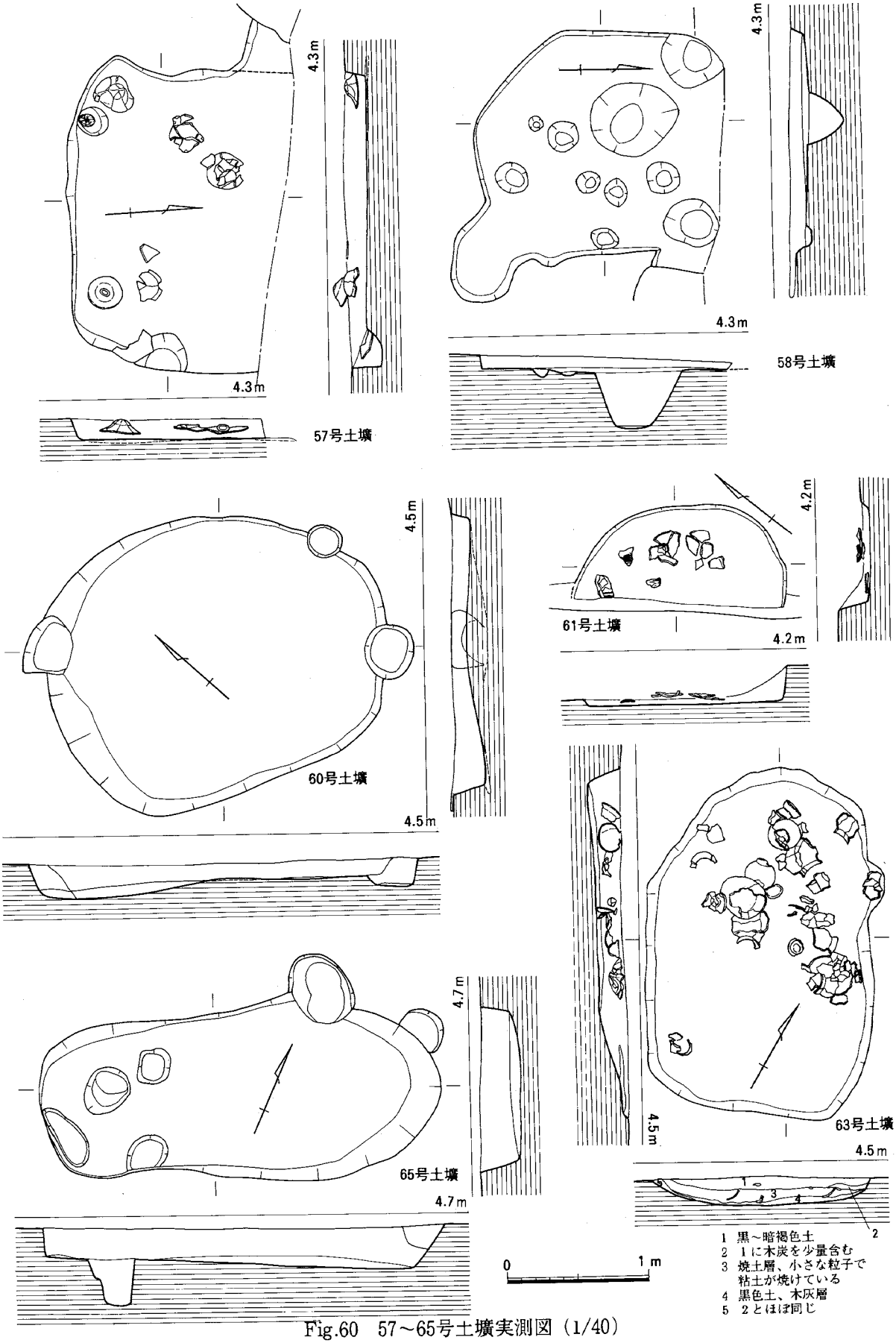


Fig.60 57～65号土壙実測図（1/40）

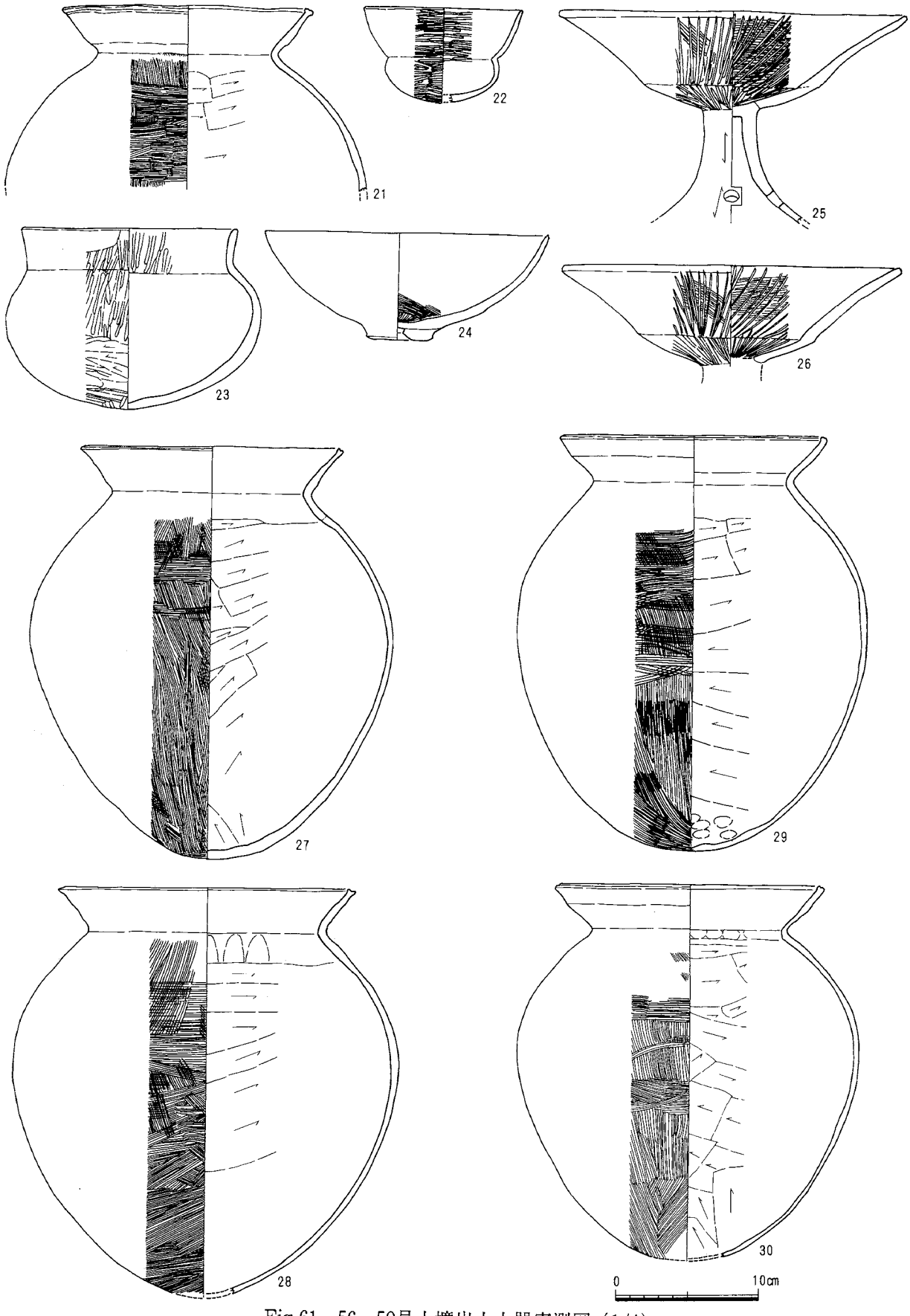


Fig.61　56～59号土壙出土土器実測図（1/4）

1 黒～暗褐色土
2 暗褐色土　木炭粒多く含む
3 茶褐色土　黄白色粘土混
4 茶～褐色粘質土
5 黄白色粘土
6 茶褐～黒褐色粘質土

Fig.62　59号土壙実測図（1/40）

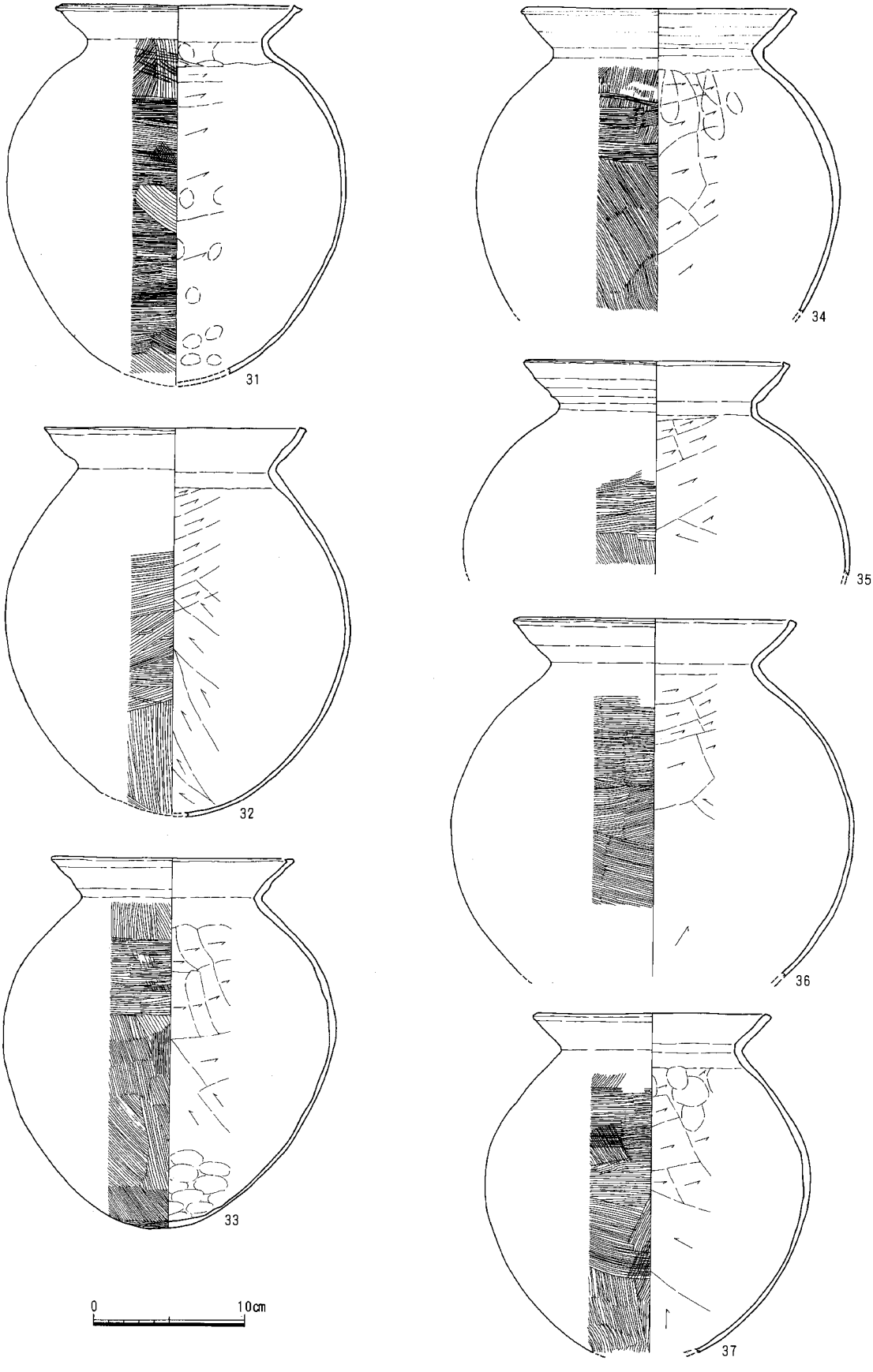


Fig.63　59号土壙出土土器実測図１（1/4）

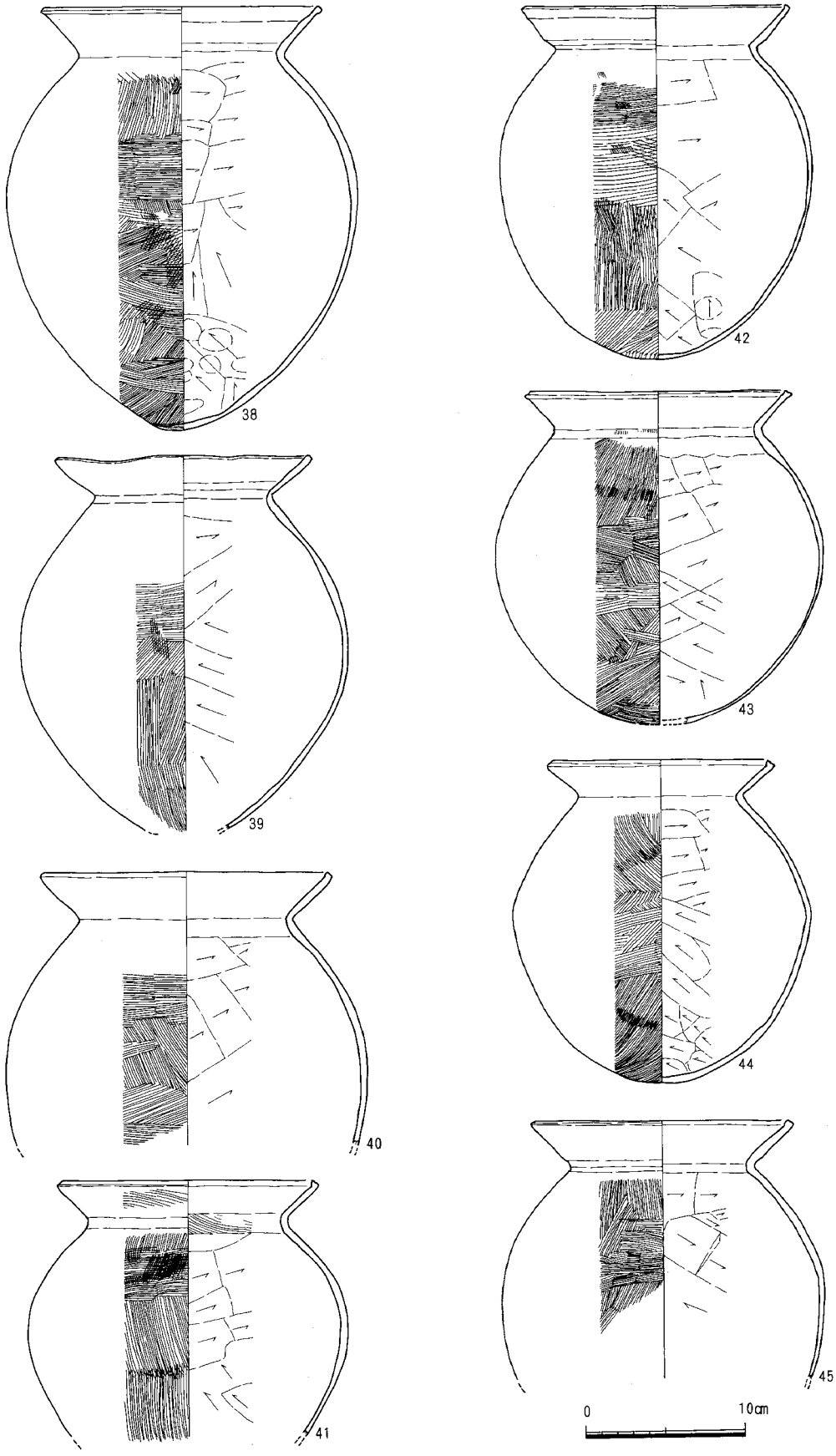


Fig.64　59号土壙出土土器実測図２（1/4）

の破片が幾つも重なったり、完形品がほとんど無かっり、本来的には完形品を置いたものではなく、土器捨て場と考えられよう。出土土器は多いが大部分は甕である。他にも大型の壷や小壷、高坏、器台等も出土している。27～45は比較的大型で胴部が長胴を示す形態である。口縁部は僅かに内湾気味に開く。口唇部は31､43のように肥厚し、中央部が窪むものや、33､35のように内面につまみ出すようなもの、37のように端部が肥厚せず内側が丸味をもったり、34のように角張るものもある。底部はほとんどが丸くなるが、38は尖り気味となっている。外面は胴部下半を縦、斜めの刷毛目調整が多いが31､36は底部近くまで横方向の刷毛目調整、33、34は肩部のみ横位の刷毛目調整、43､44は胴部中位を横、斜めの刷毛目調整を行なう。内面は口縁部は撫調整で胴部は下から斜め上に篦削りを行なうが、頸部近くは横方向となるものが見受けられる。46～55は少し小振りの一群である。口縁部、胴部などの調整、形態は前述の甕とほぼ同様であるが胴部の形態は球形に近い。56は在地系土器の系譜で長胴、口縁部はほぼ直線的に開き内面が肥厚する。外面斜位、内面の胴部上半は横位の刷毛目調整で下半は篦削りである。57～71は肩部に沈線をもつ甕の一群である。57～63は波状に沈線を廻らしている。64～67の甕は僅かに曲線を描き、69､70は直線となる。68､71は沈線が複数となる。73は長胴で内外面とも刷毛目調整、74は大型品で器高35cmを計る。76の胴部には焼成後の穿孔が見られる。80も大型品で頸部近くに二状の波状沈線を描く。79､81～84は壷である。79の肩部には刷毛の原体とも考えられる工具で羽状文を描く。外面は刷毛目調整で、内面は篦削りである。81は朝顔状に開く口縁部の壷で内外面とも刷毛目調整である。82は二重口縁で頸部と口縁部の境には明瞭な稜が付き、口縁部は内外面とも丹塗研磨している。83も口縁部内面から外面に丹塗研磨している壷で、頸部に突帯を貼り付け櫛状工具で刺突文を施している。84は大型の壷で口径33.4cm、胴部最大径56.8cm、器高77.4cmを計る。最大径を胴部上半におき倒卵形の胴部で、直口する口縁部で上端に粘土紐を貼付る。粘土紐と口縁部の接合面は窪み、また、粘土紐の外面中央部及び口縁部と頸部との接合面も中央部が窪み、「M」字状断面を呈する。口縁部は内外面とも刷毛目調整の後横撫でし、他は刷毛目調整を行なう。85は口縁部が球形の胴部に直線的に外に長く開く長頸壷である。口縁内面には暗文状に研磨を行なう。87～93は小型丸底壷である。87､88は口縁部径と胴部最大径がほぼ同じ、89､90は口縁部が大きいものである。94～101は坏、椀で内外面とも研磨している。　102～104は脚付き椀、107は大型の鉢である。110～119は高坏で坏部の底部と体部の境はゆるやかな稜をもち、脚部は円筒形から裾部が屈曲して大きく開く。内外面とも篦研磨して、暗文状となるものが多い。脚には円孔を対の位置に２～３個穿つ。120～125は器台で大きく開く脚に、口縁部が屈曲して立ち上がる坏部となる。脚には数箇の円孔を穿ち坏部は暗文状の研磨、脚内面には刷毛目が残る。

60号土壙(Fig.60,72－1,2)

調査区のほぼ中央部、11､12号住居跡に挟まれた楕円形の土壙である。長軸2.45m、短軸1.96m、深さ0.22mを測る。弥生時代前期の土器で１は断面が台形の甕の底部である。外底には木葉痕が残り、内面には条痕が確認できる。２は口唇部全体に刻み目を施す甕で内面は板状撫でが見られる。

61号土壙(Fig.60,72－3,4)

ほぼ円形の土壙であるが東半部は明らかではない。現況では半円形で径1.46m、深さ0.04mを計る。遺物は床面直上で小破片で出土している。弥生時代前期の土器で３は壷、４は甕の胴部から底部の破片である。

62号土壙(Fig.71,72－5～17)

調査区の西側で確認した不整形の土壙である。幾つかの土壙が切り合っていると考えられるが先後が明らかでなかったので西側をＡ、東側をＢとして遺物を分離した。土壙の規模は全長6.1m、最大幅

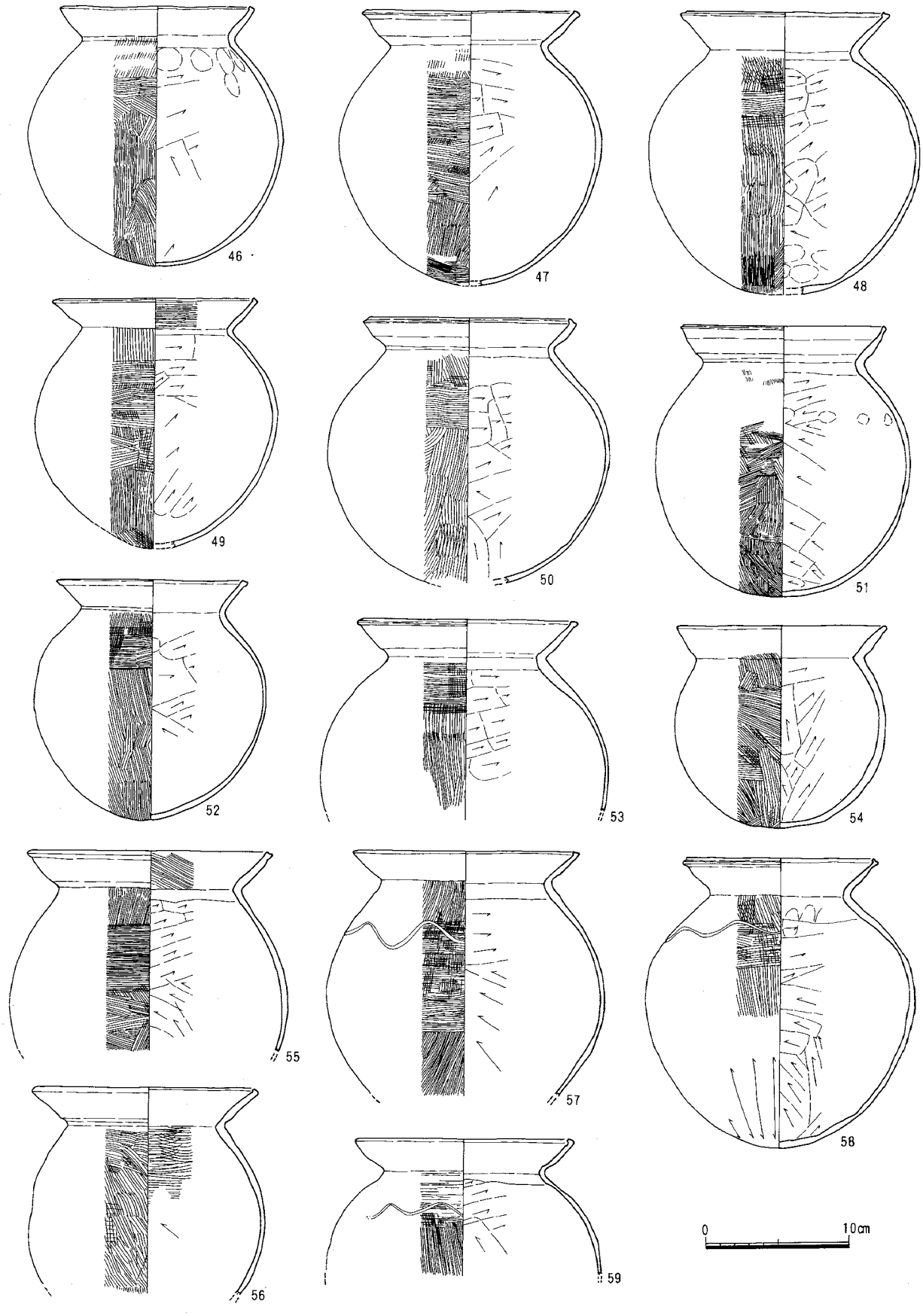


Fig.65　59号土壙出土土器実測図３（1/4）

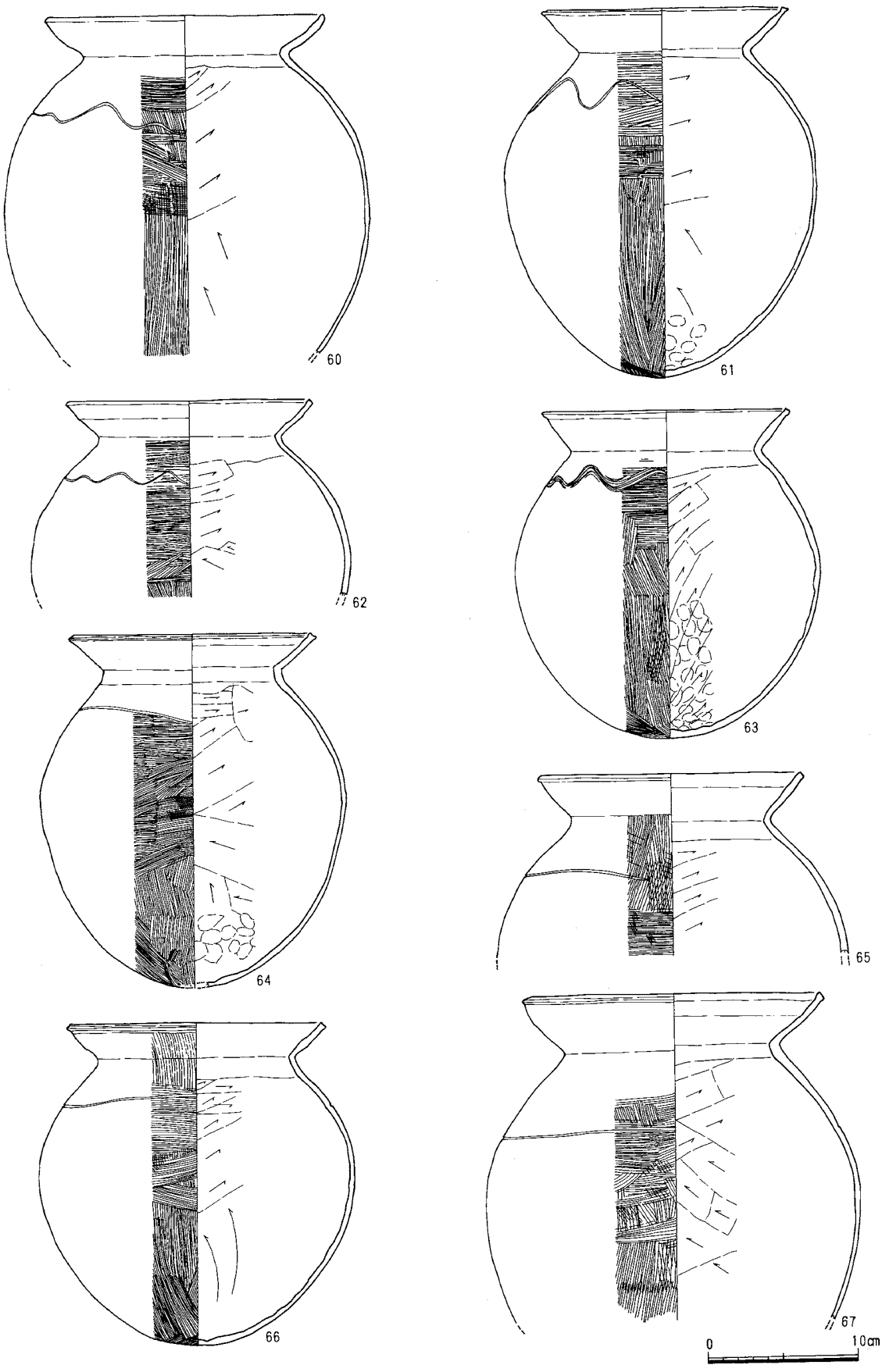


Fig.66　59号土壙出土土器実測図４（1/4）

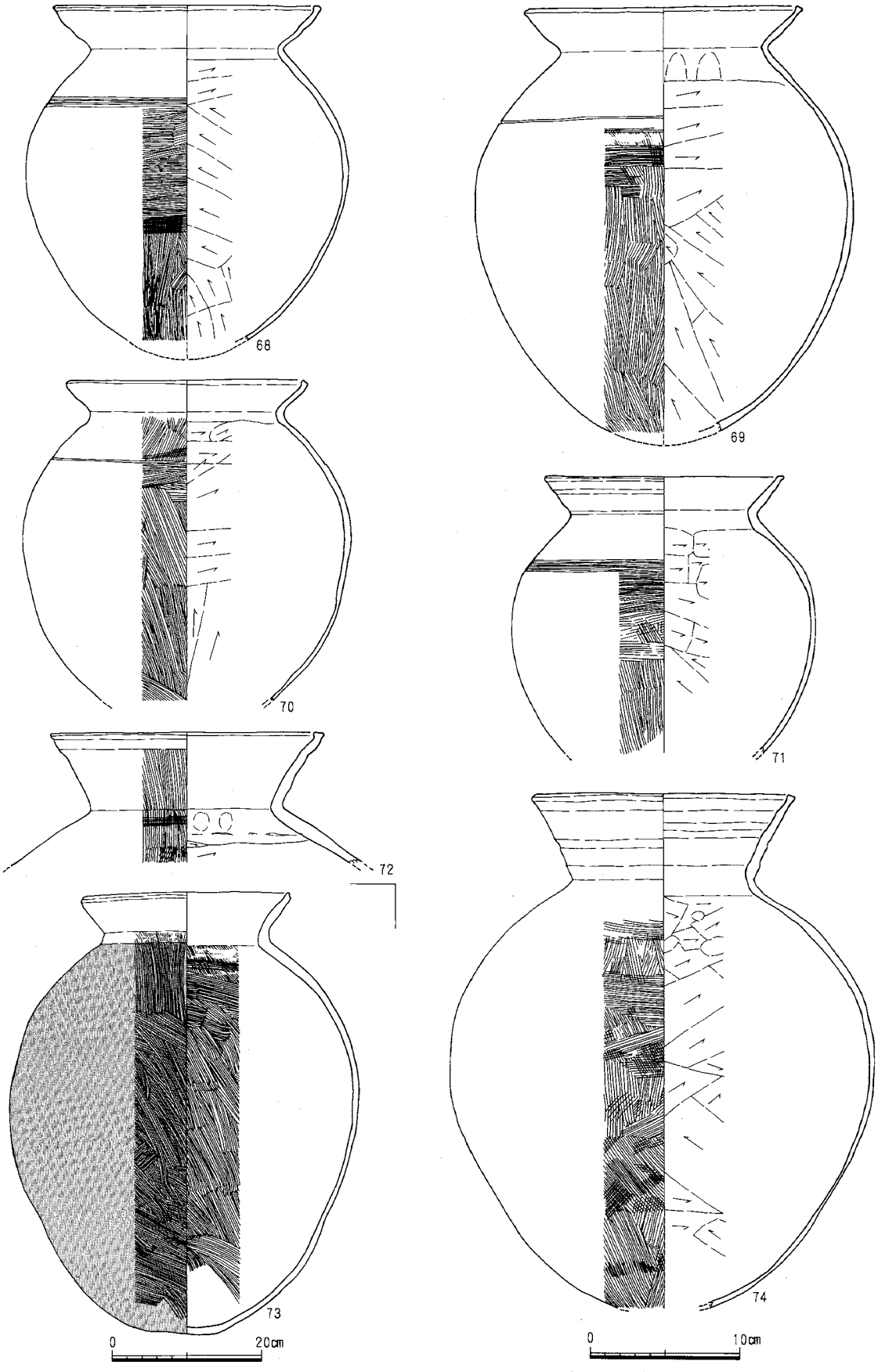


Fig.67　59号土壙出土土器実測図５（1/4,1/8）

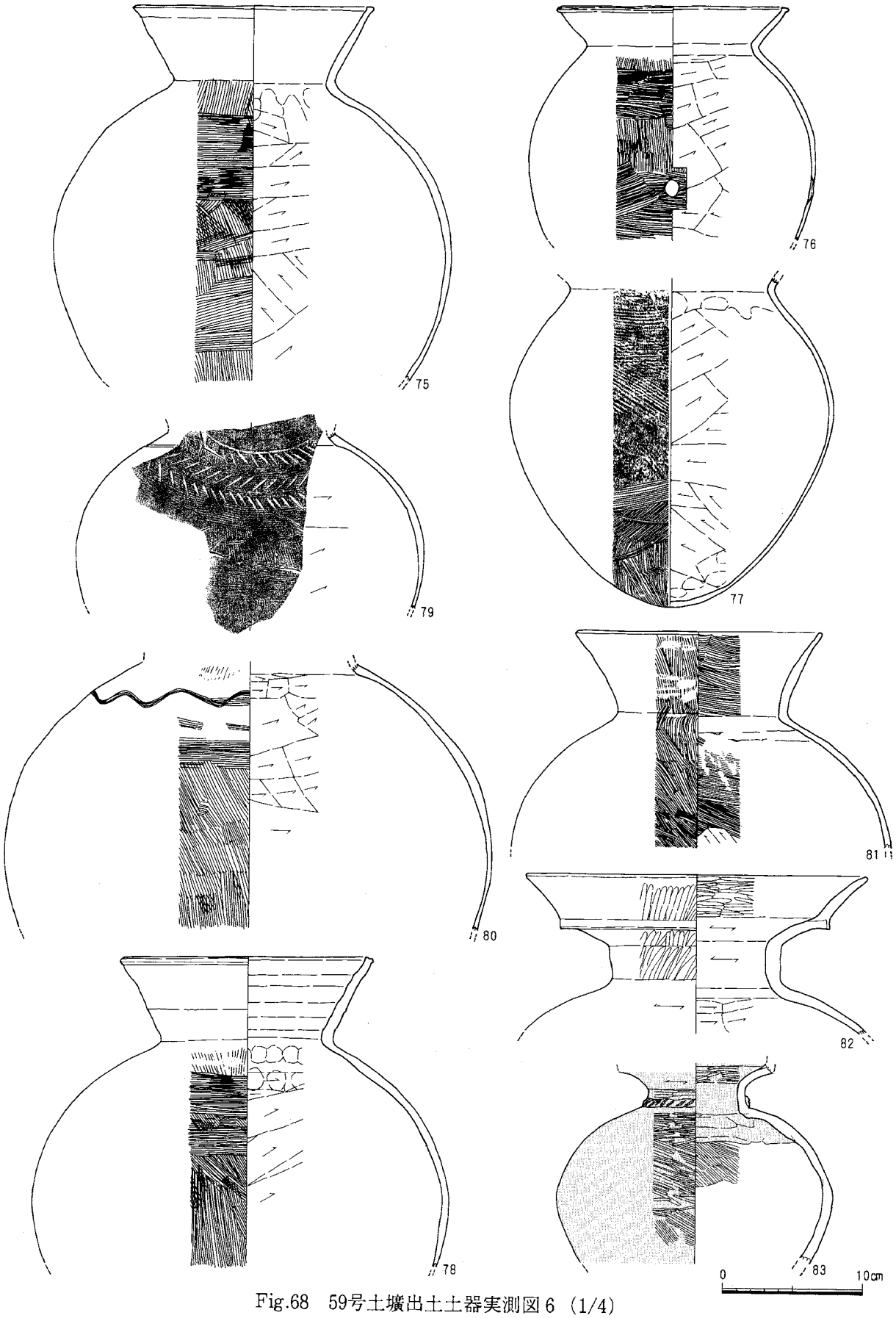


Fig.68　59号土壙出土土器実測図６（1/4）

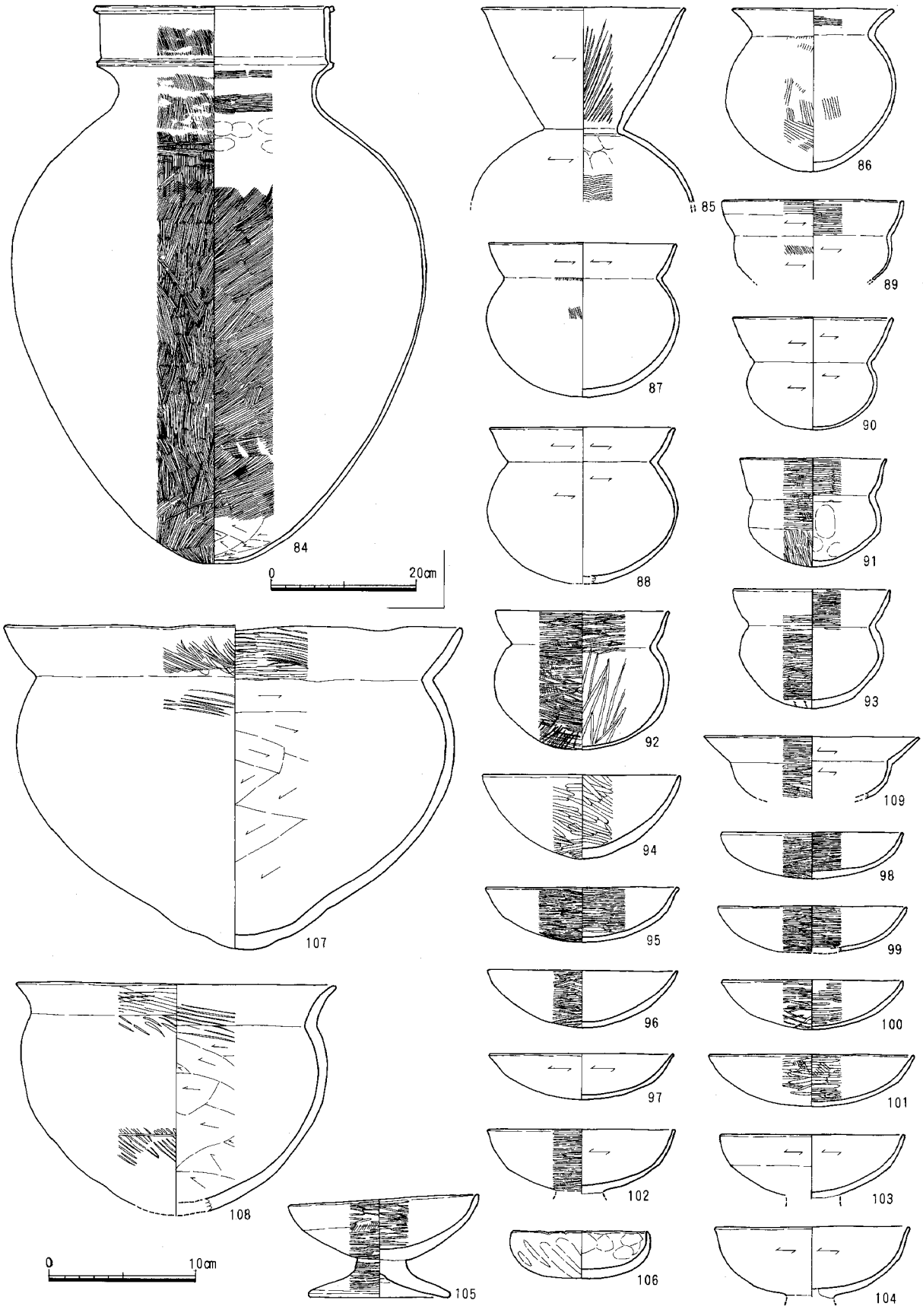


Fig.69　59号土壙出土土器実測図7（1/4,1/8）

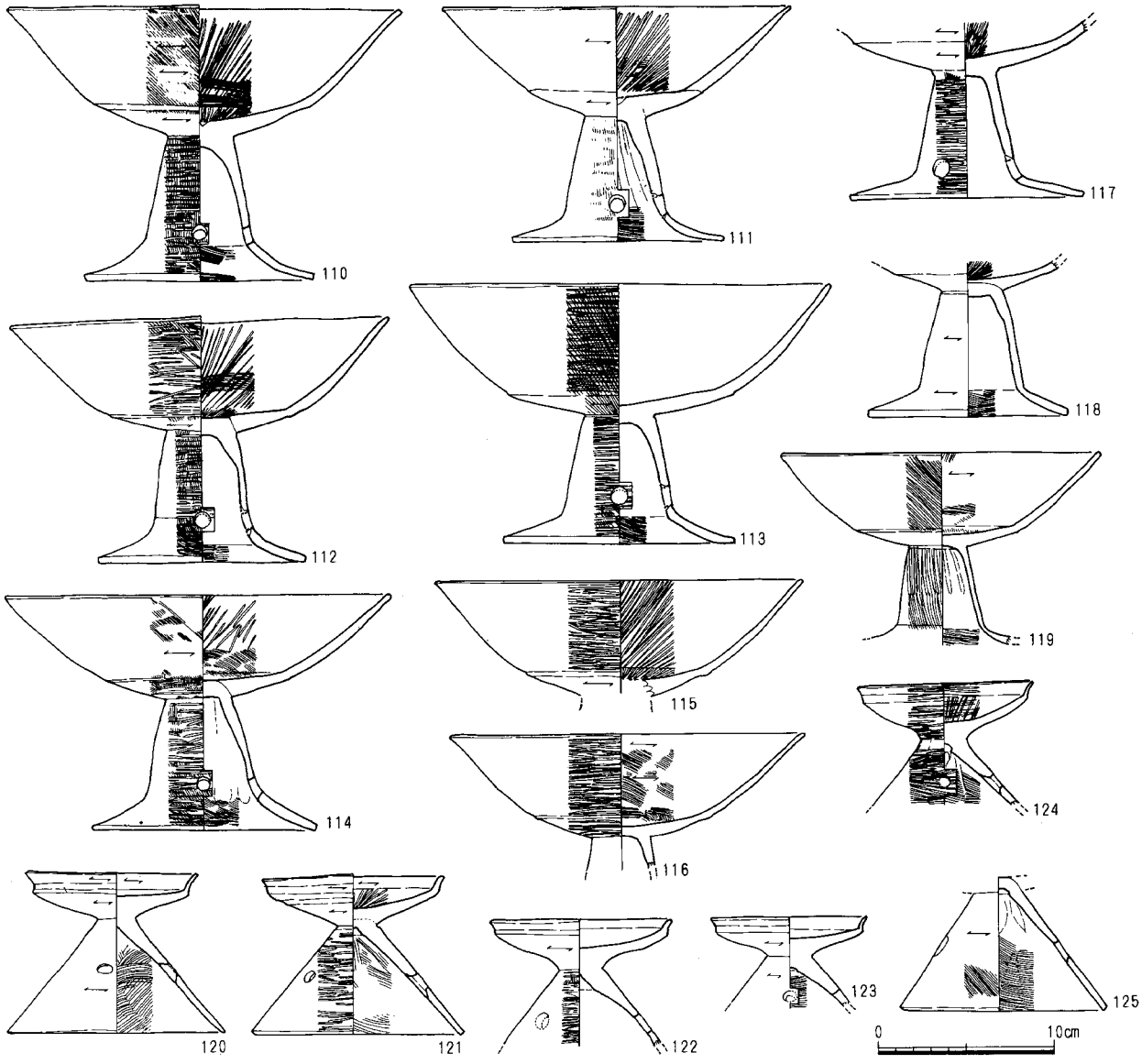


Fig.70　59号土壙出土土器実測図８（1/4）

1.3m、深さ0.4mを測る細長い遺構である。中央部は長さ2.6mにわたって一段深く掘られており、この部分からは弥生式土器が出土している。5 ～11は中央の深い土壙から出土した弥生前期から中期前半にかけて甕である。5、6は口唇部に刻み目をもつ如意状口縁で外面には刷毛目がある。7 は上げ底の底部で胴部が膨らみ口縁部は平坦で内傾する。8 の口縁部は上面中央を窪ませ、胴部上半に三角突帯を廻らせる。9 の口縁部上面は平坦となる。12～15は東半部出土である。古墳時代前期の土器で12は球形に近い胴部から内湾して立上り口縁部となる。胴部外面は刷毛目調整、内面は篦削りである。15は大型の二重口縁壺で残存器高43.2cm、口径18.3cmを計る。胴部最大径を胴部上半にとり、口縁部は屈曲部から内傾し、端部は丸く収まる。内外面とも刷毛目で口縁部は横撫で内底部は篦削りである。

63号土壙(Fig.60,73－18～74－32)

62号土壙の西に隣接する歪な楕円形の土壙である。規模は長軸2.44m、短軸1.61m、深さ0.2mを測る。断面は皿状で覆土中に焼土、木炭、灰を多く含む。北側に土器が集中して確認出来た。18～23は球形に近い胴部から内湾して開く口縁部の甕である。口唇部は肥厚し、胴部上半は横位の刷毛目調整、下半は縦位である。内面は篦削りを行なう。19の肩部には刺突文を巡らす。24～27は同様の器形であ

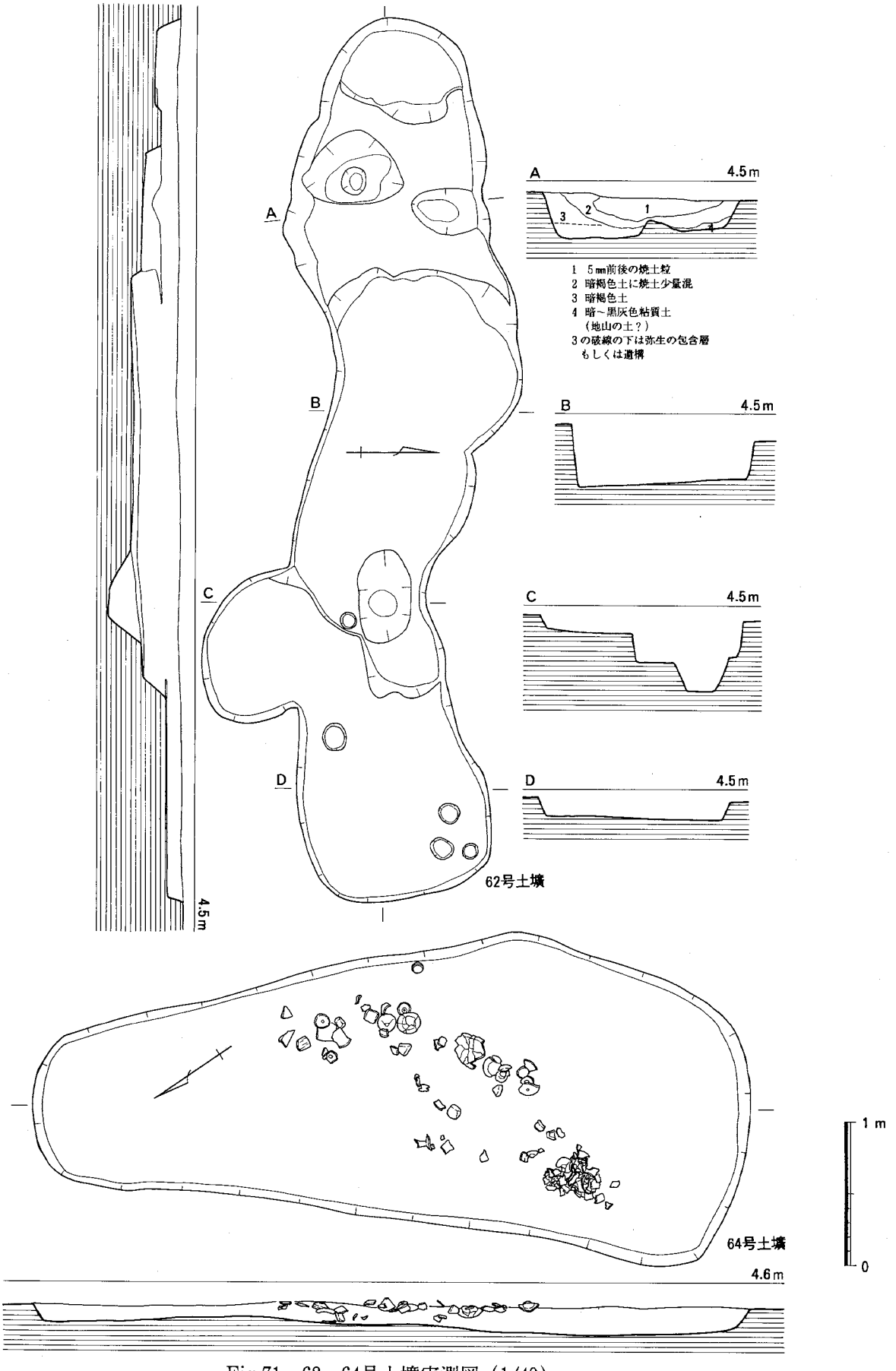


Fig.71　62・64号土壙実測図（1/40）

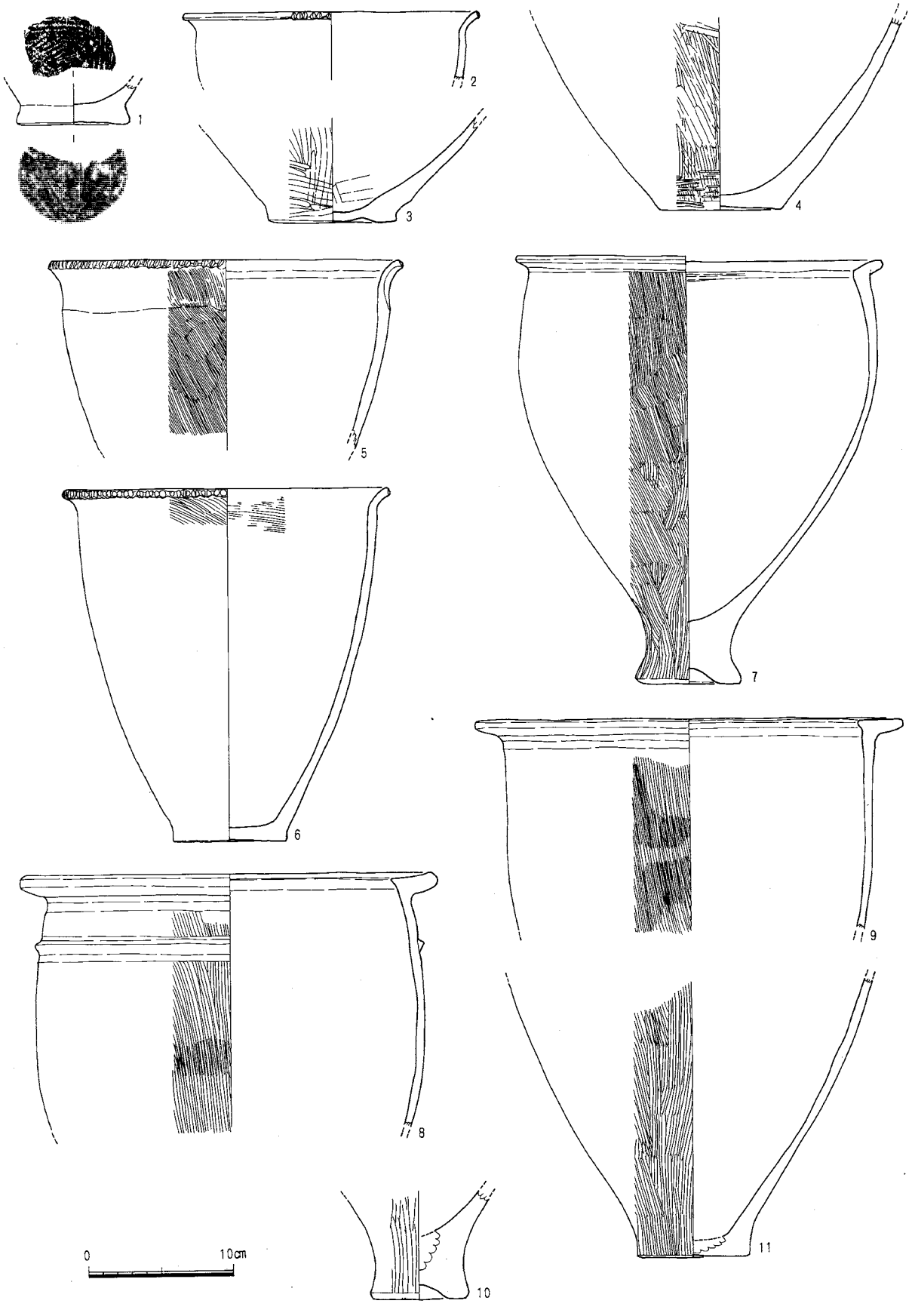


Fig.72　60～62号土壙出土土器実測図（1/4）

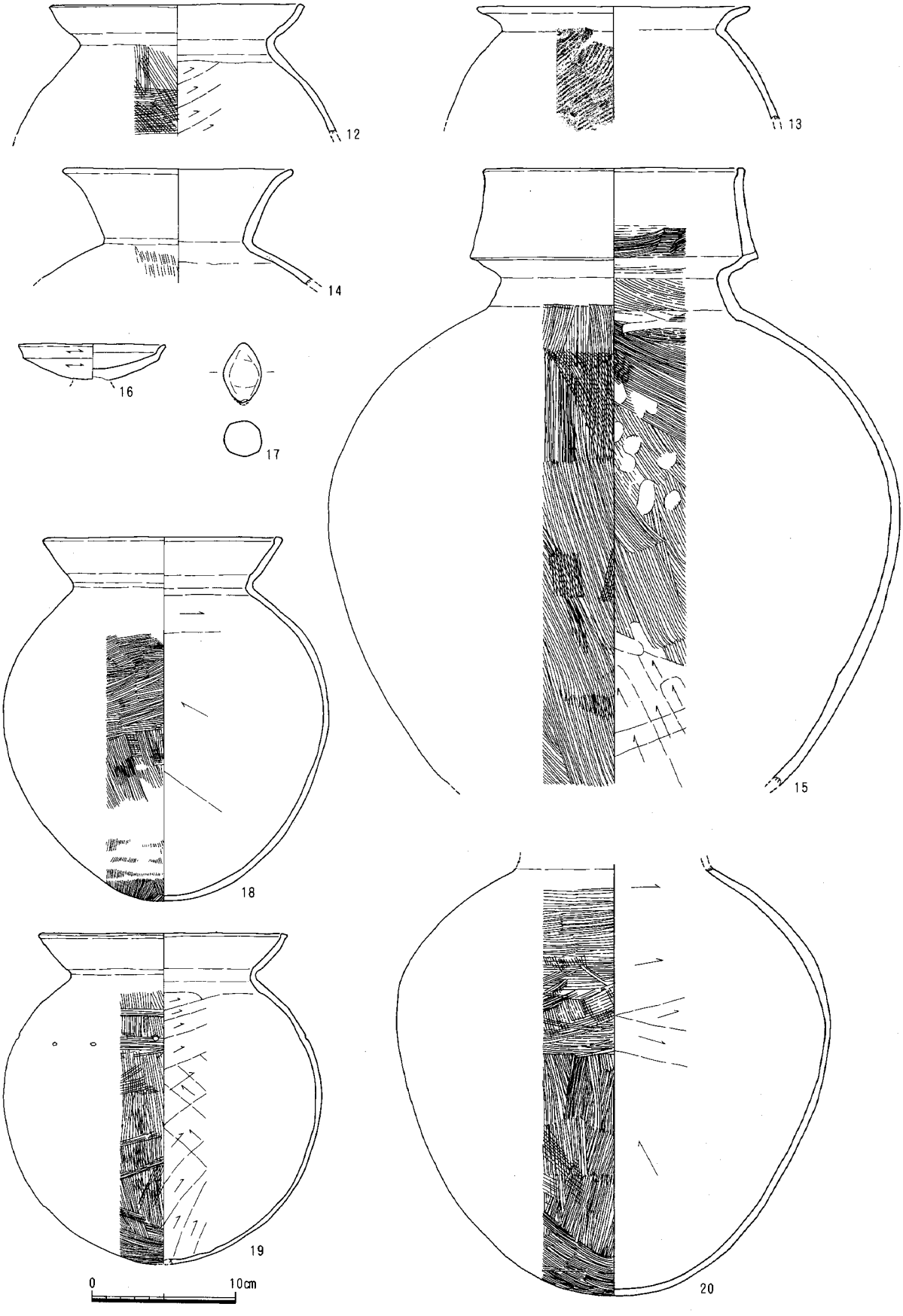


Fig.73　62・63号土壙出土土器実測図（1/4）

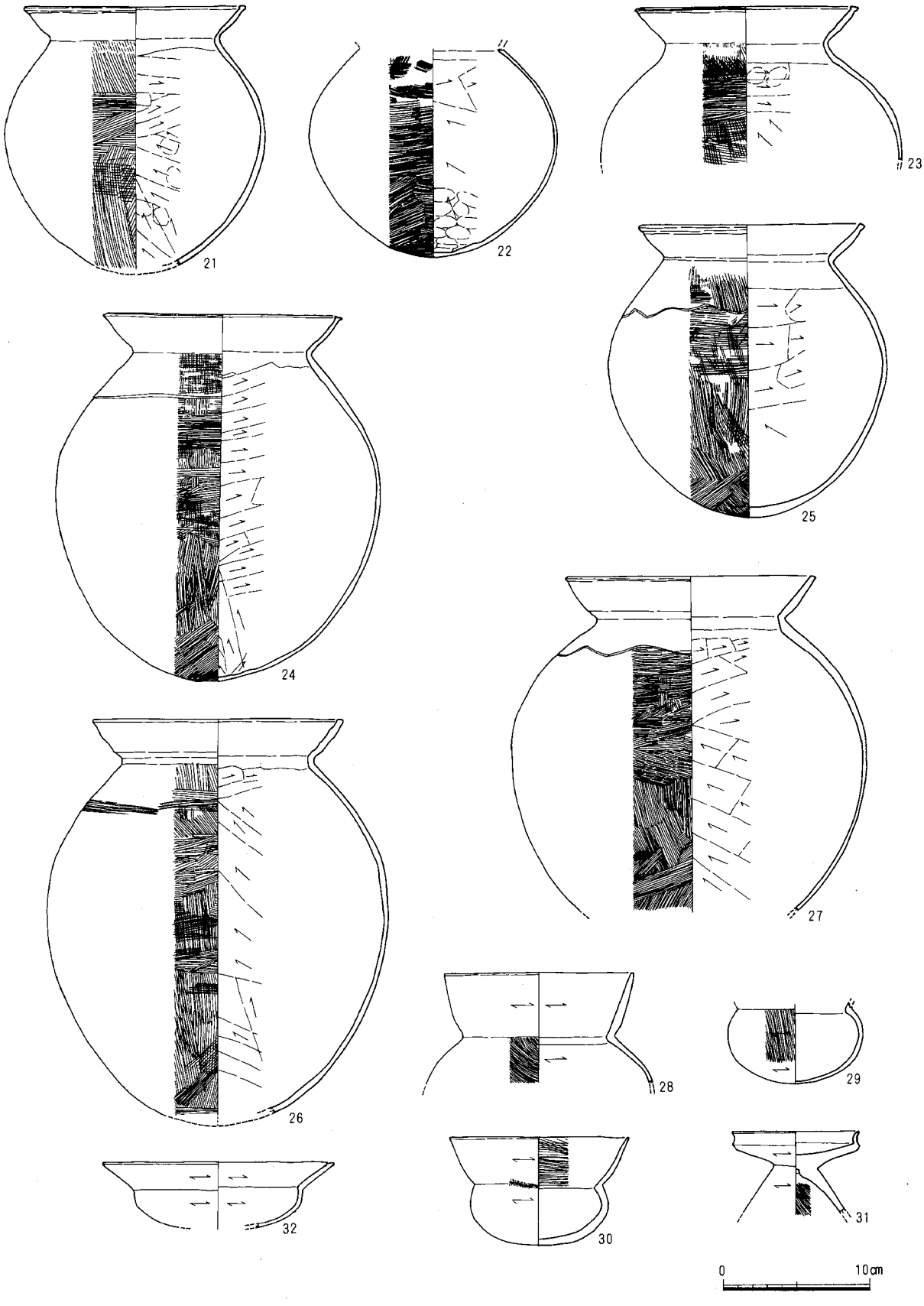


Fig.74　63号土壙出土土器実測図（1/4）

るが肩部に波状沈線を廻らす。26は櫛状工具により4 、5 条の沈線を巡らすが線を描く起点と終点がずれている。28～30は小型の壷、31は器台、32は鉢である。

64号土壙(Fig.71,75－1～16)

62号土壙の南東に位置する不整形の土壙である。南西部は幅広く、北東部は細くなり、規模は長軸4.95m、最大幅2.0m、深さ0.16mを測る。土器は床面から浮いた状態で出土している。1 ～5 は小型の甕である。胴部上半は横位の、下半は縦位の刷毛目調整であるが横位、斜位の比重が高くなる。3 、5 は肩部に篦描きの波状紋を描く。8 、9 は脚付の椀で、脚は低く外に大きく開く。10は鉢で内面篦削り、外面は研磨を行なう。11は高坏で坏部と体部の境に浅い段をもち、外面は刷毛目調整の後横位の研磨、内面は刷毛目の後から放射状の暗文状の研磨を行なう。12～16は器台で受け部の屈曲が強いものとゆるやかなものが見られる。脚部には対の位置に円孔を穿つ。13は受け部の屈曲が強く内面は高

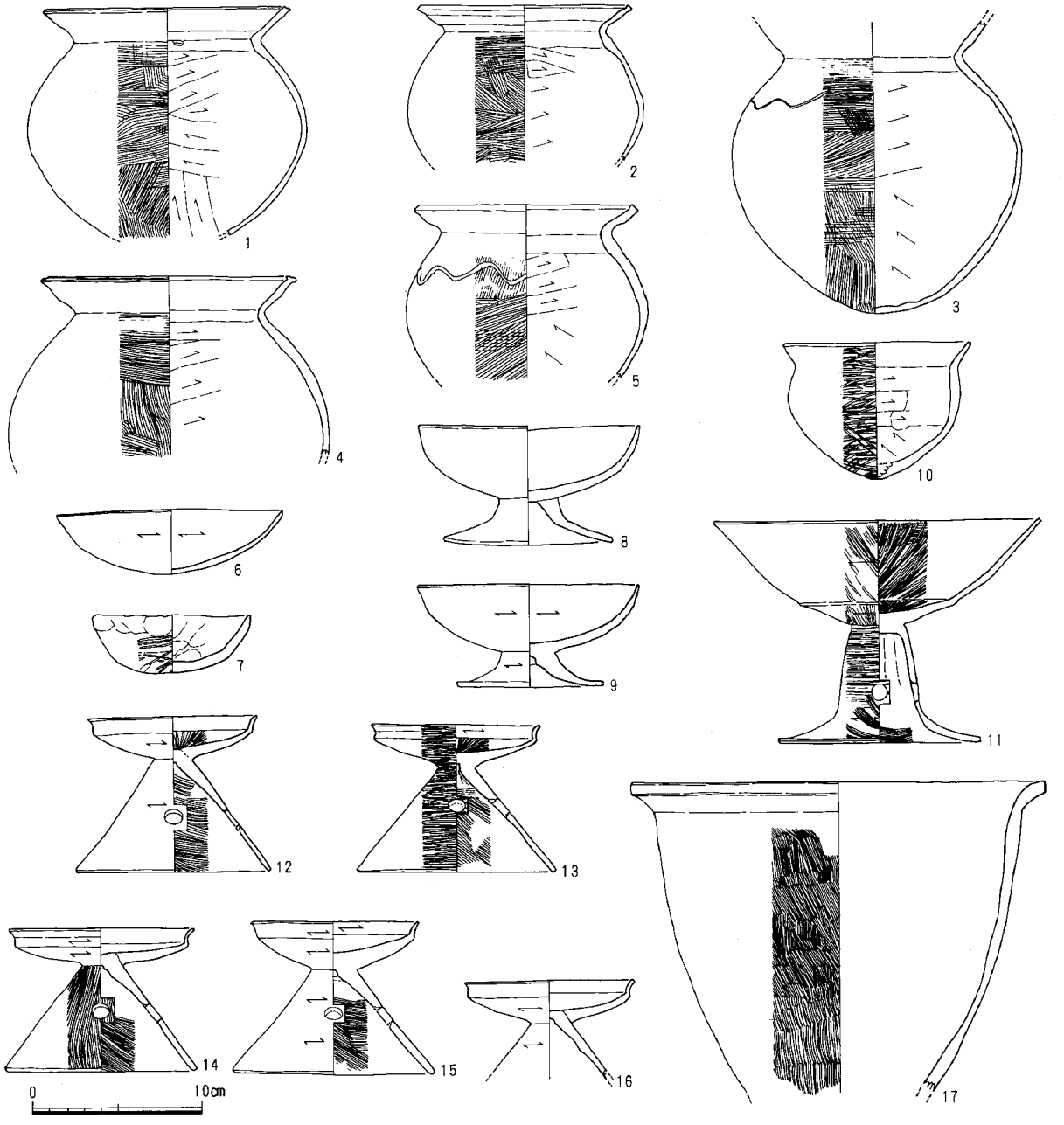


Fig.75　64・65号土壙出土土器実測図（1/4）

坏と同様で、外面は研磨、脚部内面には刷毛目調整が残る。14の脚部は内外面とも刷毛目調整である。

65号土壙(Fig.60,75－17)

64号土壙の南に位置する東西に長い長楕円形の土壙である。規模は長軸2.83m、短軸1.29m、深さ0.26mを測る。ピットに切られる。遺物の量は少ないが弥生時代前期の甕が1点出土している。如意状の口縁であるが刻目は無い。外面は刷毛目調整である。

66号土壙(Fig.76,77)

12号住居跡の西に位置する略楕円形の土壙である。規模は長軸1.7m、短軸1.85m、深さ0.15mを測る。遺物は中央部の床面から浮いた状態で纏まって出土している。庄内期の土器群である。1 は最大径を口縁部にとる甕で、倒卵形の胴部から口縁部は直線的に開く。内外面とも刷毛目調整で口縁部は横撫である。2 は内外面とも縦、斜めの刷毛目調整であるが、口縁部内面は横位となる。口唇部端は肥厚する。3 は二重口縁の壷で口縁部直下に刷毛目調整の上から円形文を巡らす。4 は壷の底部で平底風の底部で胴部下半に刻み目突帯を廻らす。5、6 は鉢で内外面とも粗い刷毛目調整である。

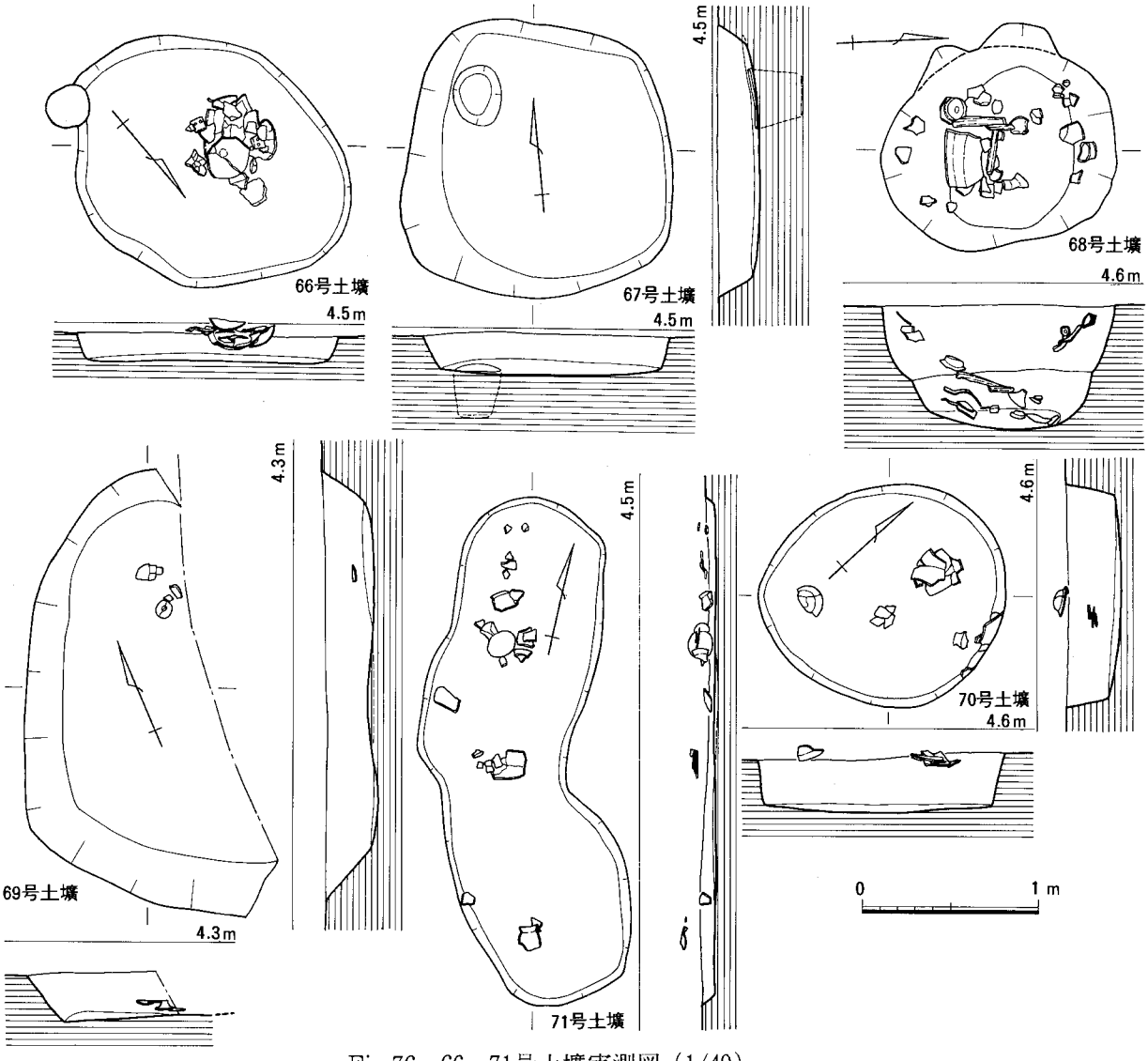


Fig.76　66～71号土壙実測図（1/40）

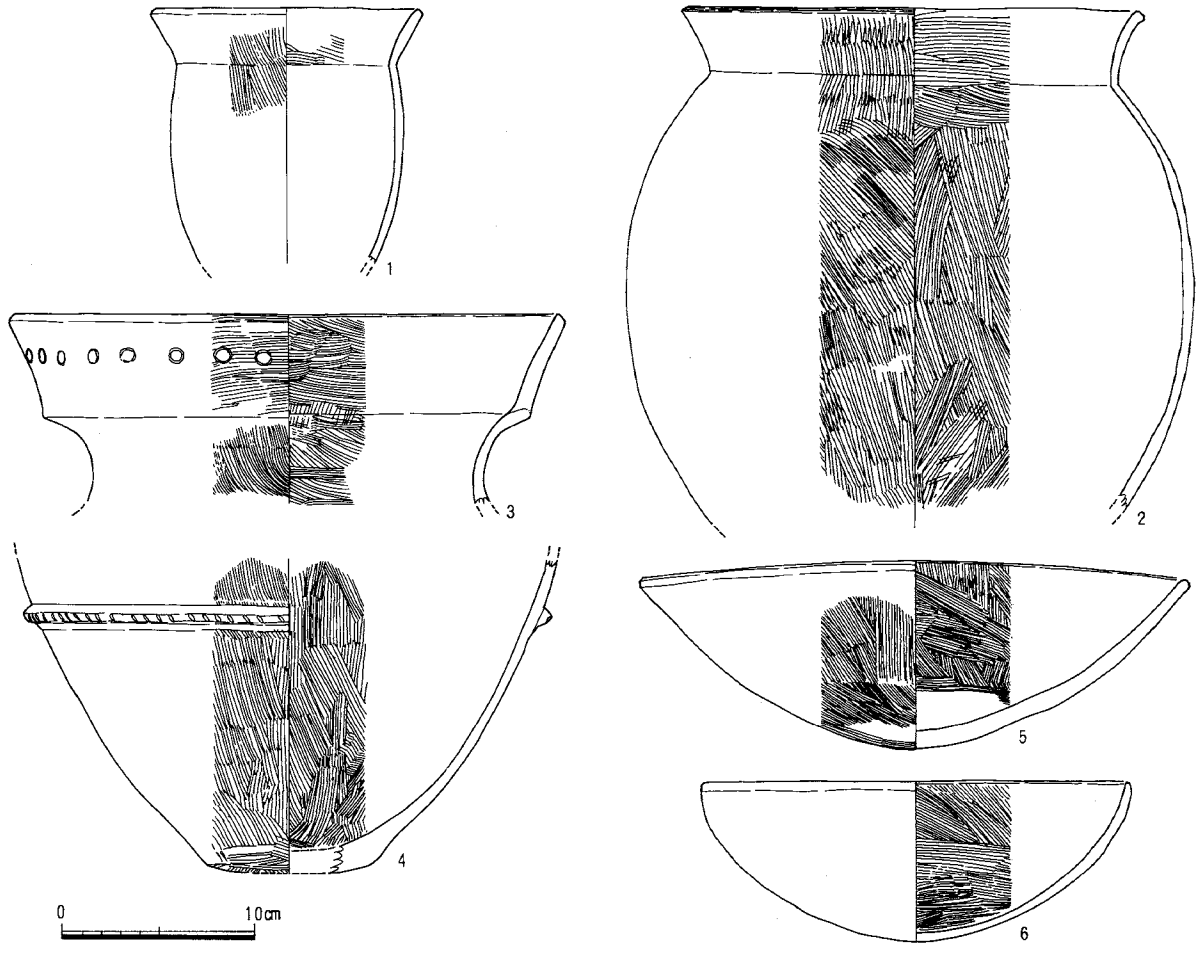


Fig.77　66号土壙出土土器実測図（1/4）

67号土壙(Fig.76)

66号土壙の南に位置する略隅丸方形の土壙である。東西1.5m、南北1.53m、深さ0.23mを測る。遺物はほとんど出土していない。

68号土壙(Fig.76,78－1～9)

67号土壙の西に位置する略楕円形の土壙である。長軸1.34m、短軸1.11m、深さ0.7mを測る。土器は甕、壷、高坏が出土している。2の外面は全面叩き、内面は刷毛目調整である。4は内外面とも刷毛目調整で口縁部は短く外反気味に立ち、胴部には焼成後の穿孔がみられる。

70号土壙(Fig.76,78－13～16)

6号住居跡と重複する略楕円形の土壙である。長軸1.38m、短軸1.23m、深さ0.3mを測る。遺物は遺構確認面で甕、壷、鉢が出土している。

71号土壙(Fig.76,78－17)

調査区の西端に検出した溝状の土壙である。幅0.85m、長さ2.75m、深さ0.08mの規模である。遺物は図示した壷の他に甕の胴部破片も出土している。

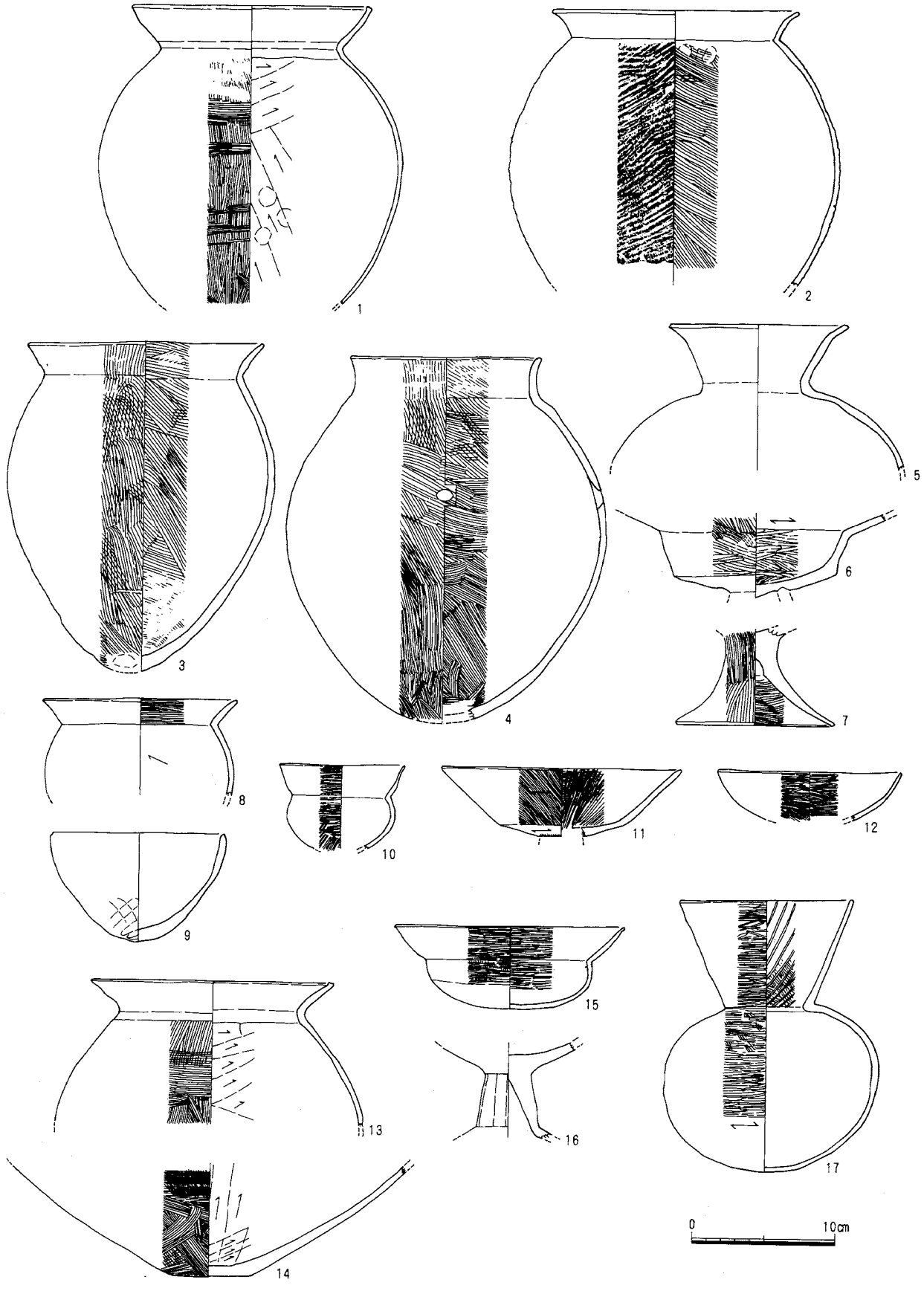


Fig.78　67～70号土壙出土土器実測図（1/4）

4）井戸の調査

今回のⅠ面では3基の井戸を調査した。いずれも素掘である。古墳時代前期のもので、建築材も出土している。

8号井戸(Fig.79,80－1～3,PL.50)

6号住居跡の西に位置する素掘の井戸である。平面形は円形で径1.19m、深さ0.84mの規模である。壁面はほぼ垂直に近く、床面は丸味をもつ。床面近くから建築材1点と壷が出土している。1は甕の胴部から口縁部の破片である。胴部は肩部を横、下半部を縦の刷毛目調整を行なう。内面は篦削りである。2は完形品の壷である。球形の胴部から屈曲し、頸部と口縁部の接合部は突帯状になり、口縁部はやや内傾して立上り端部は外反し丸く収まる。口径9.8cm、器高17.4cmを計る。3は高坏の脚部である。外面は刷毛目の後研磨し、内面は篦削り、裾部は刷毛目調整の後撫で調整を行なう。

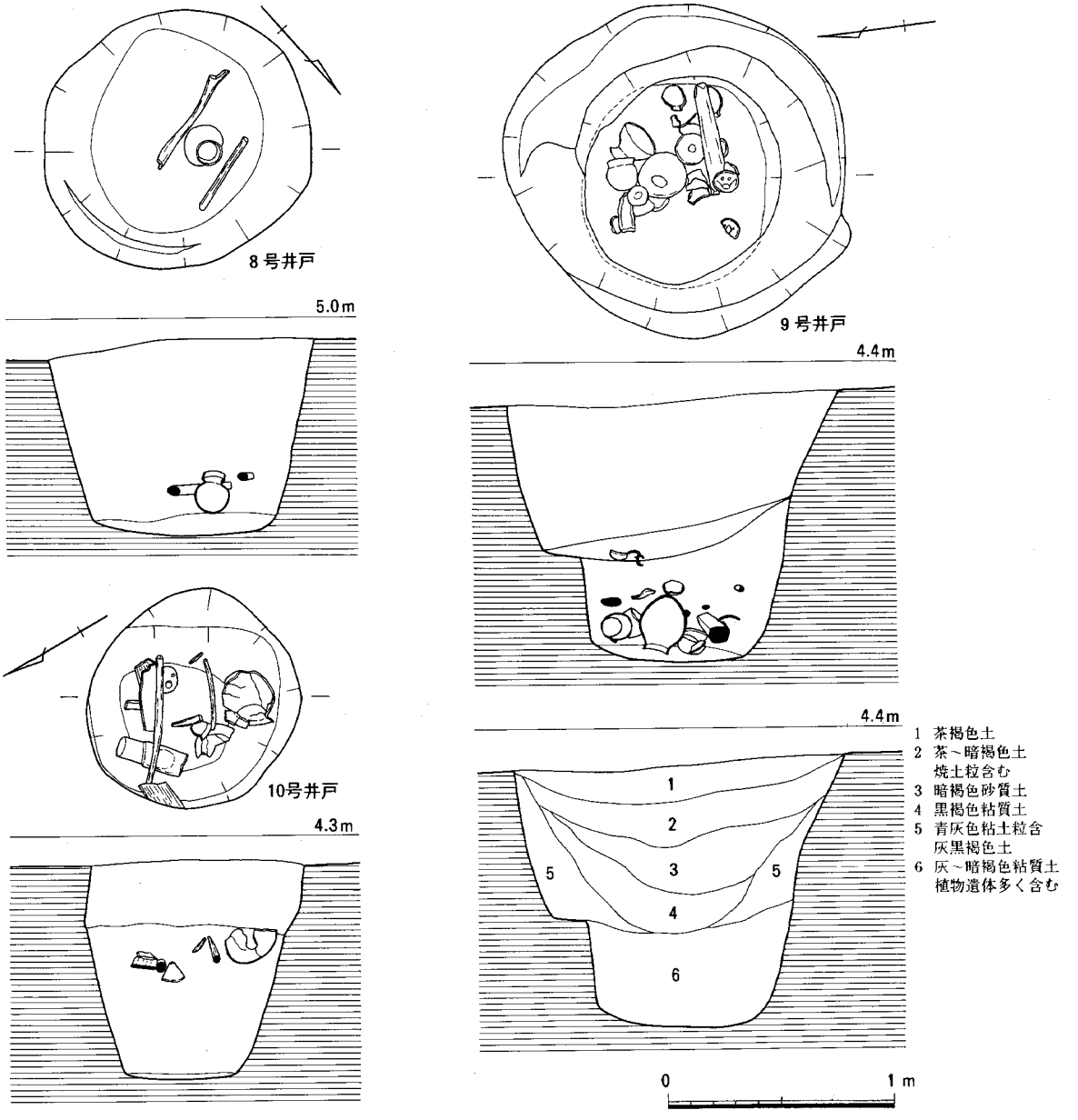


Fig.79　8～10号井戸実測図（1/30）

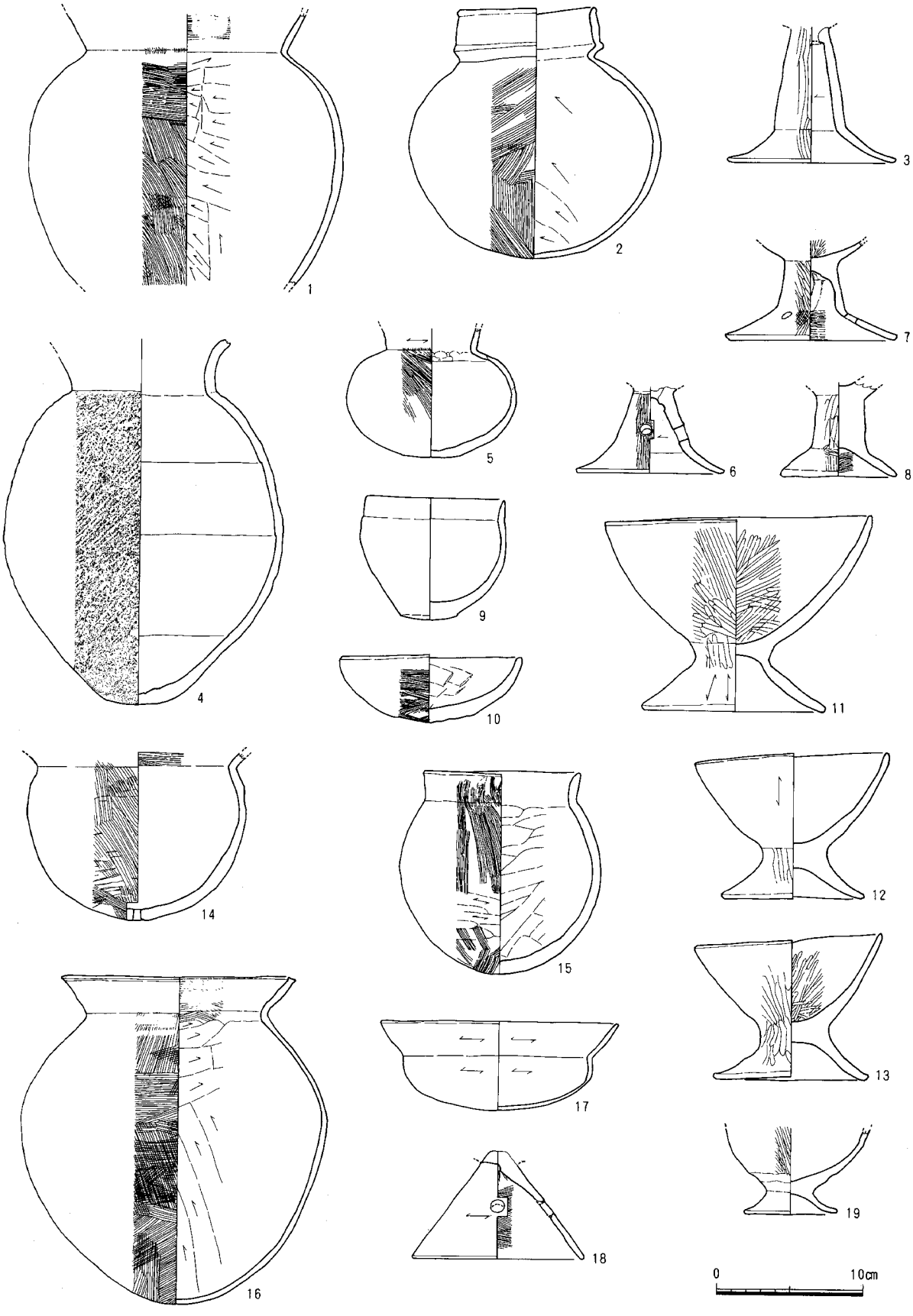


Fig.80　8～10号井戸出土土器実測図（1/4）

9号井戸(Fig.79,80－4～15,PL.32,50,51)

調査区の西部、62号土壙の北側に位置する楕円形の素掘の井戸である。規模は長径1.5m、短径1.45m、深さ1.14mを計る。東側は二段に掘り込まれ、下半部の壁面はほぼ垂直、上半部は傾斜をもつ。床面から、土器、割材等が出土している。土層を観察すると下層の遺物を含んだ第6層の灰～暗褐色土は40cmの高さまで水平に堆積しており、その上は流れ込むような自然の堆積状態を示す。6 層には植物遺体等も含まれ、意図的に埋めたものではなく、土器を投棄した後しばらくの期間は滞水状態にあり、その後水が枯れた後埋没したものであろう。4 は外面が叩きの甕で胴部は卵型で口縁部は強く外反する。内面は磨滅が著しいが篦削りであろう。粘土の接合跡が明瞭に残る。底部は尖り気味の丸底である。5 は偏球形の胴部から口縁部が直線的に開く小壷である。胴部外面は刷毛目調整である。6 、7 は高坏の脚部で6 は4 個、7 は3 個の穿孔が見られる。8 は椀の脚部であろう。外面には研磨、内面には刷毛目が見られる。9 は全面を煤に覆われた小型の鉢、10は坏である。11～13は脚付きの鉢である。15は小型の直口壷である。外面は叩きの後刷毛目調整、内面は篦削りである。

10号井戸(Fig.79,80－16～19,PL.51)

調査区の西端部、71号土壙の南側に位置する楕円形の素掘の井戸である。規模は長径0.95m、短径0.92m、深さ0.96mを測る小型の規模である。壁面はなだらかな傾斜を示し、床面はほぼ平坦である。遺物は中層から出土し、土器は完形品は無くほとんどが破片であり、木材も割材、板材などがあり不用品の捨て場としている。16は甕で球形に近い胴部からゆるやかに内湾して口縁部は立上り口唇部は肥厚し中央部が窪む。外面は縦位の後横位の刷毛目調整を行なう。内面は刷毛目調整である。17は口縁部が大きく開く鉢、19は脚付きの鉢である。18は器台の脚部で2箇の穿孔が見られる。外面は研磨、内面は刷毛目調整である。

5）溝状遺構の調査

Ⅱ区では7次調査で検出した微高地の縁を巡る溝状遺構（1号）の続きを検出した。北西－南東に長い楕円形の微高地が復原され、その広さは62×48m、4,000㎡である。他に小規模の溝状遺構（11号～17号）を検出したが、その機能については明らかではない。

1号溝状遺構（Fig.51,81,PL.32,33）

7次調査の1号溝状遺構と連続するものと考えられるのでここでも1号溝とする。この調査区では掘り込みはまったく確認出来なかった。遺物も全体に分布するのではなく二箇所に集中的に出土し、その他の所では間ばらな分布状態を示す。遺物が集中的に出土したのはC－6区周辺（東側）とJ、K－16区（西側）である。東側では小さな破片が多く、7次調査の分布とつながるもので弥生式土器も含まれていたが、微高地の西側では幾つもの土器が重なって完形品に近い土器が大量に出土した。庄内期の土器もあり、この地区が時期的に遡るものと考えられる。

出土遺物(Fig.82～Fig.103,PL.51～65)

J、K－16区(Fig.82～Fig.101,PL.33,52～65)

調査区の西端から纏まって出土した一括遺物である。1 ～22は口縁部が内湾して立ち上がるものである。口唇部の形態により数種類に分類できる。1、6、7、15等は口唇部端が内側へ肥厚するものである。1 は胴部下半を一部欠損するがほぼ完形品である。胴部最大径を胴部上半におき、底部は丸く長胴となる。口縁部は内湾して立上り口唇部は肥厚し、上面中央部が窪む。胴部外面は縦位の後、肩部から胴部中位を横位の刷毛目調整を行なうが、縦位の刷毛目も一部残る。口縁部は内外面とも横撫で調整で、胴部内面は篦削りを行なう。6 の口唇部は内面に肥厚し、端部が尖る。胴部の調整に変化は

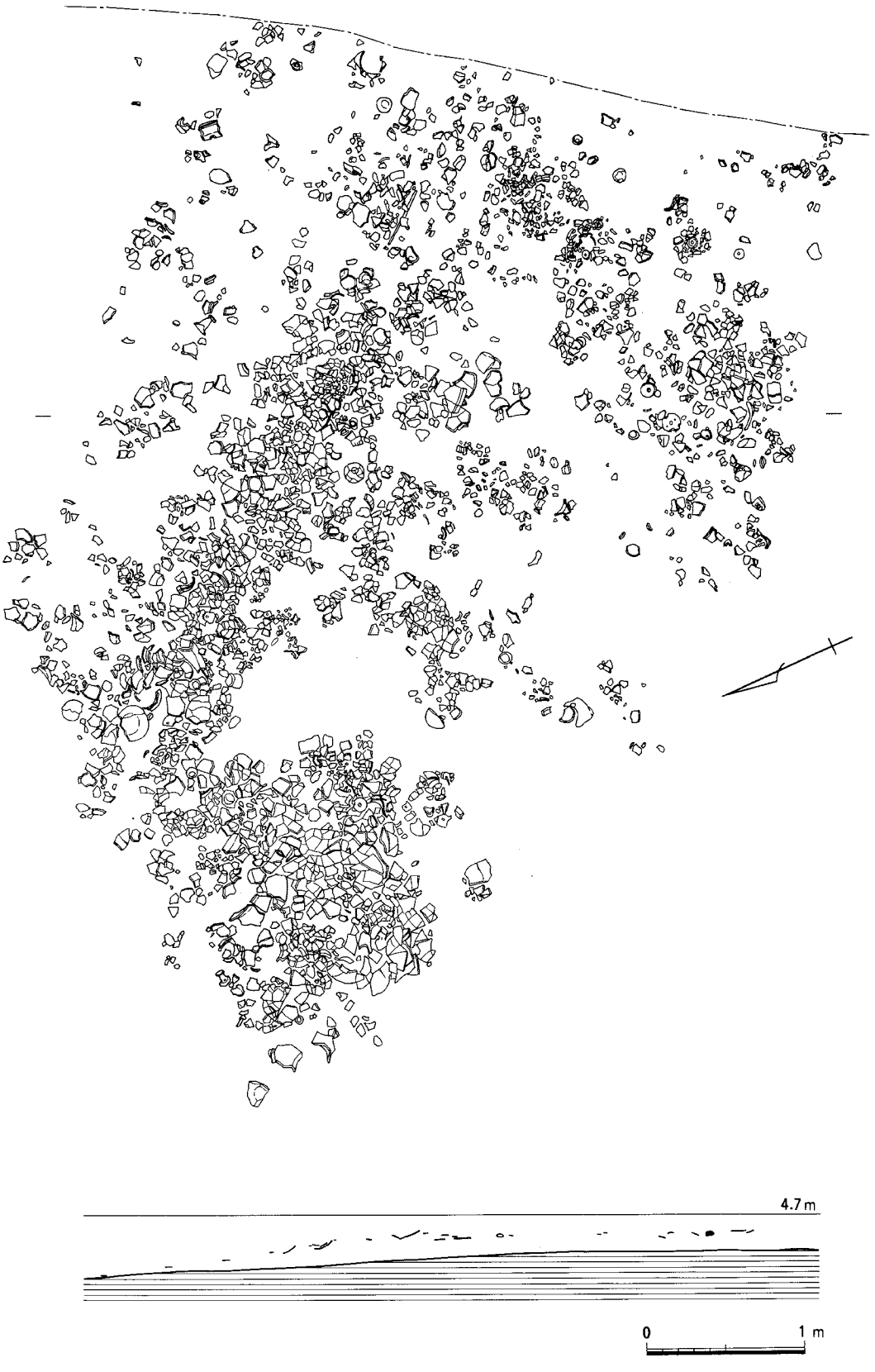


Fig.81　1号溝状遺構東側土器出土状況実測図（1/40）

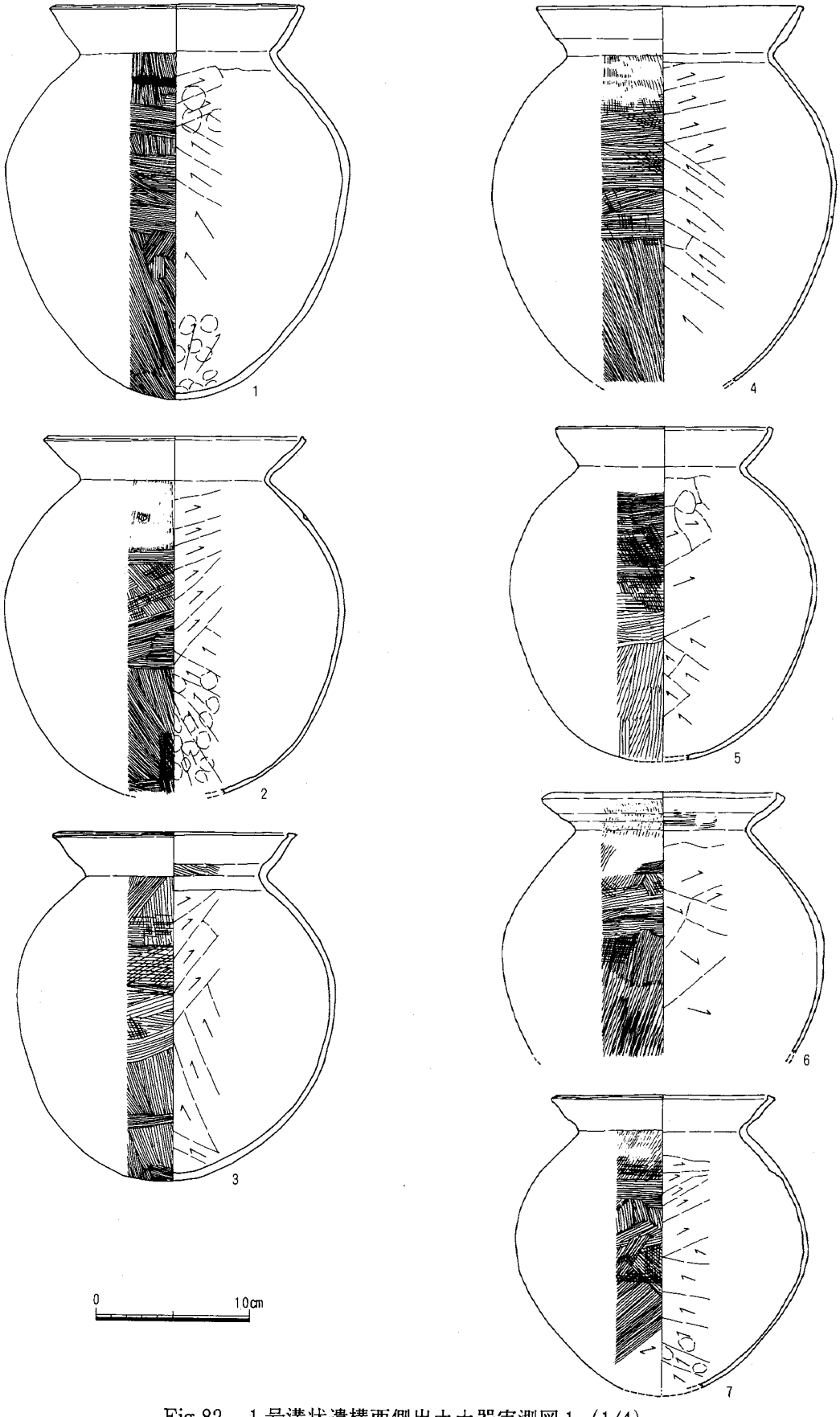


Fig.82　1号溝状遺構西側出土土器実測図1（1/4）

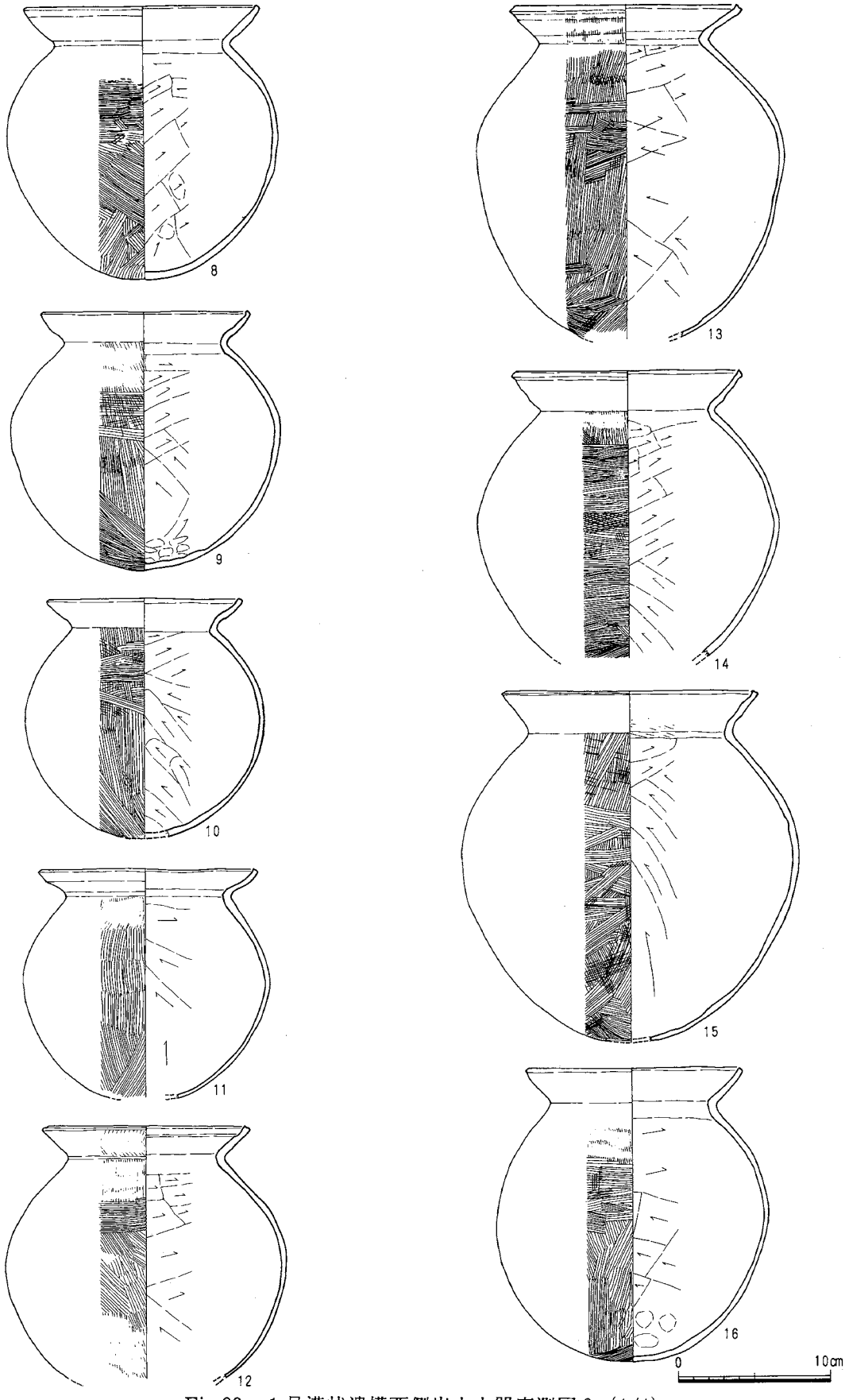


Fig.83　1号溝状遺構西側出土土器実測図2（1/4）

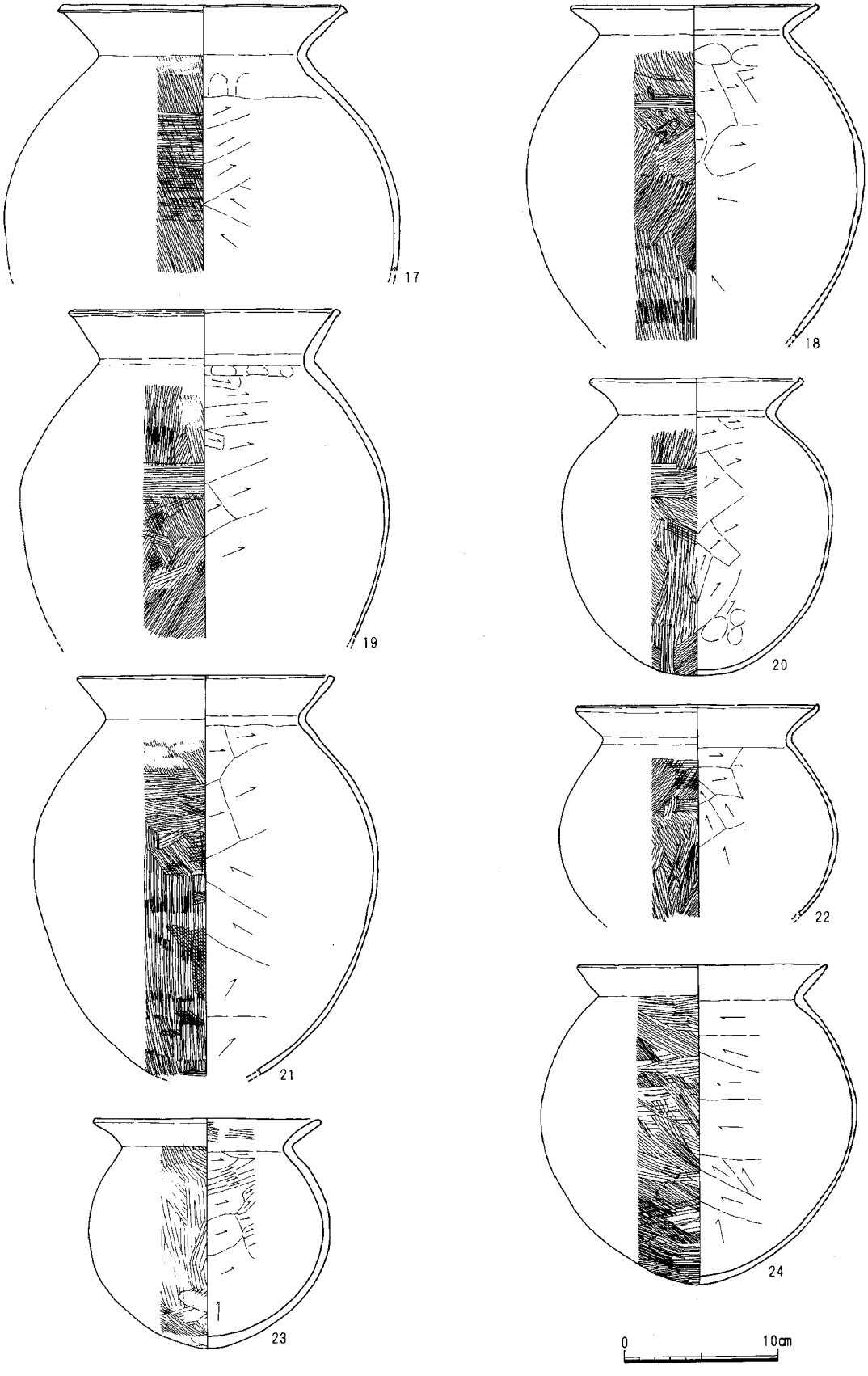


Fig.84　1号溝状遺構西側出土土器実測図3（1/4）

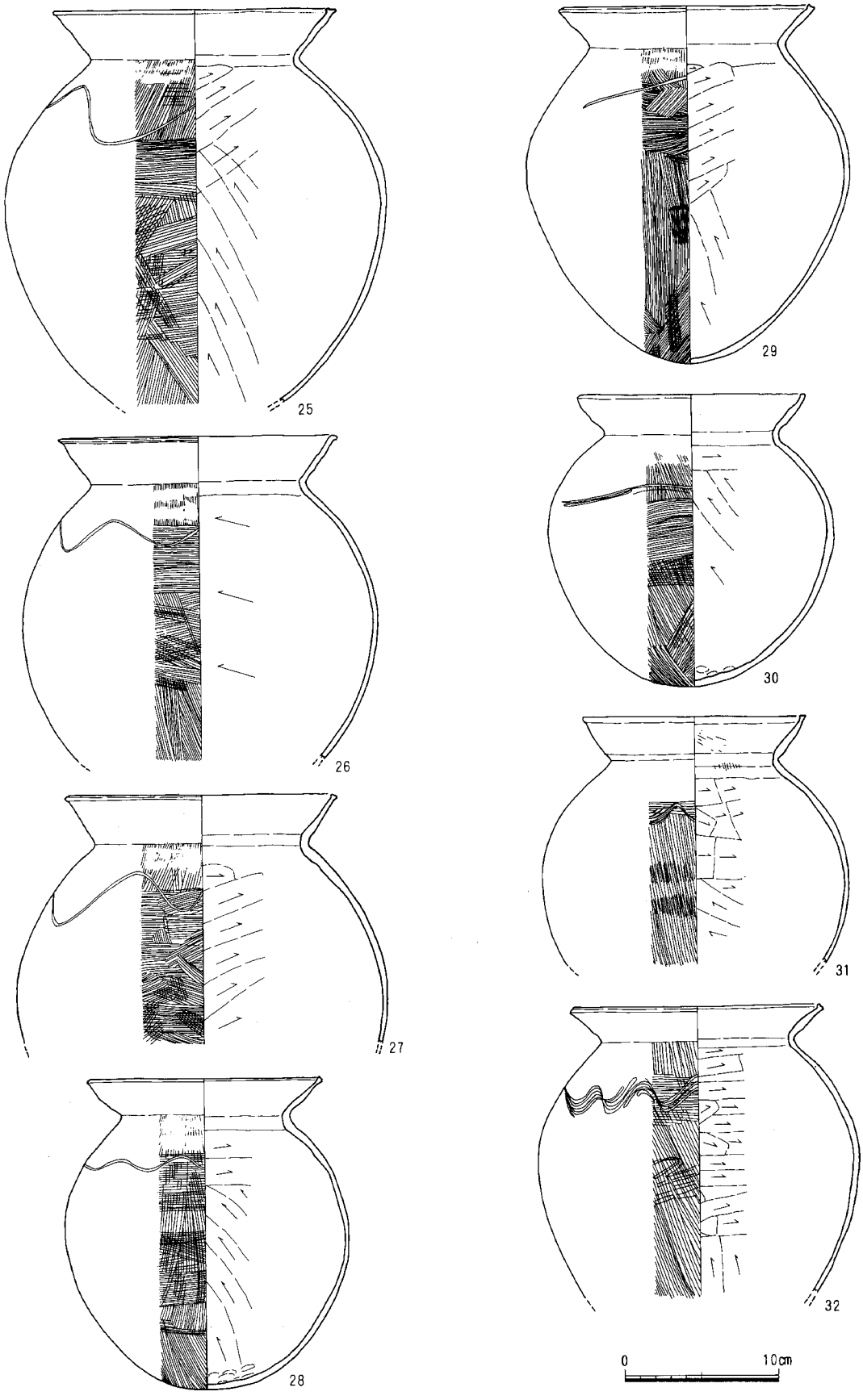


Fig.85　1号溝状遺構西側出土土器実測図4（1/4）

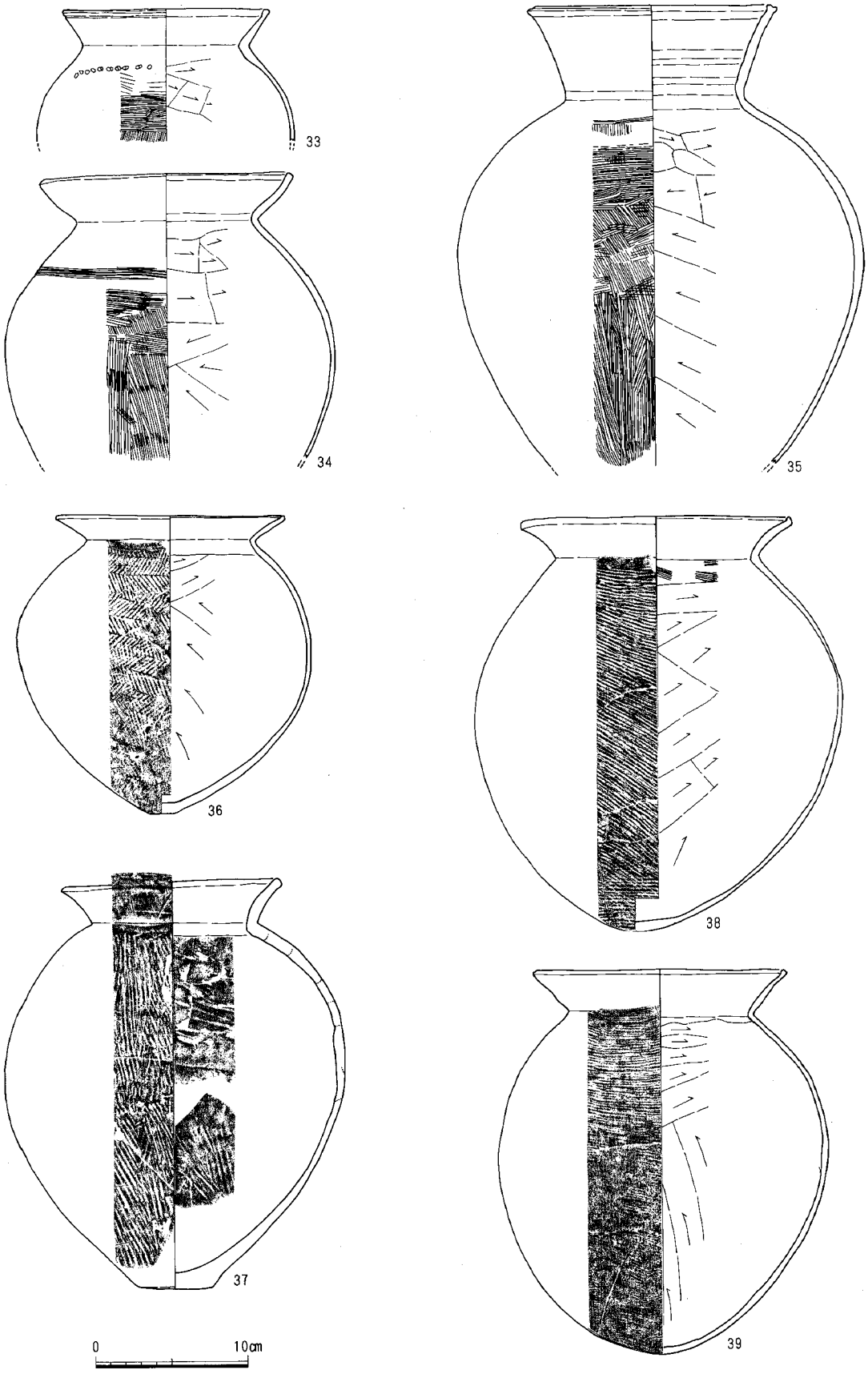


Fig.86　1号溝状遺構西側出土土器実測図5（1/4）

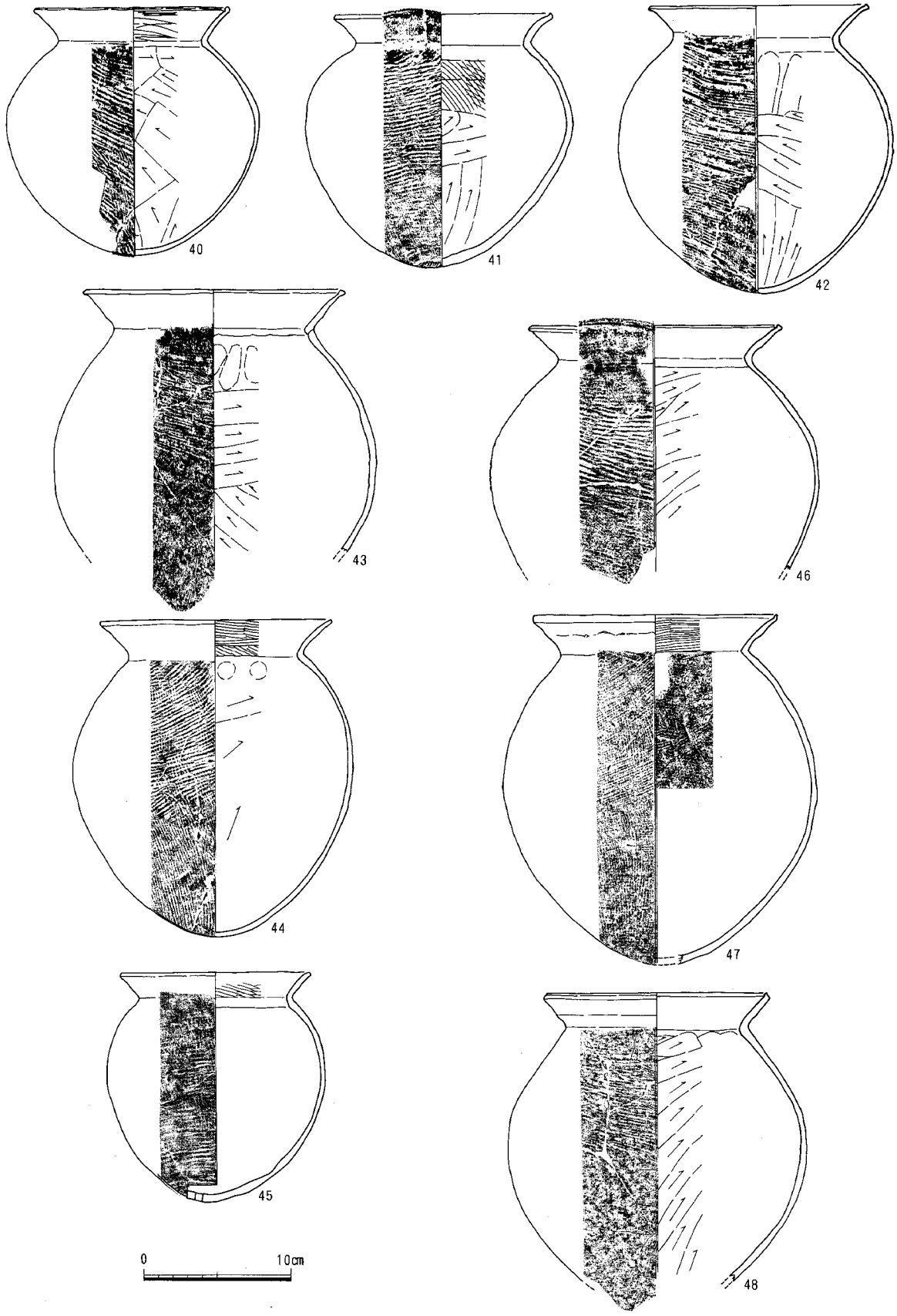


Fig.87　1号溝状遺構西側出土土器実測図6（1/4）

無いが、口縁部には刷毛目の跡が微かに残る。7 は胴部内面の篦削りが肩部までしか施されず、その部分の器壁が倍近くなっている。胴部外面も横、斜位の刷毛目調整となる。底部は少し尖り気味となる。3 は口唇部が内、外面に肥厚する形態である。上面は平坦で中央部が窪む。胴部は最大径を中位にとり、より球形に近くなる。外面の調整は胴部上半は横、斜位で下半、底部にも一部横位の刷毛目調整が観察できる。2 は1、6ほど口唇部が肥厚しなく、上端面が強く外傾する。球形に近い胴部で中位に最大径をとり、外面は肩部に横位の刷毛目、その下は斜位、下半部は縦の刷毛目となる。肩部には二箇所刺突文が見られる。10､11は小型の甕で球形の胴部となる。口縁部は僅かな肥厚に留まり、口唇端部は角張るか丸くなる。胴部上半部は横位の刷毛目で、他は縦位の刷毛目調整である。17～22は口縁部がほとんど内湾しない甕である。胴部の調整、口縁部の形態は前述した甕類とほぼ同様である。23､24は口縁部が直線的に開き口唇部が丸味をもつか尖り気味となる形態である。24は球形に近い胴部で、外面の調整は斜位の刷毛目調整で、内面は底部近くが下から上へ、胴部上半は横方向の篦削りで口唇部は尖る。25～34は肩部に模様を施す甕である。25～27は大きな波状沈線を施す。沈線部分から下半に横位、斜位の刷毛目調整である。28は沈線の波状が小さい小型の甕で胴部外面は間隔を置いた横位の刷毛目調整を行なう。29はゆるやかな沈線が半周している。30～32は櫛状工具による複数の沈線を施す。33は棒状工具による刺突文を施す。36～48は胴部外面に叩きのある甕の一群である。36は胴部上半に有軸羽状文の叩き痕を明瞭に留める甕である。最大径を胴部上半にとり、胴部上半は叩き具の幅2.6cm前後の叩きが残り、下半部は細かい刷毛目調整を行なう。底部は僅かに平坦面がある丸味をもつ平底である。器壁は内面篦削りにより極めて薄く造られ、口縁部は直線的に開き、端部は丸く上に引き出され丸く収まる。37は内面を篦削りを行なわない甕で倒卵形の胴部に外反して開く口縁部となる。口唇部端は僅かに肥厚し丸く収まる。底部はいくらか丸味をもつ平底である。胴部外面には縦位の叩きが明瞭に残り、内面には撫で消すが微かに叩き痕が残る。38､39は長胴で外面に叩きの後一部に刷毛目調整があり、内面に篦削りを施す。40～42は球形に近い胴部で外面に叩きを施し、一部その上から刷毛目調整を行なっている。41の内面には粗い刷毛目が残る。42は底部が尖り気味となり、口縁部は外反し口唇部が肥厚する。43～44は胴部上半に叩きが残り、下半は刷毛目調整で叩きが消えてしまっている。47は胴部外面の一部に叩きの痕跡が残り、刷毛目調整でその跡が消されている。口縁部は外側に面を造り中央部を窪ませ上に摘み上げたような状態である。内面は篦削りであるが刷毛目が観察できる。48は長胴となるが調整は同様であるが刷毛目は見られない。45は底部に焼成前の穿孔を行なった小型の甑である。胴部外面は横位の叩きの後、縦位の刷毛目調整を行なう。底部の穿孔は中心部より一方へ寄っている。49は脚付き甕である。胴部上半に最大径をもち、口縁部は外反して開く。胴部外面の上半部に叩き、下半は刷毛目調整で、内面は頸部近くまで篦削りを施し、頸部の篦削りしていないところと段差がつく。51､52は外面が縦位の刷毛目調整で、52の底部は丸味をもつ平底である。53～58は長い胴部から外反して開く口縁部となり、器面調整が内外面とも刷毛目調整の一群である。全体に粗い刷毛目調整で口縁部を撫で消すものもある。55は内面に粘土の接合痕が残る。59は脚付きの鉢で内外面とも研磨を施す。口縁部と脚部に粘土の付着が認められる。60～121は壷である。60～62は倒卵形の胴部から大きく外反する口縁部となる。胴部外面は縦位の後上半部に横位の刷毛目調整を行なう。内面は篦削りを施す。61は肩部に波状沈線、62には肩部に櫛状工具による波状沈線と頸部内面に浅い刺突文を等間隔に施している。69は球形の胴部に朝顔状に開く口縁部となる。外面は刷毛目調整の後に研磨、内面は部分的に刷毛目調整、篦削り、研磨を施す。71､72は最大径を胴部下半にとり、口縁部が直線的に開く。71は胴部外面は刷毛目の後研磨を施し、内面は篦削りである。72は内外面とも刷毛目調整であるが、内底面には未貫通の孔を焼成前に設け、肩部内面には整形時の指跡

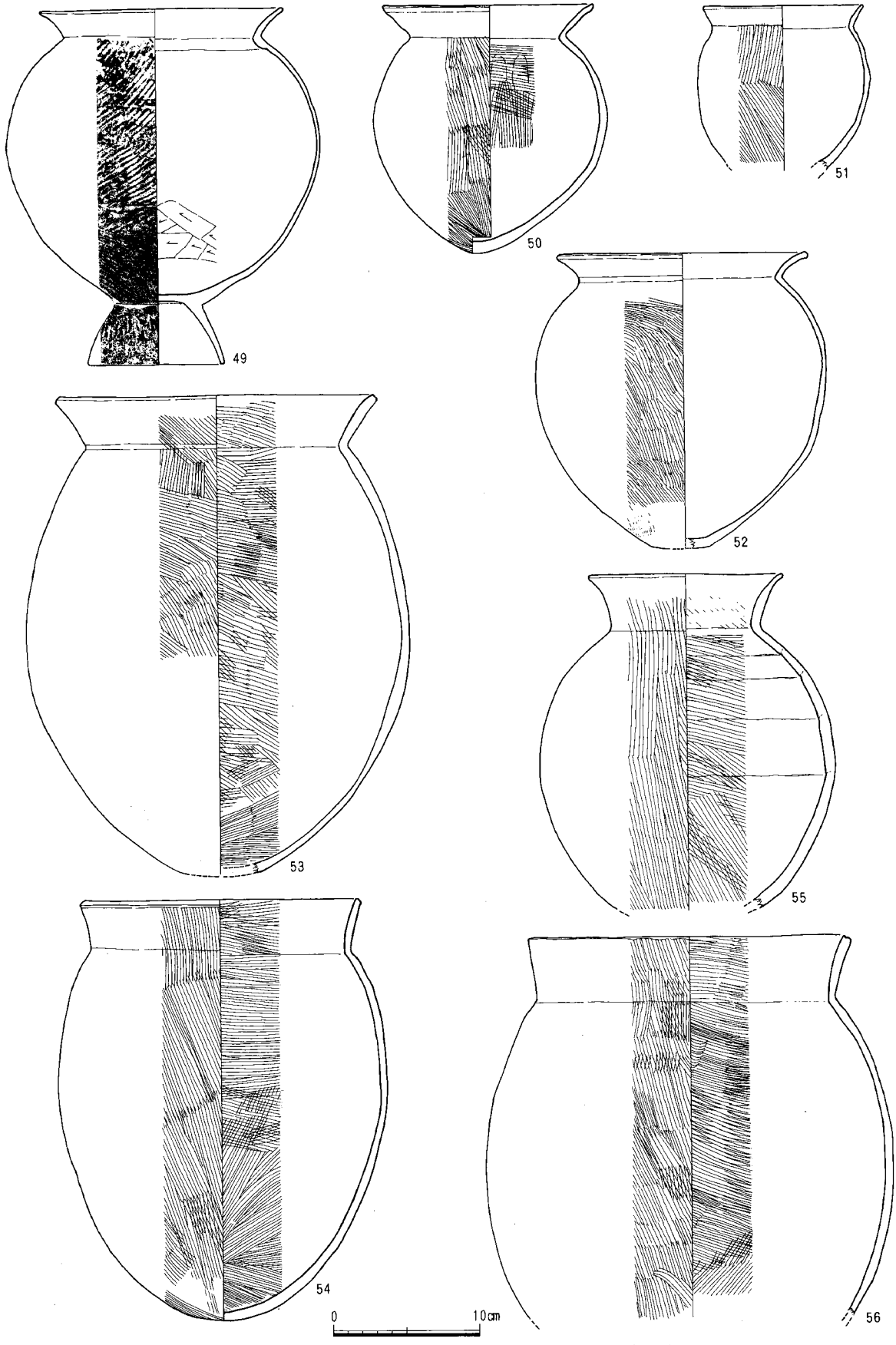


Fig.88　1号溝状遺構西側出土土器実測図7（1/4）

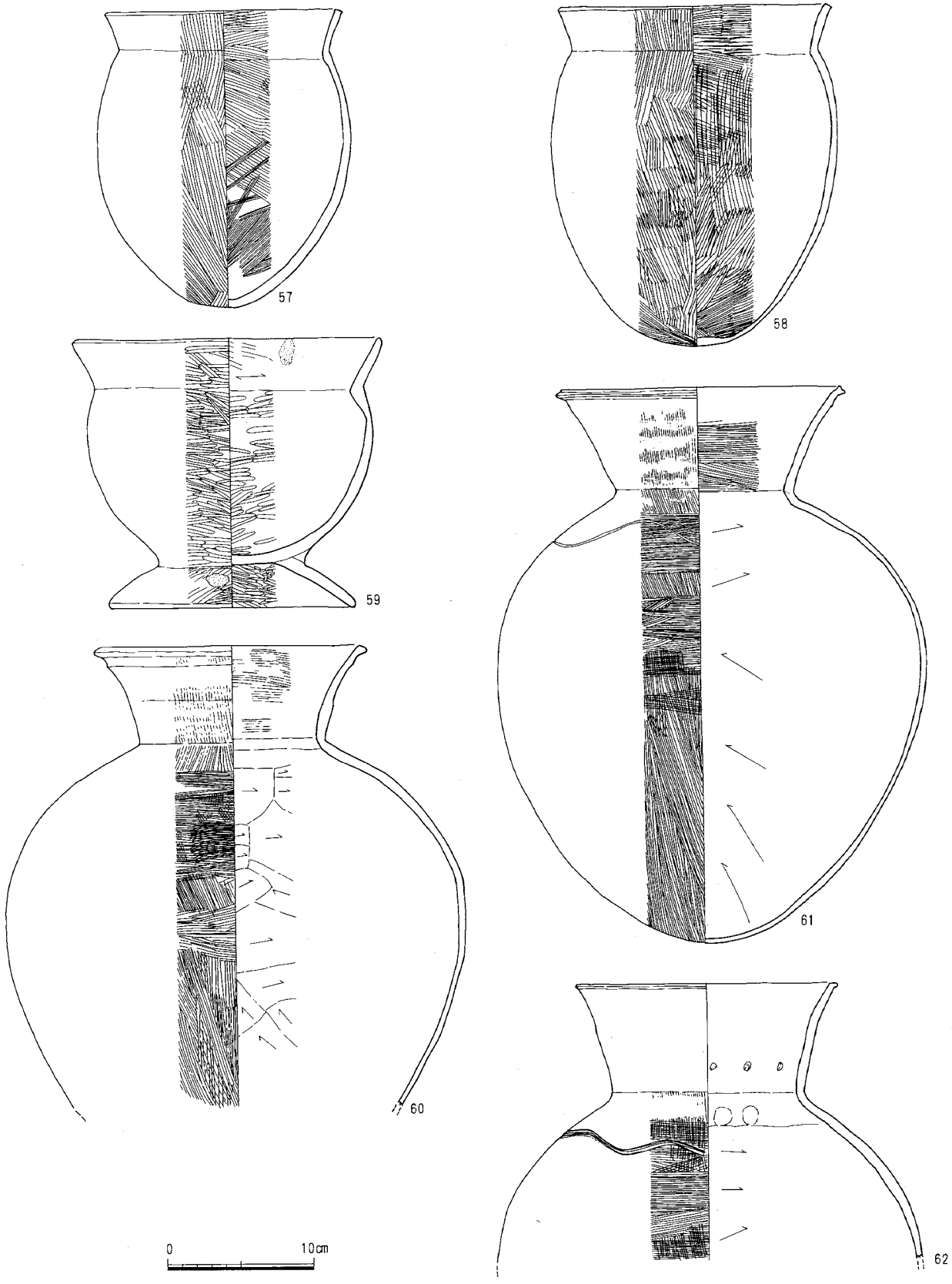


Fig.89　1号溝状遺構西側出土土器実測図8（1/4）

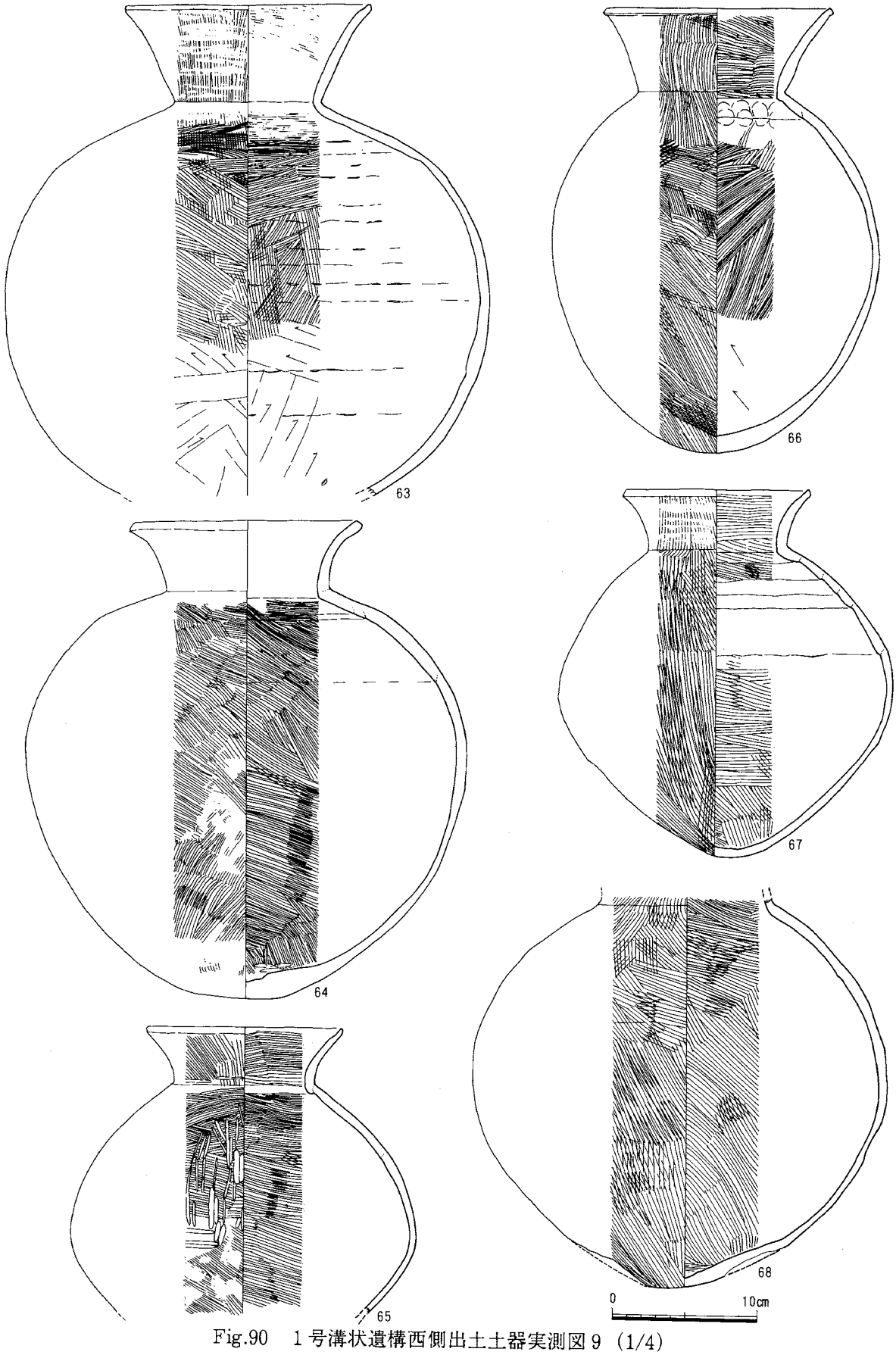


Fig.90　1号溝状遺構西側出土土器実測図9（1/4）

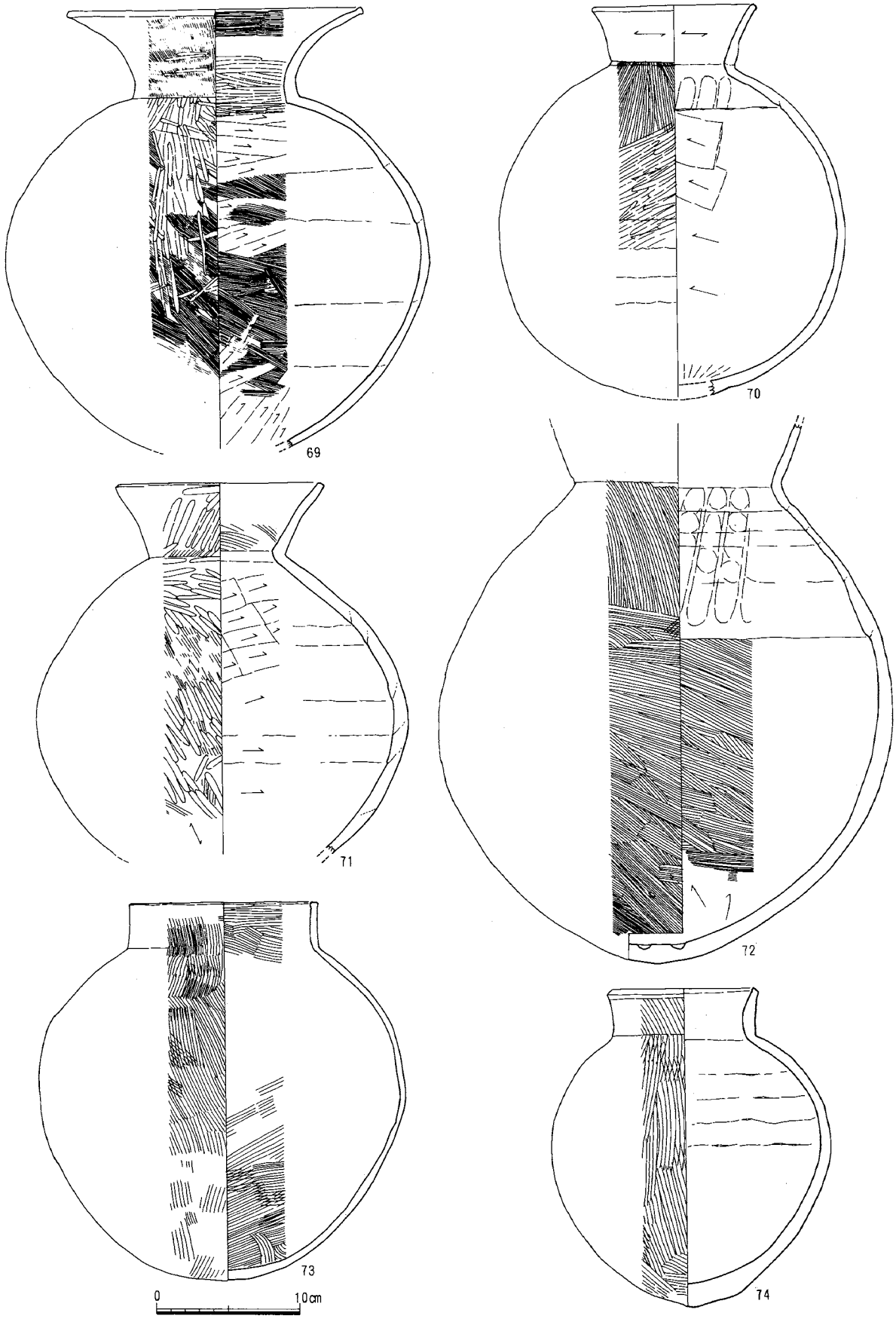


Fig.91　1号溝状遺構西側出土土器実測図10（1/4）

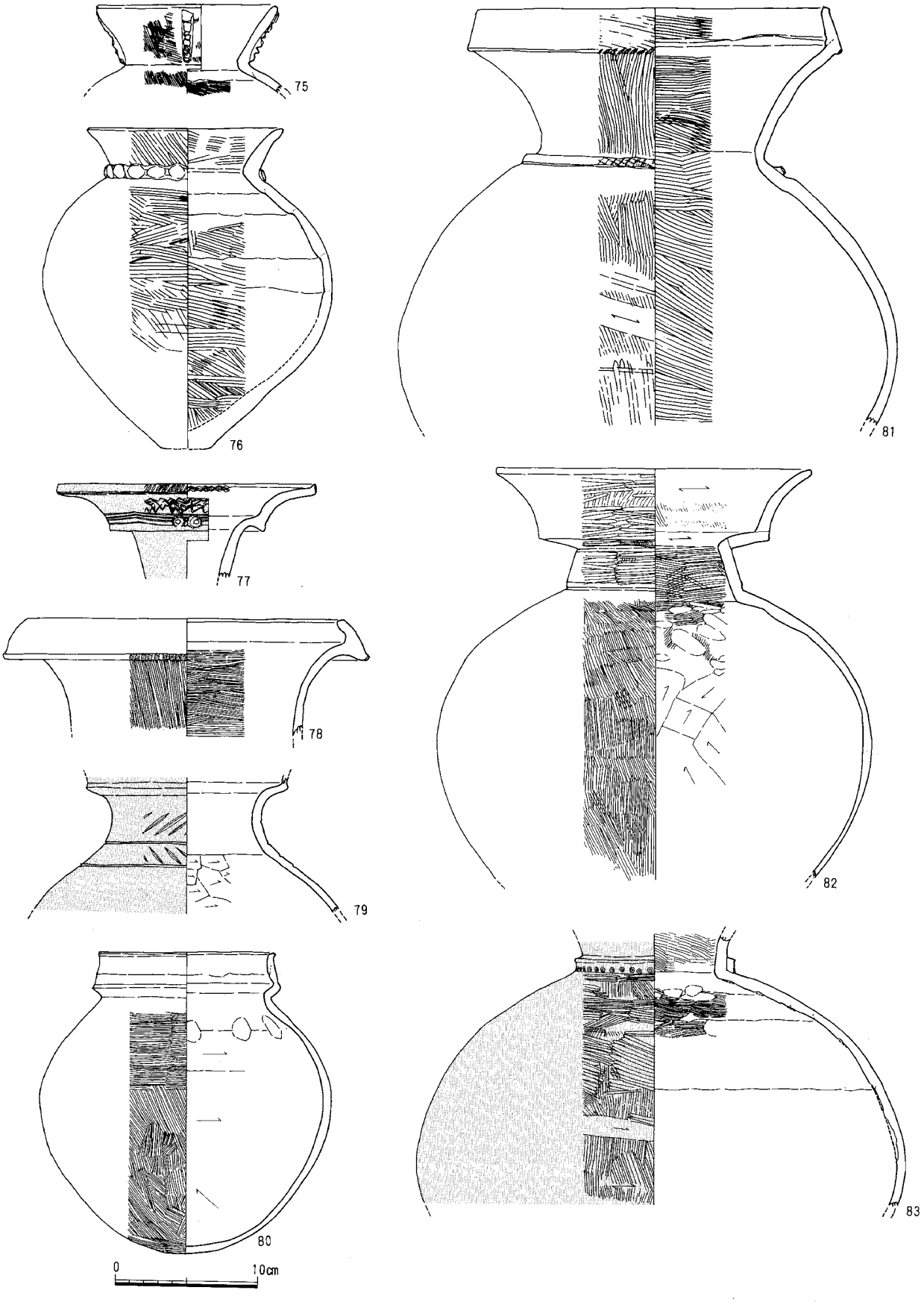


Fig.92　1号溝状遺構西側出土土器実測図11（1/4）

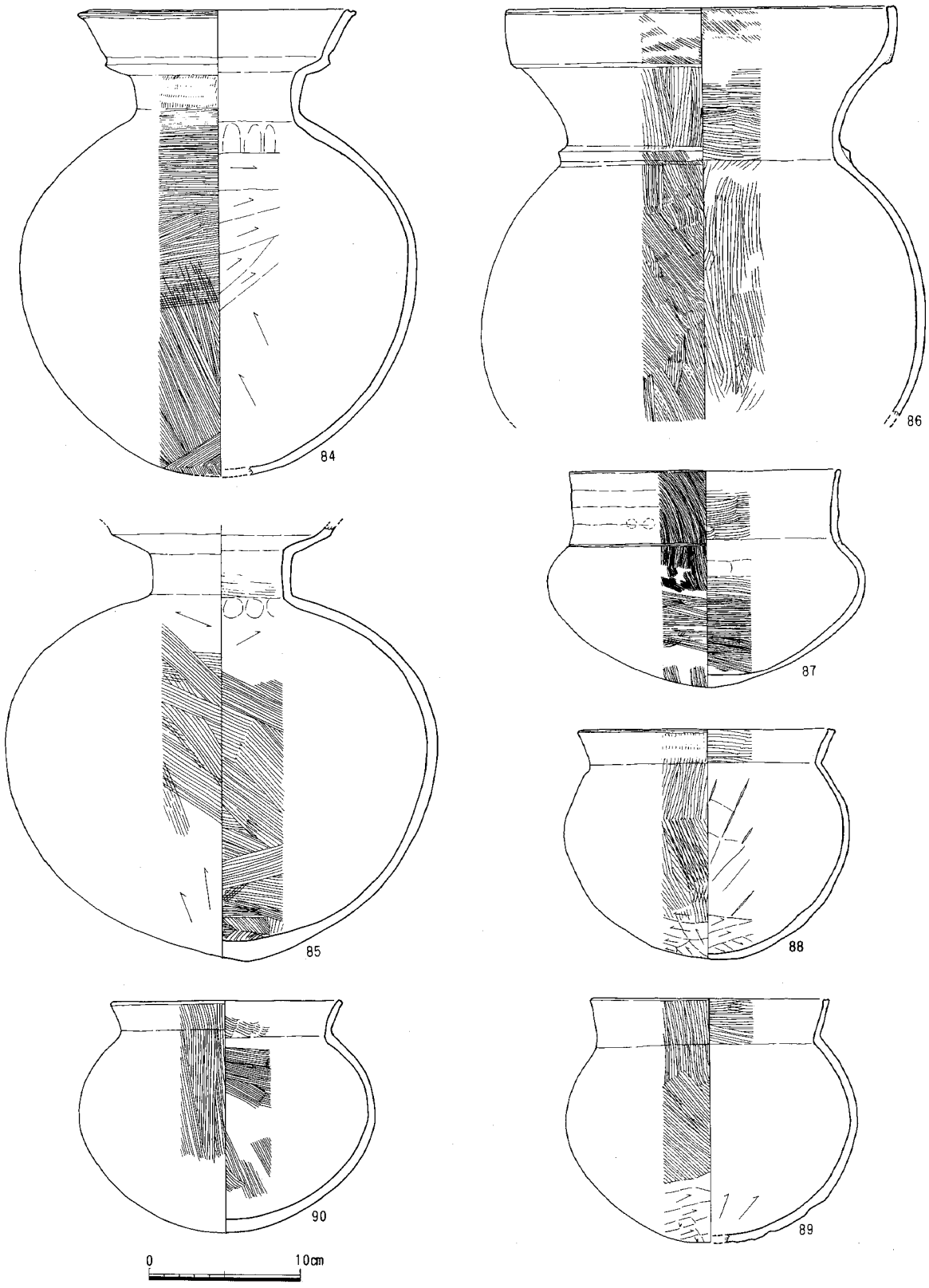


Fig.93　1号溝状遺構西側出土土器実測図12（1/4）

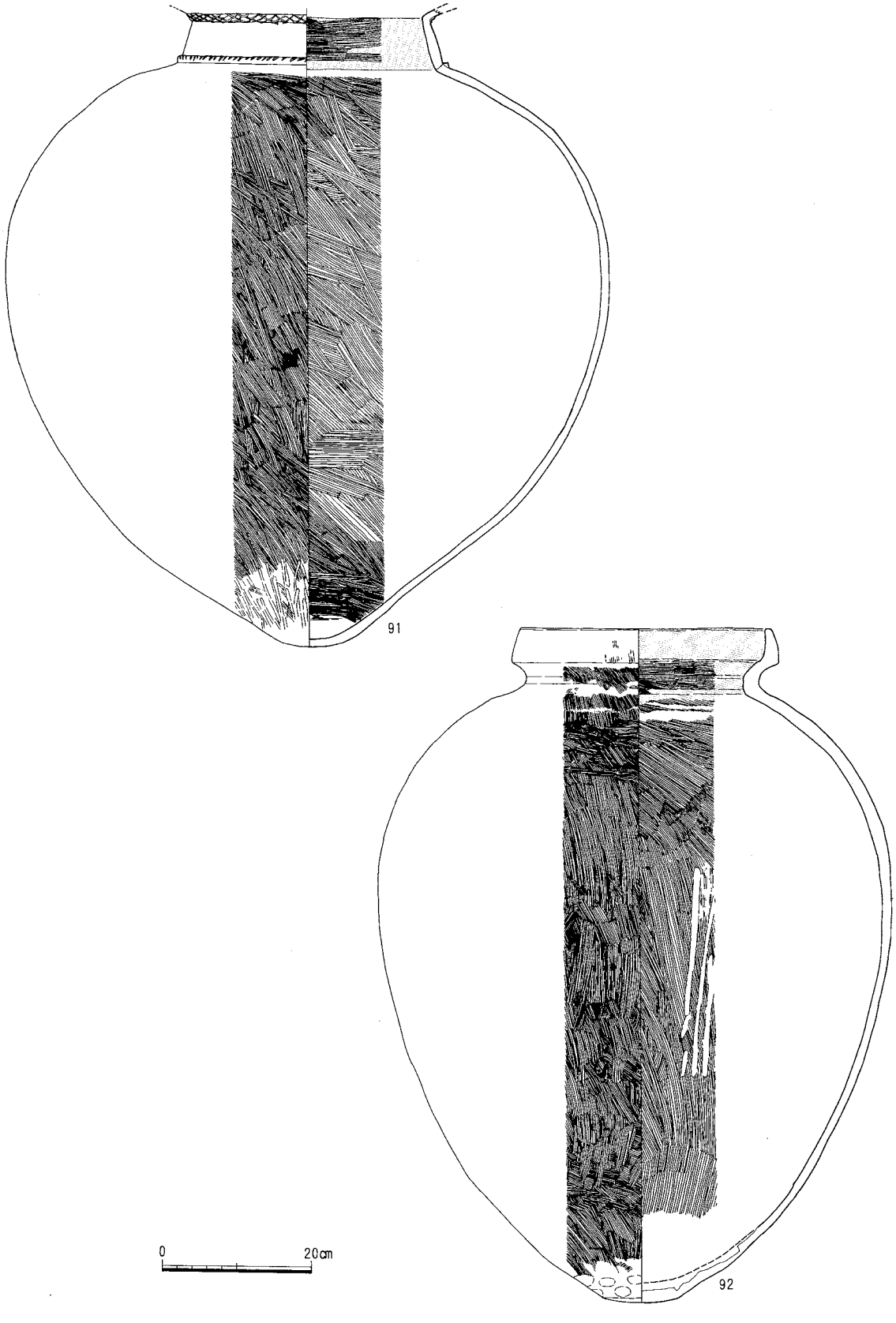


Fig.94　1号溝状遺構西側出土土器実測図13（1/8）

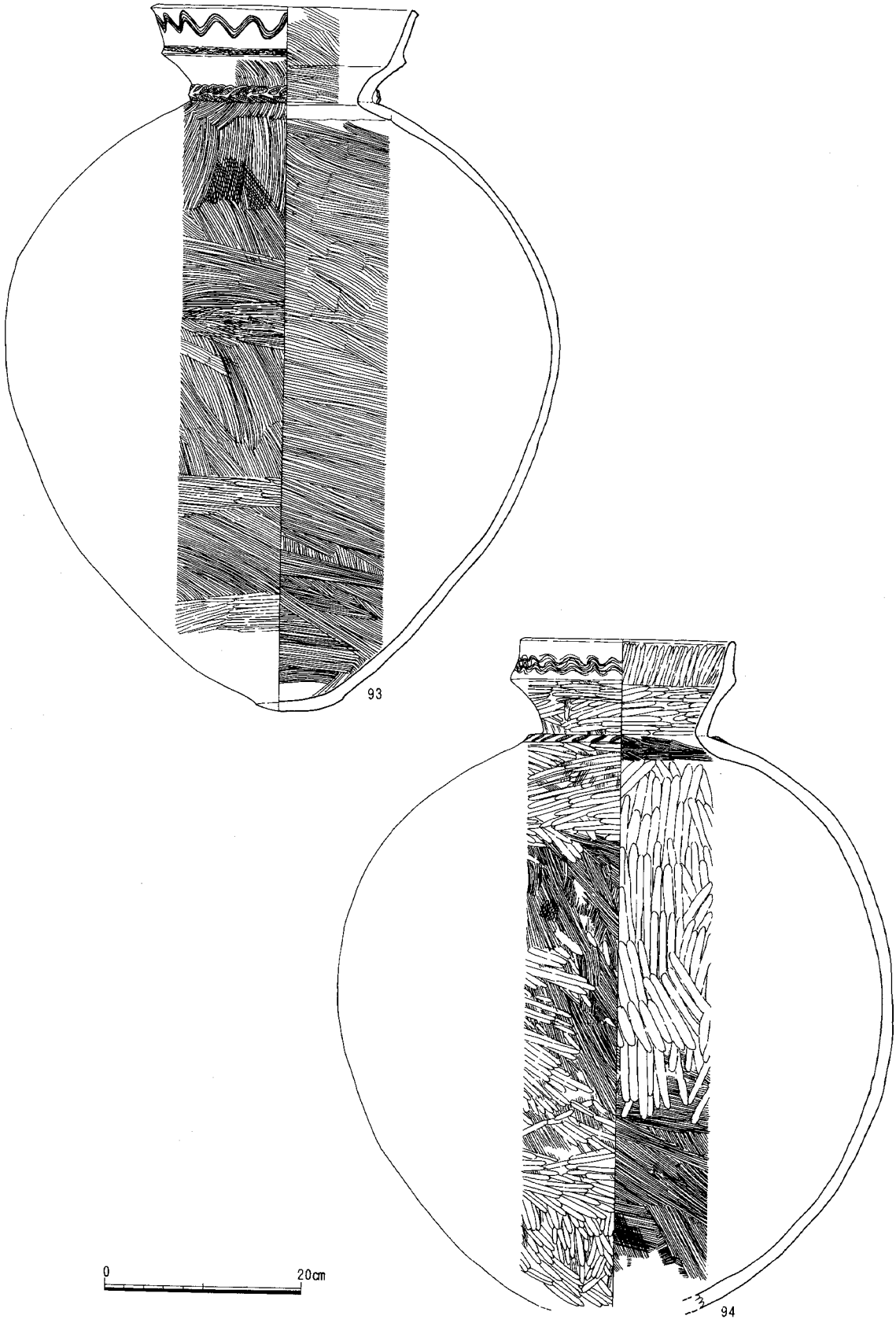


Fig.95　1号溝状遺構西側出土土器実測図14（1/6）

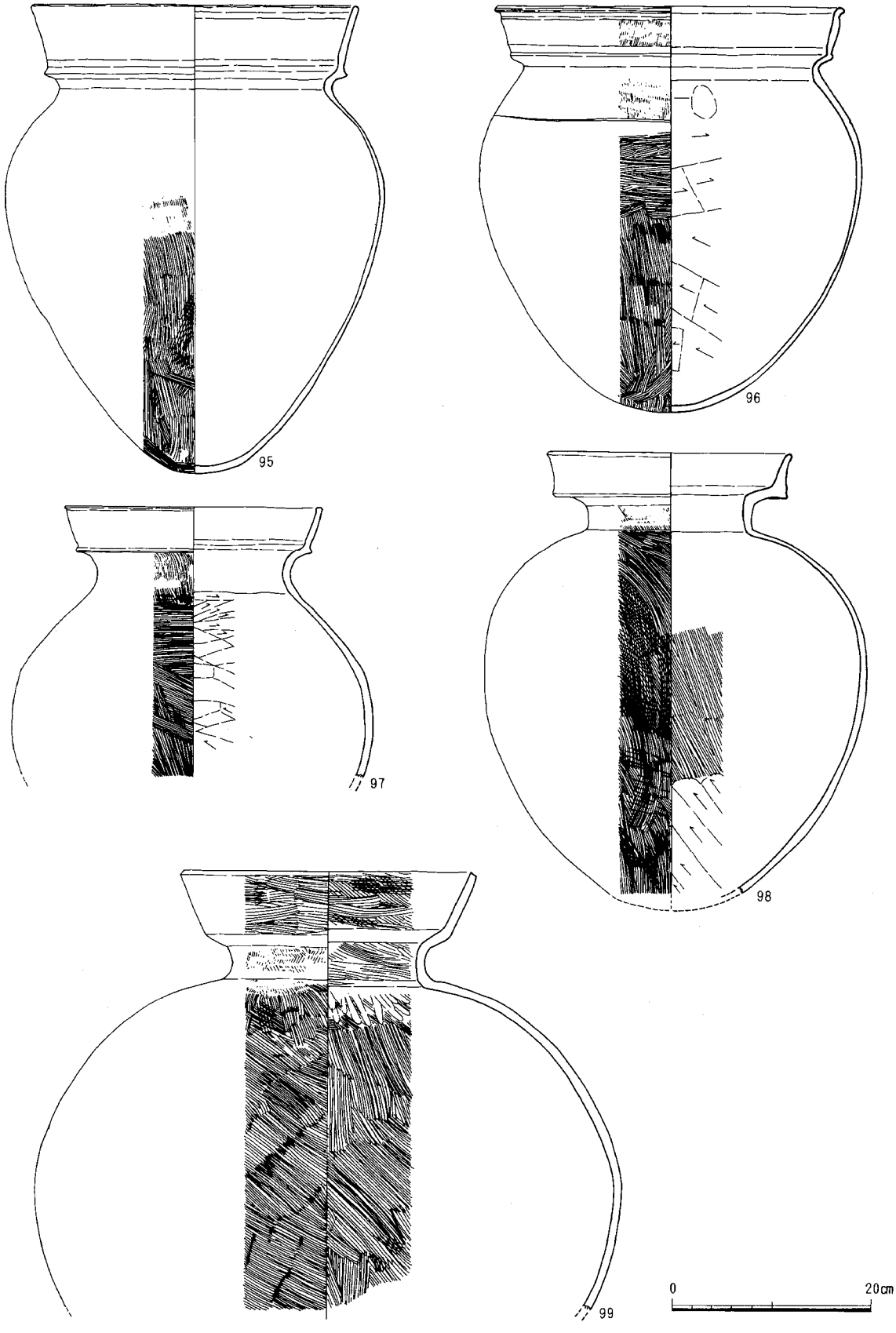


Fig.96　1号溝状遺構西側出土土器実測図15（1/6）

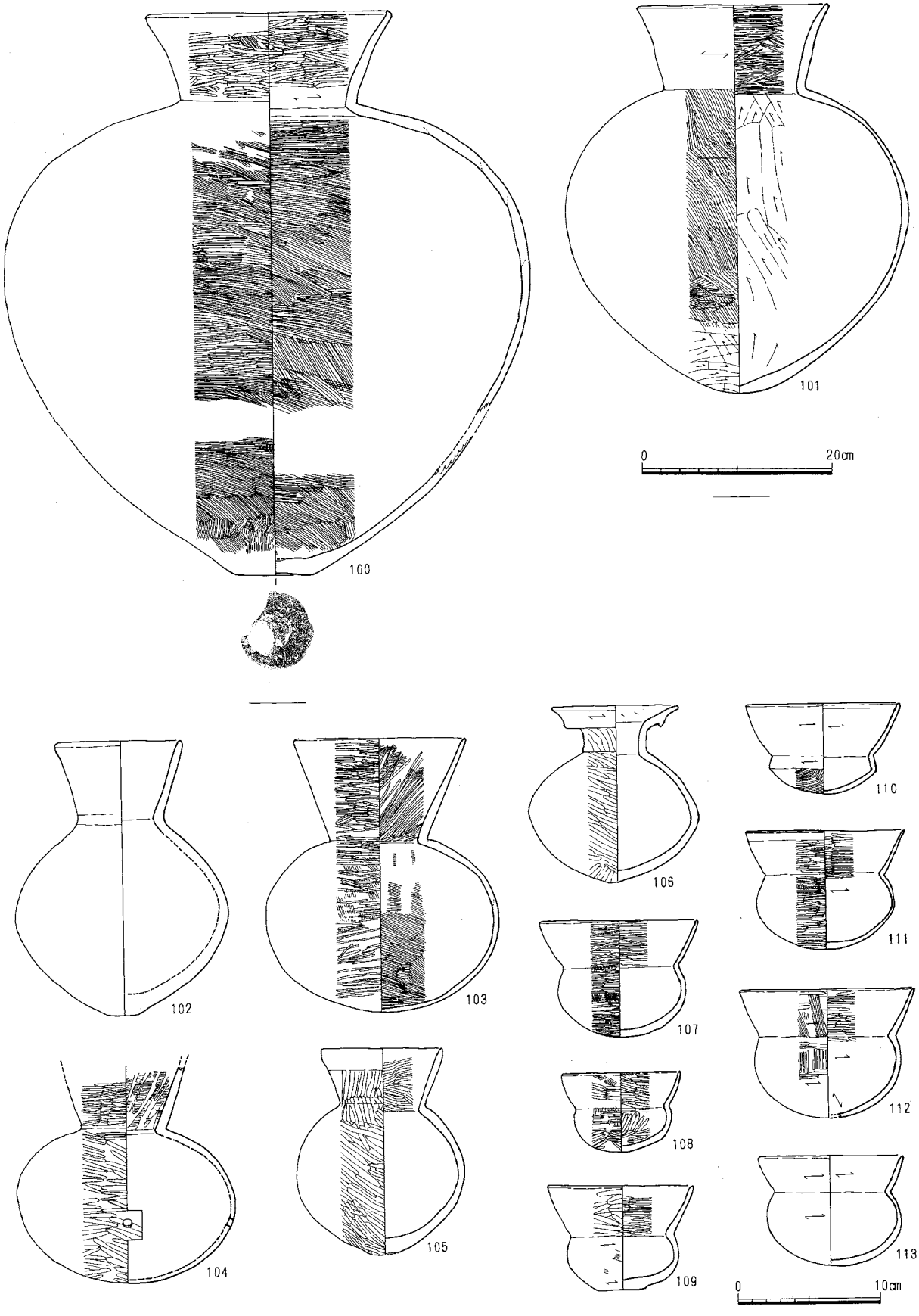


Fig.97　1号溝状遺構西側出土土器実測図16（1/4,1/6）

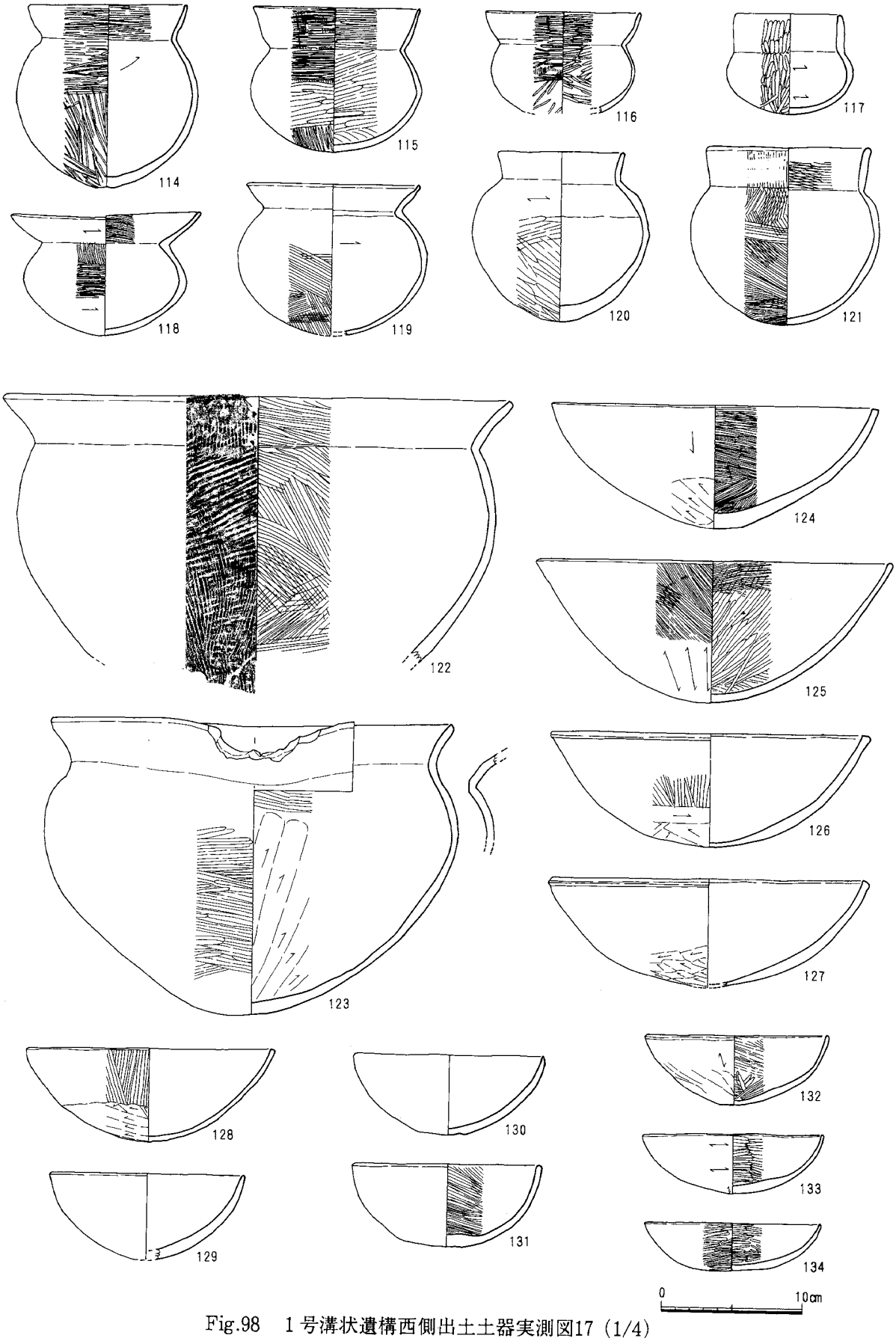


Fig.98　1号溝状遺構西側出土土器実測図17（1/4）

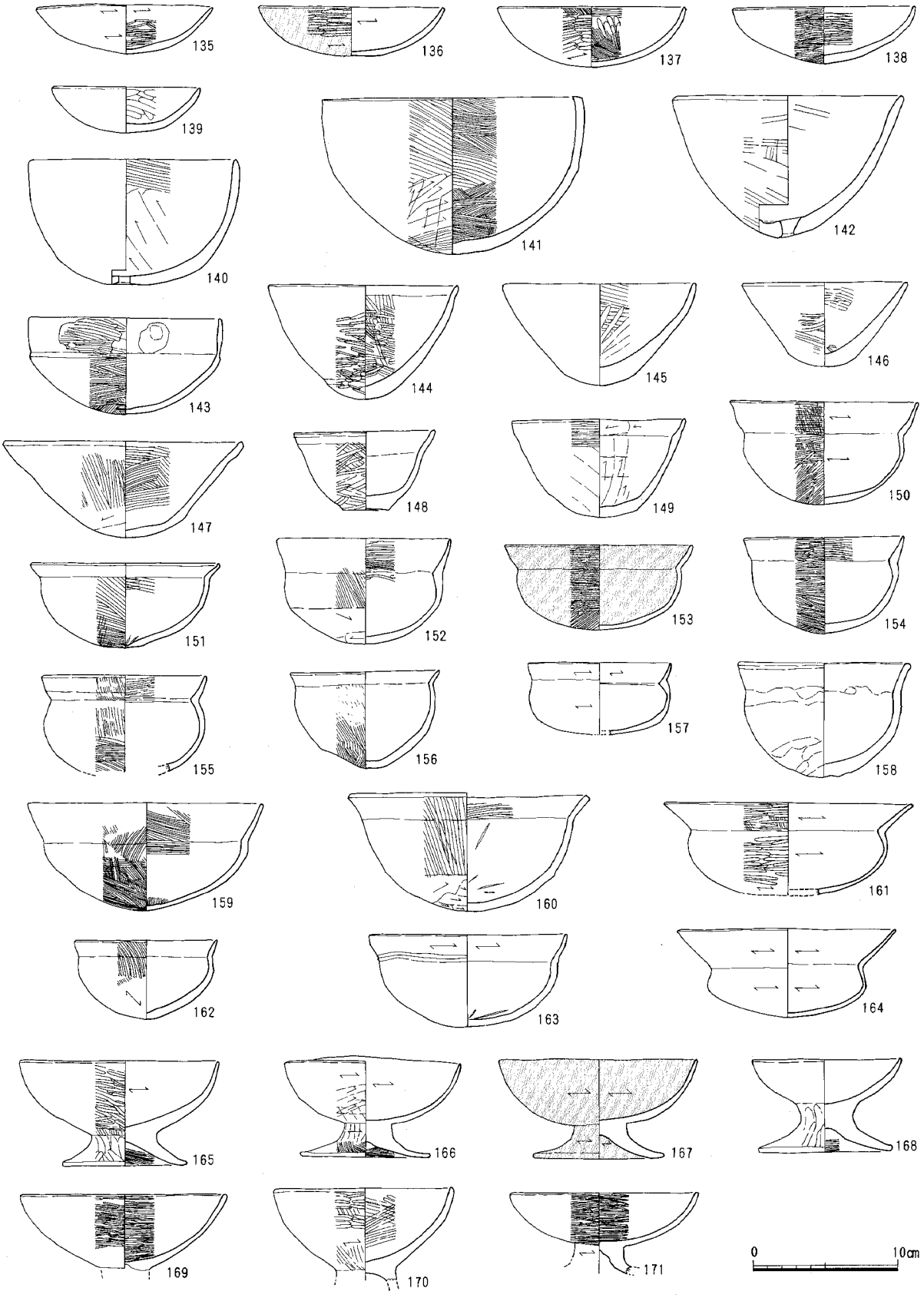


Fig.99　1号溝状遺構西側出土土器実測図18（1/4）

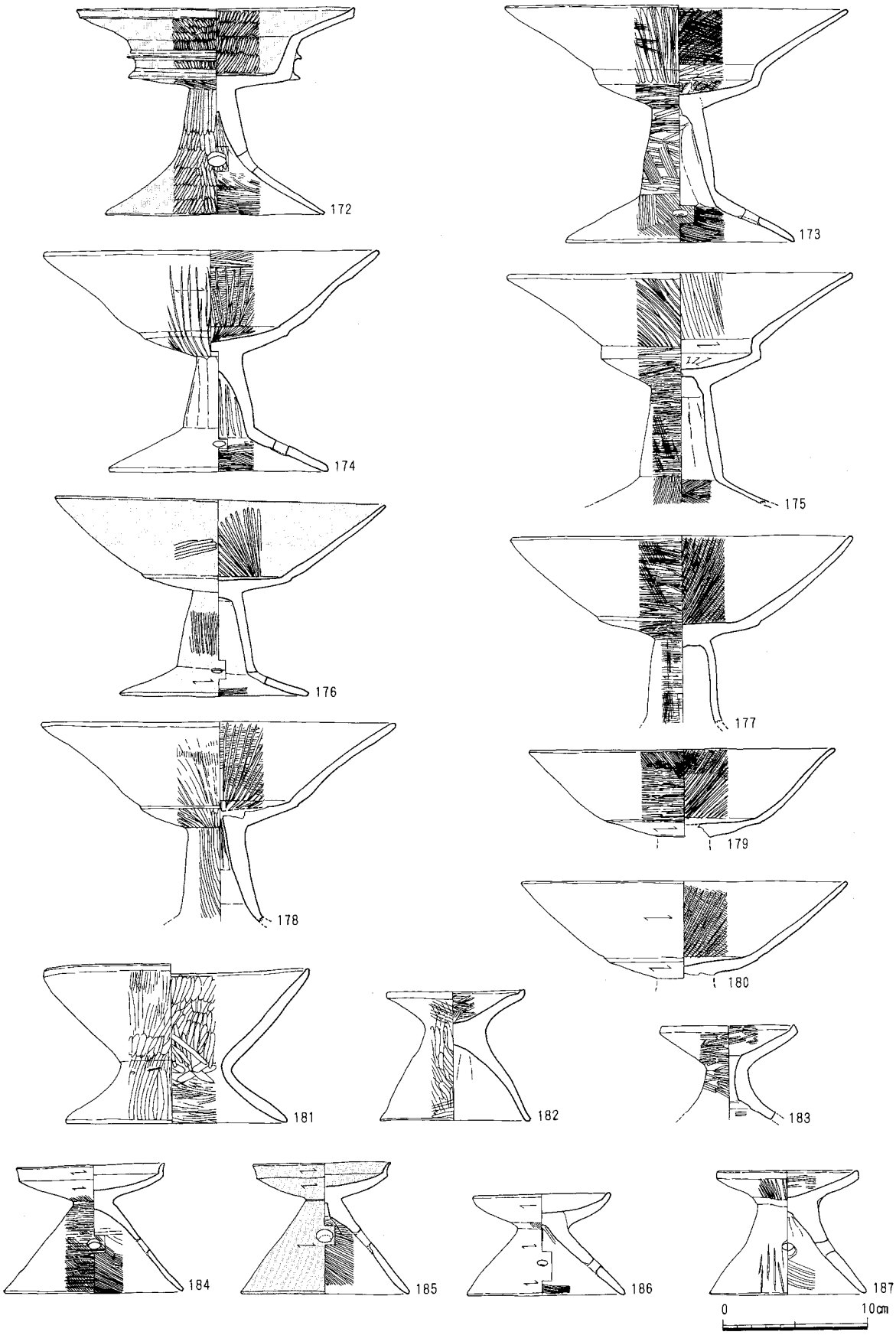


Fig.100　1号溝状遺構西側出土土器実測図19（1/4）

が口縁に向かって延びている。75は装飾を施した粘土紐を口縁部外面に縦方向に貼付た口縁部破片である。口縁下から頸部まで幅5～7㎜の粘土紐を貼り付け、その頂部に口縁部と平行に刻み目を入れている。76は口縁部の一部を欠損するがほぼ完形品の壷で丸味をもつ平底で頸部に押圧文を施す粘土紐を貼り付け、そこから外反して口縁部は開き端部は丸く収まる。器壁は厚く、内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。78は複合口縁の壷で、弥生時代終末の土器である。袋状部の外面は角張り、櫛状工具により刻目を施す。77､79～99は二重口縁の壷である。77は外面から口縁部内面の文様まで赤色顔料を塗布した壷である。口縁部の屈曲部に三条の沈線を巡らし、その上に円紋を貼付、さらに三条の連続三角文を篦描きしている。口縁部の外面に斜めの刻目を入れ、内面に四条の連続三角文を篦描き

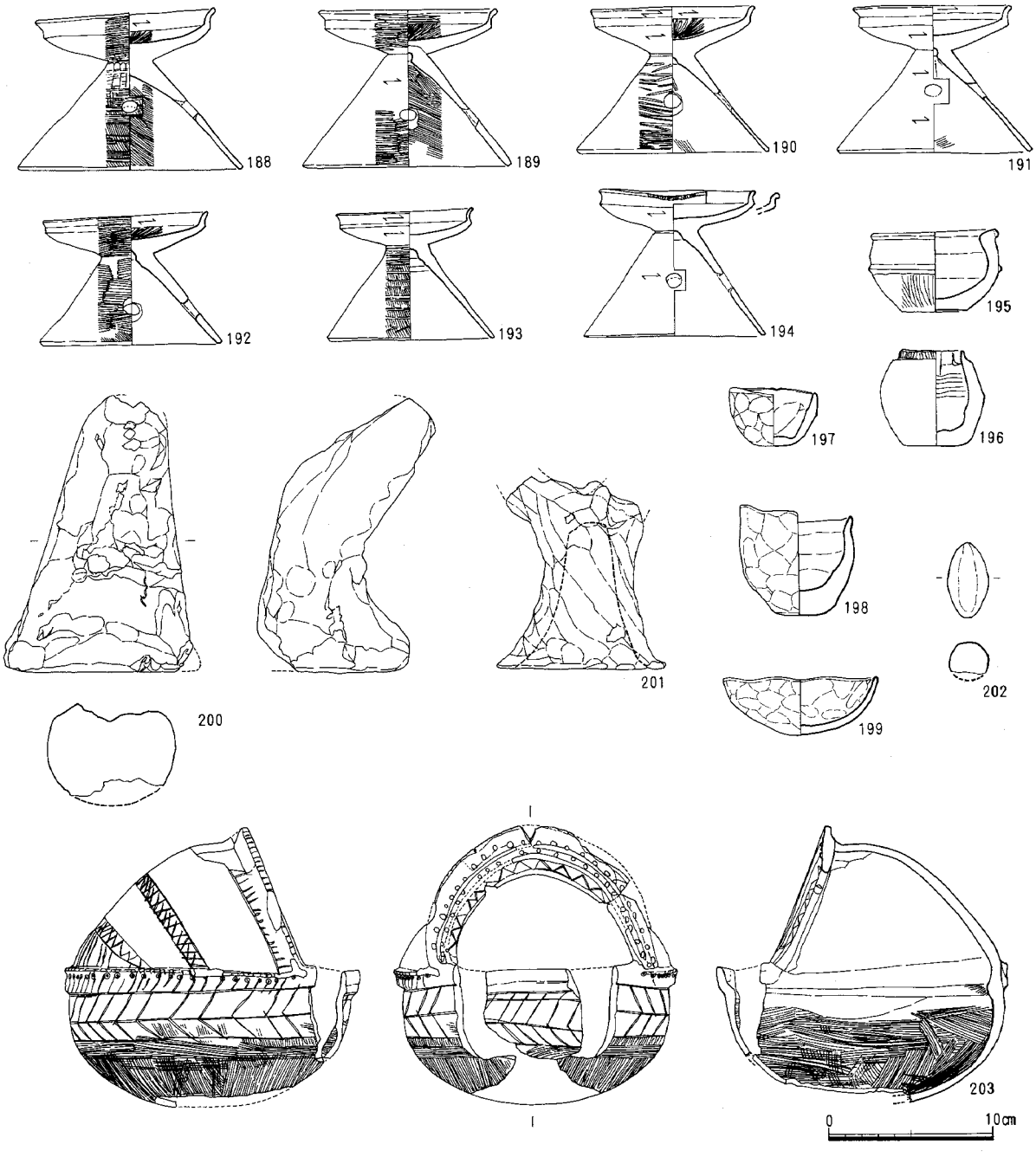


Fig.101　1号溝状遺構西側出土土器実測図20（1/4）

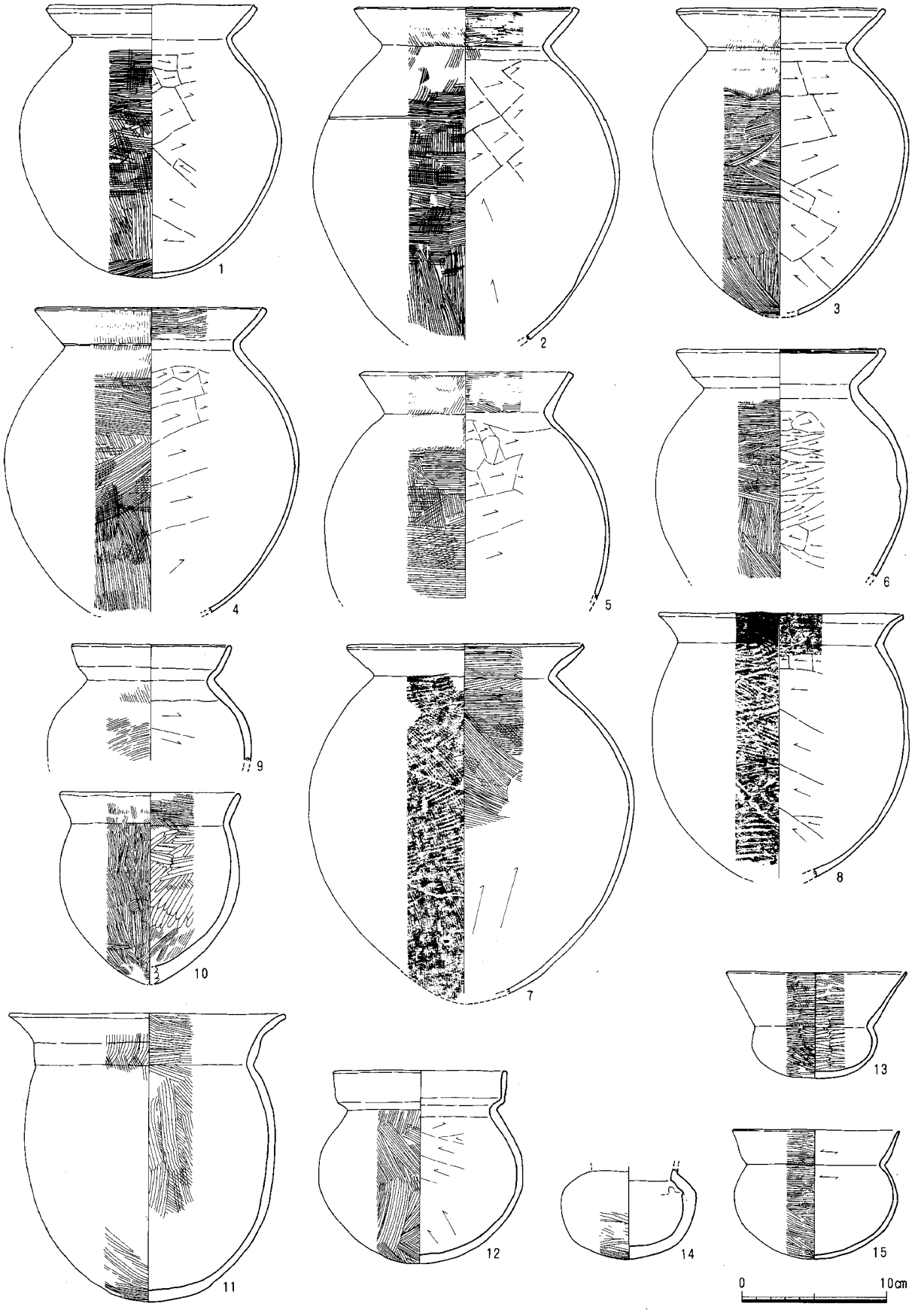


Fig.102　1号溝状遺構東側出土土器実測図21（1/4）

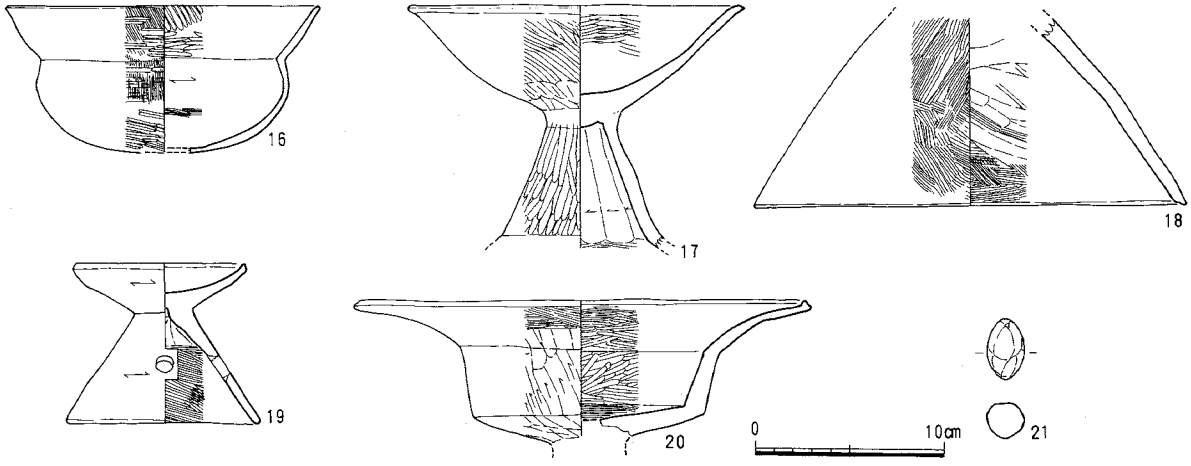


Fig.103　1号溝状遺構東側出土土器実測図22（1/4）

する。79も赤色顔料を塗布した壷で肩、頸部に沈線を巡らし、沈線の間とその上に櫛状工具の刺突文を施す。80は頸部が短く、口縁部は直線的に立上り、僅かに内傾する小型の壷で外面の胴部上半は横位、下半は縦位の刷毛目調整である。内面は篦削りである。81は頸部に斜格子の突帯を貼付、口縁部が大きく開き、上端を屈曲して内傾させ、屈曲部に78と同様な刻みを施す。83は頸部をすぼませ突帯を貼付け、その上に竹管文を押捺する。突帯は横と上を押さえ四角な断面を呈する。82は球形の胴部に頸部が内傾して立上り水平近くになり、稜をもって口縁部は大きく拡がる。84は頸部の立上りが外傾し、屈曲部もなだらかで口縁部との境を窪ませて、口縁部も直線的に外に開き、口唇部を僅かに肥厚させ上面の中央部を窪ませる。85は頸部を直立させ底部が尖り気味となる。内外面とも刷毛目調整で一部に篦削りが見られる。86は頸部がすぼまらず、突帯を巡らし、口縁部は内湾して収まる。87～89は小型の短頸壷である。87は偏球形の胴部で底部は尖り、ゆるやかに外反する口縁部となる。内外面とも刷毛目調整である。88､89の外底部は篦削りし、内面も口縁部を除き篦削りである。91～94は大型の壷である。91は最大径を胴部上半におき、底部は尖る。頸部は内傾し、両端に刻みを施した突帯をもつ。下の突帯は三角形で、櫛状工具により斜めの刻み目、上は帯状で斜格子で、刻み目は最初右上がり、その後左上がりの線刻を施す。頸部までの内面には黒色顔料が塗布される。92は倒卵形の胴部から頸部は短く屈曲し口縁部は内湾する。底部は平底気味である。口縁部内面には黒色顔料を塗布する。93は頸部は斜めに開き屈曲し、口縁部は直線的に開く。頸部の帯状突帯には櫛状工具により綾杉状の文様、屈曲部には四条の連続山形紋、口縁部下には櫛描き波状文を描く。内外面とも刷毛目調整であるが、胴部の一部に叩きの跡や研磨が見られる。94は93と同様な形態を示すが胴部が球形に近くなり、口縁部の立上りが垂直になる。頸部の刻みは斜め、口縁下の波状文は浅く不規則となる。95､96は口径が胴部最大径に近くなる形態である。95は胴部上半に最大径をとり、尖り気味となる。96は丸い胴部で口縁部は僅かに外傾して立上り、口唇部は外反する。胴部には沈線を巡らす。98、99は頸部の径が小さくなる形態である。98の頸部は垂直に立上り、上が水平近くなり口縁部が外反して垂直に立ち上がる。99は頸部と口縁部の境がなだらかになる。100は上げ底の底部から胴部が大きく膨らみ、頸部がすぼまり口縁部が直線的に開く中型の壷である。胴部は内外面とも刷毛目調整で口縁部は研磨を行なう。102～121は小型の壷である。102は弥生時代終末期の土器であろう。丸底気味の平底の底部から算盤玉状の胴部となり、口縁部が直線的に長く延びる。調整は摩耗のため不明である。105もほぼ同様な形態で、外面は研磨、口縁部内面には刷毛目が残る。104は胴部下半に円孔を穿ち、甑であろう。内外面を研磨するが口縁内面には刷毛目が残る。106は小型の二重口縁の壷、107～116は小

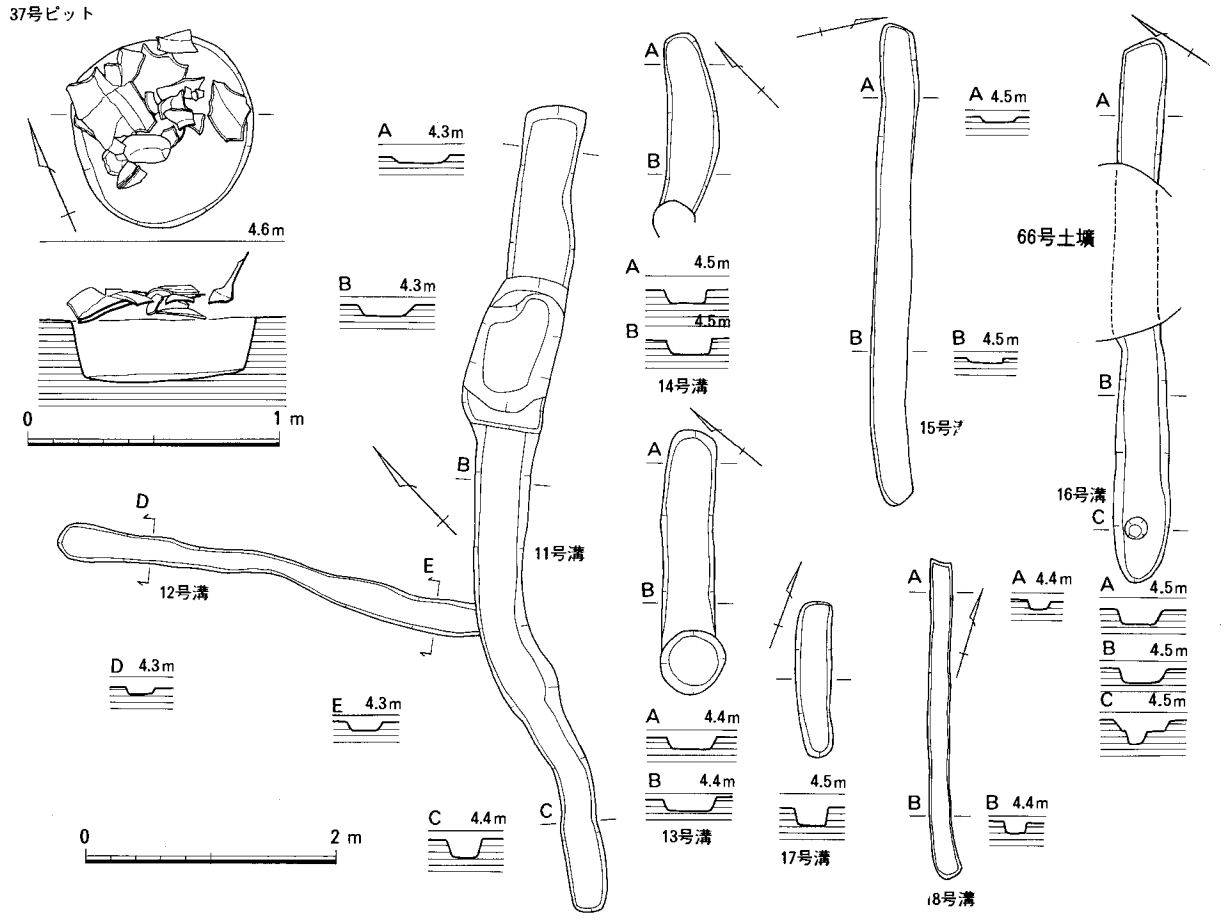


Fig.104　ピット・溝状遺構実測図（1/30,1/60）

型丸底壷である。122､123は大型の鉢、124～171は鉢、椀、脚付き椀である。他に高坏、器台、手捏土器等がある。200､201は土製支脚である。200は円錐状の頭部を内傾させたもので、整形が粗く外面には指跡が残る。201は中空の脚で先端を欠損するが三又に分岐する支部をもつ形態である。203は手焙形土器である。上面には篦描き、正面は半円状の平坦面を形成し、その上に粘土を貼付けて円文や曲線の模様や、連続三角文を篦描きしている。胴部下半は有軸羽状文の下を横方向の、その下を縦方向の粗い刷毛目調整を施す。Fig.102,103は東側のC－9区周辺から出土した土器群である。

11～18号溝状遺構（Fig.104）

いずれも小規模な遺構で調査区全体に分布している。11号溝状遺構が最も大きく幅0.46m、長さ6.38m､深さ10cm前後を計る。遺物は土師器の破片が僅かに出土している。12号溝状遺構は11号溝状遺構に切られ、その北西に位置する。幅30cm弱、長さ3.4mの蛇行した遺構である。浅い溝であるが弥生時代中期の遺物が出土している。13～18号溝状遺構は幅20～40cmの1.1～4.3mを測り、直線的に延びる小規模な遺構である。各遺構から少量ではあるが遺物が出土している。13号から弥生時代前期、14号から弥生時代中期の土器が見られる。

出土遺物（Fig.105－1～20,Fig.16）　1 ～4 は12号溝状遺構出土の弥生時代中期前半の甕である。1 の口縁部下には三角突帯を巡らす。外面は刷毛目調整で内面は撫で調整である。4 は壷で外面に暗紋状の研磨が見られる。5～20は13号溝状遺構出土の弥生時代前期前半の土器である。5 ～9 は突帯文土器の甕である。外面は条痕調整で刻目突帯を貼付る。10～13は口唇部に刻み目をもつ甕、11～19は壷、20は鉢の破片である。25～40は弥生時代前期、中期の甕などである。

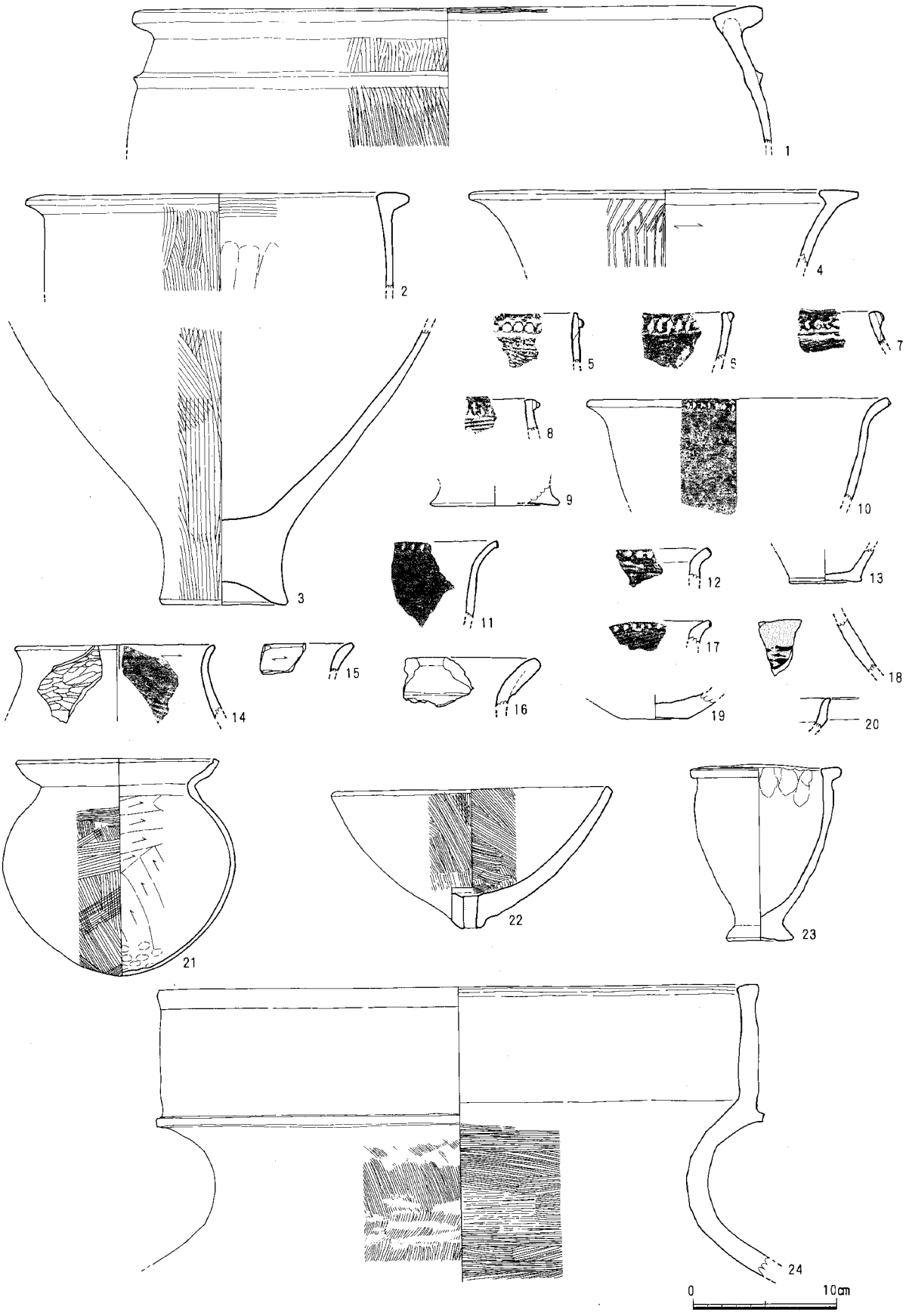


Fig.105　ピット・溝状遺構出土土器実測図（1/4）

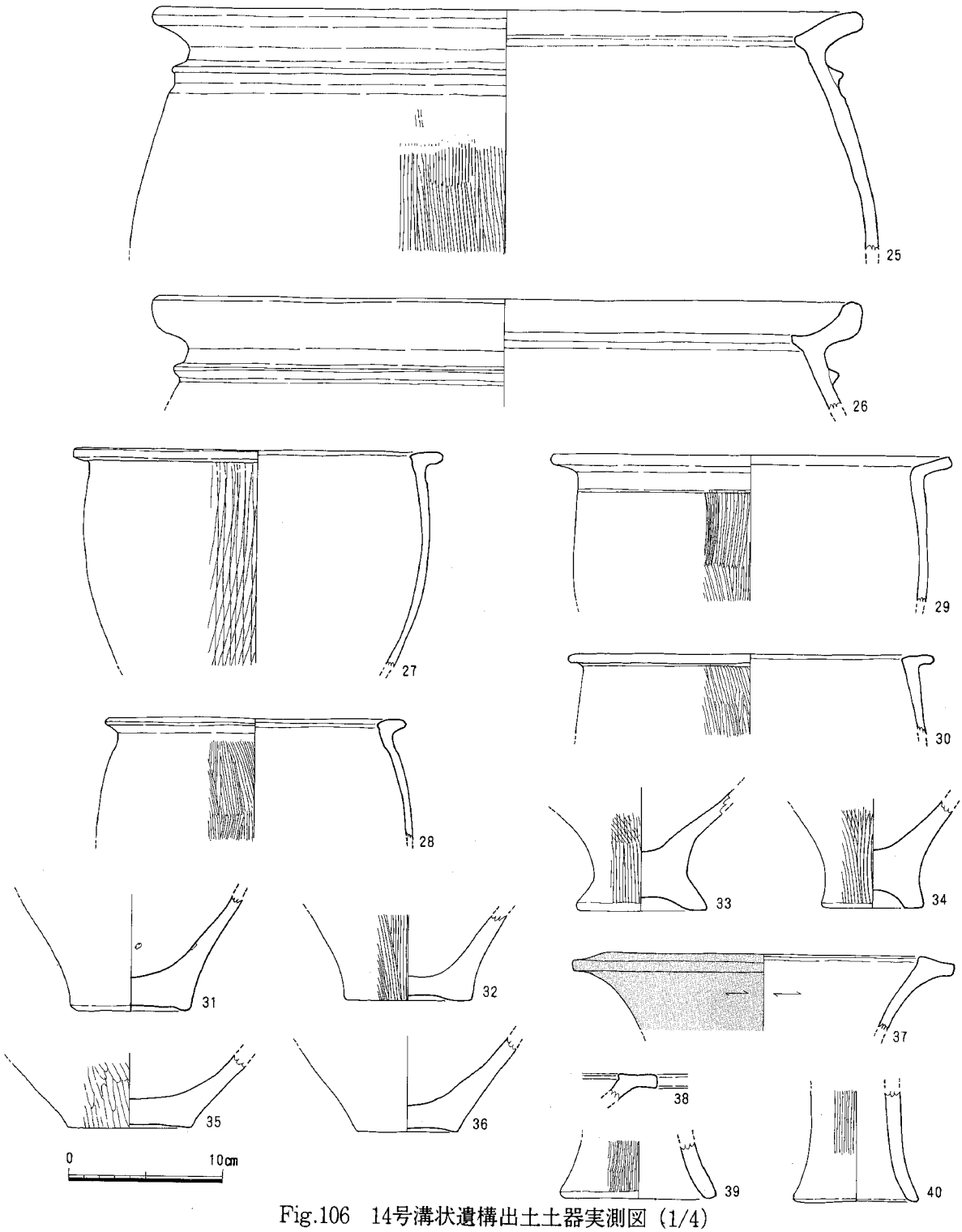


Fig.106　14号溝状遺構出土土器実測図（1/4）

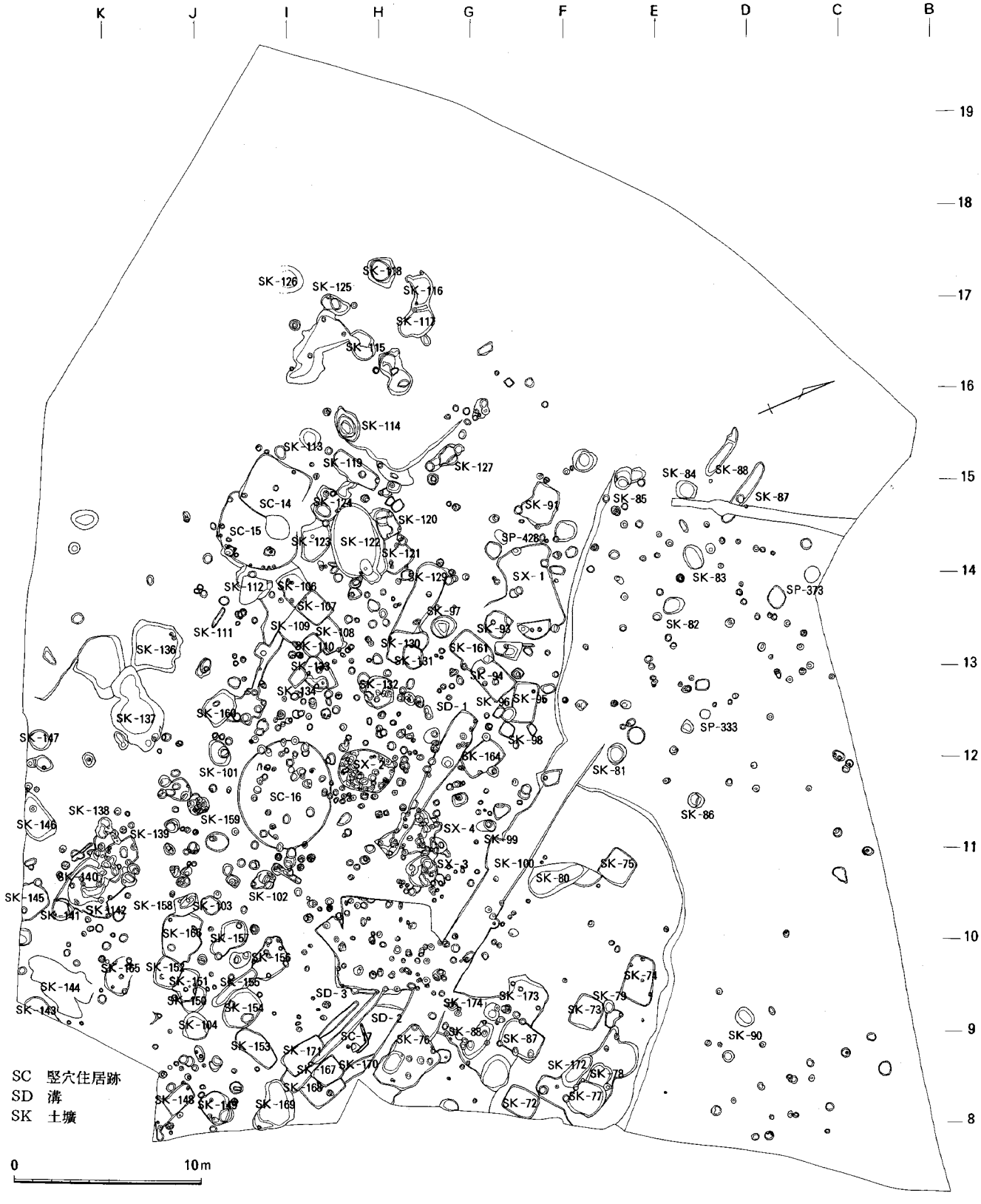


Fig.107　9次調査Ⅱ区Ⅱ面の遺構配置図（1/300）

（４）第９次Ⅱ区Ⅱ面の調査

この面の調査では弥生時代前期から中期の遺構が主体を占め一部Ⅰ面で確認出来なかった遺構も含まれる。土壙102基、竪穴住居跡４基、溝状遺構３条を調査した。以下土器が多いものを主に述べる。

１）土壙の調査

72号土壙(Fig.108,109－1～6)　隅丸長方形で規模は180×146×38cm、土器は弥生時代前期前半（以下明記しない限り弥生時代前期前半である。）の突帯文が出土している。

74号土壙(Fig.108,109－7～10)　隅丸長方形で規模は245×170×11cmを測る。

75号土壙(Fig.108,109－11～22)　調査区の東に位置する隅丸長方形の土壙である。規模は178×163×24cmを測る。壁面は略垂直に掘られ床面は平坦である。出土土器には突帯文土器と如意形口縁の甕が出土している。13は胴部上半で屈曲し内湾して立ち上がり、屈曲部に刻み目突帯を巡らす。外面は条痕調整である。18は口唇部から下がった位置に突帯がある。他に如意状に外反する甕の口唇部に突帯を貼付、外面を刷毛目調整するのもある。14、15は如意状に屈曲する口唇部全体に刻み目を施す。23は壷の胴部の破片で篦描き文をもつ。

76号土壙(Fig.108,109－23～27)　台形状の形態で規模は358×256×40cm、土器は前期前半から後半。

77号土壙(Fig.108,109－28～36)　略隅丸長方形で規模は188×175×30cmを測る。

78号土壙(Fig.110,109－37,38)　隅丸長方形で南側を欠損し、規模は現存長1.18×116×10cmを測る。

79号土壙(Fig.110,109－39,40)　略楕円形で規模は81×57×24cmを測るピット状である。

80号土壙(Fig.110,111－1～5)　長楕円形で規模は335×175×17cmを測る。掘り込みは浅く、断面皿状を呈する。1 は甕の破片で外面は条痕調整で口縁部に突帯を巡らす。3 は小壷で口縁部が僅かに肥厚する。4 は壷の内外面とも研磨を施す。

81号土壙(Fig.110,111－6～12)　略楕円形で規模は118×105×53cmを測る小土壙である。壁面は略垂直で真っ直に立ち上がり、床面は平坦である。前期末の土器が比較的纏まって出土した。6 は胴部上半に刻目三角突帯を巡らせ、内湾する胴部から口縁部が外反し口唇部端に刻みをもつ。外面は刷毛目調整、内面は撫で調整を行なう。7 は胴部の湾曲が少なく、8は突帯が見られない。9 ～11は壷である。9 は肩部に小さな突帯を巡らせ口唇部を肥厚させ外端に刻みをもつ。11は肩部に沈線、頸部に二条の突帯を巡らし、その間に連続山形紋を篦描きする。

83号土壙(Fig.110,111－13～17)　略長楕円形で規模は134×95×52cmの小土壙で前期中ごろである。

84号土壙(Fig.110,111－18～20)　隅丸長方形で規模は115×95×75cmの土壙で前期後半から中期前半。

85号土壙(Fig.110,111－22～24)　略楕円形で規模は135×125×45cmで前期後半から中期初頭。

87号土壙(Fig.110,113－1～7)　隅丸長方形で規模は231×162×20cmを測る。前期前半から後半。

88号土壙(Fig.112,113－8～16)　不整形の細長い土壙で規模は223×105×20cm、床にピットをもつ。

89号土壙(Fig.112,113－17～20)　径約60cm、深さ51cmのピット状遺構である前期後半から中期前半。

90号土壙(Fig.112,113－21,22)　楕円形で規模は101×95×76cmの小土壙で前期後半、中期前半。

91号土壙(Fig.112,113－23～29)　略隅丸長方形で規模は223×183×27cmを測る前期後半の大型土壙である。東壁は内側へ湾曲し、西壁は外側へ膨らむ。土器は突帯文から中期の土器まで含まれる。23は僅かに外半する口縁部の外面直下に刻み目突帯を巡らす。26は胴部上半に刻目三角突帯を巡らせ、内湾する胴部から口縁部が外反し口唇部端部に小さな刻み目をもつ。外面は刷毛目調整、内面は撫で調整を行なう。

92号土壙(Fig.112,113－30～32)　略隅丸長方形で規模は72×58×30cmを測り外側に掘り込みがある。

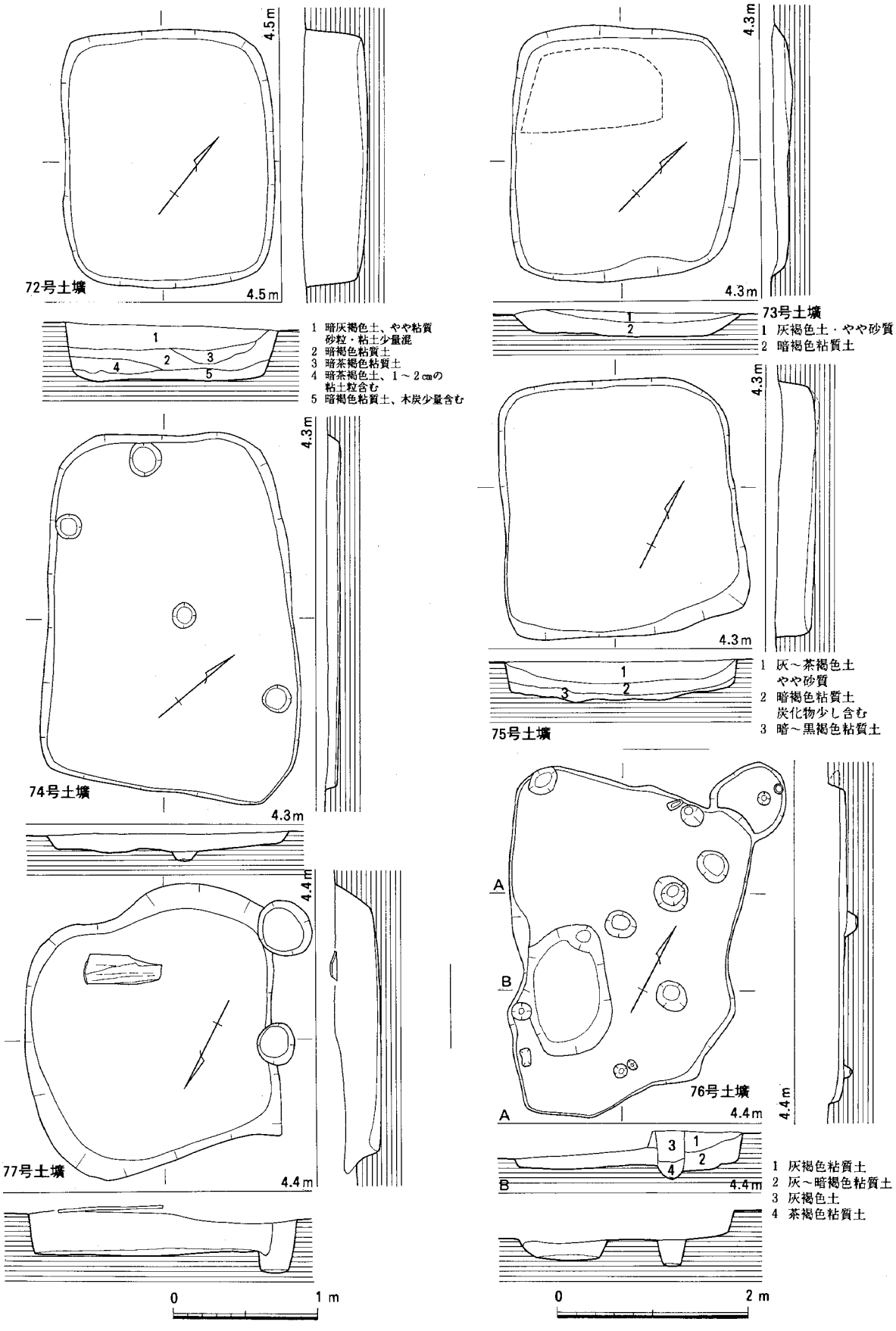


Fig.108　72号～77号土壙実測図（1/40,1/60）

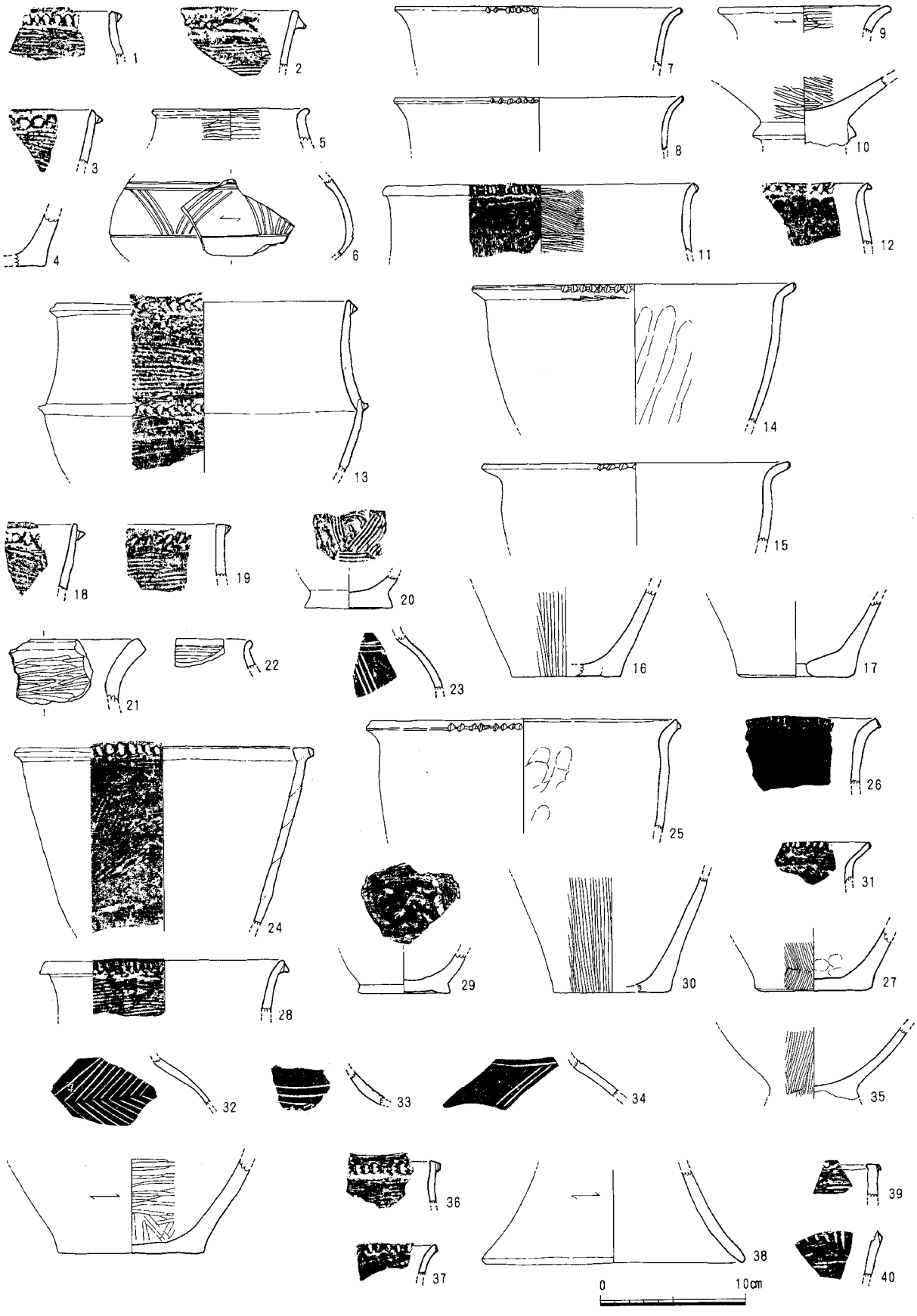


Fig.109　72号～79号土壙出土土器実測図（1/4）

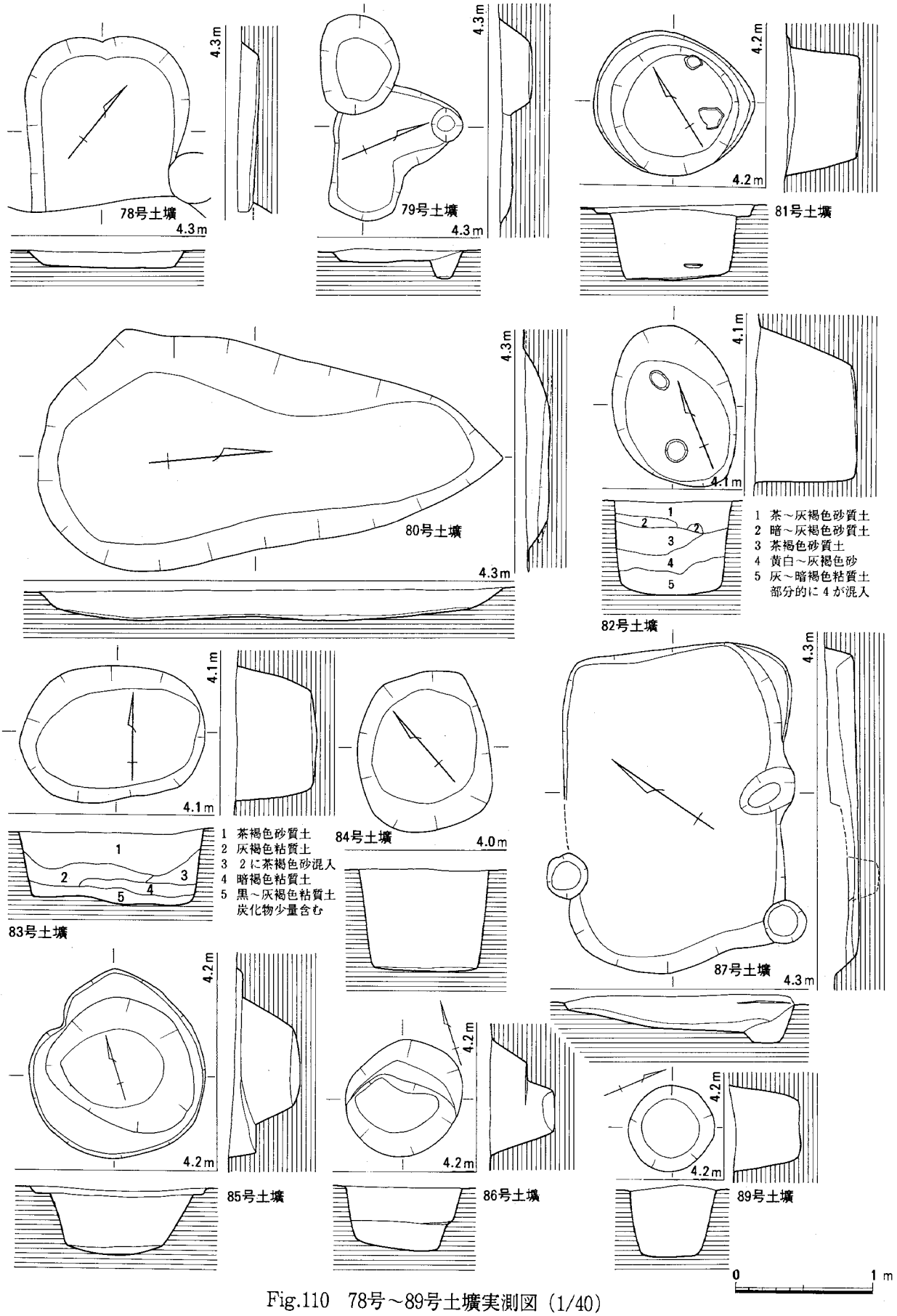


Fig.110　78号～89号土壙実測図（1/40）

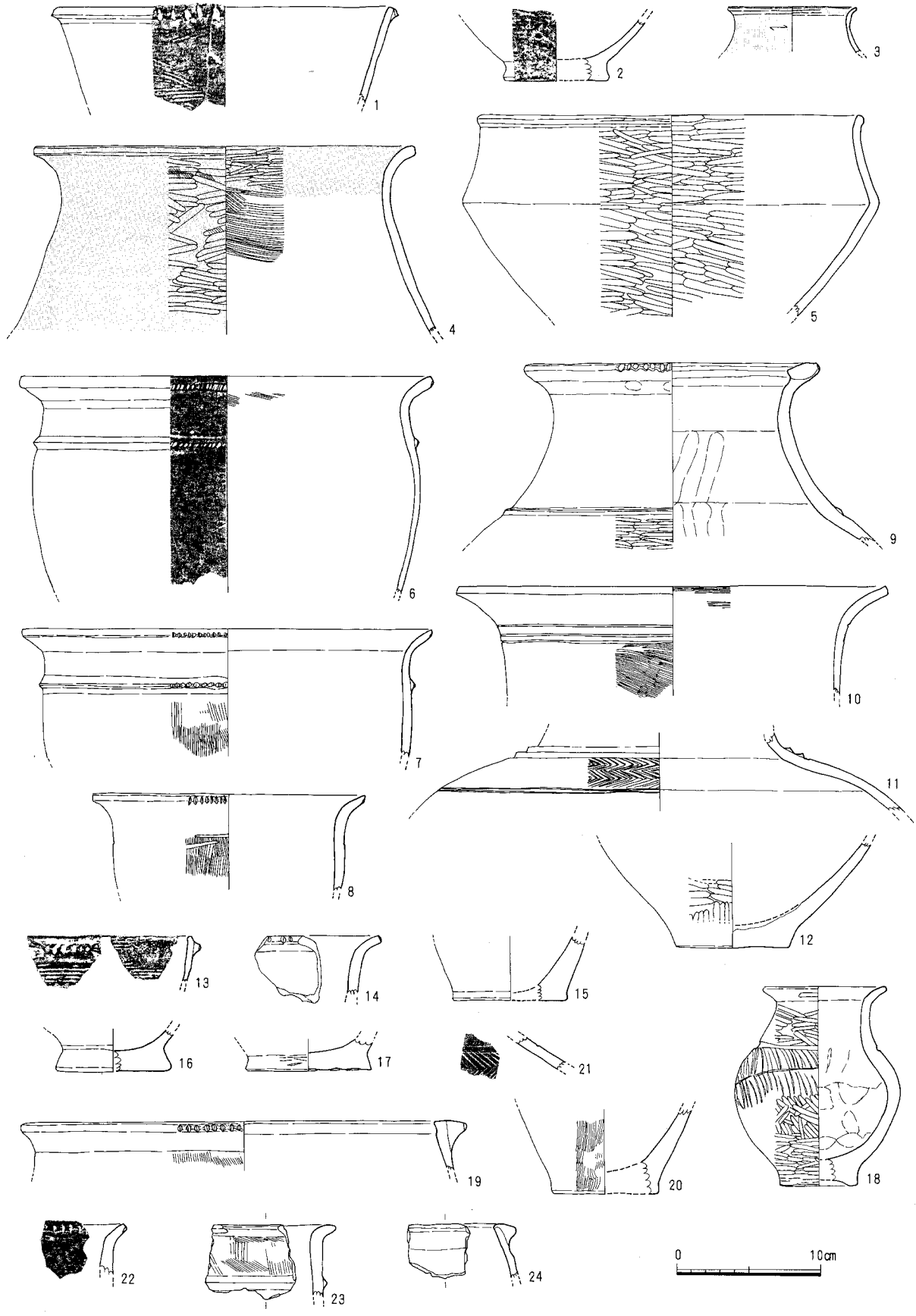


Fig.111　80号～85号土壙出土土器実測図（1/4）

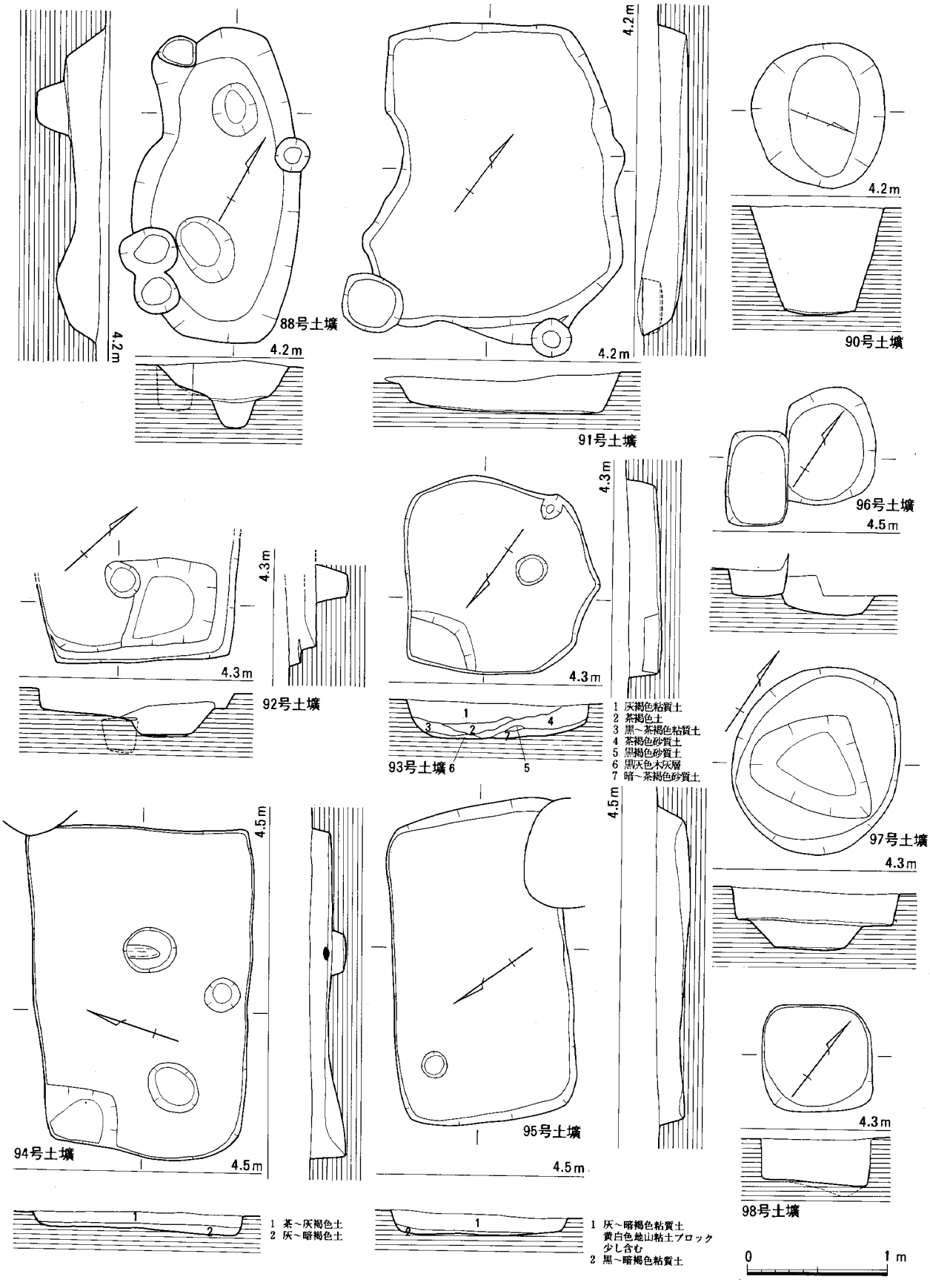
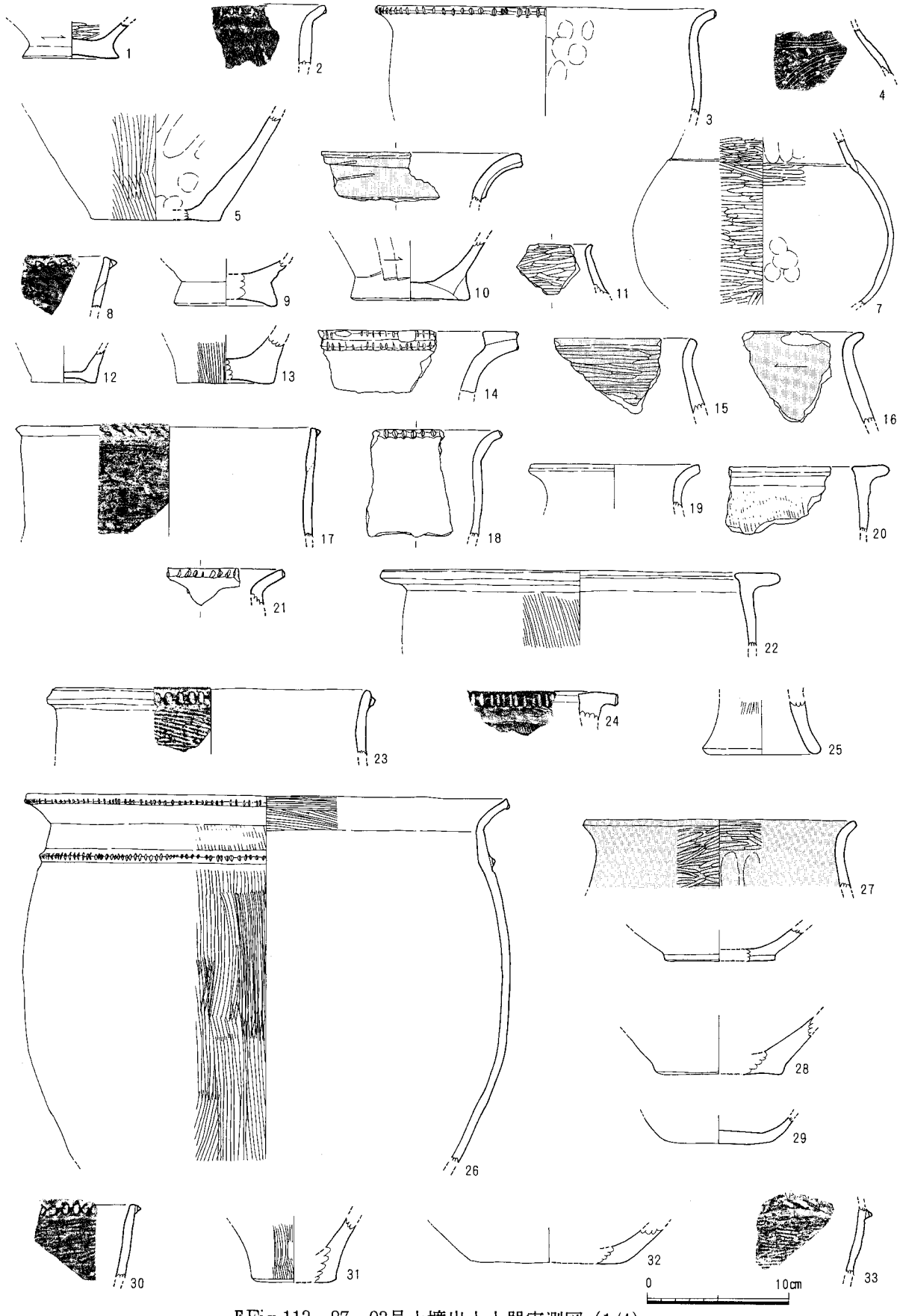


Fig.112　88号・90～98号土壙実測図（1/40）



FFig.113　87～93号土壙出土土器実測図（1/4）

93号土壙(Fig.112,113－33) 略隅丸方形で規模は141×135×27cmで床面にピットがある。

94号土壙(Fig.112,115－1～7) 略隅丸長方形で規模は232×155×15cmで床面にピットがある。

95号土壙(Fig.112,115－8～12) 略隅丸長方形で規模は225×124×15cmで96号土壙にきられる。

96号土壙(Fig.112,115－13～15) 略隅丸長方形で規模は82×63×25cmの古墳時代前期の土壙である。

97号土壙(Fig.112,115－16､17) 略楕円形で規模は136×117×41cmの中期初頭の土壙で二段掘り込み。

100号土壙(Fig.114,115－20～23) 80号土壙の西に位置する土壙で、北側を撹乱の溝に切られ遺存状態は悪い。略隅丸長方形で規模は176×77以上×6cmを測る浅い土壙である。床面は平坦で遺物が纏まって出土した。20は復原完形の甕で口径20.9cm、器高22.7cmを計る。胴部上半で屈曲し、口縁部に向かって真っ直立ち上がる。口縁部と胴部の屈曲部には刻み目突帯を貼付る。外面は条痕調整で内面は板撫で調整を行なう。底部は上げ底である。21は底部から内湾気味に立上り、口縁部下に刻目突帯を巡らす。22､23も同様な奇形であろう。

112号土壙(Fig.116,117－5～10) 調査区の北西部、15号竪穴住居跡の南に位置する略三角形の土壙で幾つかの土壙がきり合っている可能性があるが明らかではない。規模は160×150×32cmを測る。床面から浮いた状態で遺物は出土している。5 は如意状口縁を有する甕である。外面は条痕調整で口唇部端に小さな刻み目を巡らす。8 はほぼ完形品の甕で口径30.5cm、器高36cmを測る。底部は上げ底で内湾して口縁部となる。口縁部は外側へ大きく発達し上面に平坦面を造り、内側へ傾斜させる。外面は刷毛目調整で内面には焦げ痕が残る。9 は蓋で摘みで中央部を窪ませる。

119号土壙(Fig.116,119－1～4) 調査区の北西部、15号竪穴住居跡の北東に位置する東西に長い土壙である。規模は144×121×5cmを測る浅い土壙である。床面はなだらかで東寄りの位置にピットがある。土器は床面で出土している。1 は胴部で屈曲し刻目突帯を有する甕で底部を欠損する。突帯は断面三角形で細い。2 は断面形が台形を呈する底部である。外面は条痕調整で、内面は撫で調整を行なう。3 は外反する口唇部の外面に低い刻目突帯を貼付る甕である。外面には粗い刷毛目調整が残る。4 は内外面に赤色顔料を塗布した壷の口縁部破片で研磨している。

137号土壙(Fig.120,123－11～14) 調査区の南西部に位置する不整形の大型土壙である。規模は476×288×36cmを測る。11は口縁部上面を平坦にし中央部を窪める甕である。外面は刷毛目調整である。12は断面三角形の口縁部、13は上げ底の甕で、中期前半の土壙である。

144号土壙(Fig.124,125) 調査区の南西隅に検出した細長い長楕円形の土壙である。二つの土壙が切り合っているが調査時点では先、後の関係は不明であり、南側の大きい方をＢ、遺物が多い北側の土壙をＡとした。ＡはＢよりも小さく、その規模は278×110×28cmを測る東西に長い長楕円形の土壙である。遺物は床面より僅かに浮いて流れ込むような状況で出土した。Ｂは大きく419×130×35cmを測る。1 ～8 はＡ土壙出土である。遺物の出土状況からＡがＢに後続するものと考えられる。1 は口縁部から胴部にかけて半分を欠損するが復原完形品で口径21.4cm、器高23.7cmを計り、胴部上半で屈曲し、外反して口縁部となる。内外面とも板目調整である。胴部と口縁部の刻目は深く、器壁にまで達している。2 は屈曲部が胴部中位に近く、突帯が見られず、内傾して直線的に延びて口縁となる。3 は如意状口縁の甕で底部に焼成前の穿孔が見られる。外面は細い縦方向の刷毛目調整、内面は斜めの粗い刷毛目調整を行なう。口唇部には櫛状工具による刻目を全面に施す。6は外面から口縁部内面まで赤色顔料を塗布した壷である。外面は研磨し、肩部に低い段をもち、口縁部は内傾して立上り端部が外反する。8は鉢で底部を欠損する。口縁下で屈曲、外反して口縁部となる。内外面とも研磨を行なう。9､10は壷、11は鉢、12は高坏の脚である。

153号土壙(Fig.126,129－1～7) 調査区の南西部の土壙が集中している所に位置する。東西に長い歪

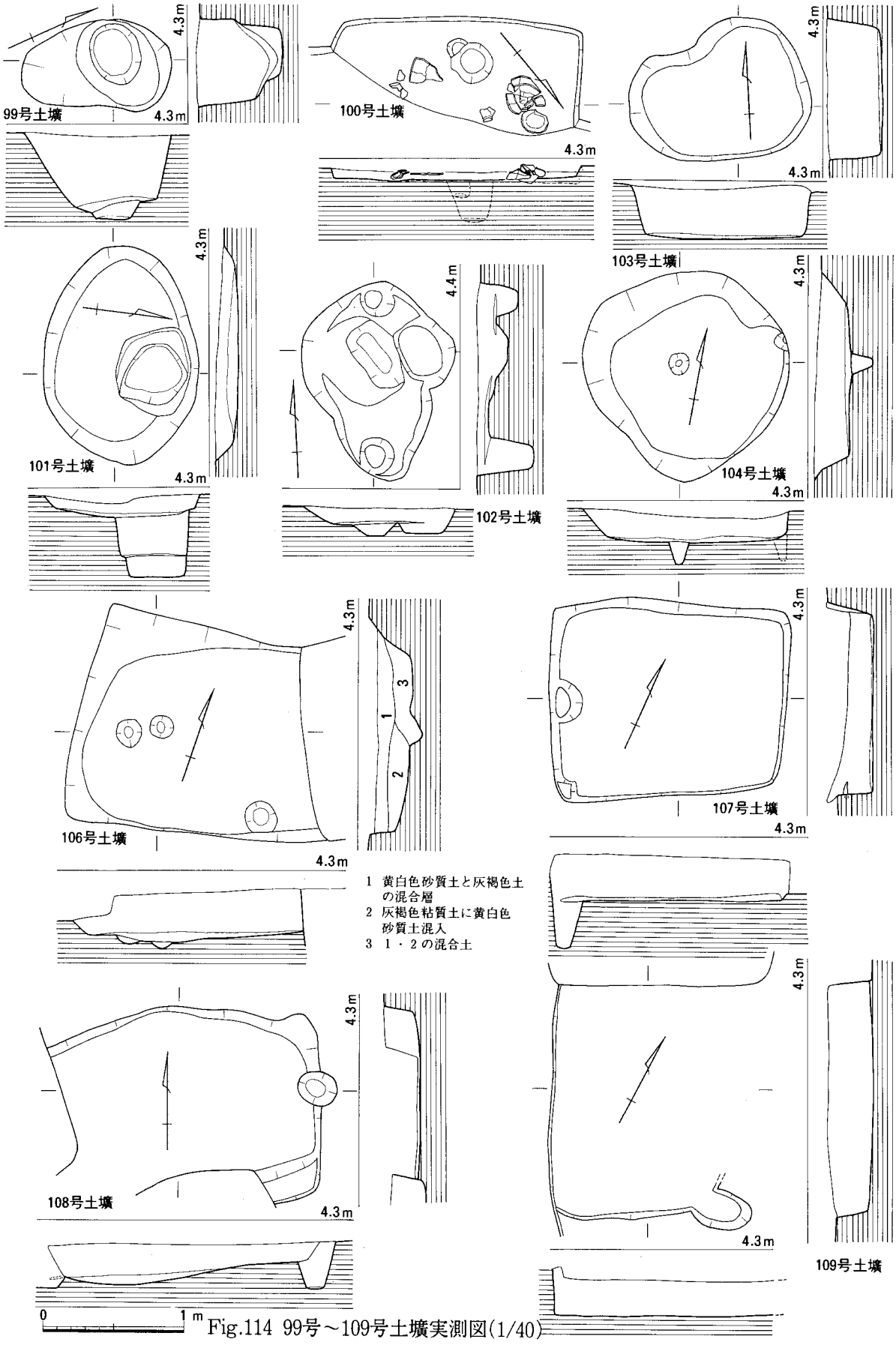


Fig.114 99号～109号土壙実測図(1/40)

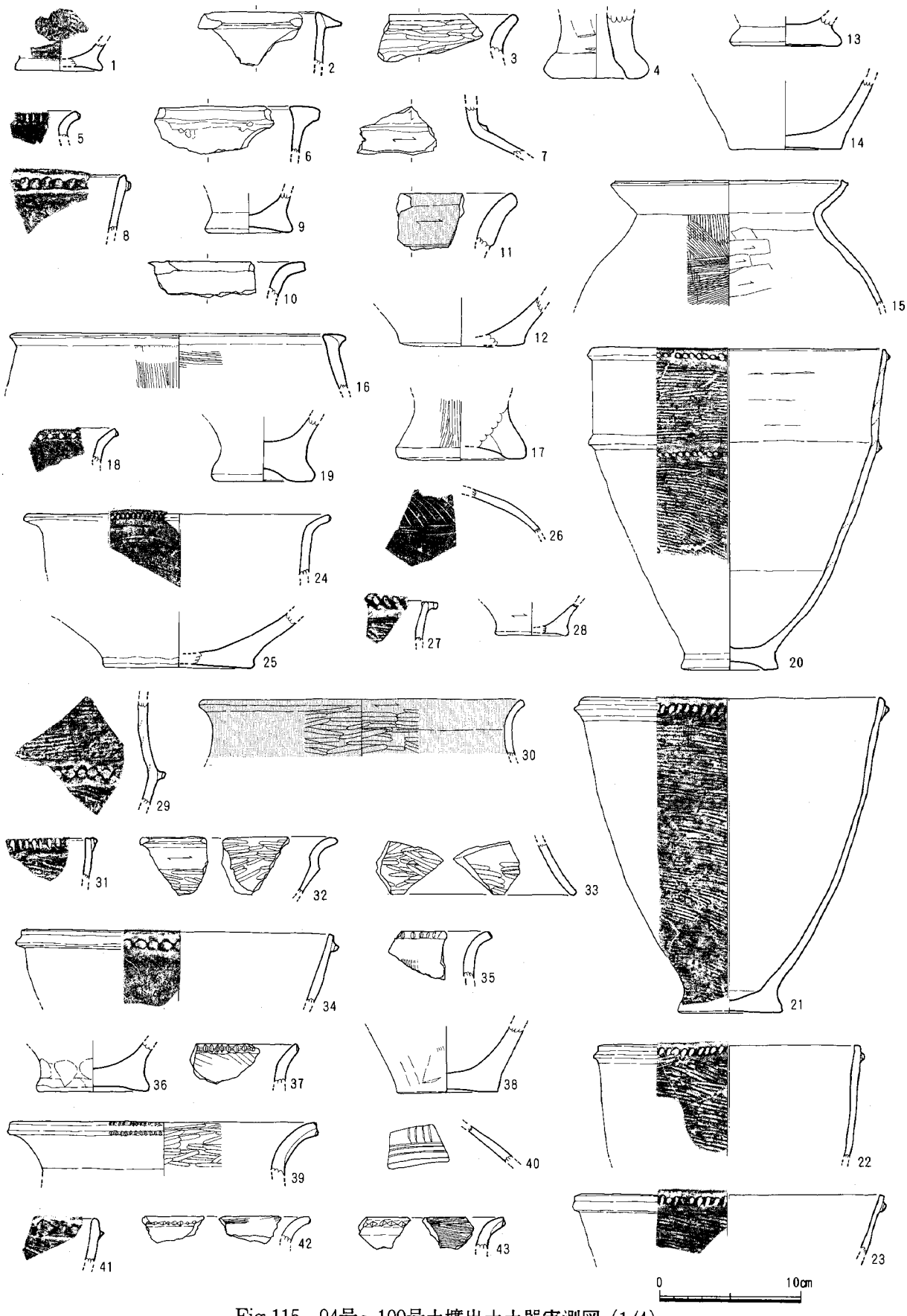


Fig.115　94号～109号土壙出土土器実測図（1/4）

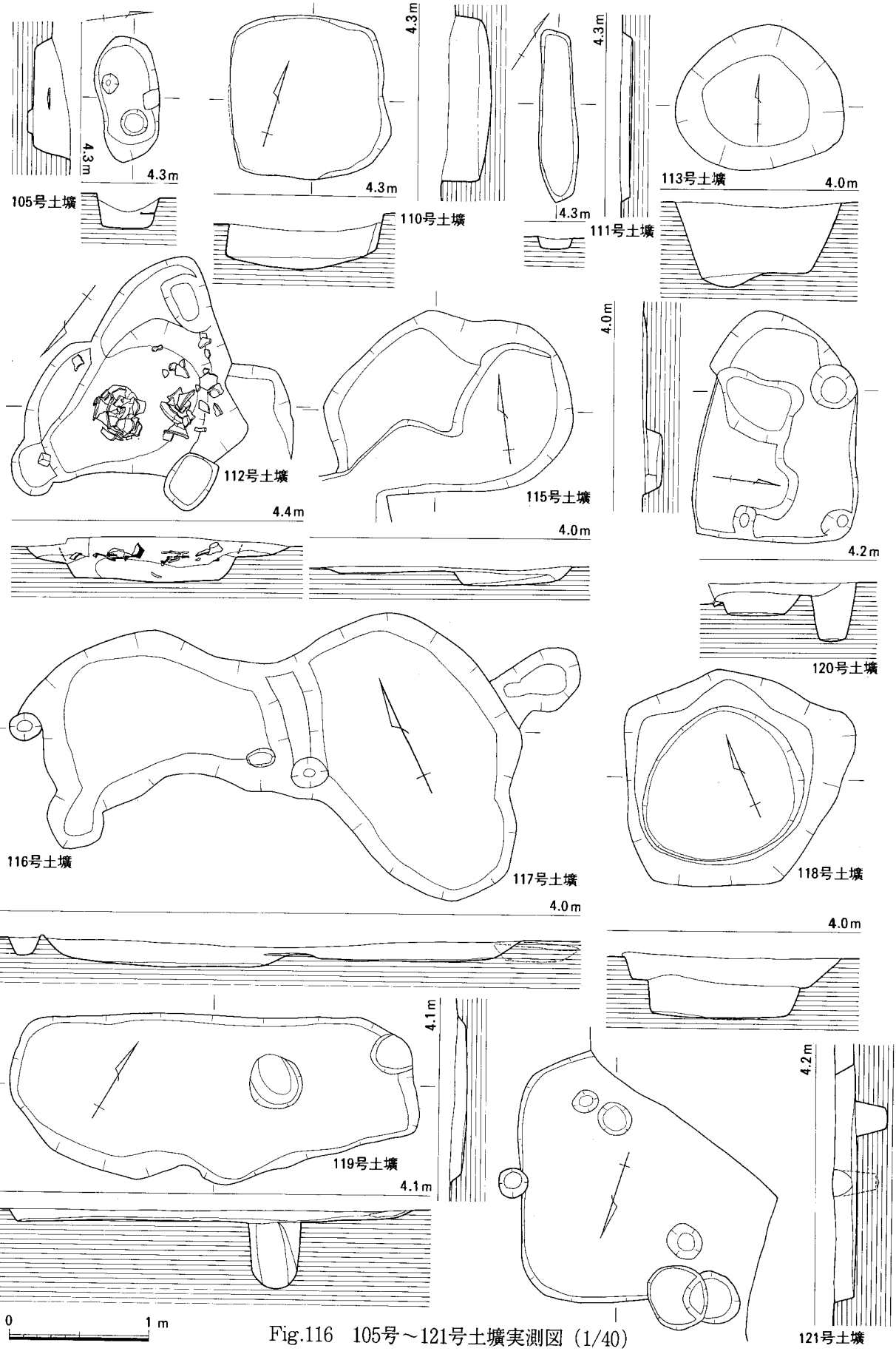


Fig.116　105号～121号土壙実測図（1/40）

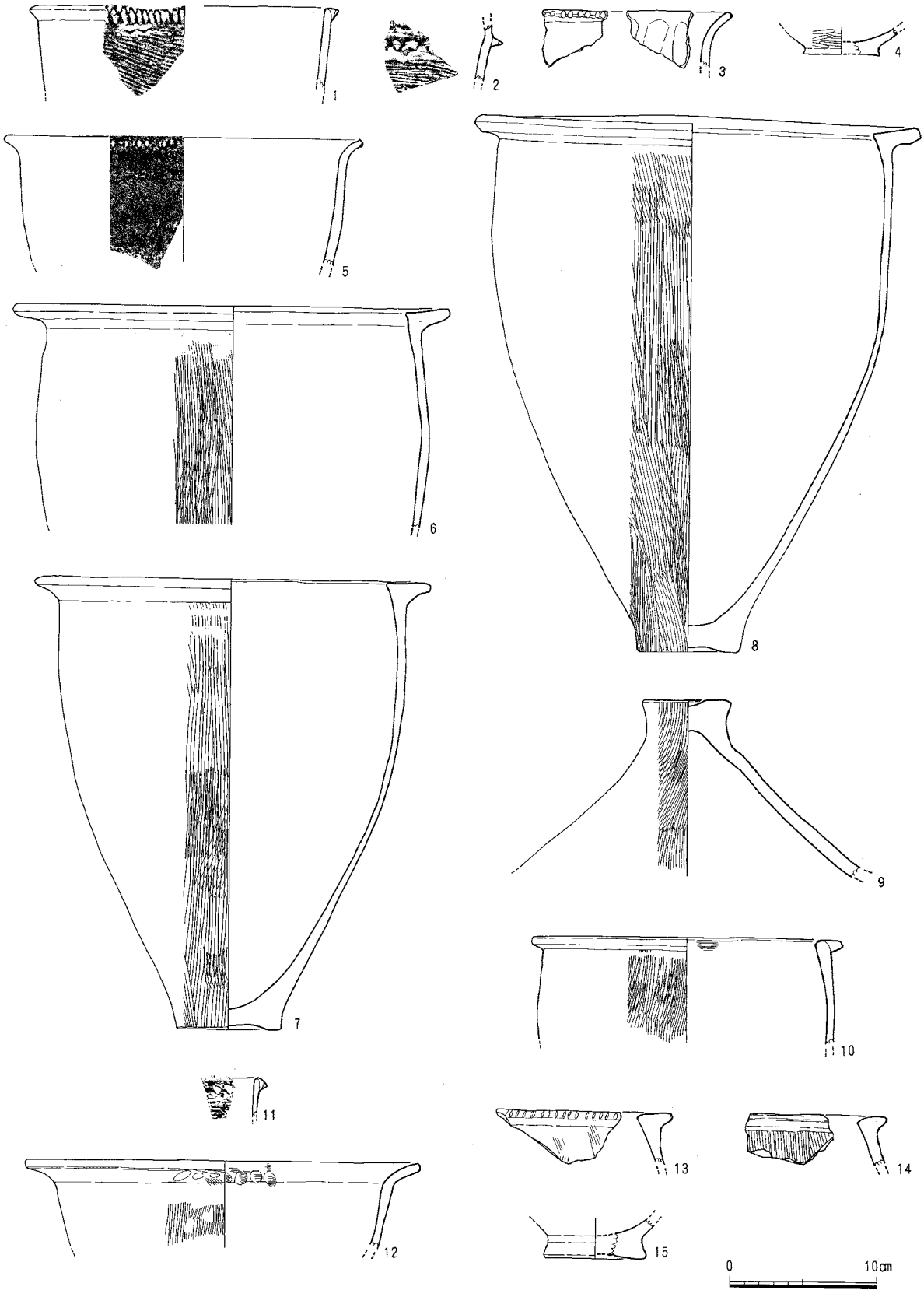


Fig.117　110号～118号土壙出土土器実測図（1/4）

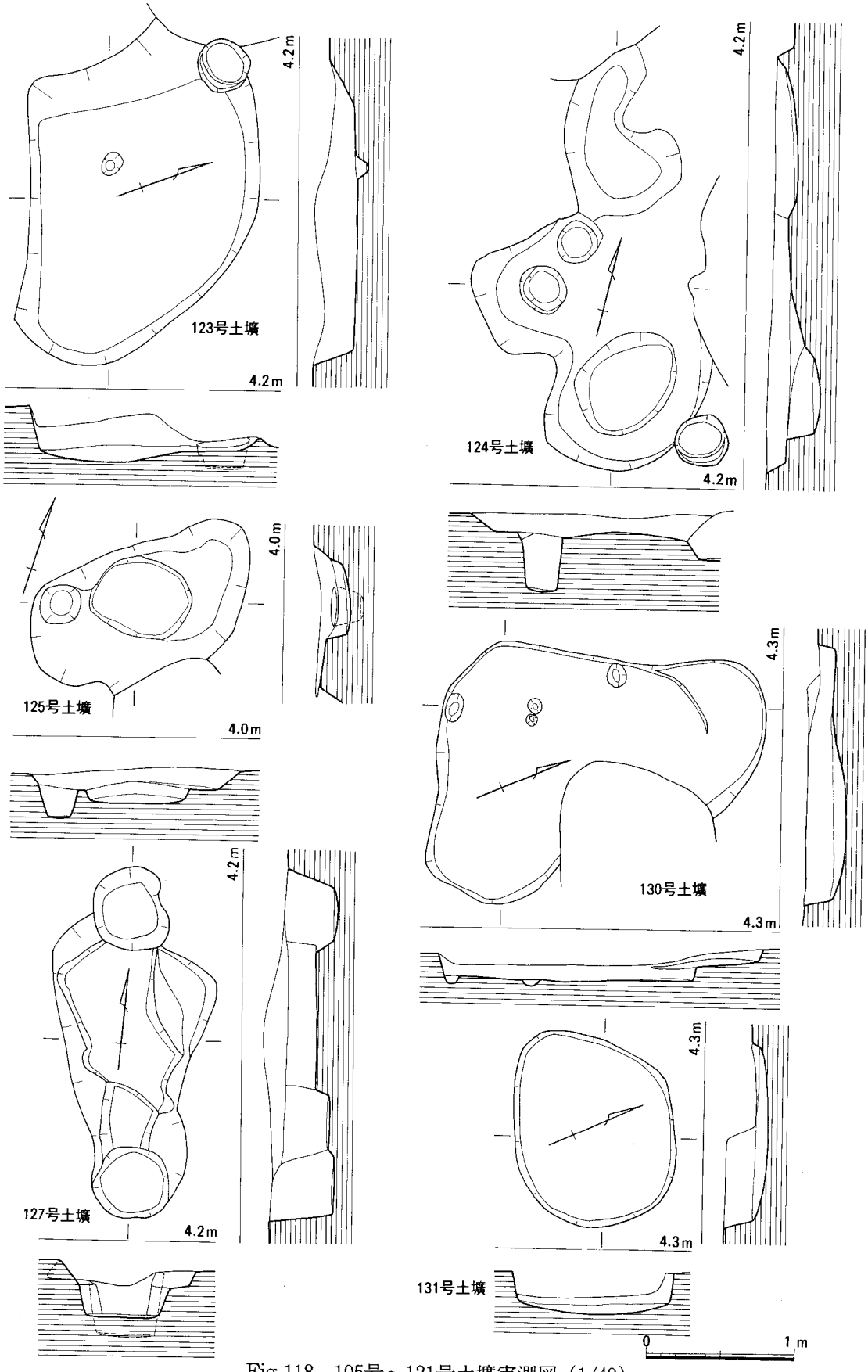


Fig.118　105号～121号土壙実測図（1/40）

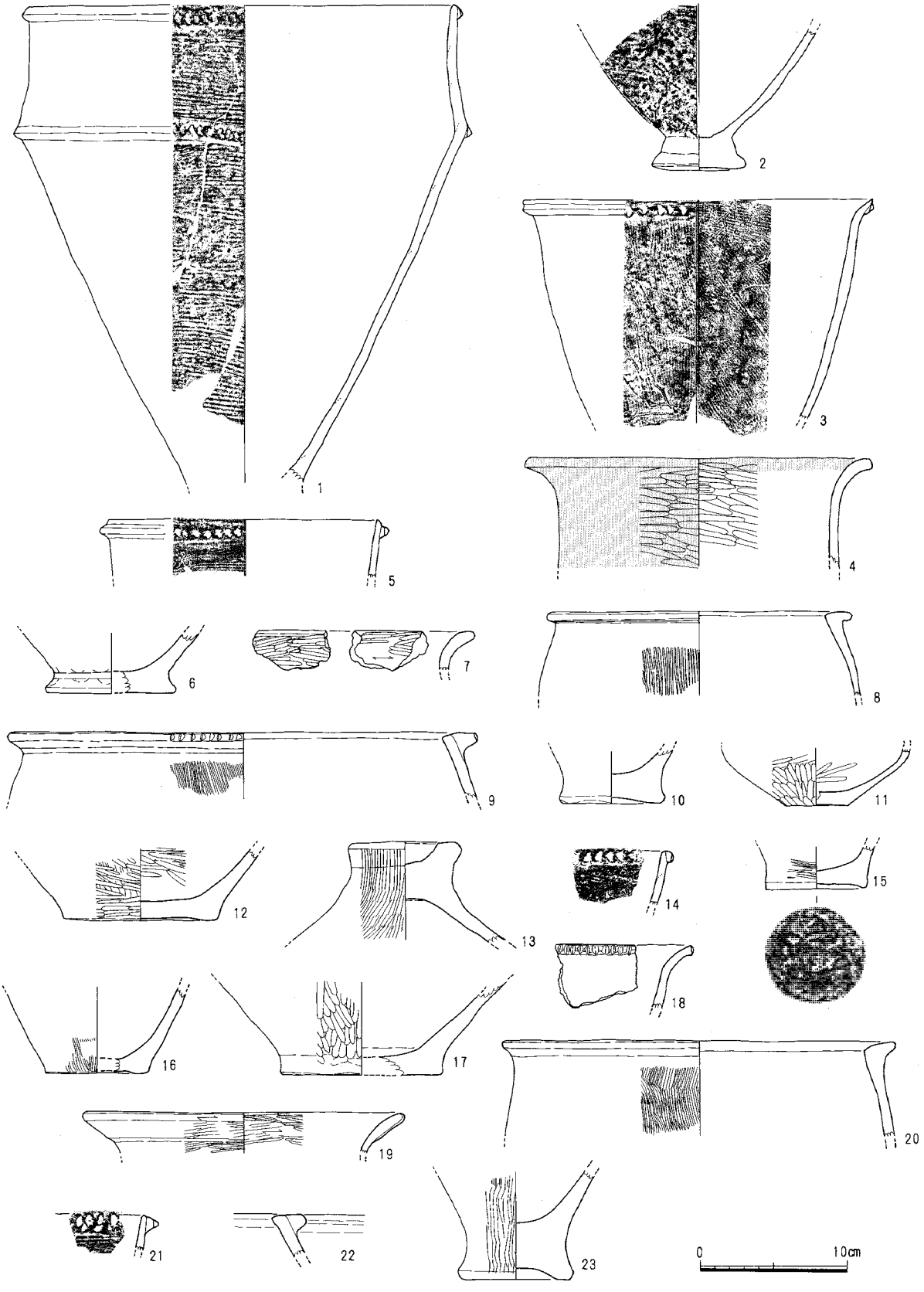


Fig.119　119号～126号土壙出土土器実測図（1/4）

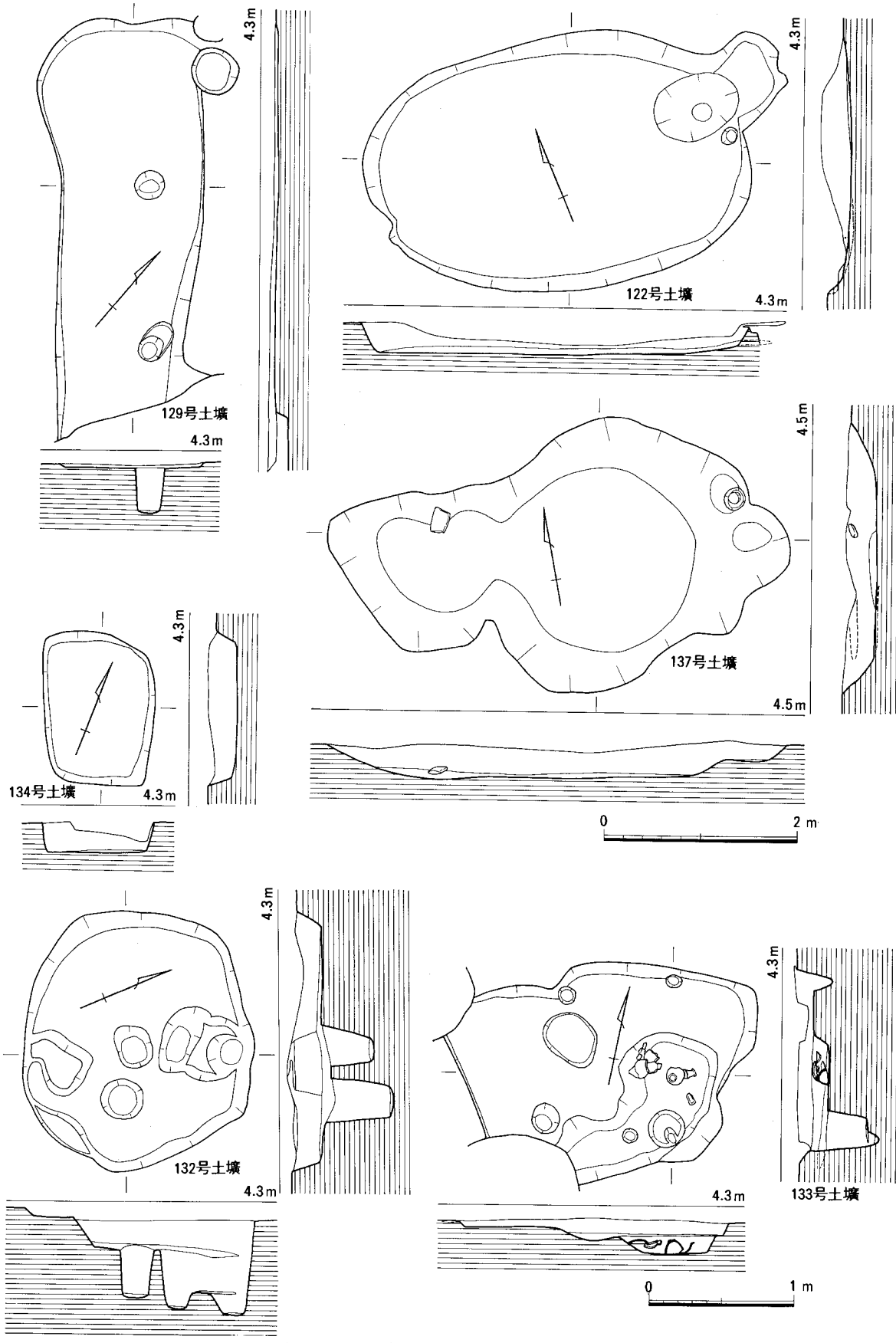


Fig.120　122号～137号土壙実測図（1/40,1/60）

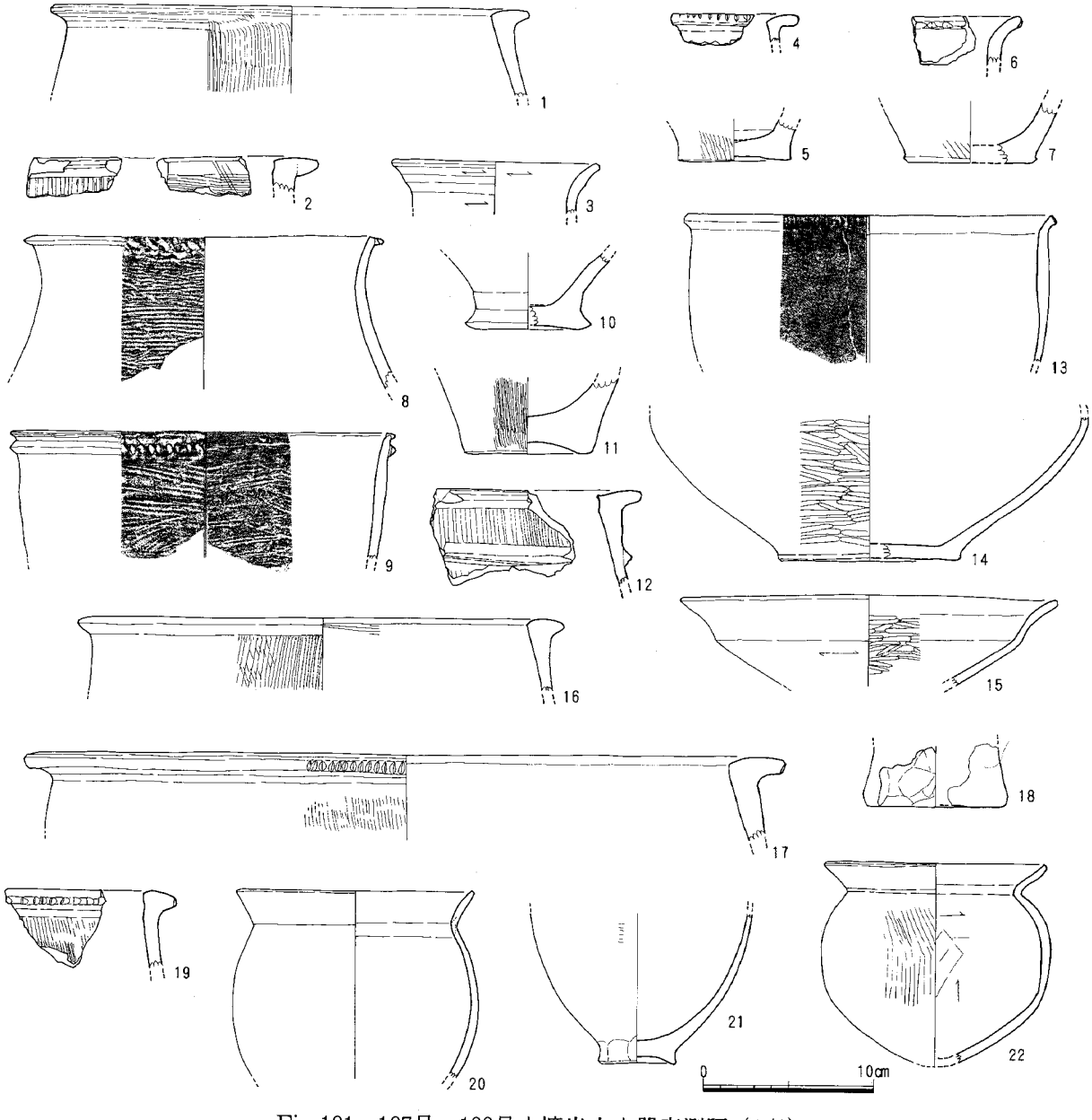


Fig.121　127号～133号土壙出土土器実測図（1/4）

な隅丸長方形の土壙で、その規模は262×118×35cmを測る。西側は一段浅くなり28cmとなる。壁面はなだらかで床面も丸くなる。出土遺物は床面より高い位置で確認された。形態の異なる甕が3点出土している。1は胴部に突帯を巡らし、屈曲して直線的に開きつゝ口縁部となる。胴部の突帯と口縁部の間は横方向の、胴部下半は斜め方向の条痕調整を行なう。内面は板目調整を行なう。2 は底部から内湾して立上り口縁部となる。口唇部に刻目突帯を貼付る。3 は胴部中位に低い刻目突帯を貼付、口縁部を如意状に外反させるが端部は角張り、全体に大きな刻みを巡らす。外面は縦方向の刷毛目調整で、口縁部内面には横方向の刷毛目が残る。6 は壷の頸部から肩部の破片である。肩部に3本の沈線を巡らし、その下に円弧文を篦描きしている。7 は外面に赤色顔料を塗布する鉢で、内外面を研磨する。他に条痕調整や刷毛目調整の甕の底部がある。

169号土壙(Fig.130,132, PL.34)

調査区の南端に位置する略三角形を呈する不定形土壙である。規模は195×277×37cmを測る。床面

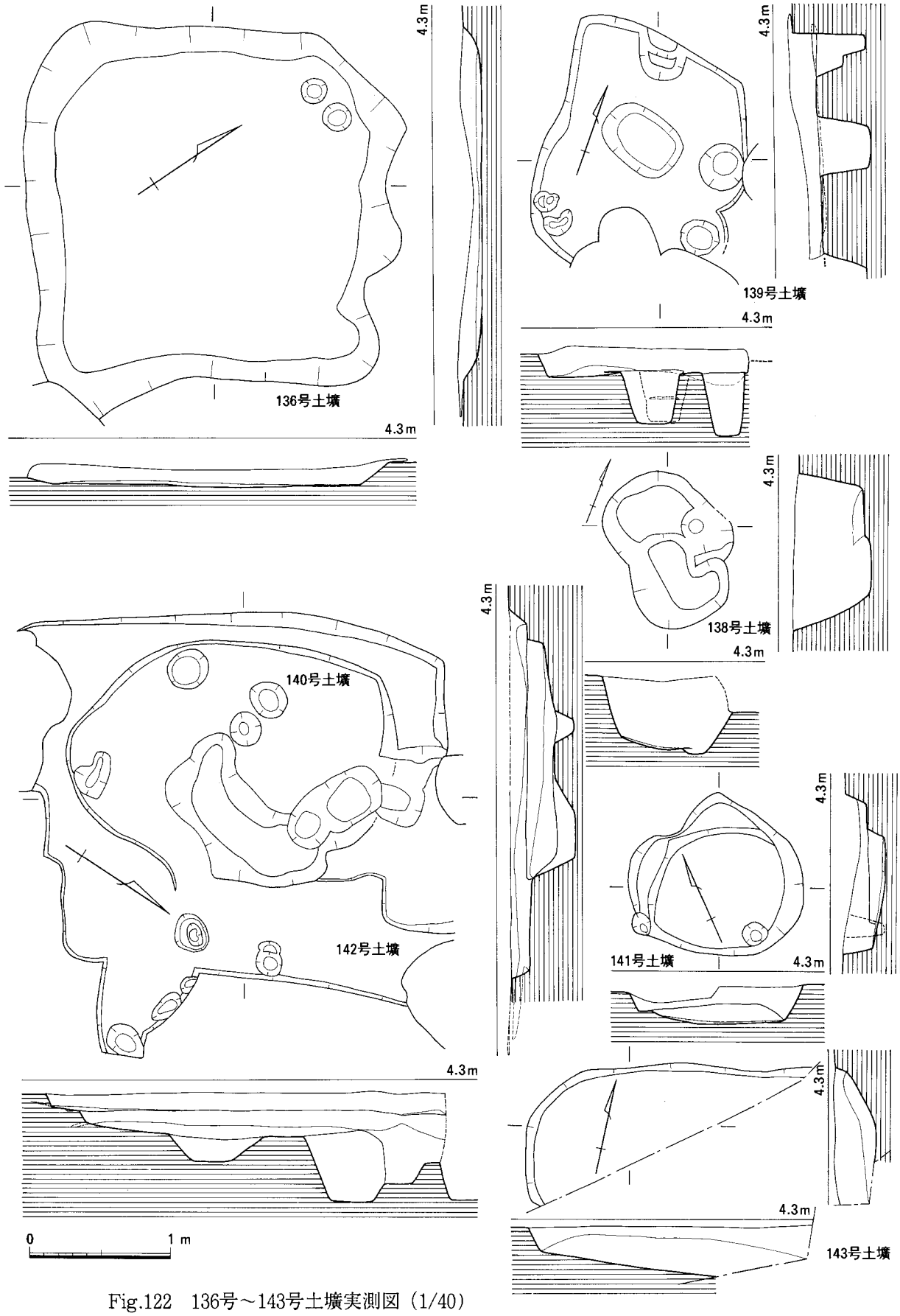


Fig.122　136号～143号土壙実測図（1/40）

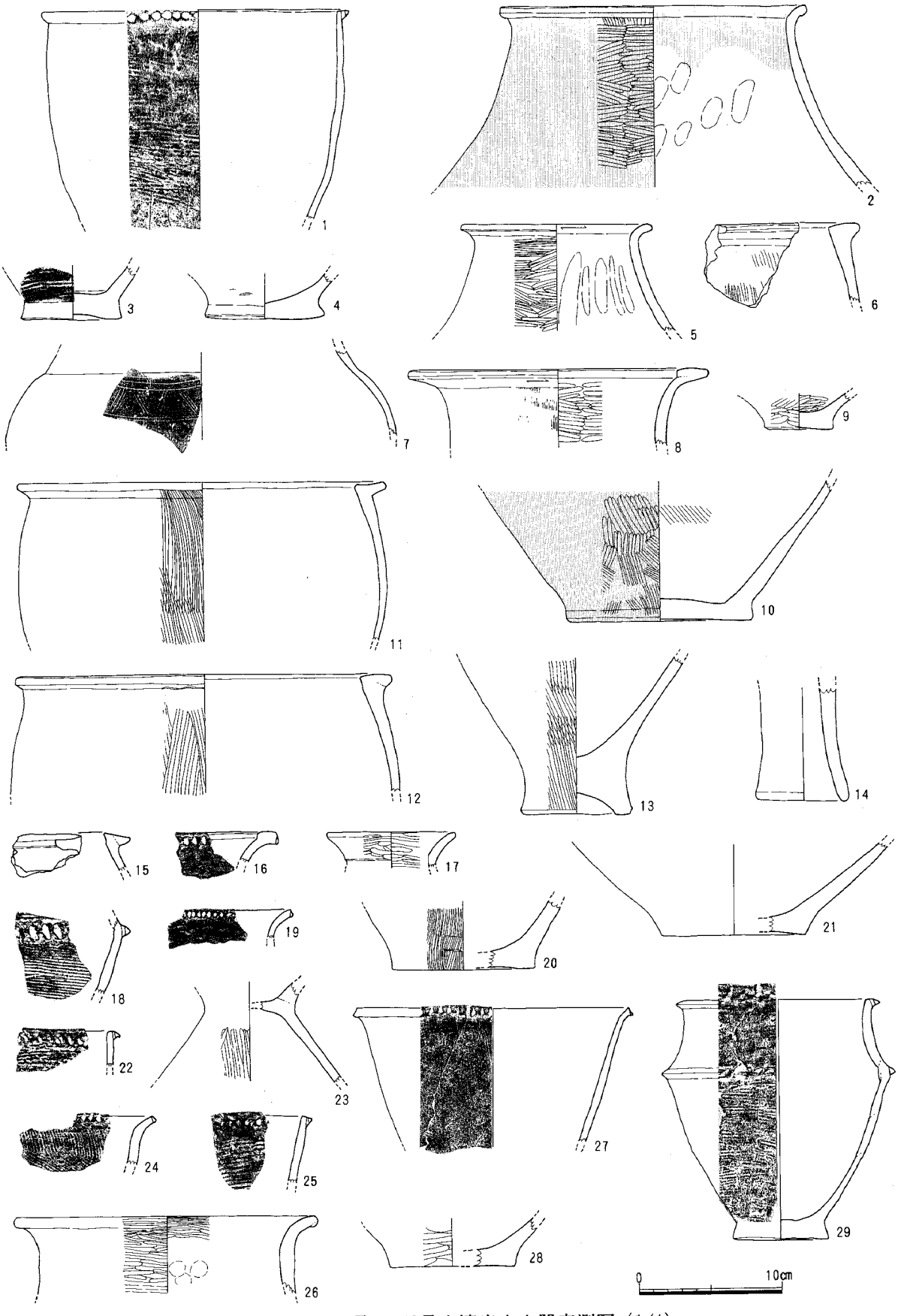


Fig.123　136号～143号土壙出土土器実測図（1/4）

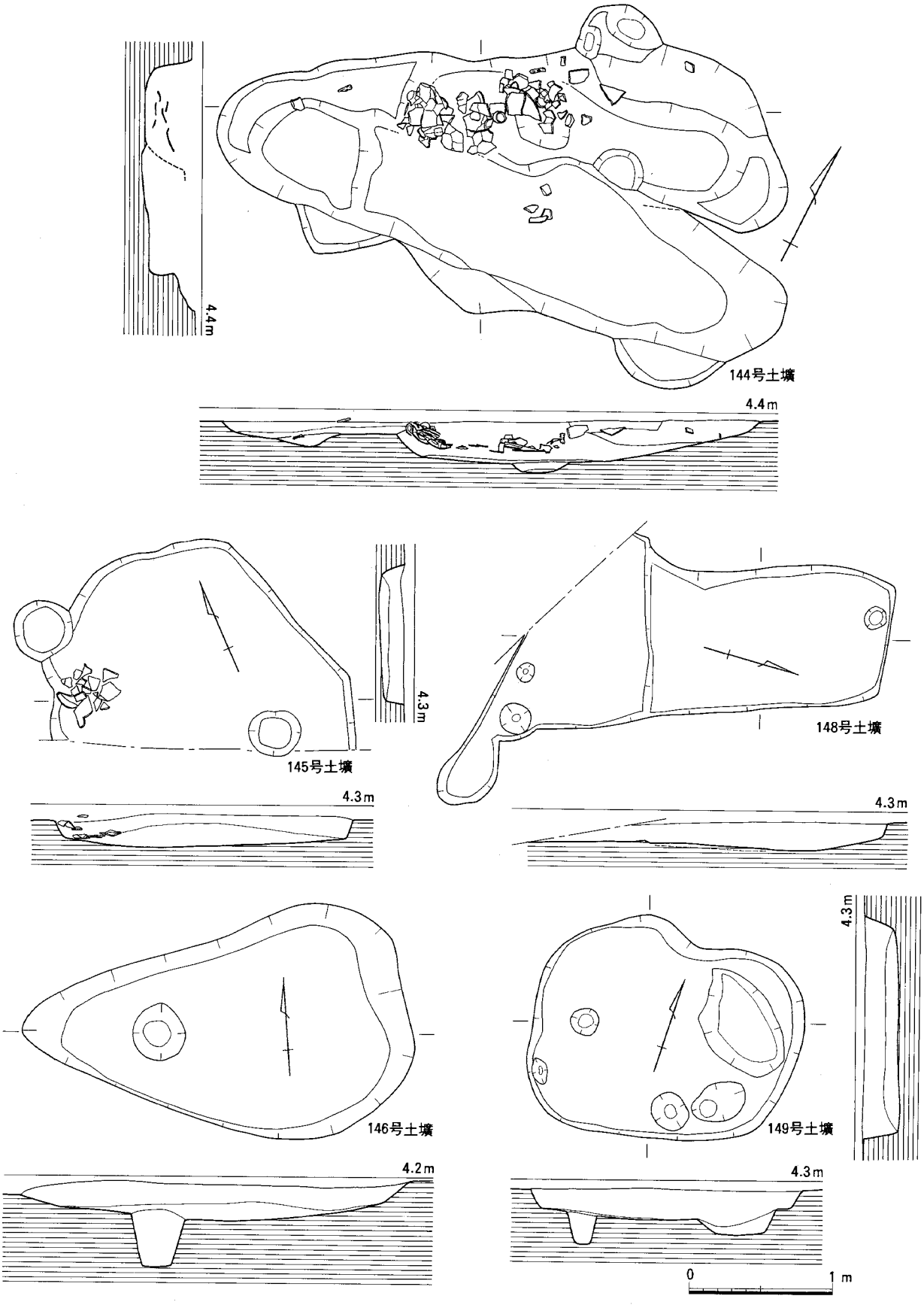


Fig.124　144号～149号土壙実測図（1/40）

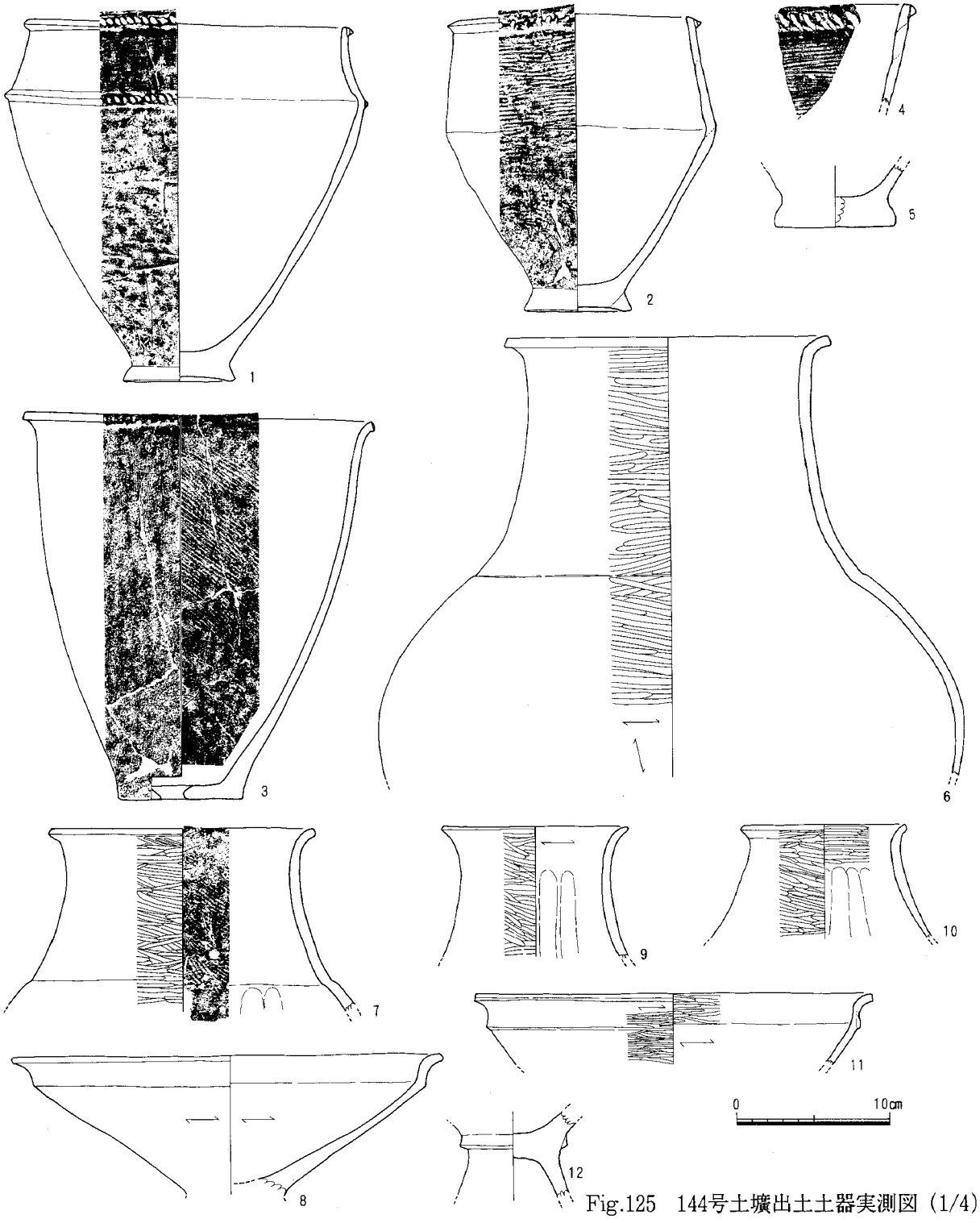


Fig.125　144号土壙出土土器実測図（1/4）

は略平坦であるが中央が高くなる。また、南側は二段に掘り込まれている。遺物は破片ではあるが比較的多く出土している。1 ～4は突帯をもつ甕の口縁部と底部である。1 は胴部突帯から口縁部が垂直に立上り、外面は条痕調整であるが、2 は口縁部が直線的に外傾して開き、横方向の、胴部下半は縦方向の細かい刷毛目調整を行なう。5 、6 は如意状口縁の甕で5は口唇部全体に刻目をもつが6は口唇部の下端に小さな刻み目を施す。他に壷、鉢、高坏が出土している。

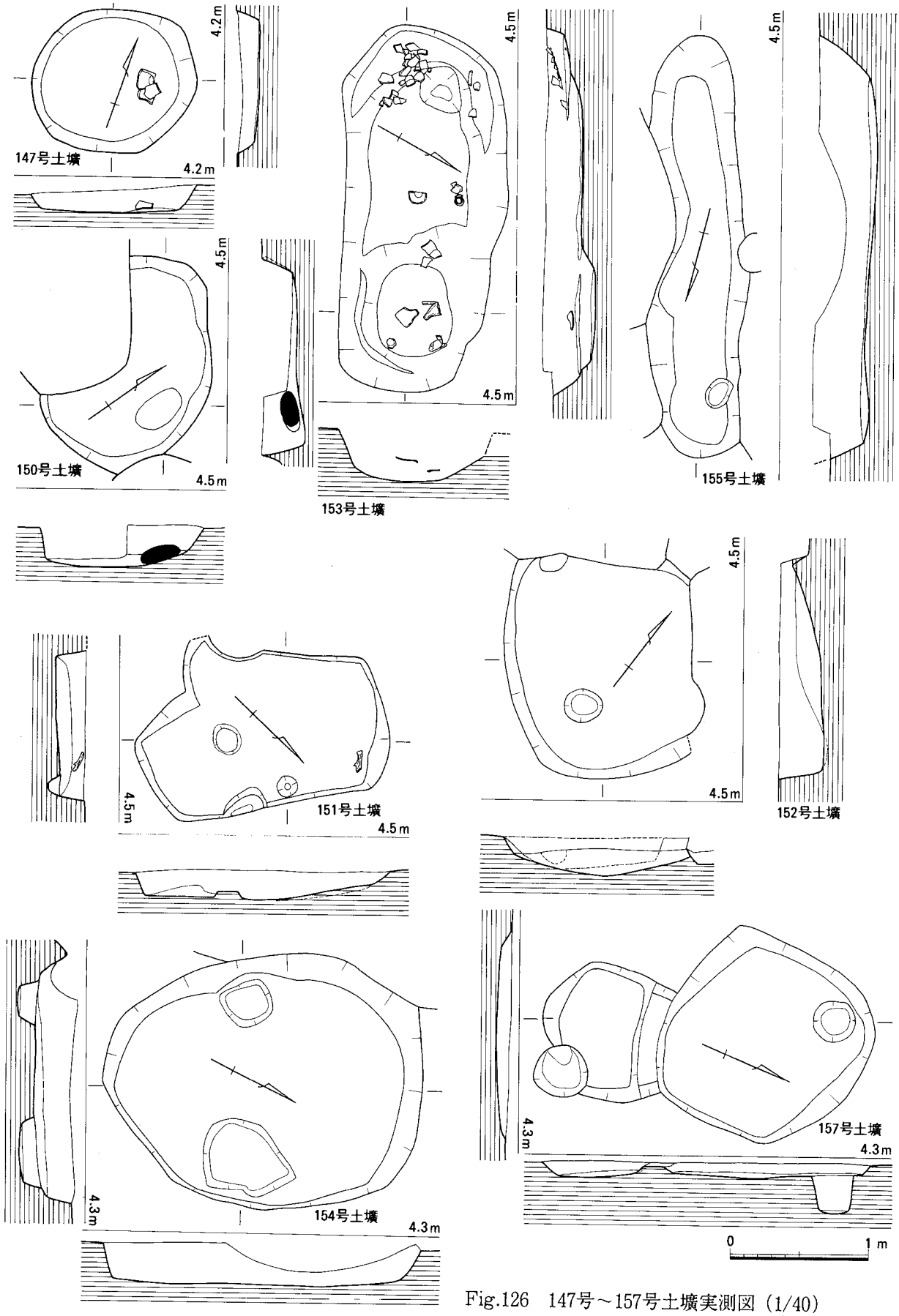


Fig.126　147号～157号土壙実測図（1/40）

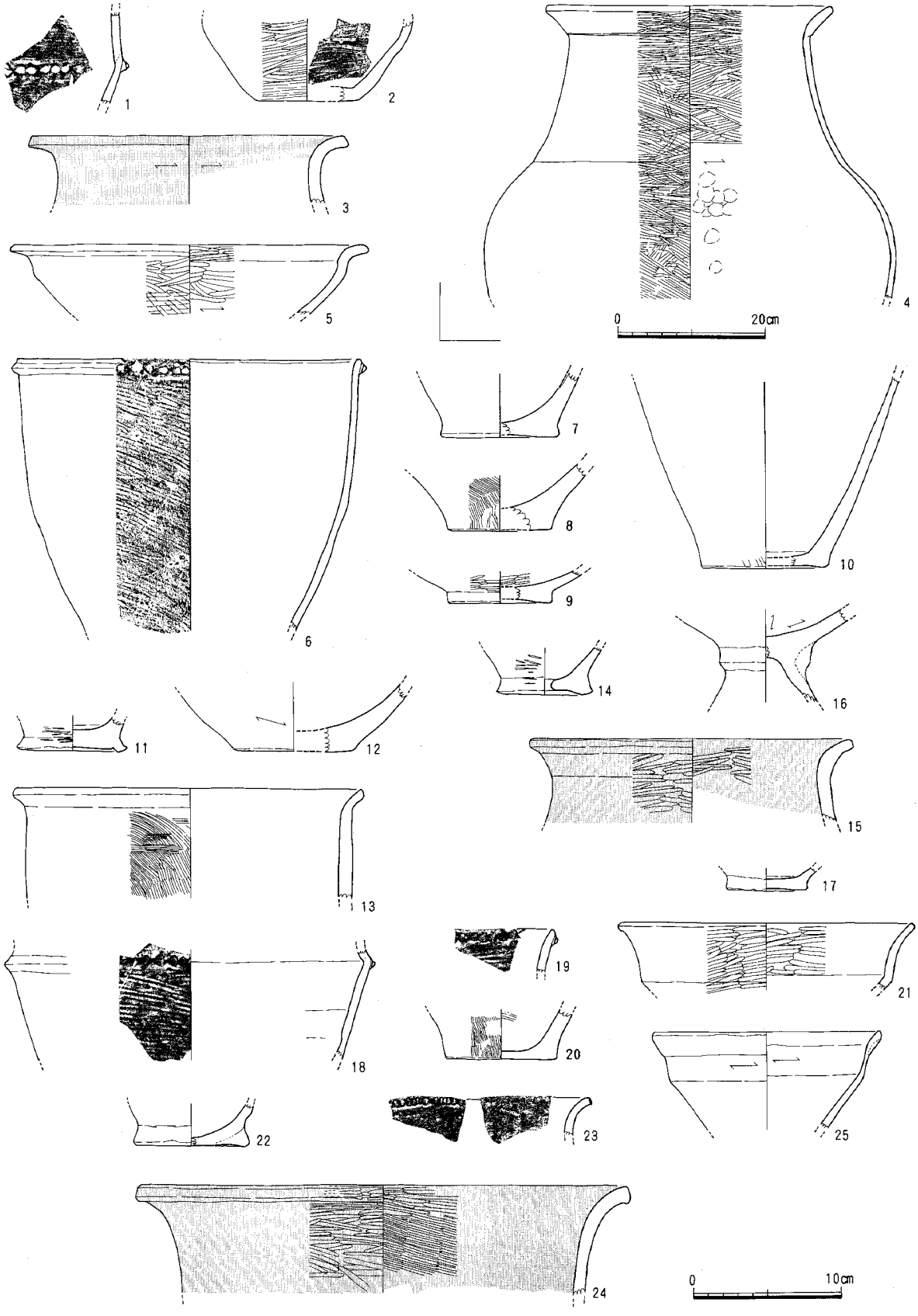


Fig.127　145号～152号土壙出土土器実測図（1/4,1/8）

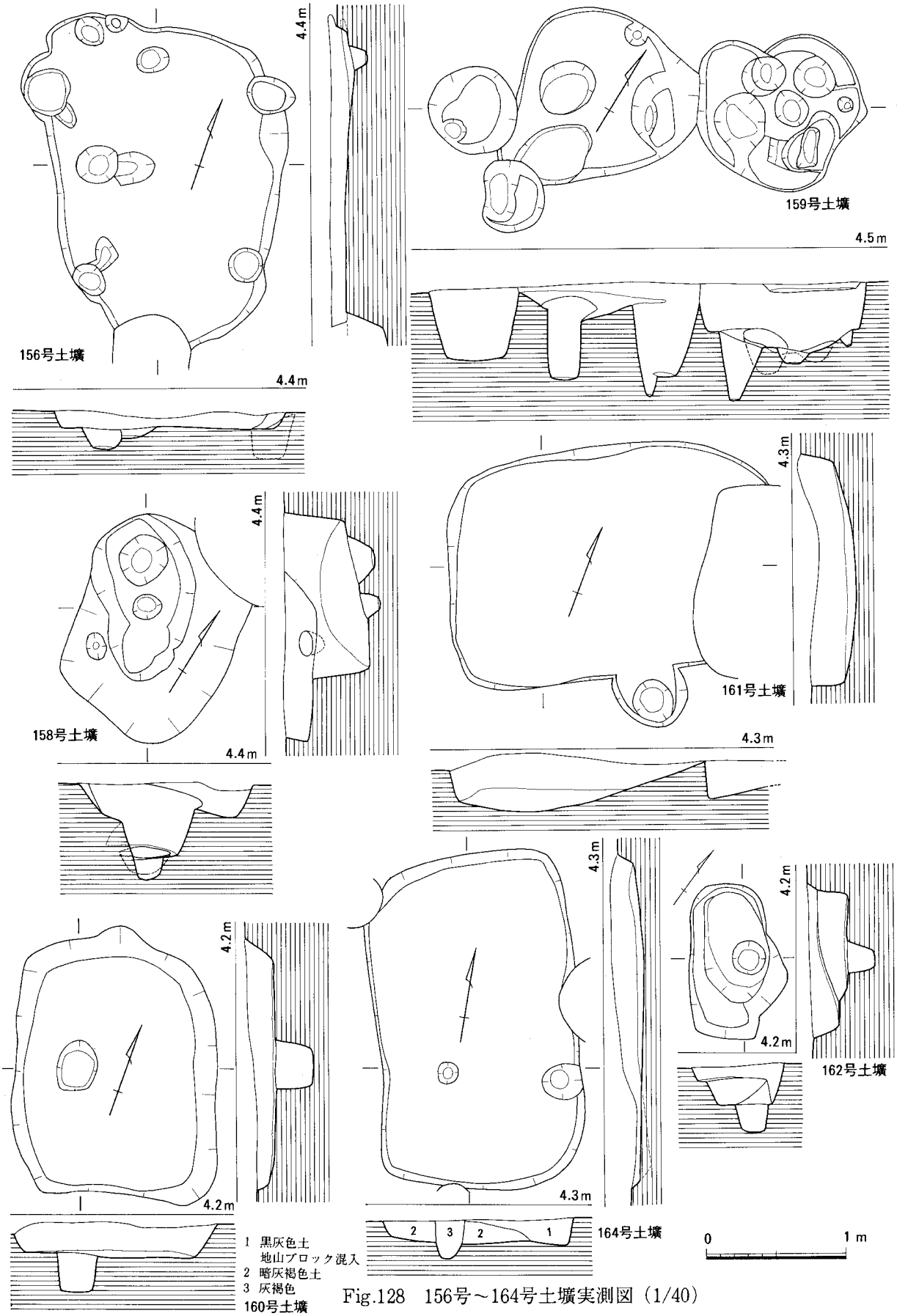


Fig.128　156号～164号土壙実測図（1/40）

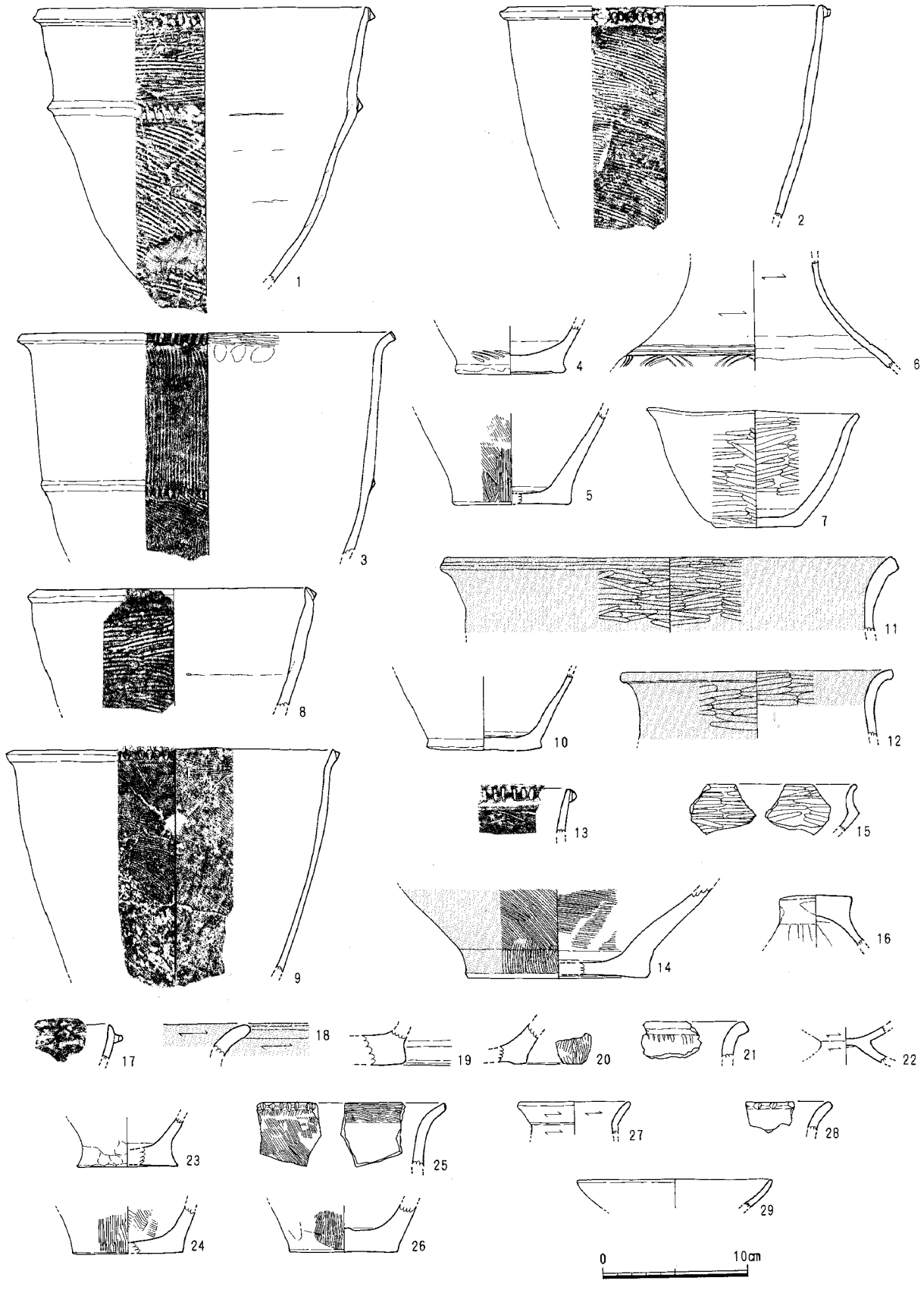


Fig.129　153号～162号土壙出土土器実測図（1/4）

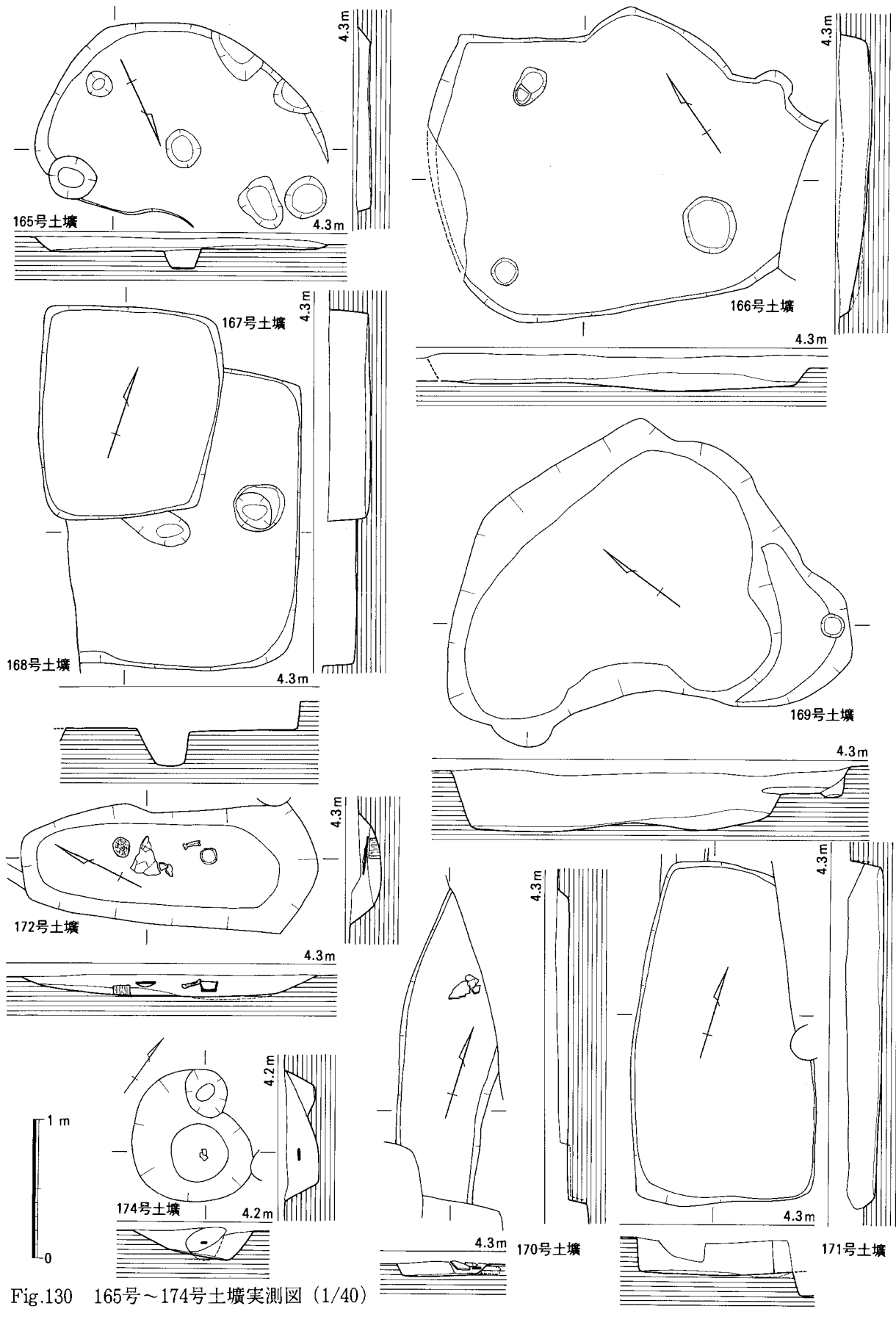


Fig.130　165号～174号土壙実測図（1/40）

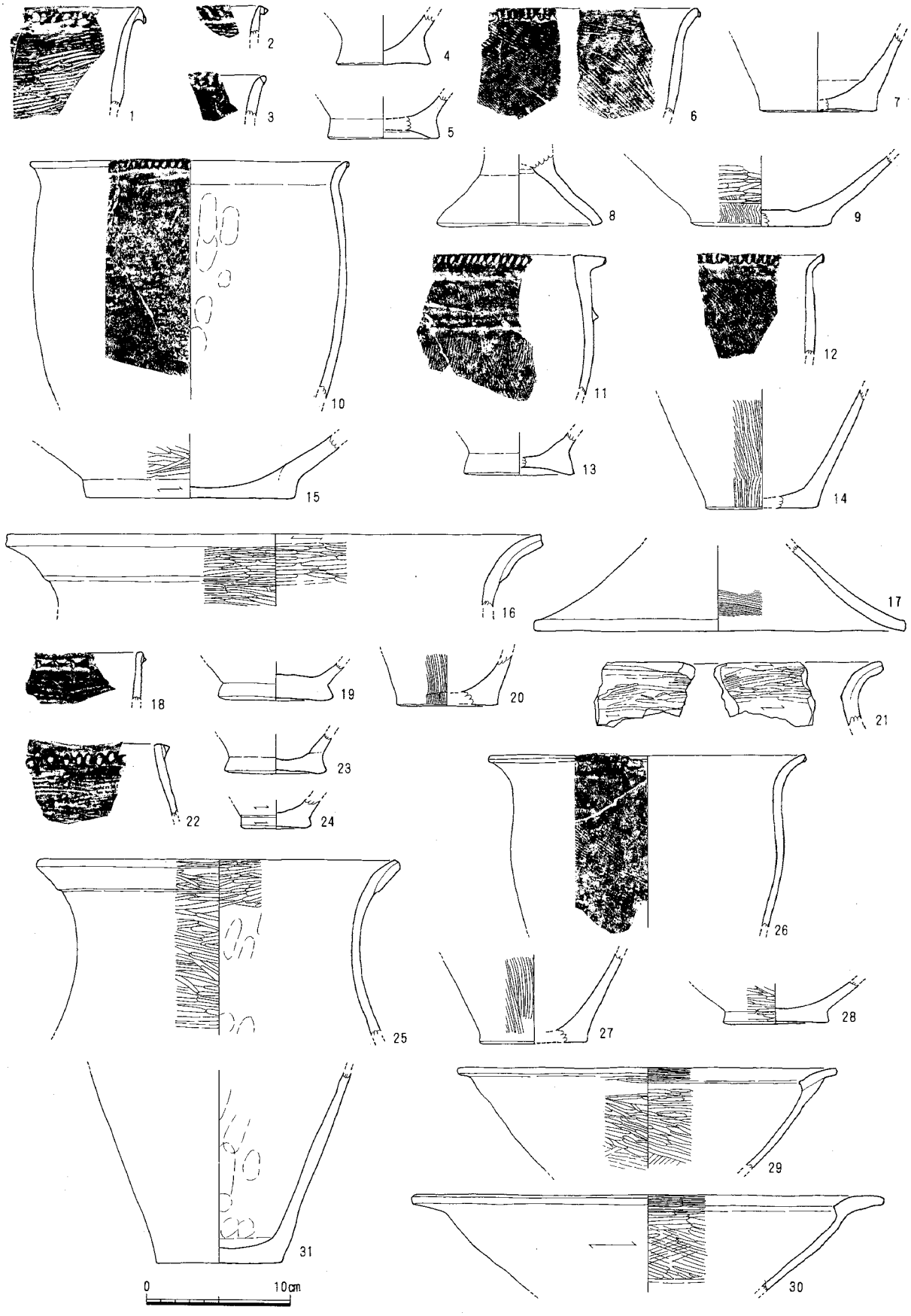


Fig.131　164号～172号土壙出土土器実測図（1/4）

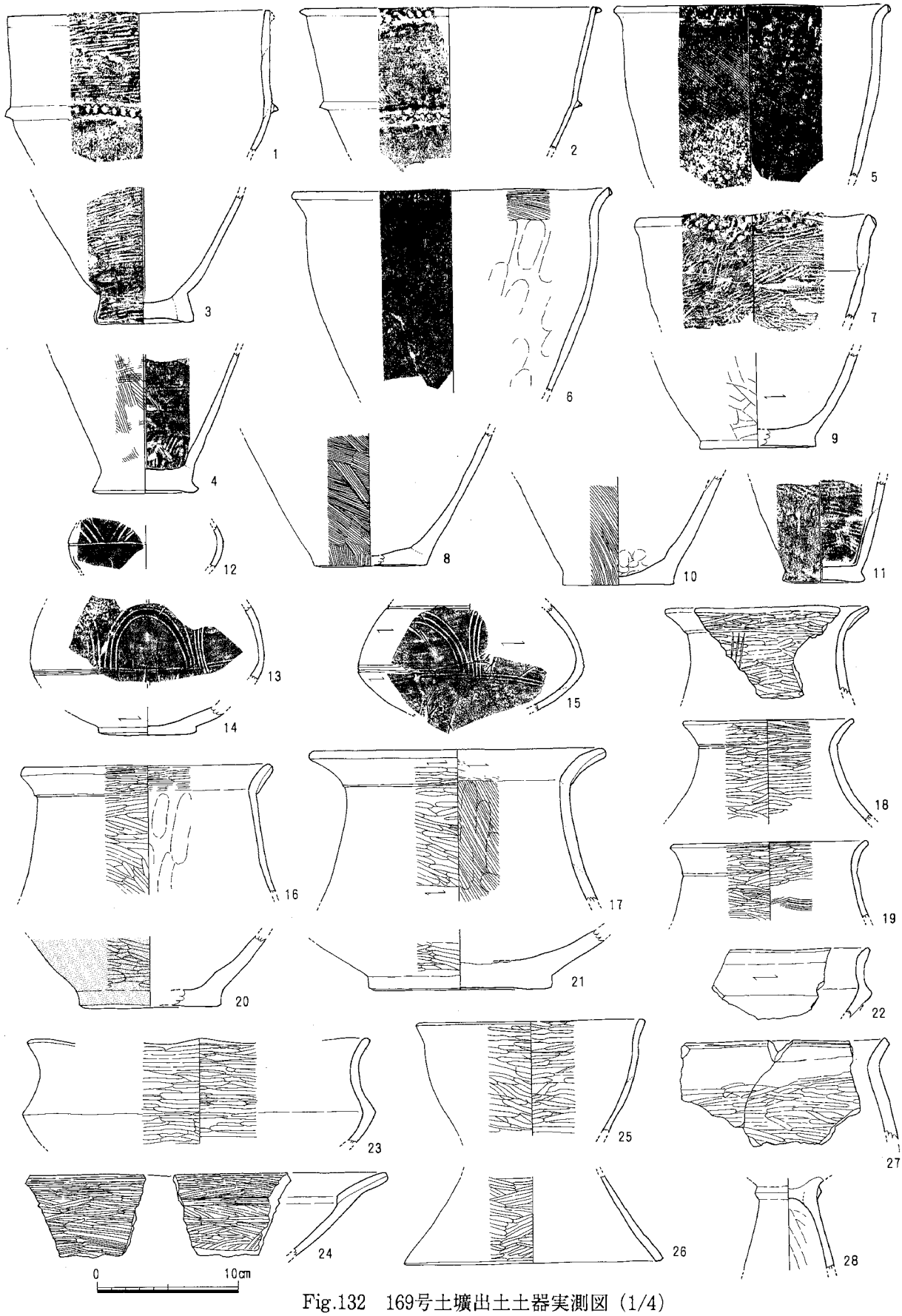


Fig.132　169号土壙出土土器実測図（1/4）

2）竪穴住居跡の調査

14号住居跡(Fig.133)

調査区の西側から検出した隅丸長方形の住居跡である。15号住居跡と重複している。長軸3.46m、短軸3.09m、深さ0.19mを測る。床面はほぼ平坦で中心部に径30cm、深さ52cmピットがある。

15号住居跡(Fig.133)

14号住居跡に切られて、その南に位置する略楕円形の住居跡である。長軸4.7m、短軸約3.5m、深さ0.1mを測る。南側は綺麗な円弧を描くが北側は浅く不明瞭であるが歪になっている。住居跡の中央部に0.8mの範囲で焼土、木炭を少量含んだ土層が確認できた。数cmの厚さで、土壙は確認出来なかった。主柱穴は認められないが南部の壁際にはピットが並んで確認できた。

16号住居跡(Fig.133, PL.35)

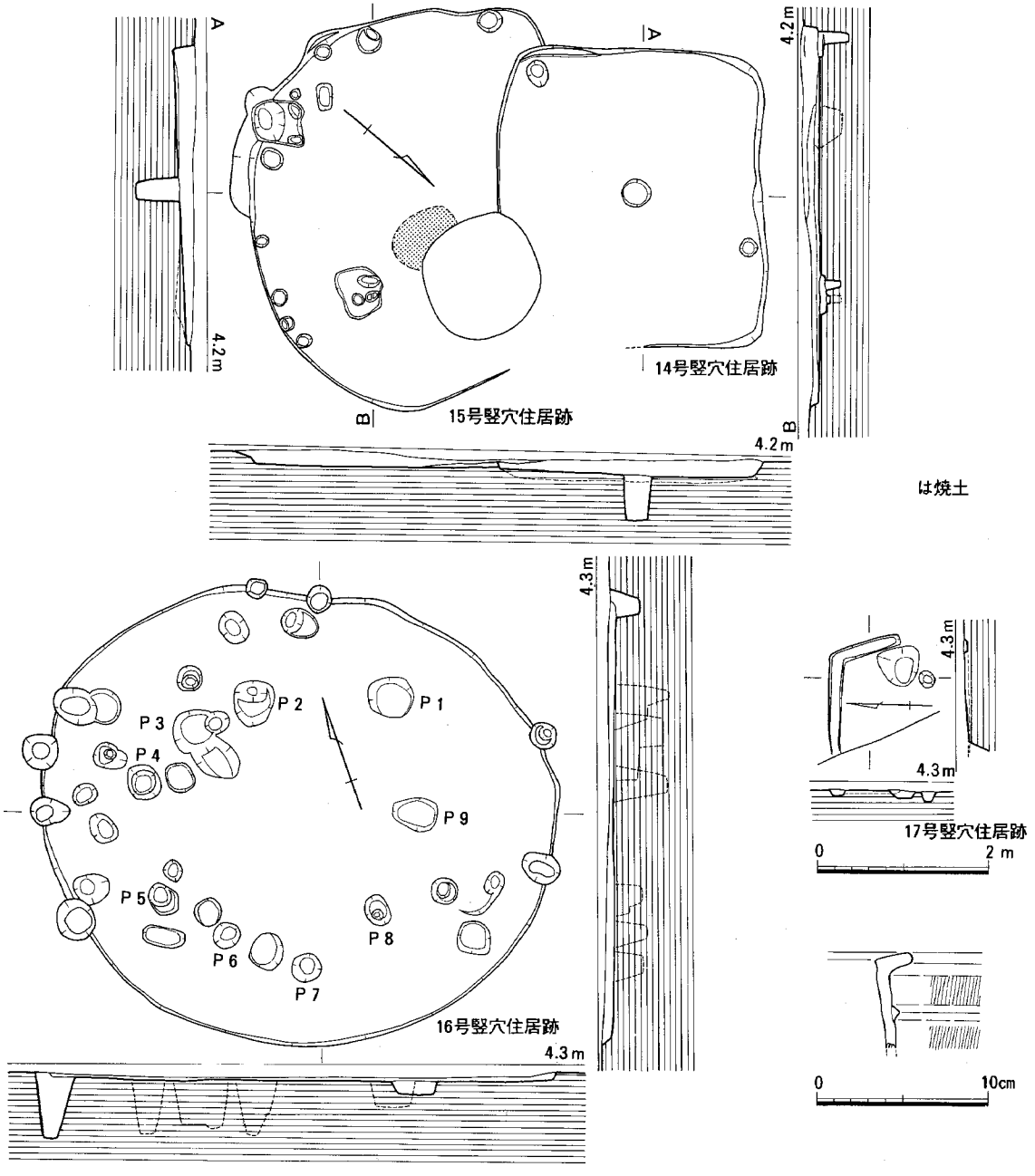


Fig.133　14号～17号竪穴住居跡・出土遺物実測図（1/80,1/4）

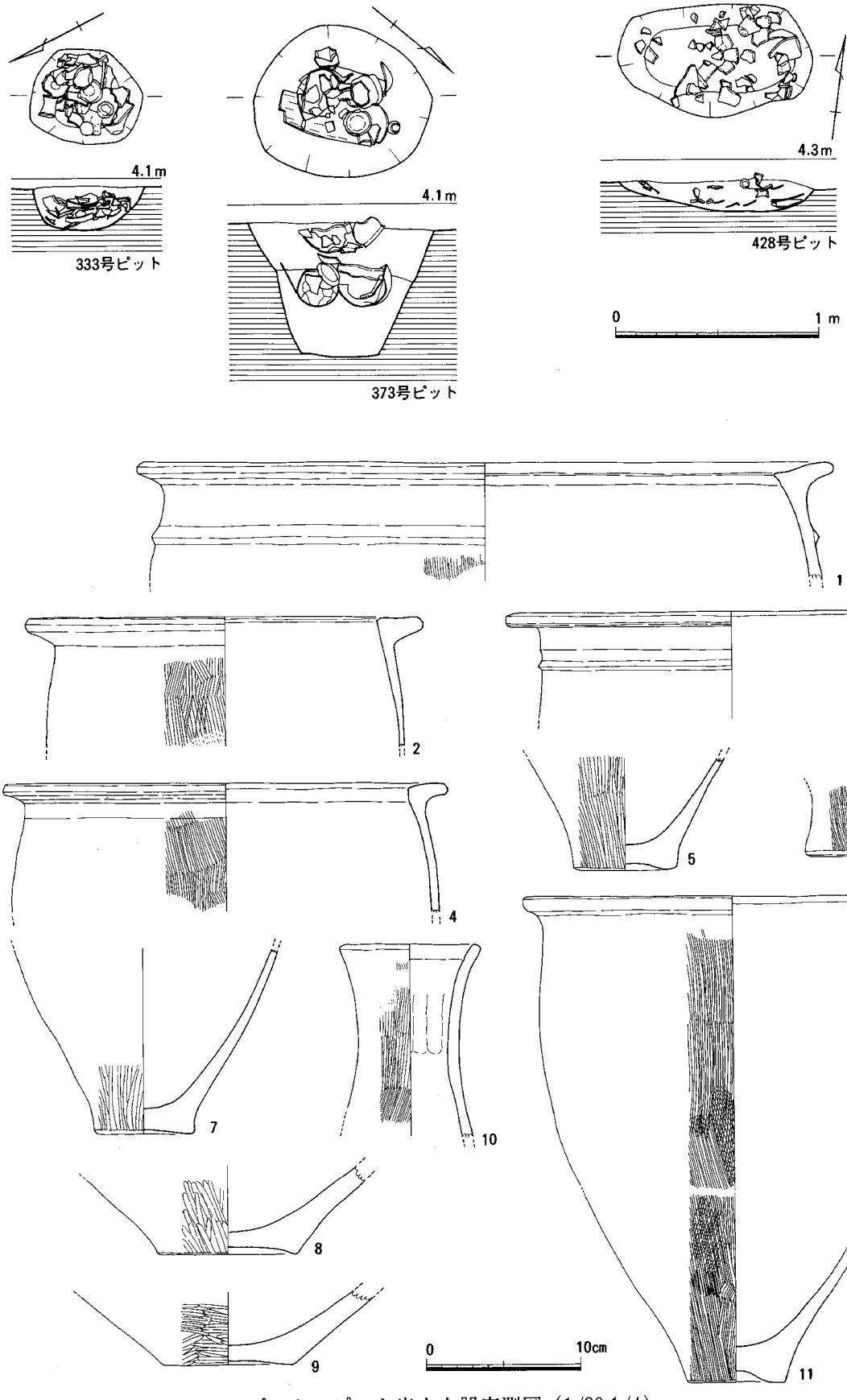


Fig.134　ピット・ピット出土土器実測図（1/30,1/4）

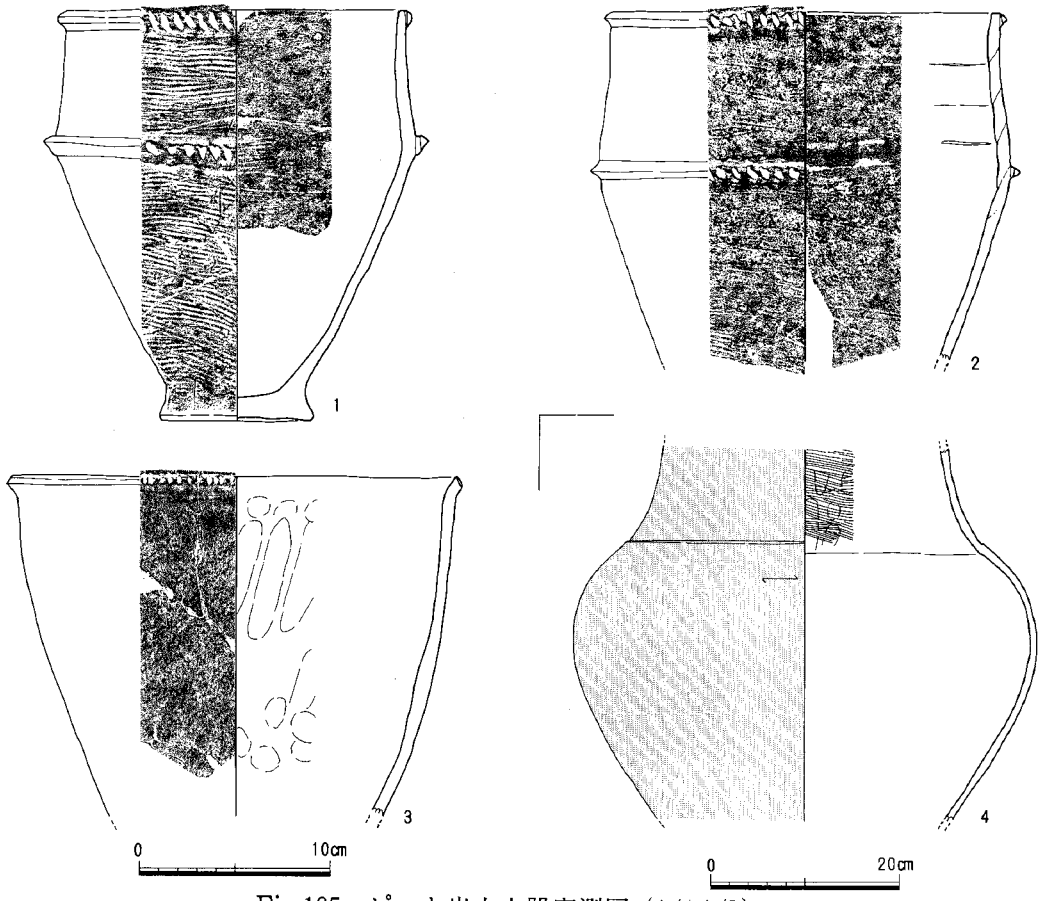


Fig.135　ピット出土土器実測図（1/4,1/8）

調査区の中央部より少し西に寄った位置で確認した円形住居跡である。東西にやゝ長い楕円形を呈し、その規模は長軸5.98m、短軸約5.2m、深さ0.05mを測る。床面はほぼ平坦で主柱穴はP1～P9が深く、それにあたると考えられる。壁際のピットは少なく、壁と重複するピットが見られ住居跡に伴うものであろう。実測可能な土器が1点出土した。甕の口縁部で上面に平坦面を造りだし、口縁下に突帯を巡らす。外面は刷毛目調整で内面は撫で調整を施す。弥生時代中期前半であろう。

17号住居跡(Fig.133)

調査区の南端に検出したL字に屈曲する溝状の遺構である。竪穴住居跡の屋内周溝と考えられ一応住居跡とした。幅15cm、深さ5cmを測る。

3）ピットの調査

土壙、住居跡などの他にピットが多数調査したが建物などの復原までには至らなかった。その中で比較的大きめのピットから多くの土器が出土したのがある。土壙とした方が適当であるかもしれないが、ピットとして以下記述する。

SP－333(Fig.134)

略楕円形のピットで、その規模は54×43cm、深さ21cmを測る。上層には僅かな土器が混じっていたが床面近くではピット全体が土器に覆われていた。いずれも破片ばかりで完形品は見られない。ピット内に壊れた土器を投棄したものである。1～10がピット出土の土器である。1は内面への発達が著しく、2は三角貼付突帯に近い。3は外側への張出しが強く、口縁下に小さな三角突帯を巡らす。胴部

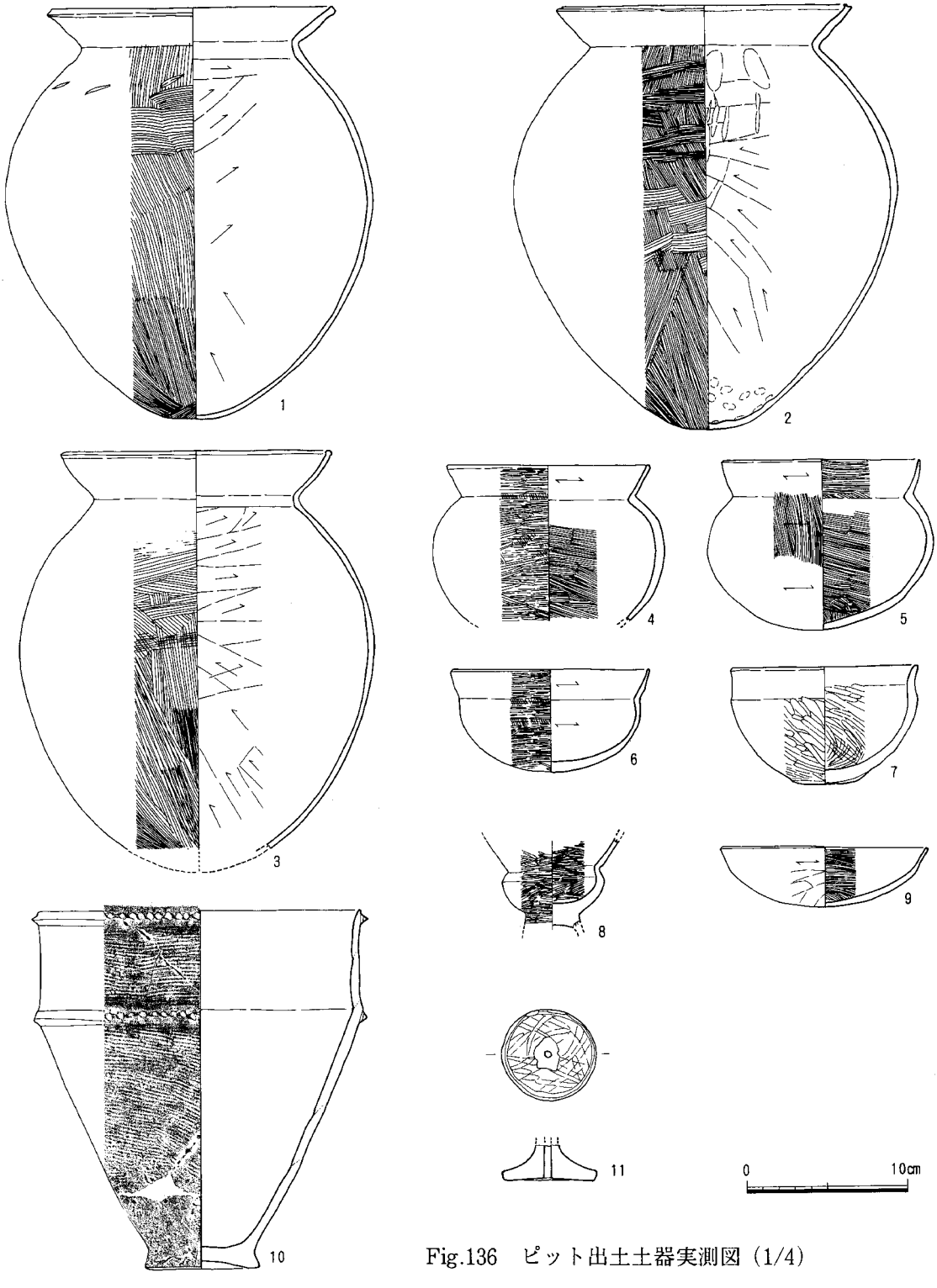


Fig.136　ピット出土土器実測図（1/4）

外面は縦方向の刷毛目、内面は撫で調整を行なう。弥生時代中期前半のピットである。

SP－373(Fig.134,136－1～7)

略楕円形のピットで、その規模は87×74cm、深さ65cmを測る。古墳時代前期前半の土器でⅠ面で検出出来なかったピットである。床面から25cmの高さまで比較的多きい破片が纏まって出土した。1、2は甕で底部を尖り気味にし、胴部上半に最大径をもち、内湾して立ち上がる口縁で、口唇部を肥厚さ

せる。胴部内面は篦削り、外面は縦方向の刷毛目調整の後胴部中位から上半に横方向の刷毛目調整を施す。3 は長胴で丸底の甕である。

SP－428(Fig.134)

隅丸長方形の浅いピットである。断面皿状の浅い掘り方で、その規模は87×74cm、深さ65cmを測る。小さな破片が多く復原出来たのは甕1点である。口縁部の上面を平坦にし、内面へ傾斜する。外面は刷毛目調整で底部は上げ底である。他に弥生時代前期の壷、甕等がある。11は紡錘車と考えられる土製品である。円盤状に丸く仕上げ片面を円錐状に丸く尖らし、中央に径3.5mmの孔を穿つ。円盤状の上面の縁には二条の沈線を巡らし、全面を研磨し、黒色顔料を塗布している。

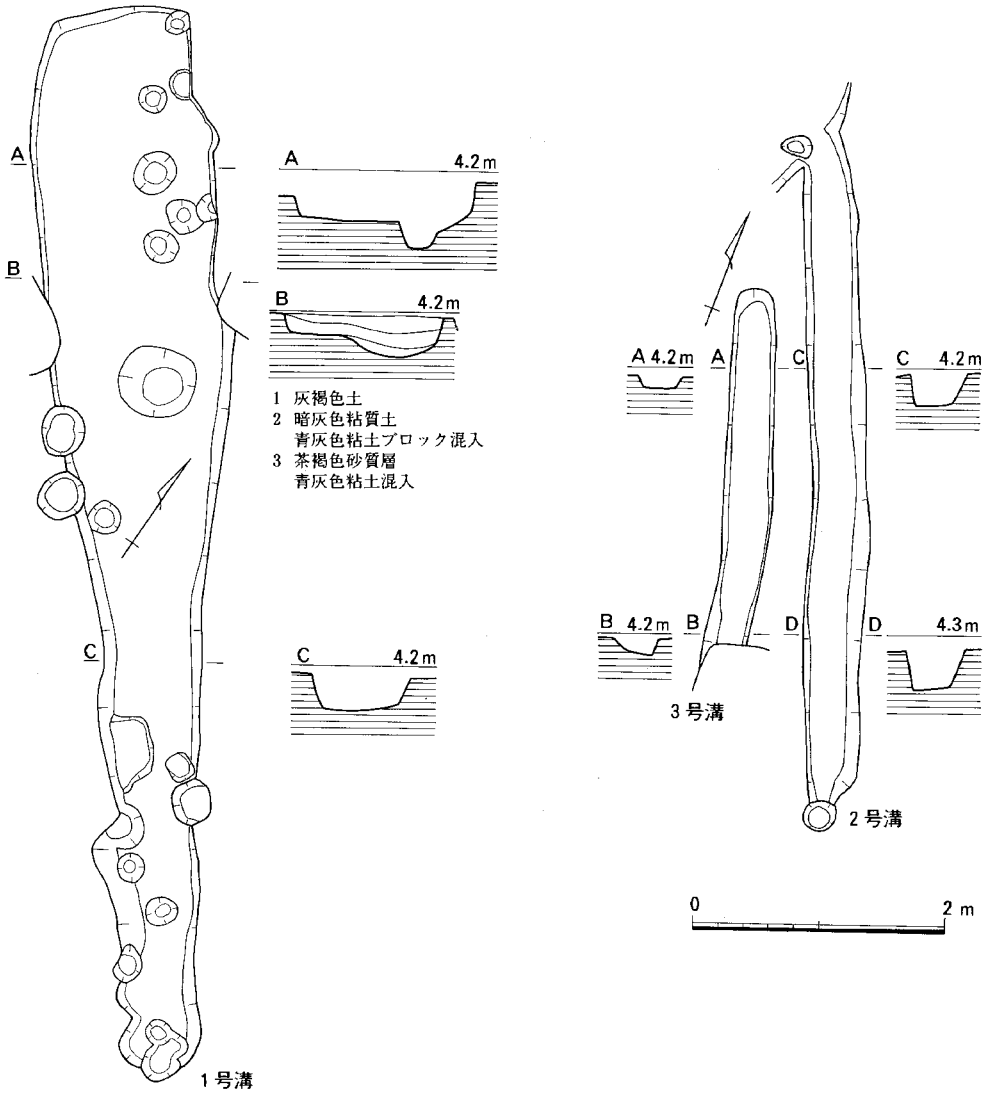


Fig.137　1 ～ 3 号溝状遺構実測図（1/60）

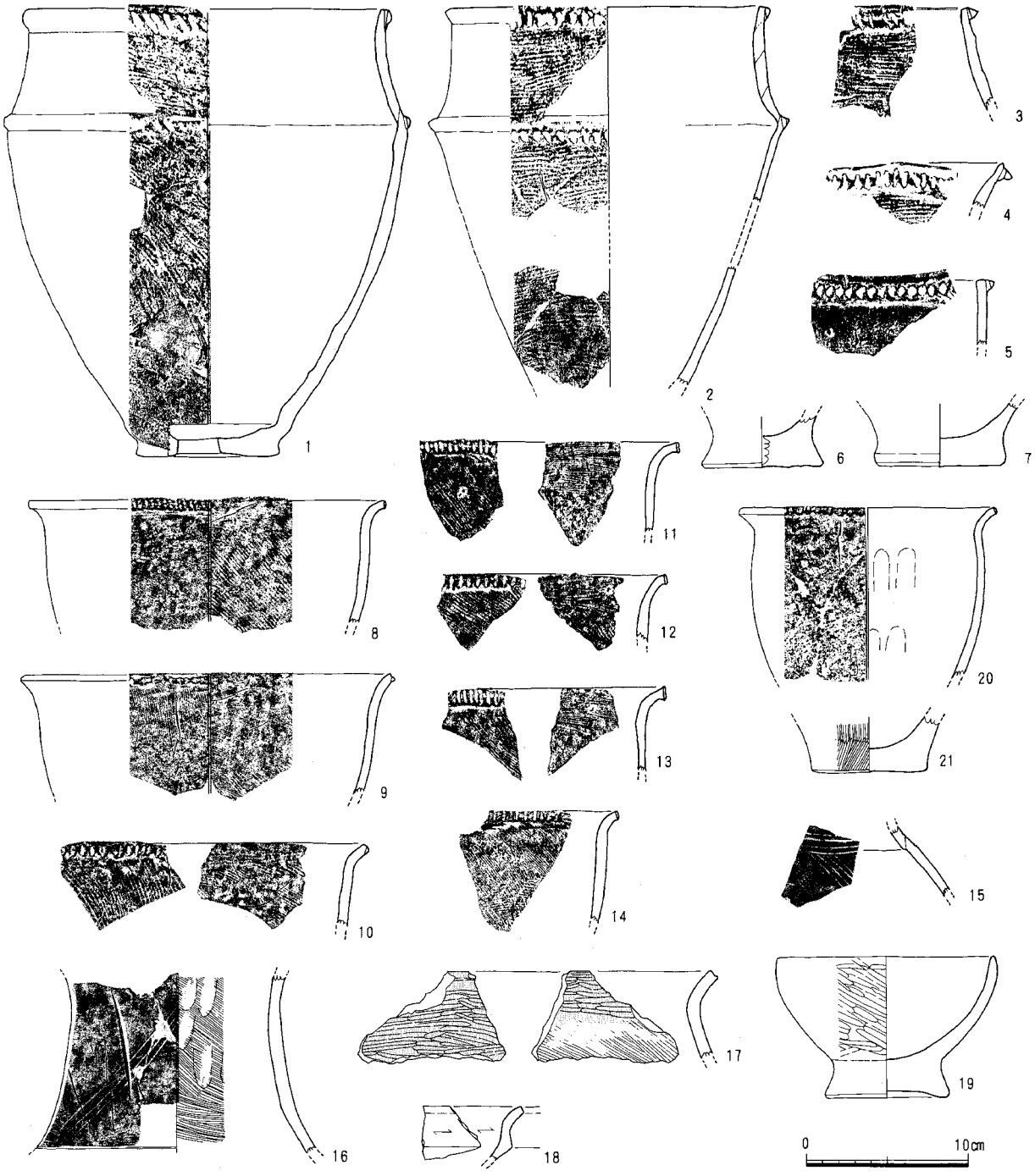


Fig.138　1～3号溝状遺構出土土器実測図（1/4）

4）溝状遺構の調査

Ⅱ面の調査では3条の溝状遺構を検出した。いずれも弥生時代前期前半の遺構であるがその性格については明らかではない。

1号溝状遺構（Fig.137,138－1～17）

調査区の中央部に確認した溝状遺構である。規模は最大幅1.42m、長さ8.4m、深さ0.3mを測る。直線的に延びるが幅は南西部で幅を狭め約0.8mとなる。覆土は暗灰色粘質土、茶褐色砂質土で青灰色粘土を含んでいる。土器は全体に分布するが中央部より南の幅を狭めた位置から比較的纏まって出土

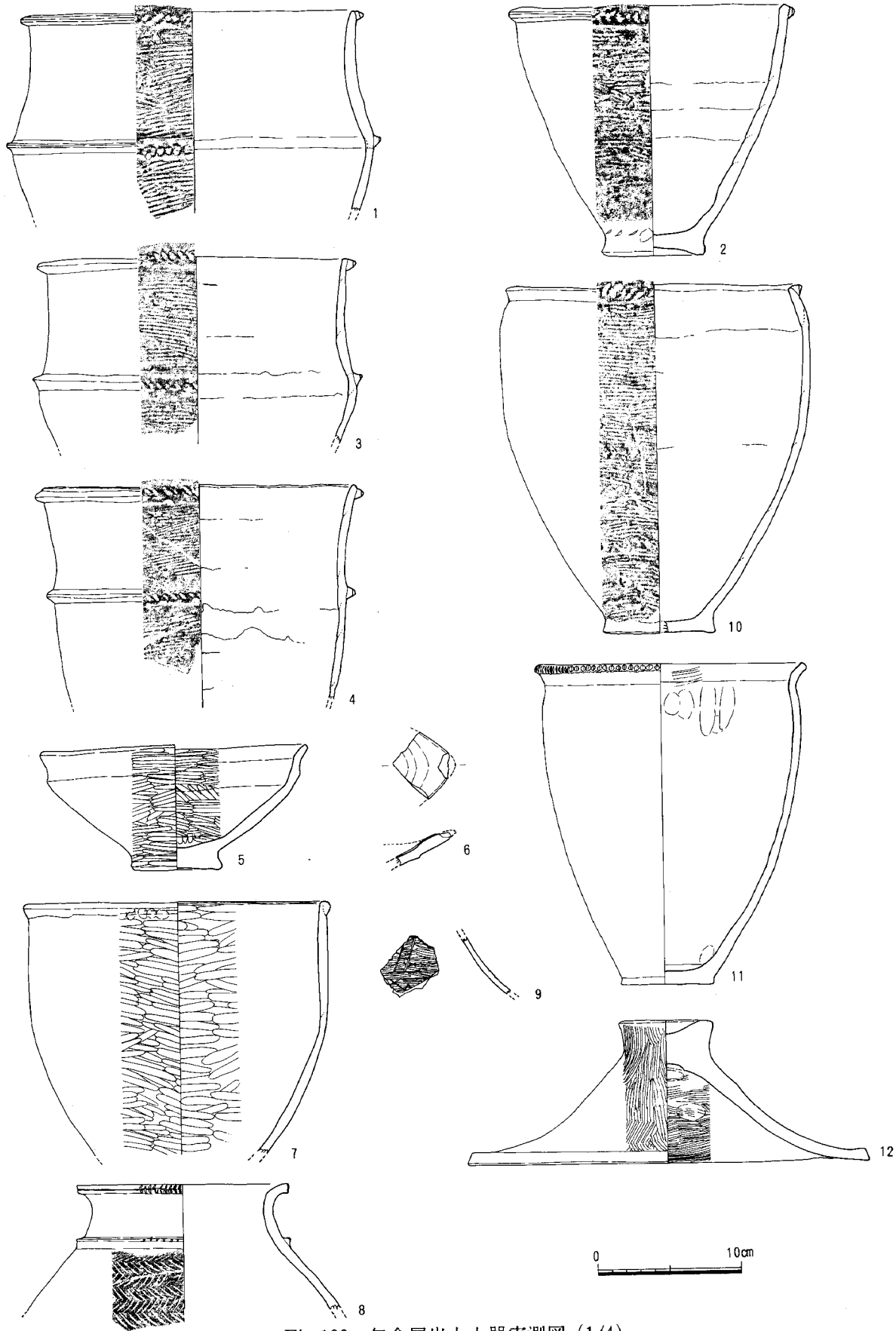


Fig.139　包含層出土土器実測図（1/4）

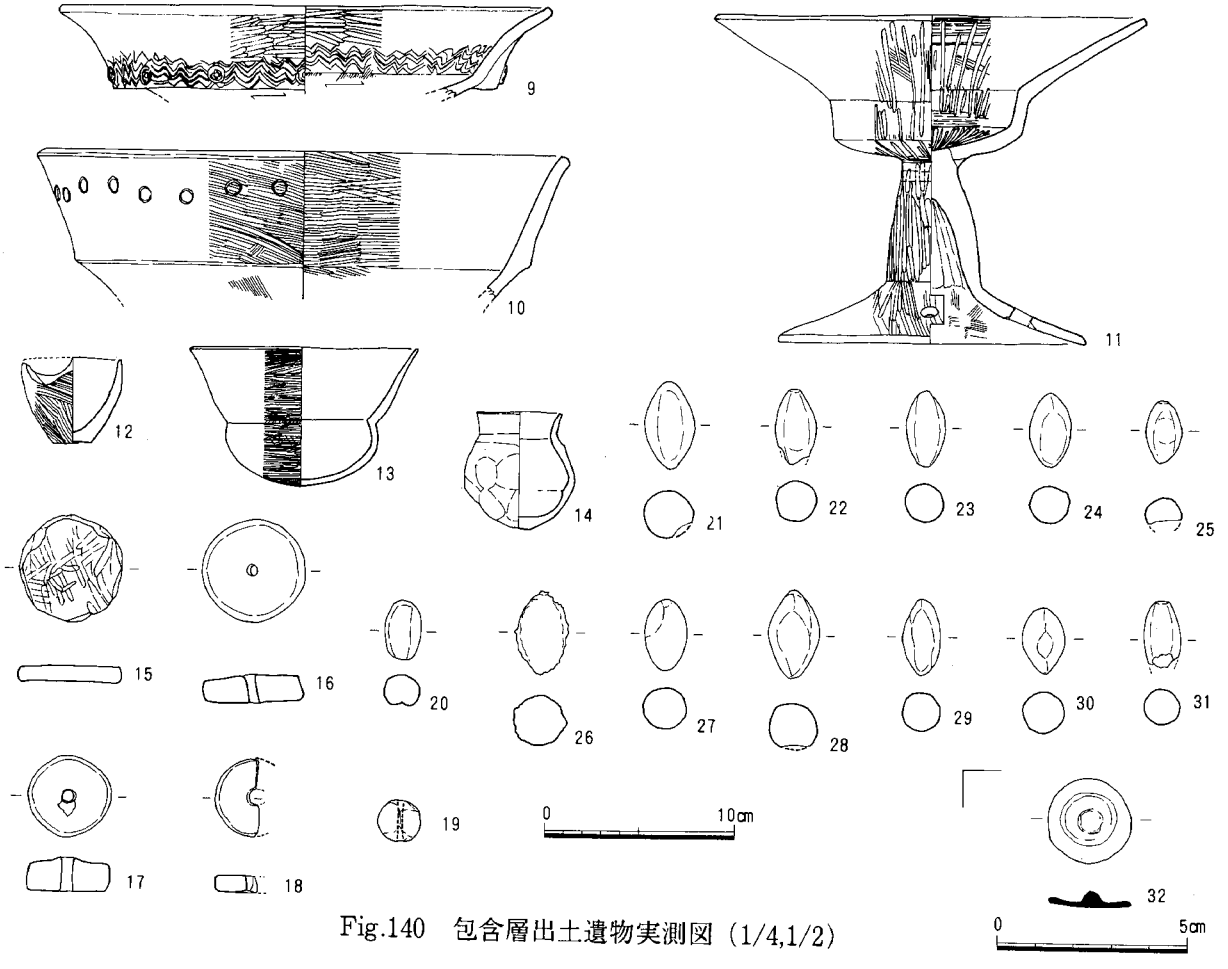


Fig.140　包含層出土遺物実測図（1/4,1/2）

した。１～７は刻目突帯文土器である。１は外面に煤も付着し、内面に焦げ跡が残るが焼成後の穿孔が見られ、甑として転用されている。底径が大きく器壁も全体的に厚く不格好な形態である。３～７は口縁部及び底部の破片で、外面は条痕調整である。８～14は口唇部に刻み目を有する如意状口縁の甕である。９、10は口唇部下端に刻みを施すが他は全体に刻みを施す。

２号溝状遺構（Fig.137,138－19）

３号溝と同じに171号土壙とⅠ面の17号住居跡の間に位置する小さな溝状遺構である。規模は幅0.45m、長さ5.4m、深さ0.26mを測る。19は鉢である。円盤状の厚い底部で上げ底である。外面は研磨を行なうが内面は磨滅のため調整は不明。底部の造りから突帯文と同じ時期と考えられよう。

３号溝状遺構（Fig.137,138－20,21）

３号溝状遺構の西側に平行して延びる遺構である。規模は幅0.40m弱、長さ3.0m、深さ0.10mを測る。如意状口縁の甕が出土している。ゆるやかに膨らみをもつ胴部から口縁部は外反し口唇部全体に刻みを施す。外面は剥離のため調整は不明、内面は指撫での跡が残る。

５）その他の遺物（Fig.139）

１～５は調査区の北西部、微高地の傾斜面から纏まって出土した土器群である。胴部に刻み目突帯を巡らす夜臼式の甕である。５は内外面を研磨している鉢、６は波状口縁を呈する鉢で平面形が四角になるものであろう。７～31はⅡ面掘り下げ中に出土した包含層出土の遺物である。紙面の都合でその一部を記載した。７は口縁部を折り返した土器である。

（５）出土石器の調査

1）７次出土の石器

溝状遺構出土の石器（Fig.141～142, PL.67）

1 不純物の混じる漆黒の黒耀石を素材とした凹基無茎式の石鏃である。片脚と先端部を欠損し、裏面に主要剥離面を残す剥片鏃の部類に属する。表面は周辺部からの押圧剥離により丁寧に仕上げているが、裏面は中心部を除き周辺部に押圧剥離を施す。素材となった剥片の打面側を先端部としている。長さ2.2cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.16g。2 凹基無茎式の石鏃で、基部の抉りは浅く弧状を呈する。調整は両面に行われており、裏面基部からの剥離は石鏃の1/3 程度まで達する。漆黒の黒耀石を使用。長さ2.6cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.51g。3 長身の石鏃で基部は凹基を呈し、抉りは浅い。調整は両面に行われており、裏面は主要剥離面の一部を残し、打面側を基部とする。長さ3.3cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ2.17g。4 凝灰岩製の小型有茎式磨製石鏃である。断面菱形を呈し、全体に丁寧な研磨を施す。先端は欠くが、中央の鎬は先端から基部まで一直線に通るものと思われる。図面上の基部中央の面は、研磨痕が確認できないこと、また光沢のある新しい面であること等から後世にできた傷と判断した。茎側面は浅い溝状の粗い研磨痕が認められる。長身で端正な形状を呈する。SD－01、Ｄ－４区上層出土。現長4.8cm、幅1cm、厚さ0.5cm、重さ3.02g。5 先端及び茎部下端が折断された凝灰岩製の石剣である。裏面は剥が落し、表面のみが遺存する。中央の鎬はシャープさに欠けるが、断面は菱形を呈するものと思われる。全体的に研磨され、刃部から茎に至る抉りも部分的ではあるが、丁寧な研磨を施す。刃部は刃こぼれが随所に見られる。現長4.6cm、幅3.4cm、厚さ0.5cm、重さ10.86g。6 凝灰岩製石剣の破損品で、刃部の研磨痕を僅かに残すが、著しい風化により原形をとどめない。現長3.8cm、幅3.9cm、厚さ0.6cm、重さ12.51g。7 桂岩製石剣の破損品で、裏面も欠失する。表面のみの遺存であるが、研磨によりツルツルした面を残すことから、製作時は丁寧に仕上げられたものと思われる。現長3.9cm、幅2.8cm、厚さ0.4cm、重さ7.37g。8 凝灰岩製石剣の破損品で、風化のため研磨痕は確認できない。中央の鎬もシャープさに欠ける。両刃縁は平行である。現長3cm、幅3.6cm、厚さ0.8cm、重さ10.08g。9 桂岩製の扁平片刃石斧である。表・裏面の一部は剥離され、残る面は丁寧な研磨により光沢を持つ。刃部角度は58度である。現長5.2cm、幅3.8cm、厚さ1cm、重さ33.58g。10 一部を欠損する頁岩製扁平片刃石斧である。両側辺を除く全ての面に研磨を施し、丸みを持った石斧に仕上げている。刃部角度は48度である。11 柱状片刃石斧で刃部のみ遺存する。石材は桂岩で丁寧な研磨を施す。刃部は「レ」の字状を呈し、鋭利な刃部に仕上げられている。刃部角度は56度である。12 頁岩製の柱状片刃石斧の刃部で、下端に研ぎ出しによる稜を持つ。刃部角度は52度である。13 頁岩製の柱状片刃石斧の欠損品である。前主面及び後主面は丁寧な研磨を施すが、前主面の一部に研磨された凸部を残すことから、この凸部が本来の石斧の面で、欠損後、現在の前主面に成形・研磨したものと考えられるが、凸部を残した意図は不明である。刃縁は刃こぼれが認められる。14 凝灰岩製の紡錘車の欠損品で、約1/4強の残存である。中央の孔は両面から穿ち、全面を研磨する。15 凝灰岩製の三角形を呈する石包丁である。風化のため研磨痕は認められない。16 凝灰岩製外湾半月の大型石包丁で約1/2は欠損する。基端は平坦を呈し、両面に稜をもち縦の研磨を施す。体部は粗い縦横位の研磨を施すが、敲打による調整痕を両面に残す。刃縁は特に丁寧な研磨を施す。穿孔は１ケ所で半分を欠く。しかし欠損した部分から二孔の可能性も考えられ、石包丁本来の大きさを窺い知ることができる。17 輝緑凝灰岩製石包丁の欠損品でその大半を失う。41と形態・石材及び穿孔の位置・研磨状況等が非常に類似しており、41も大半を欠損するところから同一品と考えられる。しかし、接点がないこと、遺構の違い等から別の番号を与えた。18 凝灰岩製石包丁の欠損品である。基部が直線

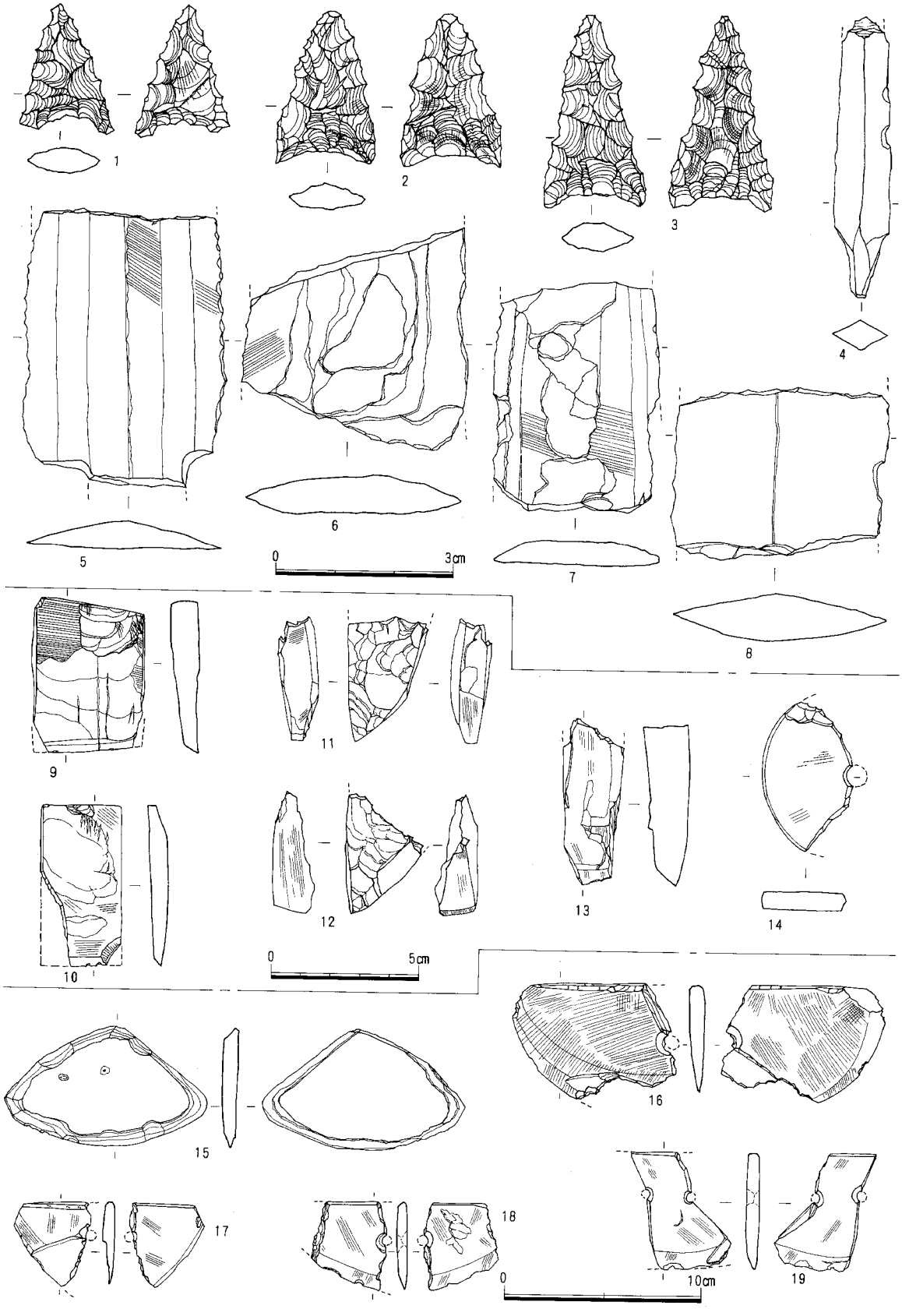


Fig.141　第7次調査1号溝状遺構出土石器実測図1（1/1,1/2,1/3）

的で刃部が外湾するところから、外湾刃半月形を呈するものと思われる。研磨は全面で、基端は丸みをもつ。孔は半分欠失するが、両面から穿たれている。刃部は片面からの研ぎ出しにより「レ」の字状を呈する。

19 凝灰岩製石包丁の欠損品である。孔は接近する位置に二ケ所配し、どちらも半分は欠く。基端は丸味を帯びる。風化が進むが、研磨痕は僅かに残る。20 断面が楕円形を呈する玄武岩製の太型蛤刃石斧である。基部の一部に剥離痕・敲打痕を残すが、基端以外は研磨され、特に刃部は丁寧で57度の刃部角度をもつ鋭利な刃縁を形成している。基端は剥離により尖基を呈する。刃縁の一部に刃こぼれがあるが、ほぼ完形品である。現長19.5cm、幅7.9cm、厚さ4.4cm、重さ1,103.5g。21 玄武岩製太型蛤刃石斧の破損品である。敲打を終了し、研磨段階に入る直前のもので、破損後両側辺に調整剥離を施す再加工途中のものと思われる。22 扁平な円礫を素材とする磨石で、上部は切断されている。基端部は平坦面を有するが、この面が主な使用面であり、滑らかである。裏面に火を受けた痕跡を有する。石材は花崗岩である。23 花崗岩製磨石で上・下端は切断している。器表面は滑らかで、裏面にはあばた状の敲打痕が観察される。24 扁平な円礫を素材とする複合石器である。表・裏面は凹みを有し、周縁の一部は潰れ痕及び擦痕が認められ、磨石及びたたき石の二種の用途が窺える。石材は玄武岩である。25 砂岩製の凹石で、使用頻度が高い。表裏面に深い凹みを有する。26 大型の結晶片岩円礫を素材とした複合石器である。器表面は滑らかで、中央には浅い痘痕状の凹みを有することから、石皿及び磨石の二種の機能をもつ。27 隅丸方形を呈する砂岩製の砥石である。使用面は全面で、小さな面をいくつも有する。28 方形を呈する砂岩製の砥石で全面を使用している。上端及び側面は溝状の擦痕を有する。以上の28点はSD－01から出土した。30 扁平片刃石斧で基部の一部を欠損する。基部上位より下位が薄くなる。後主面は平坦で、刃部角度が48度のシャープな刃部に仕上げられている。研磨は丁寧で、基部は斜め、刃面及び基端は横位が主体である。側面に研磨は施されていない。上位に剥離痕を有し、その周辺は粗い研磨痕が顕著に認められる。石材は桂岩である。31 扁平柱状片刃石斧の完形品である。全面に丁寧な研磨を施し、滑らかで光沢がある。基部の厚さにバラツキがあり、左上端が厚く、右下端が薄い形態を呈する。後主面左側は研磨により丸味を持たせる。刃部の後主面は平坦で、刃部角度41度の鋭利な刃部に仕上げられている。基端は一部欠損するが、丸味をもつ。石材は桂岩である。全長5.1cm、幅1.8cm、厚さ0.8cm、重さ13.87g。33 黒耀石の石核である。剥離面、リング、フイッシャー等が確認出来ないほど風化が著しい。時期的に古いタイプであるが、上下端からの剥離や打面の形成等が認められるところから縄文時代後期に見られる鈴桶技法をもつ石核である。34 凝灰岩製の紡錘車で風化が著しい。中央に両面から穿つ孔を有する。また、周縁近くも孔を有するが半分は欠損している。周縁の一部に研磨が残り、この位置からすると外側の孔は縁より中に入る物と思われる。36 凝灰岩製の紡錘車で全面に研磨を施す。中央に孔を有し、その周り及び周縁は擦痕が認められ、使用頻度の高さが窺える。37 滑石製紡錘車で右半分は欠損する。研磨は周縁だけ認められる。孔は両面から穿っている。38 滑石製紡錘車で約1/4の残存である。研磨は全面で、中央の孔は両面から穿つ。40 杏仁形を呈する凝灰岩製の石包丁である。基端は、研磨を施した平坦な面の一部を残して他は欠損する。上位の左右に両面から穿つ孔を有するが、両方とも半分は欠損する。刃先は右側に多少残すが、他は潰れた状態にあり、その磨滅度から使用頻度の高さが窺える。研磨は全面で特に刃部は丁寧で光沢がある。41 外湾刃半月形を呈する輝緑凝灰岩製の石包丁である。基部は平坦で、刃部との境も隅を落とし平坦に仕上げる。研磨は全面に施す。穿孔は左右対称に二ケ所と思われるが、半割されているため、一ケ所しか残存しない。両面から穿たれたものである。43 玄武岩製太型蛤刃石斧の刃部である。丁寧な研磨を施している。44　石材は角礫岩で、角礫の周縁を敲打により成形後、両側辺

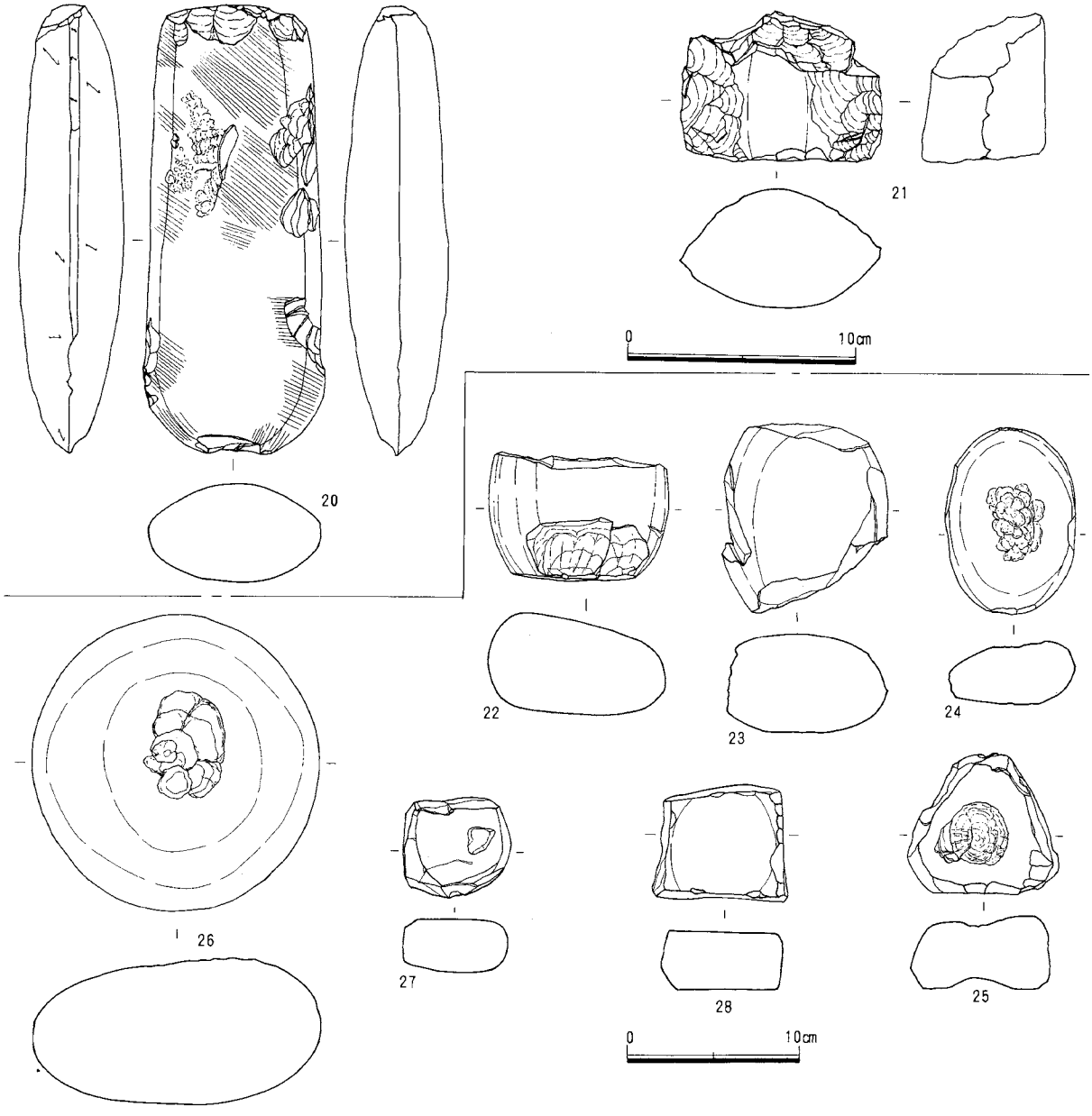


Fig.142　第7次調査1号溝状遺構出土石器実測図2（1/3,1/4）

及び上下端を両面より窪ませたもので石錘とした。全面にも敲打痕を残す。49 扁平な長方形を呈する小型の砥石である。硬質砂岩製で全面を使用している。45 花崗岩製磨石の欠損品で、上下端及び裏面を欠く。器表面は使用によりツルツルしている。52 硬質砂岩の扁平な礫で、全面に摩擦痕を有することから磨石とした。下端は潰れ痕を有する。51 粘板岩製で裏面を欠損する砥石である。火を受けた痕跡をもち、三面を使用している。小型できめ細かく、仕上げ用として使用したものと思われる。SD－02から出土したものは36·37·40・41・44·47、SD－04からは30·31·33·34·38·43·45·51·52が出土した。

土壙・井戸・Pit出土の石器（Fig. 148～149, PL. 67～69）

29　小型の柱状抉入片刃石斧である。刃部は横位主体の研磨を施し、後主面刃先近くで緩い弧状をなし、刃部角度58度をもつ。前主面・後主面は研磨を施すが、前主面は研磨面が刃面より狭く、両側面の敲打痕が前主面までおよぶ。後主面の研磨面も最大幅が刃部にあり、基端近くの抉入部で極端に狭くなる。基端は研磨を施すが、敲打痕がかすかに残り、刃面ほど滑らかではない。また、後主面側基端は潰れている。側面は敲打痕が殆どを占め、一部に研磨痕が認められる。左側面下端の研磨は前主面・後主面の研磨と接しており、後主面からの観察では、研磨面を敲打により消去した様相を呈する。また、両側面の基部上位に調整剥離を施すことから、再生された可能性も考えられる。石材は頁岩でSK－06下層出土。32 頁岩製の柱状片刃石斧で基端は欠損している。前主面・後主面は研磨により滑らかに仕上げられている。刃部は、刃先が若干斜めを呈し、丸味をもつ。これは刃こぼれを研磨して再生させたものと考えられる。幅0.7cm、厚さ1.3cmと幅より厚さが厚いタイプで長さ7cm、刃部角度49度で鋭利に仕上げている。SE－01出土。35 中央に両面から穿つ孔を有する紡錘車である。凝灰岩製であるため風化が著しく、このため周縁及び器表面の研磨は認められない。SK－07付近から出土した。39 滑石製紡錘車で径2.1cmと非常に小型である。研磨は全面であるが、周縁部は大まかで面取が残る。中央の孔は両面から穿つ。42 凝灰岩製の石包丁の欠損品で、風化のため研磨は確認できない。39と42がSK－16出土。46 黒耀石製の使用痕のある剥片である。多角的剥離が見られる剥片で、末端部に細かなリタッチが認められる。SK－11より出土。47 玄武岩製の太型蛤刃石斧で、基部を欠損する。刃部は打裂痕が認められ、刃部再加工の痕跡を残す。SP-27から出土。48 硬質砂岩製の断面五角形を呈する大型の砥石で、全面及び側面に稜を持つため七面を有する。上下端は欠損するが、この状態で強い火を受けたため煤が付着する。又、石質が脆くなっている。SK－02出土。50 砂岩製の砥石で、三面を使用している。表面は浅い痘痕状の窪みを持つ。SE－05出土。

包含層出土の石器（Fig.145, PL. 68）

53 黒耀石製石鏃の未製品である。表面の調整剥離は大まかで、裏面はエッジのみ細かな連続する剥離を施し、主要剥離面の大部分を残す。素材となった剥片の打面側を基端とし、剥片剥取の際の打裂痕を残す。54 サヌカイト製の尖頭器状石器である。調整は周縁のみで、主要剥離面及び大剥離面を大きく残す。基端は平坦を呈する。55 凝灰岩製の石包丁である。刃部しか遺存していないが丁寧な研磨を施す。56 凝灰岩製の石包丁で両端を欠損するが、背部が直線を成すところから外湾刃半月形と判断できる。体部は身が厚く、刃部は両面からの丁寧な研磨により刃部角度43度の鋭利な刃縁に仕上げている。孔は中央に位置し、外孔径1.9cm、内孔径1cmと大きく、両面から穿たれている。研磨は裏面が粗い。又、器表面の観察から他の磨製石器破損後の再加工品の可能性も考えられる。57 凝灰岩製の石包丁で背部は平坦を呈する。刃部上位に抉入部を有し、この部分より下方に外湾気味に刃部が形成されている。しかし大半を欠損するため全容は知り得ない。研磨は全面に施し、やや風化が進んでいる。58 玄武岩製太型蛤刃石斧で、刃部は欠損している。横断面は楕円形を呈し、研磨段階の

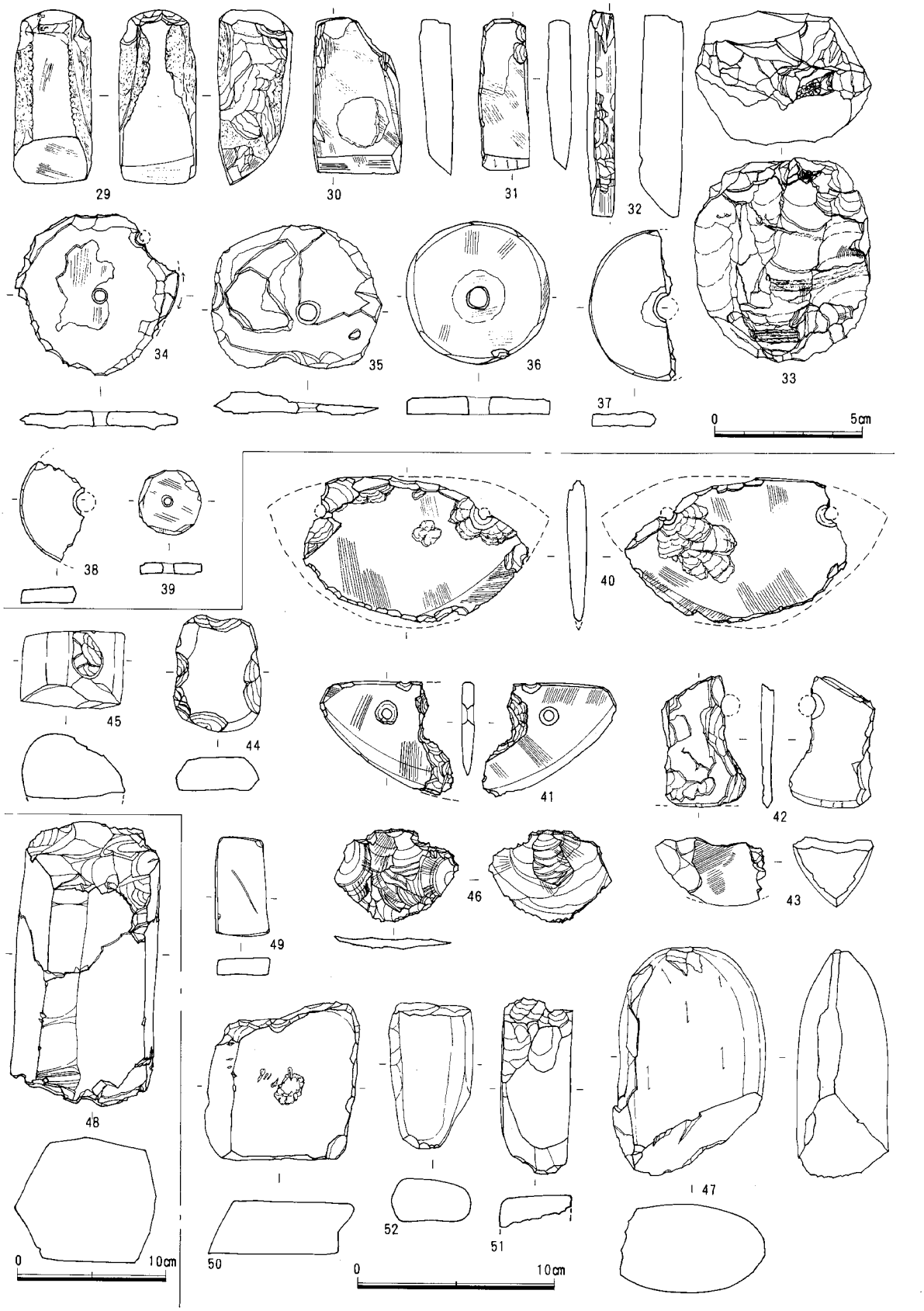


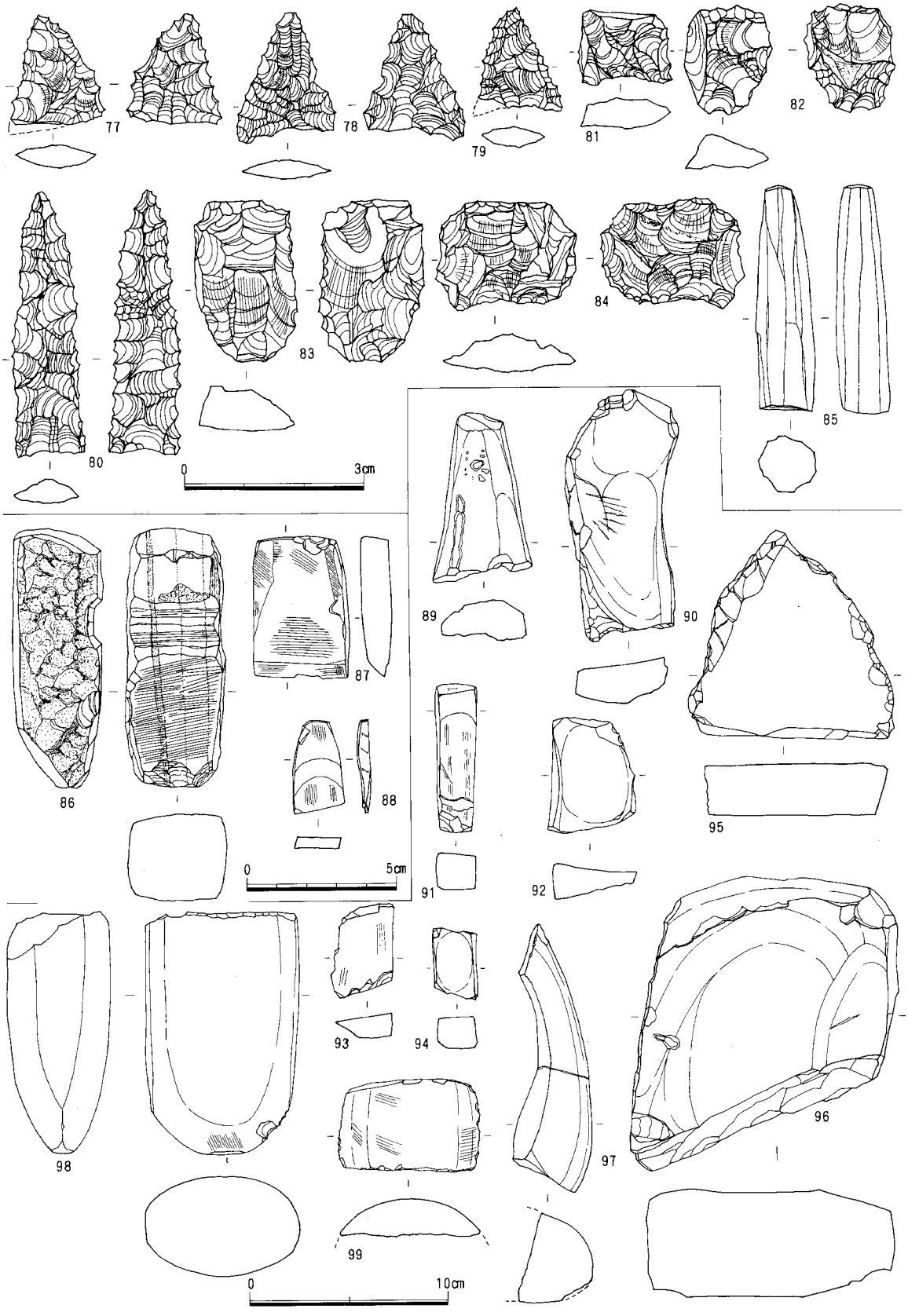
Fig.143　第7次調査土壙・ピット出土石器実測図（1/2,1/3,1/4）

29 …… SK-6
30-31-33-38-43-45-51-52 … SD-4
32 …… SK-1
34 …… SK-4
35 …… 包
36-37-40-41-44-49 … SD-2
39-42 …… SK-16
46 …… SK-11
47 … SK-27
48 … SK-2
50 … SK-5

ものである。器表面の顕著な擦痕及び側辺の潰れ痕から欠損後磨石としての再利用が窺える。59 玄武岩製太型蛤刃石斧の破損品で、側辺の稜及び幅、研磨の状態から刃部であると判断した。研磨により滑らかに仕上げられている。60 玄武岩製磨製石斧の破損品である。上端の破損部分に研磨を施しており、欠損後磨石として再利用したことが窺える。61 凝灰岩製磨製石斧で、風化が著しく原形をとどめない。62 丁寧な研磨を施す柱状抉入片刃石斧で、石材は頁岩を使用している。前主面の両側は敲打痕を有し、刃縁は剥離痕を有する。刃面は全体の約1/3と広く、多方向の研磨痕が観察できる。又、刃縁近くで研ぎ出しにより稜が認められる。後主面の刃部は直線的で、刃部角度26度を測る鋭利な刃部に仕上げている。後主面上位に抉入部を有するが、極めて浅く、又、敲打段階で研磨が行われていないこと、左側辺の抉入部も剥離のみで敲打も行われていないことから製作途中のものとも考えられるが刃縁の一部を欠損することからこの段階での使用も考えられる。形状的には完形品である。長さ18.5cm、幅2.7cm、厚さ3.1cm、刃部の長さ6.6cm、重さ384g。63 不純物の多く混じる黒耀石の石核である。打面は調整打面で、一方向からのみの剥取である。他の面は自然面である。64 先端部を欠損する凝灰岩製の石剣である。研磨は丁寧で中央部の鎬は下位で意識的に粗い研磨により消されている。断面は菱形を呈し、刃縁には顕著に刃こぼれが認められる。茎部は側辺に面を有し、刃部との境は浅い抉りが認められる。基端は平坦で、裏面は風化により軟化が進んでいる。65 桂岩製の柱状片刃石斧である。両側面を除く全ての面に丁寧な研磨を施し、滑らかに仕上げられている。後主面は直線的で刃部が僅かに外湾する。前主面刃部は摩滅後再度研磨されと考えられる稜を縁に持つ。基端は平坦面で、長軸に対し斜めに仕上げられている。66 桂岩製の柱状石斧で、刃部は欠損している。全体的に破損度が高く、使用時によるものと考えられる。研磨は横位が主体である。67 桂岩製の扁平片刃石斧である。形態的には完形品だが刃縁を欠く。研磨は丁寧で多方向の研磨痕が観察できる。68 桂岩製片刃石斧の刃部で、丁寧な研磨を施す。後主面は直線的で、刃部角度53度のシャープな刃部に仕上げている。69 桂岩製柱状片刃石斧で、基端は欠損する。後主面は直線的で刃部が僅かに外湾する。前主面の刃部は丸味を持ち、刃部角度43度の鋭利な刃縁を形成する。研磨は丁寧で滑らかに仕上げられている。70 円形に近い隅丸方形の石製品で、小型の紡錘車形を呈するが孔は有しない。石材は滑石で全面に研磨を施す。71 紡錘車の半割品で火を受けた痕跡を残す。石材は硬質砂岩で、研磨は全面に施す。72 全周を面取りされた砂岩製の投弾である。下位の溝状の窪み及び上位の形態から石錘の可能性も考えられる。73 粘板岩を石材とする石錘で、ほぼ完形品である。扁平な分銅型で前・後は面を有し、下端は球形を呈する。上位と下位に孔を有するもので、上位の孔と先端とを結ぶ溝を有する二孔一溝タイプである。上位の孔は二孔が重なり合ったダルマ状を呈し、後主面もまたやや離れた位置に穿つ途中の小さな凹みを有する。下位の孔は中央よりやや右側に穿つ。研磨は丁寧で下端に擦痕を有する。74 玄武岩製の扁平な楕円形を呈する磨石で器表面は滑らかである。表面は擦痕が認められ、下端に僅かだが敲打痕を有する。75 器表面に滑らかな研磨面を有し、裏面には敲打痕を有し、浅い凹みを持つ複合石器である。又、側辺及び上下端は潰れ痕・擦痕が認められ、敲石の機能を持つ磨石である。76 玄武岩の球形の礫を半割したもので、器表面の擦痕から磨石とした。切断面は中央に敲打痕を有する凹みを持つ。又、周縁の全てに調整剥離を施し、その端部が潰れた状態であることから掻器としての用途も考えられる。77 黒耀石製の三角鏃で、基部は平基を呈する。調整は大まかで両面に施す。風化が進み光沢を失っている。長さ1.8cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ0.91g。78 いびつな三角形を呈する石鏃で漆黒の黒耀石を使用している。調整は両面で裏面左側辺は深い剥離調整により急斜度を呈する。基部の抉りは極く浅い。長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重さ0.97g。79 三角形を呈する石鏃で基端の一部を欠損する。両面調整で側辺に丁寧な細部調整を施す。

Fig.144　第７次調査包含層出土石器実測図（1/1,1/2,1/3,1/4）

基部は平基を呈する。石材は右側辺が透明感のある灰色で、左側は漆黒の黒耀石を使用している。長さ1.7cm、幅1.4cm、厚さ0.35cm、重さ0.66g。80 細身で長身の石鏃で漆黒の黒耀石を使用。両面調整で、表面は両側辺からの押圧剥離により中央に稜を形成する。裏面も先端より中位までは同様の技法によるが、下位は浅い剥離で平坦面に仕上げる。基部は極く浅い抉りを施す。長さ4.4cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ1.7g。81 黒耀石製石鏃で左側辺および先端を欠損する。調整は両面で製作過程での破損品と思われる。現長1.3cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ0.87ｇ。82 大剥離面に自然面を持つ石核調整剥片の長軸部分を使用したもので、上下端に刃こぼれが認められ、下端に打裂痕がある。断面は厚い三角形を呈する。漆黒の黒耀石を石材としている。83 黒耀石製で再生剥離によって剥取された剥片の主要剥離面側に二次加工を加えて削器としたものである。大剥離面の剥離状況は大きなステップフレーキング（階段状剥離）が認められ、断面も厚い。この厚い部分にも二次加工を加えていることから、この部分も使用した可能性が高い。84 黒耀石製の楔形石器である。両面の上端部に打裂痕、両面の下端部に剥離痕が認められる。剥片は上・下・横方向からの剥離が認められるが、剥片本来は横方向から剥取された剥片で、横の部分を使用して楔形石器としている。85 適当な大きさの硬質砂岩を面取り、研磨により棒状に仕上げられた刺突具石器である。上端がすぼまる形態を呈し、上・下端は平坦面であるが、下端は研磨によるもので、上端は使用により擦り減ったものと思われる。下位に横の擦痕が観察できる。86 桂岩製の柱状抉入片刃石斧である。両側面は敲打段階で終了し、他は研磨を施す。刃面は、一部に研磨面を残すが、大部分が剥離され、刃縁も丸みを持つ程摩耗しており使用頻度の高さが窺える。後主面上位に有する抉入部は中央に稜を有し二溝の形態を呈する。研磨は横方向が主体。 87 凝灰岩製扁平片刃石斧の完形品である。丁寧な研磨により滑らかで光沢がある。上位は両面の側辺に研磨を施し若干丸みを持たせている。刃部角度は49度で鋭利な刃部に仕上げられる。88 小型の扁平石斧で刃部は折断。基端近くで急激に幅が狭くなる形態を呈する。又、基部中央より下位が急激に薄くなる。研磨は全面で、側辺および基端は横方向が主体。石材は凝灰岩。89 結晶片岩製の砥石で、裏面及び基端は欠損している。先端部は打裂痕が見られ、叩き石の用途も考えられる。砥石面は三面であるが、表面に節理面があるため使用頻度は高くない。90 粘板岩製砥石で下端は欠損。全面を砥石面とし、表面上位は摩擦痕が認められる。91 断面が四角形を呈する小型の仕上げ用砥石で全面を使用。表・裏面は粗い擦痕が認められる。石材は蛇紋岩でF－5区包含層1面より出土。92 砂岩製砥石の一部で二面の砥石面が残存する。二面とも摩耗度から使用頻度の高さが窺える。93 硬質砂岩製の砥石の一部で二面の砥石面を有する。仕上げ用と思われるもので器表面は滑らかである。94 硬質砂岩製の砥石で上・下端は欠損。砥石面は四面で、横断面は四角形を呈する。裏面は三本の線刻が認められる。95 粘板岩製の砥石で裏面は破損している。恐らく四面を使用したのもと考えられる。96 下端を欠損する砂岩製砥石で三面の使用面を有する。表面は中央が若干凹み、右側辺に稜を持つ。97 凝灰岩製磨石の破損品である。扁平な円礫の周縁の残存で、磨石面は滑らかで使用頻度の高さが窺える。破損後の再利用痕跡は認められない。98 結晶片岩製の磨製石斧で、基部が欠損している。全面に研磨を施すが、一部敲打部分が残る。刃部は刃こぼれが顕著に認められ、欠損した部分をさらに粗い研磨で再加工した意志が窺われる。欠損しているが現在の重さは752.4gである。99 凝灰岩製磨製石斧の基部の一部である。上・下端を切断され、後主面も剥落されているが、前主面は丁寧な研磨を施す。側辺は摩擦痕が認められ、破損後の再利用が窺える。



77～98 … 包含層
99 …… SP-6

Fig.145　第7次調査包含層出土石器実測図2（1/1,1/2,1/3）

2） 9次調査出土の石器

住居跡内出土の石器

9次調査で出土した石器のうち代表的なものを各遺構ごとに記述する。

石鏃（Fig.146－1～3） 石鏃は5点図示した。

1　凹基無茎式の石鏃で先端部を欠損する。両面からの大まかな押圧剥離により仕上げている。基部の抉入は浅い。黒耀石製で風化が著しい。現長1.4cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.55gを測る。SC-04出土。2　平基式、いわゆる三角鏃と称しているもので、左側基端部を欠損している。周辺部からの細かい押圧剥離により丁寧な仕上げを行っている。光沢のある漆黒の黒耀石を使用している。SC-08出土、現長1.8cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.42g。3　凹基無茎式の石鏃で、基部の抉入部は深いものと思われるが、両基部は欠損している。両側辺部は、鋸歯鏃を思わせる刃部形成を施し、断面形はレンズ状を呈する。漆黒の黒耀石を使用している。現長2cm、幅1.5cm、厚さ0.35cm、重さ0.60g、SC-11出土。4　石鏃の未製品と思われるもので、成形途中に上端を破損したものと考えられる平基式の石鏃である。黒耀石製で、SC-13出土。現長1.6cm、幅1.6cm、厚さ0.35cm、重さ1.03g。

5　ハリ質安山岩を石材とする大型の石鏃で、基部が丸みを持ち、表面には自然面・裏面には主要剥離面が残り、断面はレンズ状を呈するが、かなり部厚いこと等から平基式の未製品と考えられる。現長4.0cm、幅2.5cm、厚さ0.6cm、重さ5.06g、SC-12出土。

使用痕のある縦長剥片・削器（Fig.146－6～10, PL.70）

6　石材は縞状に透明感のある黒耀石で、側辺部に使用痕が認められる縦長剥片である。打面は調整打面で、小さく平坦面を残す。断面は台形を呈し、末端部は切断され、その後に二次加工を下端から施している。大剥離面の打撃(剥取)面をみると、上・下・横方向の三方向から剥取されている。この剥片の技法は、縄文時代後期にみられる剥片剥取技法(類鈴桶技法)に類似している。SC-01出土。

7　不純物が混じる黒耀石を石材とし側辺部に使用痕のある縦長剥片である。打面は自然面で、主要剥離面側に大きなバルバー・スカーを残し、下端部に裂痕を残す。大剥離面からは、上からの一方向により剥取されており、断面は台形を呈する。両側辺部には、両面からの使用痕が認められる。SC-01出土。8　サヌカイトの縦長剥片の末端部を切断し、主要剥離面側に二次加工を加え削器として使用している。打面は自然面で、大剥離面・主要剥離面の剥取方向は、すべて上からのものであり、風化も著しい。サヌカイトの縦剥技法は、非常に高度で、弥生時代の技法では剥取した例はなく縄文時代後期に一部認められるだけである。9　玄武岩製の磨製石斧の破損品を再加工して削器としたもので、表面の一部に敲打の痕跡を持つ。裏面には、刃部形成のための二次加工を加え鋭利にしている。また基部は切断した後、細かな剥離を施し、手に馴染むように形成されている。SC－06床面出土。10　黒耀石の石核で、裏面の一部に自然面が残る。多角的剥離方向による剥取方法で、打面は基本的に平坦打面であり、時期的には弥生時代の産物である。SC－06床面出土。

－柱状片刃石斧（Fig.146－11～14, PL.70,72,73）

11　基端部を欠損する頁岩製の柱状抉入片刃石斧である。後主面が剥落しているが、その他は丁寧に研磨されている。右側辺上端部に浅い抉りがみとめられ、抉入部の成形を丁寧に行っている。刃部は右側辺部が丸みを持ちながら湾曲し、刃部端部に達する。左側辺部からの鋭利な刃部と接し、65度の刃部角度を有する。刃部の先端部は非常に小さいが、これは後主面の剥落によるもので、本来は約1cm程度と考えられる。SC-01出土。12　頁岩製の柱状抉入片刃石斧で、刃部・後主面は欠損している。右側辺部に浅い抉入部を有する。後世の剥離痕を除いて研磨は全体に丁寧に施している。SC－06

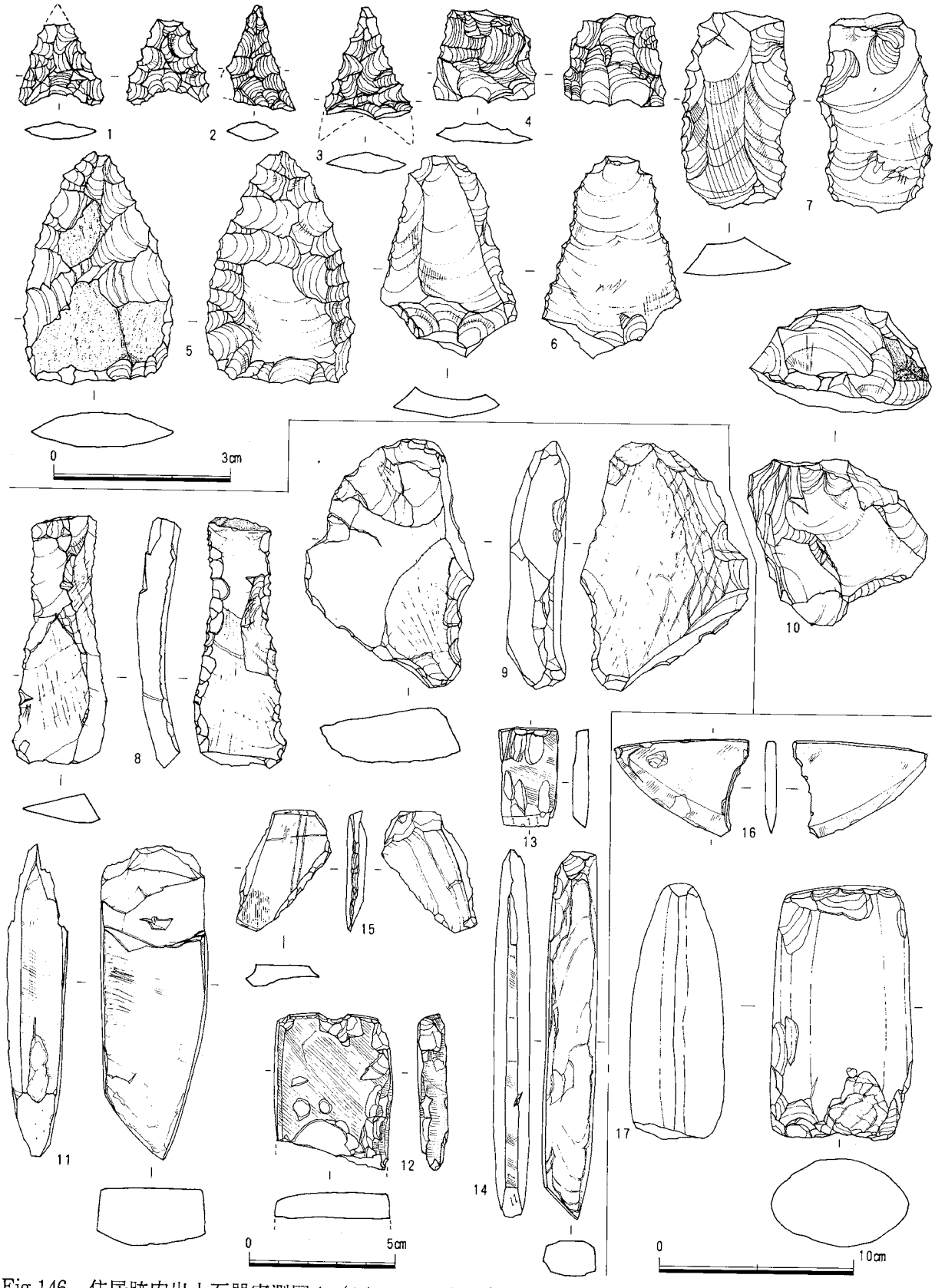


Fig.146　住居跡内出土石器実測図１（1/1,1/2,1/3）

1 ……SC-4　　5・15 ……SC-12　　13 …SC-2
2 ……SC-8　　6・7・11 ……SC-1　　17 …SC-16
3 ……SC-11　　8 ……SC-13
4・14 …包含層　　9・10・12・16 …SC-6

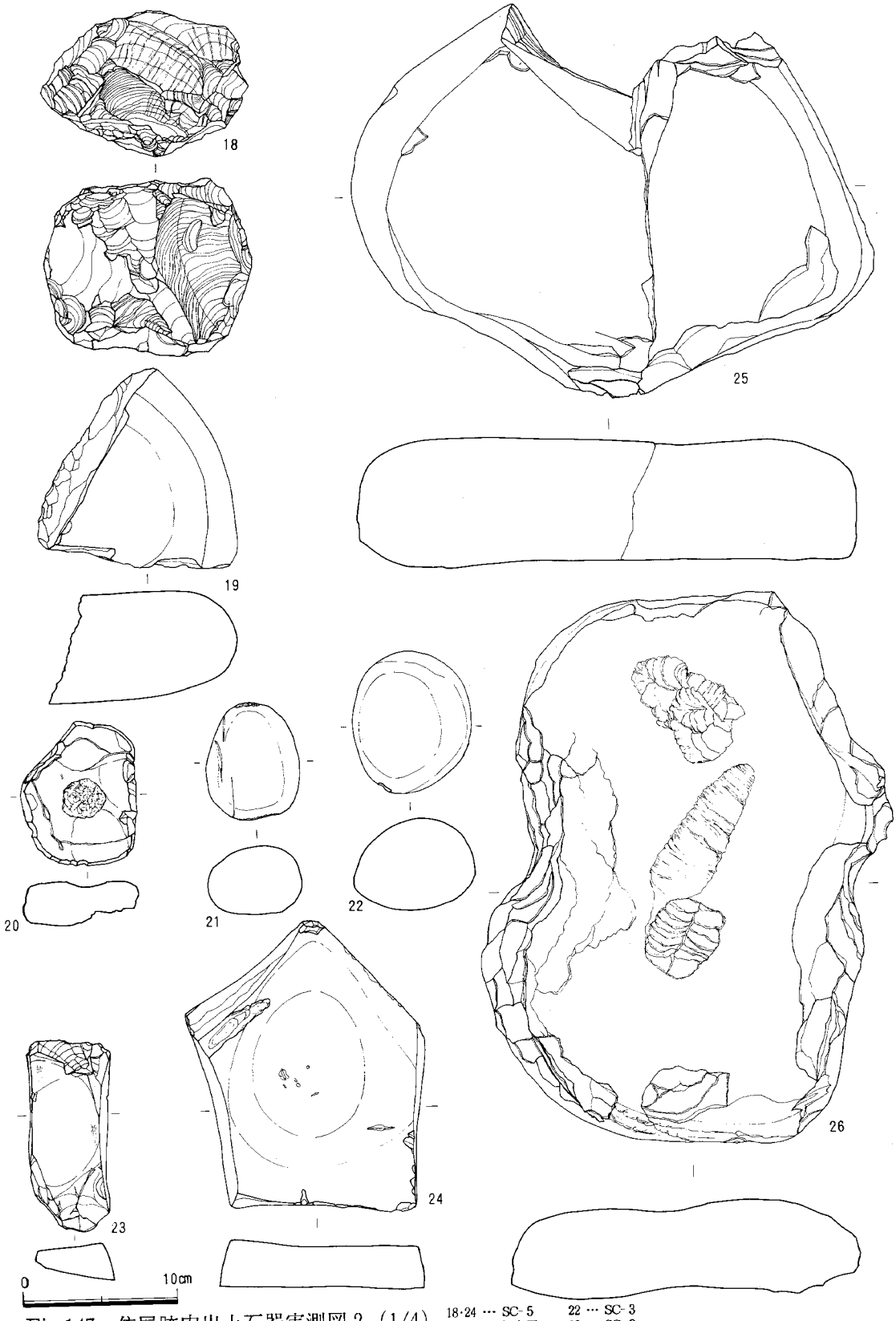


Fig.147　住居跡内出土石器実測図 2 （1/4）

18·24 … SC-5
19 …… 包含層
20·21 … SC-4
22 … SC-3
23 … SC-8
25 … SC-13
26 … SC-15

出土。13　桂岩製小型扁平片刃石斧で、基部は欠損している。前・後主面および左側辺部に研磨を施しているが、右側辺部は破損している。刃部の研磨は丁寧で、若干の刃こぼれが認められる。SC－02出土。刃部角度52度。14　凝灰岩製の柱状片刃石斧で、幅が狭く身が厚いタイプで棒状を呈し、刃部は鋭利に仕上げている。風化が著しいため側辺は軟化しているが、刃部および前・後主面は丁寧な研磨を施している。全長12.6cm、厚さ1.2cm、刃部角度49度を測る。G－10住居下出土。

彫器・石包丁・石核（Fig.146－15～18, PL.70）

15　凝灰岩製の、肩部から刃部を残す石庖丁の欠損品の再利用として、右側辺および下方からの剥離によって彫刻刀面を形成して彫器としたものである。SC－12出土。16　凝灰岩製の石庖丁で、肩部は直線的、刃部は外湾半月形を呈する。半分以上欠損しているため孔は不明であるが、研磨は全体に施しているところから使用時に破損したものと考えられる。SC－06出土。17　刃部が欠損するが、玄武岩の太型蛤刃石斧である。全体的に敲打の段階で研磨は確認できない。現長12.7cm、幅6.8cm、厚さ4.2cm、重さ780g。18　長さ11.2cm、幅13.6cm、厚さ9.6cmの大型の安山岩製石核である。打面は調整打面で裏面に自然面を有する。剥離方向は、上、下、横位の3方向であるが、打面部分も大きな剥離面を有するところから多角的剥離を行う技法とおもわれる。G－10住居下出土。

凹石・磨石・砥石・台石（Fig.147－19～26, PL.73）

19　約1/4程度しか残っていないが、復元長14cmの 凹石(石皿)である。表・裏面をよく使用している。花崗岩製でG－10住居下出土。20　中央部に凹みを持つ凹石で、側面に打裂痕が認められる。裏面は欠損しているため定かでないが、両面が凹むタイプかもしれない。石材は花崗岩を使用しており、SC－04出土。21　上下端に打裂痕をもつ磨石で、特に下端の使用頻度は高い。又左側面および裏面にも打裂痕が認められる。上面には火を受けた痕跡を残す。石材は花崗岩製でSC－04出土。22　全面を研磨しているが、上面を特に使用した痕跡が窺える磨石で、花崗岩製である。SC－03床面出土。23　粘板岩の砥石で表・裏・側面の四面を使用している仕上げ用砥石である。24　砂岩製の砥石で、裏面の使用頻度は高くないが、他はかなりの使用頻度がある。特に両側面の使用頻度が高い。中央部がわずかに凹むところから石皿の可能性もある。18.4×12×2.8cmの大きさで、SC－05出土。25　玄武岩製の礎板状石製品で二分割され、離れた場所から出土した。一部に火を受けた痕跡が認められる。SC－13出土。26×34.5×8cm。26　長さ36.2×25×5.6cmの安山岩製の礎板状石製品で、SC－15西Pit内出土。西側中央部に抉りを入れ石錘状を呈する。また両面中央部は凹みを持つ。

土壙出土の石器（Fig.148－Fig.151, PL.71～74,76）

27　凹基無茎式の黒耀石製石鏃である。先端および左脚を若干欠損する。基部の抉りは浅く、断面はレンズ状を呈する。押圧剥離により両面を加工しているが、右側辺部は鋸歯状を呈し、基部からの剥離は鏃の中央部まで達している。現長2.1cm、幅1.4cm、厚さ0.35cm,重さ0.69g、SK－29出土。28 凹基無茎式の剥片鏃で、不純物の少ない黒耀石を石材として使用している。脚部は部分的に剥離を施し、小さなかえしを造っている。押圧剥離による二次加工は、周辺部のみにかぎられ、表面の下端および裏面には大きな剥離面が残っている。現長1.9cm、幅1.4cm,厚さ0.45cm,重さ0.99gの完形品で、SK－59出土。29　サヌカイト製の平茎式石鏃である。基部の幅が狭く、鏃身が非常に長い。脚部は不揃いで、右側脚部に肩を有する。両側辺からの二次加工は丁寧で、裏面右側の剥離が、やや大まかである。7次調査の包含層や9次調査の包含層からも同形式の石鏃が出土しているが、この種類は、北部九州での出土例が少なく、類例を検索中である。長さ4.8cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm、重さ3.03g、SK－62出土。30　漆黒の黒耀石を石材とした石鏃の未製品である。表面は全体的に二次加工を加え、調整剥離は終

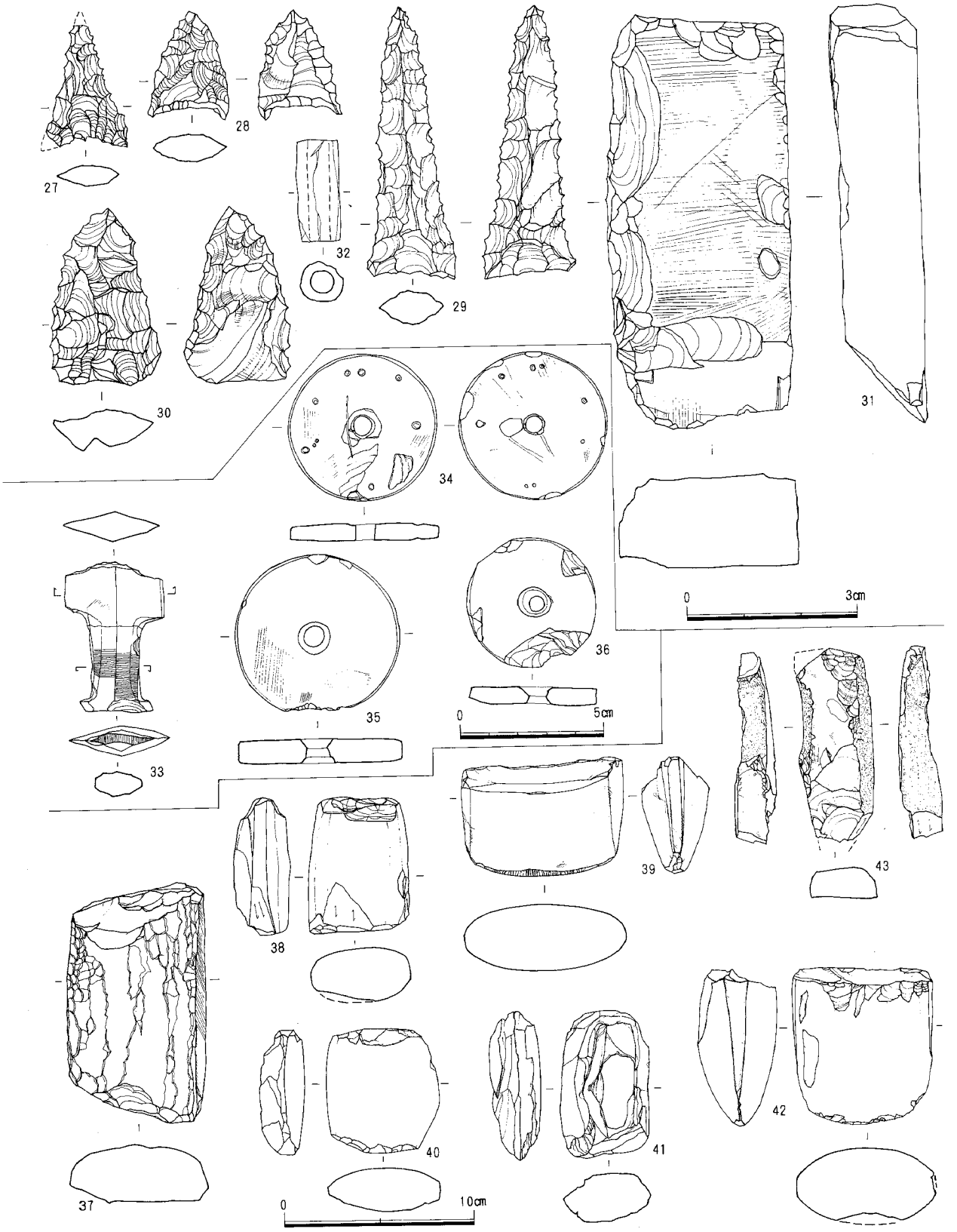


Fig.148　土壙出土石器実測図1（1/1,1/2,1/3）

27 …… SK-29
28 …… SK-59
29·30 … SK-62
31 …… SK-159
32 … SK-54
33 … 包含層
34 … SK-25
35 … SK-145
36 … SK-51
37 … SK-87
38 … SK-106
39 … SK-144
40 … SK-77
41 … SK-136
42·43 … SK-166

表１．福岡市雀居遺跡第７・９次調査出土弥生時代人骨

番号	時代	性	年齢	埋葬姿勢	抜歯	備考
第７次						
7-1号土壙墓	前期中頃	女？	成年	不明	有？	集骨
7-2号土壙墓	前期中頃	女	成年	仰臥屈肢	有	
7-3号土壙墓	前期中頃	男？	成人	不明	？	散乱状態
7-4号土壙墓	前期中頃	？	成年	不明	？	集骨
7-5号土壙墓	前期中頃	？	熟年	仰臥屈肢	？	
7-6号土壙墓	前期中頃	女	成年	仰臥	？	体部骨散乱、小壺副葬
K－２号甕棺	前期後半	？	小児		？	
K－６号甕棺	前期後半	？	若年？		無	
K－７号甕棺	前期後半	女	熟年		有	
K－８号甕棺	前期後半	男	熟年～		？	
第９次						
9-1号土壙墓	前期中頃	男？	成年	仰臥屈肢	？	
9-2号土壙墓	前期中頃	男	熟年	仰臥屈肢	？	
9-3号土壙墓	前期中頃	男	成人	不明	？	集骨

表２．主要頭蓋計測値の比較（女性）

		雀居（弥生）7-2号	北九州[1]（弥生） N	北九州[1]（弥生） M	土井ケ浜[2]（弥生） N	土井ケ浜[2]（弥生） M	西北九州[3]（弥生） N	西北九州[3]（弥生） M	広田（弥生） N	広田（弥生） M	津雲・吉胡[4]（縄文） N	津雲・吉胡[4]（縄文） M	西南日本[5]（現代） N	西南日本[5]（現代） M
45	頬骨弓幅	-	61	131.3	20	131.9	6	130.2	4	126.0	10	132.6	57	123.9
46	中顔幅	96	67	99.8	23	98.5	11	95.9	6	91.8	23	99.7	57	93.4
47	顔高	(127)	45	116.3	23	114.2	9	104.9	4	105.3	14	105.1	14	112.9
48	上顔高	74	66	70.1	22	68.3	12	60.9	4	62.0	17	62.0	55	68.2
47／45	顔示数（K）	89.8	34	88.7	17	86.6	6	81.7	3	81.1	7	79.2	14	90.8
47／46	顔示数（V）	132.3	39	116.7	21	115.9	9	109.5	4	110.8	13	106.8	14	119.0
48／45	上顔示数（K）	-	49	53.7	17	51.8	6	47.6	3	47.9	7	48.0	55	55.0
48／46	上顔示数（V）	77.1	57	70.2	21	69.3	11	63.5	4	65.3	14	62.3	55	72.9
51	眼窩幅（左）	41	66	41.6	24	40.3	10	41.1	4	39.3	22	41.7	57	40.5
52	眼窩高（左）	33	65	34.1	25	33.3	10	31.2	4	30.3	14	32.6	57	34.0
52／51	眼窩示数（左）	80.5	62	82.0	24	82.6	10	75.9	4	77.7	13	78.0	57	83.9
54	鼻幅	27	72	26.6	20	26.0	12	26.6	5	24.8	27	25.4	57	25.0
55	鼻高	52	71	49.8	23	49.0	12	46.3	4	44.0	21	44.9	57	48.6
54／55	鼻示数	51.9	69	53.5	20	53.0	12	57.4	4	58.0	20	56.1	57	51.4

1)中橋・永井（1989）、 2)金関、他（1960）、 3)内藤（1971）、 4) 清野・宮本(1925)；金高（1928）、 5)原田(1954)

表３．上肢骨計測値（男性、左）

		雀居（弥生） K-8	雀居（弥生） 9-8	北部九州[1]（弥生） N	北部九州[1]（弥生） M	山口[1]（弥生） N	山口[1]（弥生） M	大友[2]（弥生） N	大友[2]（弥生） M	津雲[3]（縄文） N	津雲[3]（縄文） M	九州[4]（現代） N	九州[4]（現代） M
上腕骨													
1	最大長	-	-	22	302.6	29	305.3	11	291.4	36	284.3	106	295.3
2	全長	-	-	17	296.8	23	300.0	8	285.8	35	280.6	106	290.6
5	中央最大径	23	25	76	23.3	61	23.1	34	23.4	50	24.1	106	21.9
6	中央最小径	19	20	76	17.4	61	17.6	33	17.6	50	17.8	106	16.9
7	骨体最小周	-	68	81	63.9	66	63.7	33	63.5	50	64.0	106	61.8
7a	中央周	(72)	72	75	67.8	57	67.5	33	68.2	50	69.3	106	63.7
6/5	骨体断面示数	82.6	80.0	76	74.9	61	76.5	33	75.0	50	73.9	106	79.1
7/1	長厚示数	-	-	22	21.3	28	20.8	11	22.4	36	22.7	106	20.9
橈骨													
4	骨体横径	-	19	79	17.2	51	17.4	25	17.1	42	17.1	63	16.0
5	骨体矢状径	-	12	79	12.5	51	12.0	25	12.4	42	12.0	63	11.7
5/4	骨体断面示数	-	63.2	79	72.6	51	69.6	25	72.3	42	70.2	60	71.4

1)中橋・永井(1989)、 2)松下（1981）、 3)池田(1988)、 4)專頭(1957)、溝口(1957)

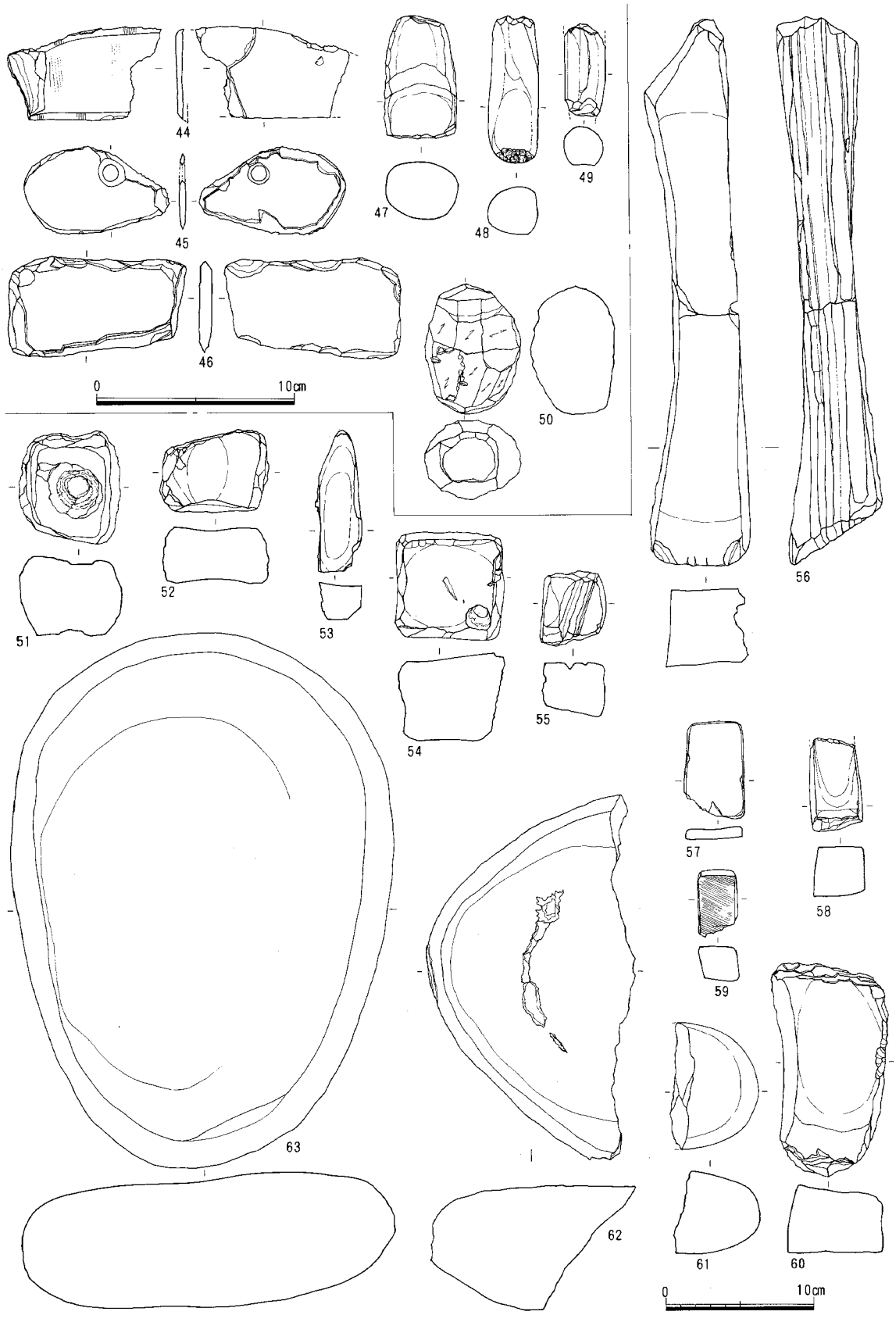


Fig.149　土壙出土石器実測図２（1/3,1/4）

44 …… SK-32　45 …… SK-126　46·58～60 … SK-54　47·51·56 …… SK-59　48 …… SK-156　49 …… SK-123　50 …… SK-80　52·54·62 … SK-169　53 … SK-132　61 … SK-65　63 … SK-150

を使用した砂岩製の砥石で、使用頻度は高い。SK－169出土。53　粘板岩製の砥石で、1面のみを使用している。左側辺部が欠損しているが、上下端は使用時のままの長さを保っている。使用頻度は非常に高く、中央部が凹む形状を呈する。SK－132出土。54　砂岩製砥石で上下二面を使用している。片面は中央部に痘痕状の凹みを持ち、台石とした可能性も考えられる。SK－169出土。55　SK－158出土の砂岩製の砥石である。上面には鋭利なものを研いだと思われる深い溝が二条ある。56　使用頻度の高い砂岩製の砥石で、四面すべてを使用。右側面は幅2cm、深さ1cmの深い溝2条が先端部から下端部まで通っている。SK－59出土。出土した段階では二分割されており、接合すると長さ36.8cm、最小幅4cm、厚さ3.6cm。57　硬質砂岩製の砥石で表面だけを使用している。SK－144出土。58　砂岩製の四面を使用した砥石で、上部は半割されている。SK－54出土。59　頁岩製の柱状石斧の未製品である。刃部を欠損する。表面にコールタール状の粒子が付着している。SK－54出土。60　硬質砂岩製の砥石で、3面を砥石面として使用している。特に左側面は使用頻度が高く、表面が滑らかである。SK－54出土。61　花崗岩製の磨石で半割されているが、使用頻度は高く表面は滑らかである。SK－54出土。62　凝灰岩の磨石もしくは台石である。表裏面とも研磨された状態がみられる。遺存状態は約1/2弱でSK－169出土。63　扁平な楕円形を呈する大型の凝灰岩製台石である。全長36cmと大きく中央部に僅かな凹みを有する。全面が研磨されていることから磨石の可能性も高い。SK－150出土。64　両脚が大きく開きほぼ正三角形を呈する黒耀石製石鏃で、片脚は欠損している。調整剥離は両面に及ぶが主要剥離面が先端に残る。剥片の打面を石鏃の先端とし、両側辺は使用時によるものと思われる潰れ痕が観察でき、基部の抉りは浅く広い。SE－08出土。65　凹基無茎式石鏃で二等辺三角形を呈する黒耀石製である。調整剥離は全面におよび基部の抉りは浅い。下層土器群中から出土した。長さ2.4cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重さ0.86g。66　サヌカイト製の凹基無茎式石鏃の完形品で、基部の抉りは全体の約1/3までと深い。側辺からの剥離は大まかで全周におよび風化が著しい。長さ3cm、幅2.7cm、厚さ0.5cm、重さ1.82g。67　黒耀石製三角鏃で完形品である。調整剥離は全面におよび左側辺は裏面からの細かな剥離を施し、脚は不揃いである。SD－04出土。長さ2.5cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ1.01g。68　68も67と同様に黒耀石製三角鏃で完形品である。調整剥離は全面におよび両側辺は摩滅している。長さ2cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.12g。69　サヌカイト製の尖頭器状石器で完形品である。周縁部からの押圧剥離によって成形し、基部は切断。最大幅は基部より先端に近い部分にある。SD－04出土。長さ4.5cm、幅1.4cm、厚さ0.6cm、重さ3.08g。70　凹基無茎式磨製石鏃で基部の一部を欠損している。二等辺三角形を呈し、抉入部は弧状を呈し、全面を丁寧に研磨している。石材は頁岩でSD－04出土。71　碧石製の管玉でブルーの色彩を呈する。長さ0.7cm、幅0.3cm、厚さ0.3cmを測る。D－14区P-1出土。72　透明感のあるグリーン色をしたガラス小玉である。長さ0.35cm、幅0.35cm、厚さ0.2cm。Ⅱ区Pit内出土。73　凝灰岩製の大型石庖丁で約1/2は欠損している。全体に風化が著しく、本来の石庖丁としての面は刃部上方に一部だけ残り、幅4㎜で研磨を施す。Ⅱ区2面出土。74　外湾刃半月形の石庖丁で右半分は欠損している。両面から穿つ孔を有する。研磨は全面におよび背部は平坦面をもつ。D－12･13土壙群出土。75･76　両方とも紡錘車の欠損品で風化が著しい。75には表面に数条の浅い溝状の擦痕が認められる。77～79　3点とも玄武岩製太型蛤刃石斧の刃部部分で、基部は破損している。表面の一部に敲打痕を残すが、研磨は全体におよぶ。刃縁は使用痕・摩擦痕が確認できる。両方ともⅡ区D－12･13区土器群出土。80～82　扁平柱状石斧と抉入石斧である。80は基部を破損しているが、刃部角度が33度と非常に鋭利である。表面の一部に敲打痕を残すが、研磨は全体におよぶ。81は桂岩製抉入石斧で、抉入部の幅は狭く浅い。研磨は丁寧で一部に敲打痕が残る。SE－09出土。82は桂岩製扁平石斧で刃部は欠損している。研磨は全面で、両面に研ぎ出しによ

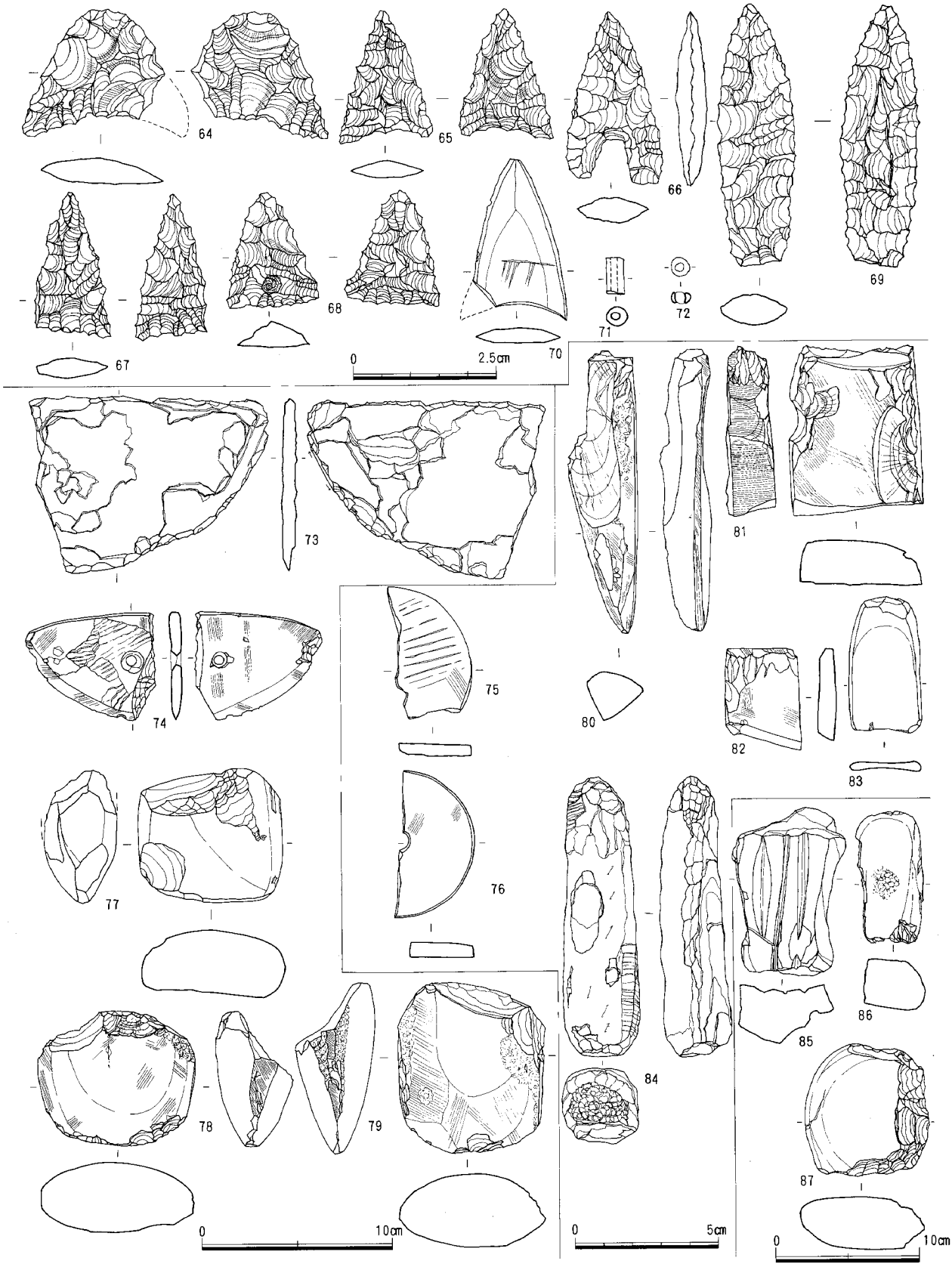


Fig.150　井戸・ピット・包含層出土石器実測図１（1/1,1/2,1/3,1/4）

64 … SE-8
65·66·71·74·77·78·84·85 … 包含層
67·69·70 … SD-4
72·73·75·76·79·82·83·86·87 … ピット
81 … SE-9

Fig.151　第9次調査1号溝状遺構出土石器実測図1（1/1,1/2,1/3,1/4）

る稜を持つ。Ⅱ区出土。83　小型の粘板岩製の砥石である。表裏面を砥石面としているが、非常に使用頻度が高い。Ⅱ区P-45出土。84　凝灰岩製のすり棒状石製品で、一部風化するが広い範囲に研磨が残る。上下端は打裂痕が残り、潰れた状態から叩き石としての用途ももつ。85　砂岩製の砥石で非常に使用頻度が高い。表裏面に深い溝三条とこれより広く深い溝を有する面がある。砥石面としては三面をもつ。86　方形の磨石で、全面に磨った状態が観察される。先端部は潰れ、中央部に痘痕状の凹みが両面に見られる。87　扁平な円礫の三面に両方からの剥離を加え打器としての機能も有する磨石である。形態的に見ると一見、旧石器時代のチョピング・ツール的要素を持つが、刃部部分が潰れた状態にあり、表面がかなり磨った状態が見られる。83～87までⅡ区D－12・13区土器群出土。88　有茎式磨製石鏃で先端部裏面を欠損。研磨部分が一部に残るが、全体的に風化が著しく中央の鎬も摩滅により中位から下方は消滅している。89　凝灰岩製の磨製石剣で器表面の風化が著しい。裏面は剥落するが刃部は遺存する。丁寧な研磨を施している。左先端部に刃こぼれがあり、中央の稜はやや左側に寄っている。90　大型の凝灰岩製の石包丁で側辺に抉入部を持つ。風化のため微調整は確認できない。91　滑石製紡錘車の欠損品で中央の孔は片面より穿つ。研磨は全面におよび、表・裏面には斜め・横位の擦痕が確認できる。92　桂岩製の柱状片刃石斧で一部欠けるがほぼ完形に近い。幅が厚さより大きく、刃面はやや丸味を帯びる。後主面は平坦で研磨は全面におよぶ。長さ8.6cm、幅3.7cm、厚さ2.3cm、重さ124.2g。88～92までSD－01出土。93　玄武岩製の柱状片刃石斧で刃部は欠損。断面三角形を呈し、ほぼ全面に研磨を施す。J-16下層一括出土。94　玄武岩製太型蛤刃石斧の一部で敲打段階の欠損品である。95　玄武岩製太型蛤刃石斧の刃部で一部に敲打痕が残る。刃縁は潰れた状態にあり、使用頻度の高さが窺える。使用時における破損品と考えられる。火を受けており一部に煤が付着している。96　刃部を欠損する玄武岩製磨製石斧で、断面扁平な楕円形を呈する。側縁の一部に敲打が残り、左側縁部は研磨により平坦面を有するが、右側縁は明確な稜をもたず丸味をおびる。97　扁平な円礫の半割品で、表裏面は砥石として使用。割れ口もその痕跡を残す。周縁の一部は敲打痕と凹みをもつ。砥石と叩き石の機能を併せ持つ石器である。裏面は無数の縦の擦痕が認められる。98　扁平な長方形の砥石で裏面は剥離されている。表面の２ケ所に浅い凹みを有することから砥石の転用品と考えられる。99　凝灰岩製の叩き石で上部は欠損。下端は研磨痕を有する。100　玄武岩製の円礫で表面中央に浅い凹みを有する。この凹み以外は非常に研磨されており、周縁は面を持ち、磨石としての使用頻度の高さが窺える。又、周縁の３ケ所に研磨以前の敲打による浅い凹みを有することから叩き石としての用途も考えられ、磨石および凹石としておく。101　結晶片岩製の磨石の半割品である。下端は潰れた状態で使用頻度が高い。叩き石としての用途もある。102　四面を使用する砂岩製の砥石で両面に浅い凹みを有し、形状から細形銅剣の鋳型の破損品を砥石として転用したものと考えられる。103　砂岩製の砥石で四面を使用している。表面に左寄りの稜を有する。104　砂岩製の砥石で四面を使用している。すべて使用頻度が高いが上半分は欠損している。105　硬質砂岩製の砥石で全面を使用している。表裏面に凹みが見られ石皿的要素も考えられる。106　砂岩製の砥石で上部は欠損。四面の砥石面を有し、表面を除く三面には浅い溝状の凹みをそれぞれ１本づつ有する。107　断面方形を呈する砂岩製の砥石で、四面の使用面を有する。平面形は撥形を呈し、使用頻度の高さを思わせる。下端は鋭利なものを研いだ痕跡の溝を数本有する。108　台形を呈する硬質砂岩製の砥石である。側面の砥石面および表面に有する数カ所の浅い凹み状の打痕から砥石・石皿の二通りの用途を持つものと思われる。しかし砥石面の摩擦痕から考えて、本来の大きさはこれより大きく半割後、水平に設置して石皿として使用したものと思われる。88～108までがSD-01出土。

包含層出土の石器（Fig.152～Fig.156, PL.72,73,76）

109　凹基無茎式石鏃で基部の抉りは浅い。両面調整で基辺からの微調整は丁寧である。中央に階段状の剥離面が残る。漆黒の黒耀石である。長さ2cm、重さ0.55g。110　サヌカイト製の凹基無茎式石鏃で抉りは浅く、先端部と脚部の一部を欠損する。加工は丁寧で全周におよび鋭利な側辺に仕上げている。長さ1.8cm、重さ0.54g。111　黒耀石製の部分研磨を施した凹基無茎式石鏃で、脚部が大きく開く。左脚は裏面からの力により切断。先端は切断されたものではなく、裏面からの剥離である。左側辺部の一部に研磨を施す。基部の抉りは大きく、脚の微調整は丁寧である。112　先端および基部を欠損する石鏃で、両面調整を施す。淡い灰褐色の姫島産黒耀石を使用している。113　平基無茎式石鏃、いわゆる三角鏃と称するもので先端部は欠損する。断面は凸レンズ状を呈し、調整は丁寧で両面におよぶ。漆黒の黒耀石を使用。114　平基無茎式石鏃の完形品で、先端部は尖る。剥離は両面に施されているが、風化が著しい。基部の剥離は新しい。長さ2.1cm、重さ1.03g。115　小型の凹基無茎式石鏃で先端部が欠損する。調整は両面に施すが、裏面は大まかであり、基部の抉りは浅い。不純物が多く混じる黒耀石を使用。116　平基無茎式石鏃で両面調整を施す完形品である。剥離は大まかで、姫島産黒耀石を使用している。長さ1.9cm、重さ0.54g。117　両基端を欠損する黒耀石製の平基無茎式石鏃で、調整は両面におよぶが、主要剥離面を基部の一部に残す。118　平基無茎式石鏃の一種と考えられる石鏃で、基部が丸味を持つ。表裏面とも周辺からの押圧剥離を施している。縞状に不純物が混じる黒耀石を使用。長さ2.3cm、重さ1.25g。119　平基無茎式石鏃の完形品で、先端部は丸味を持つ。調整は側面から施す。漆黒の黒耀石を使用。長さ1.6cm、重さ0.41g。120　細身の平基無茎式石鏃の完形品で、断面凸レンズ状を呈する。黒耀石を石材とし、両面調整を施すが、基部からの剥離は一部階段状剥離を施す。長さ2.3cm、重さ0.73g。121　黒耀石製小型石鏃の先端部で基部は折断されている。調整剥離は丁寧で両面におよぶ。122　素材となった剥片の主要剥離面を残す剥片鏃で、素材の打面側を先端部としている。裏面は全て調整を施している。先端部・基部の一部を欠損する。123・124・126　黒耀石製の凹基無茎式石鏃であるが、抉り部分は浅く、中央部に舌状の突起が付く。調整は大まかで両面に及ぶが主要剥離面の一部を残す。先端の調整から未製品と思われるが、両側辺に摩耗痕が認められる。125　黒耀石製の平基無茎式石鏃でいわゆる三角鏃と称する部類に入る。両脚は尖らず、先端部は欠損する。側辺部からの剥離は大まかである。127　黒耀石製縦長剥片の下端を折断したものを素材として、剥片の右側辺を鏃の先端部とし、主要剥離面側より先端および基部の一部に加工を施した剥片鏃の未製品である。128　黒耀石製の尖頭状を呈する有茎式石鏃で、基部の端部及び先端部は欠損する。調整は側辺からの連続する剥離で、両面の一部に第一剥離面を残す。129　黒耀石製の菱形を呈する有茎式石鏃の完形品で、丁寧な調整を両面に施す。基部及び側面及び表面の一部に研磨痕(使用時による摩滅痕？)が認められる。長さ2.1cm、幅1cm、厚さ0.6cm、重さ0.85g。130　ハリ質安山岩製の半月形石器で、両面加工を施す。組み合わせ石器の一種と考えられる。鋭利な部分は右側辺部で、この部分が刃部であろう。長さ3.5cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.95g。131　自然面を有する縦長剥片で、一部に二次加工を施す。良質の黒耀石を使用している。132　自然面を有する剥片の両側縁に裏面から連続する調整剥離を施し、刃部を形成し削器としている。良質な漆黒の黒耀石を素材とする。133　上下端を切断する薄い縦長剥片で、上端は裏からの加撃により剥離されている。又、若干の刃こぼれが見られることから、石刃として利用されたことが窺える。黒耀石を使用。134　黒耀石製の自然面を有する縦長剥片で、剥取方向はすべて上から行っている。打面は自然面で、厚みのある剥片である。135　黒耀石製の縦剥ぎ剥片の両側縁に連続する浅い調整剥離を施し刃部を形成する。右側縁は大剥離面、左側縁は主要剥離面から施す。又、下端も両面より調整剥離を行う。打面は自然面である。136　凝灰岩製磨製石剣で、

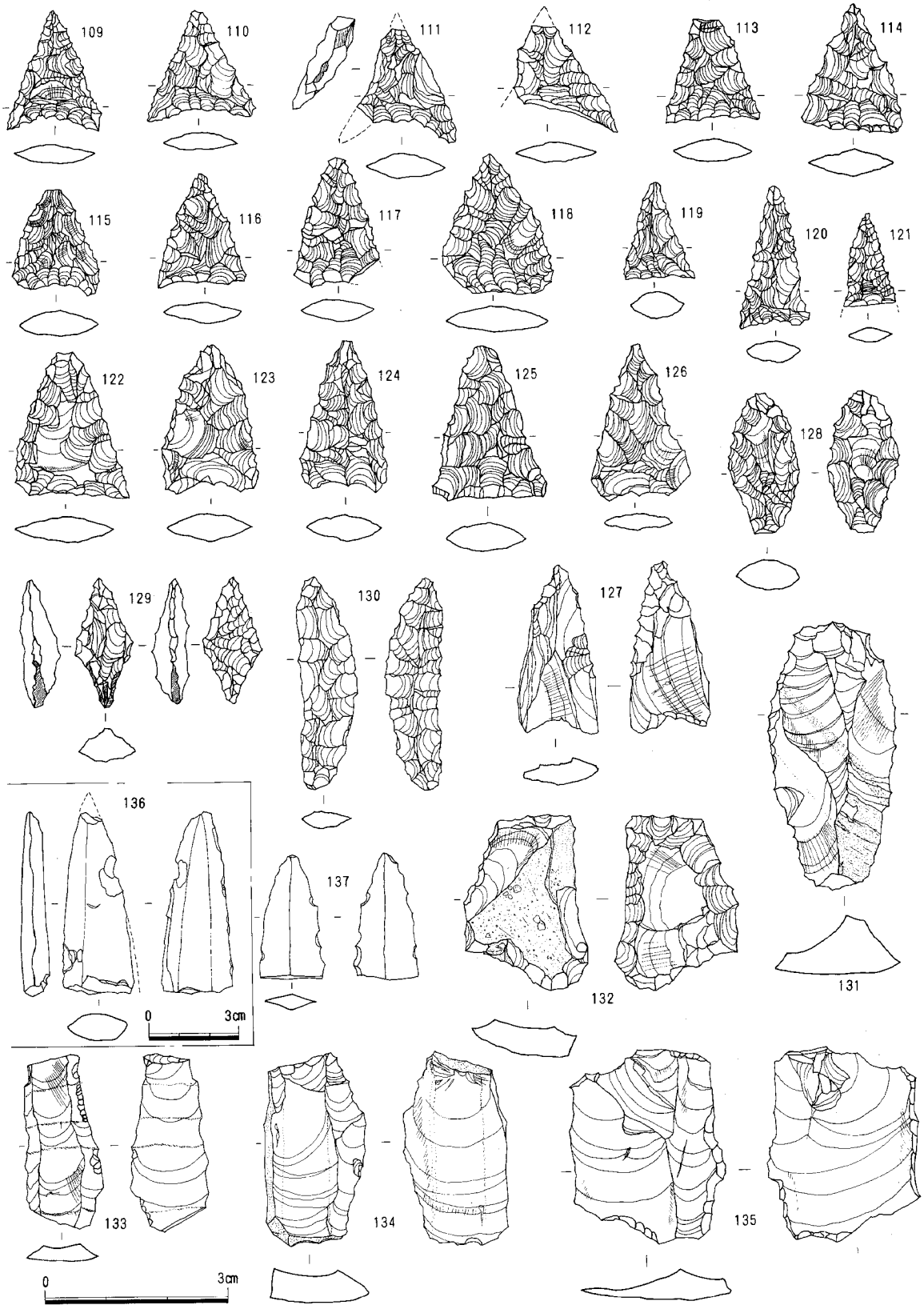


Fig.152　第9次調査包含層出土石器実測図1（1/1,1/2）

基部及び先端部を欠損。研磨は丁寧で、刃部は刃こぼれが広い範囲に確認できる。137　頁岩製磨製石鏃の先端部で、断面菱形を呈する。研磨は丁寧で鋭利な側辺部は一部刃こぼれがある。138　横長の漆黒の黒耀石を素材とした掻器である。素材となった剥片の下端を側縁とし、この部分の2/3下方に主要剥離面側より連続する調整を施し刃部を作り出す。又、1/3上方は大剥離面側からの調整を施す。上部は切断され、この切断面を打点として大まかな剥離を行う。素材となった剥片の打面側切断面は無調整だが、若干の刃こぼれが認めれる。139　縞状に不純物が混じる黒耀石を石材とした縦長剥片である。剥離方向はすべて上からの一方向で、打面は調整打面である。140　打面・裏面に自然面を有する黒耀石の小型石核である。剥離面は2面で、上下二方向からの打撃によって剥取する技法を持つ。打面は調整打面である。141　不純物が多い黒耀石の石核で、打面は自然面である。表面は上からの剥離、裏面は下からの剥離面を持つ。142　桂岩製の抉入柱状石斧の破損品で、表裏面とも剥離されているが、丁寧に研磨された抉入部だけが遺存する。143　散発的に出土した4片は同一物で、幅の狭い方の3片は1塊が3片に剥がれた物で、残る1片もこれに接する。接合後の形状は半円形を呈し、上端は幅が広く、下端に向かって徐々に狭くなる。先端は両面から穿つ孔を有するが、半分より上位を欠損するため全容は知り得ない。扁平な勾玉の形状を呈するものと思われる。一部に軟化した部分があるが、全体に丁寧な研磨を施す。凝灰岩製である。144　透明感のあるスカイブルーの色彩を呈するガラス小玉である。大部分が欠損するが、復元径0.55cm、厚さ0.2cm、長さ0.6cm。145　桂岩製の扁平片刃石斧で刃部の一部を欠くがほぼ完形品である。全体に丁寧な研磨を施し、刃部角度41度、全長5.1cm、幅2.1cm、厚さ0.8cm。146　桂岩製扁平片刃石斧で、基部は欠損。前・後主面の研磨は丁寧で、刃部下端は研出しによる稜をもつ。側面は研磨が確認できない。刃部角度41度。147　桂岩製扁平片刃石斧で、刃部の一部を欠くがほぼ完形品である。全体に丁寧な研磨を施すが、風化のため軟化が進む。刃部角度43度、全長5.3cm、幅2cm、厚さ0.7cm。148　頁岩製の扁平な方形を呈する剥片で、打面は調整打面である。扁平片刃石斧の未製品と思われる。149　頁岩製の柱状片刃石斧の欠損品である。刃部は刃縁欠損のため全容は知り得ないが、片刃と思われる。又、幅に対して厚さが厚く側面に研磨が認められないことから、側面は剥離された可能性が考えられる。研磨は前・後主全面に施す。150　桂岩製の柱状片刃石斧の欠損品で、研磨された面は2面のみである。刃部の先端部及び基部部分を欠損する。151　桂岩製の小型柱状片刃石斧で、刃部を欠損する。研磨は丁寧で光沢を帯びる。152　頁岩製小型扁平片刃石斧で、全面に研磨を施す。刃部は刃こぼれが認められる。刃部角度39度で基部を欠損する。153　桂岩製の小型扁平片刃石斧の完形品である。研磨は丁寧に施すが、側辺部には施していない。刃部角度36度。154　桂岩を石材とする小型柱状石斧で基部・刃部が破損。後主面側刃部がやや上方に上がる形態を呈する。風化のため軟化が進んでいる。155　桂岩製の柱状片刃石斧の一部で、研磨面と敲打痕の面を有する。156　滑石製の紡錘車で中央の孔は片面から穿つ。全面を丁寧な研磨を施し、側面は丸味を持つ。157　棒状の石製品で、上位は細く全体に研磨を施し、断面は円形を呈する。中央より下位は六面に面取りし、下方は更に小さく面取りを行い、上位より幅が広い。下端は敲打痕を残す。158　凝灰岩製の石鎌である。風化が著しく器表面は摩滅する。159　凝灰岩製の杏仁形石庖丁で、中央上位に両面から穿つ孔を1つ有する。風化が著しく研磨は確認できない。160　玄武岩製太型蛤刃石斧で、基端は欠損する。刃部は丁寧な研磨を施すが、部分的に敲打痕が残る部分がある。刃縁は使用時における刃こぼれや摩滅痕が認められる。161・162　両方とも滑石製の紡錘車で中央の孔は両面から穿つ。孔の外周に浅い溝状の圧痕が巡る。研磨は全面におよび、使用頻度は高い。161は表裏面に擦痕が認められる。又、赤色の粒子が付着する。163　扁平な砂岩製の砥石で両面を使用するが、裏面の使用頻度は低い。164　下位・裏面を欠損する方形の凝灰岩製砥石で三面を使用している。又、火を受け

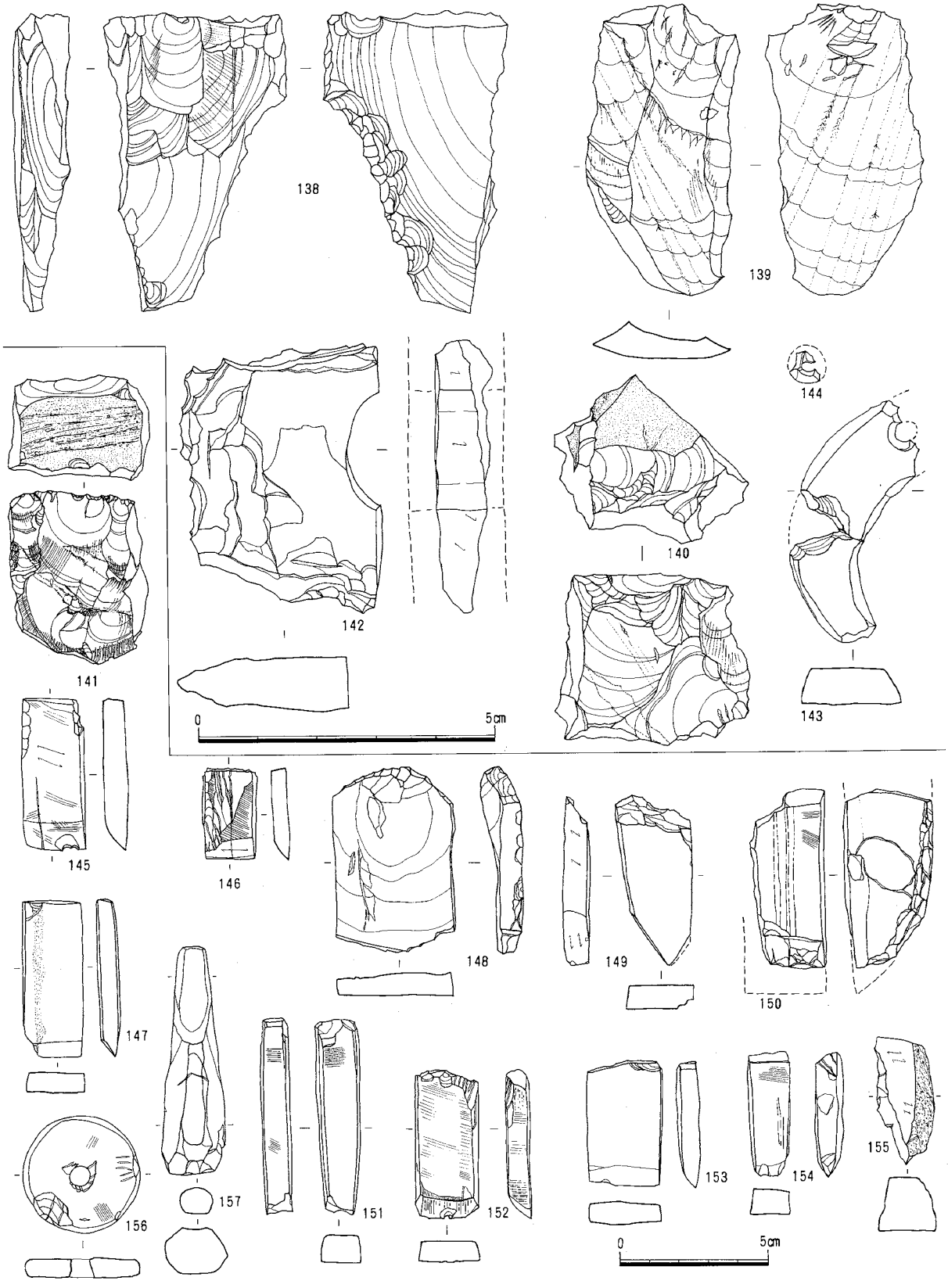


Fig.153　第9次調査包含層出土石器実測図2（1/1,1/2）

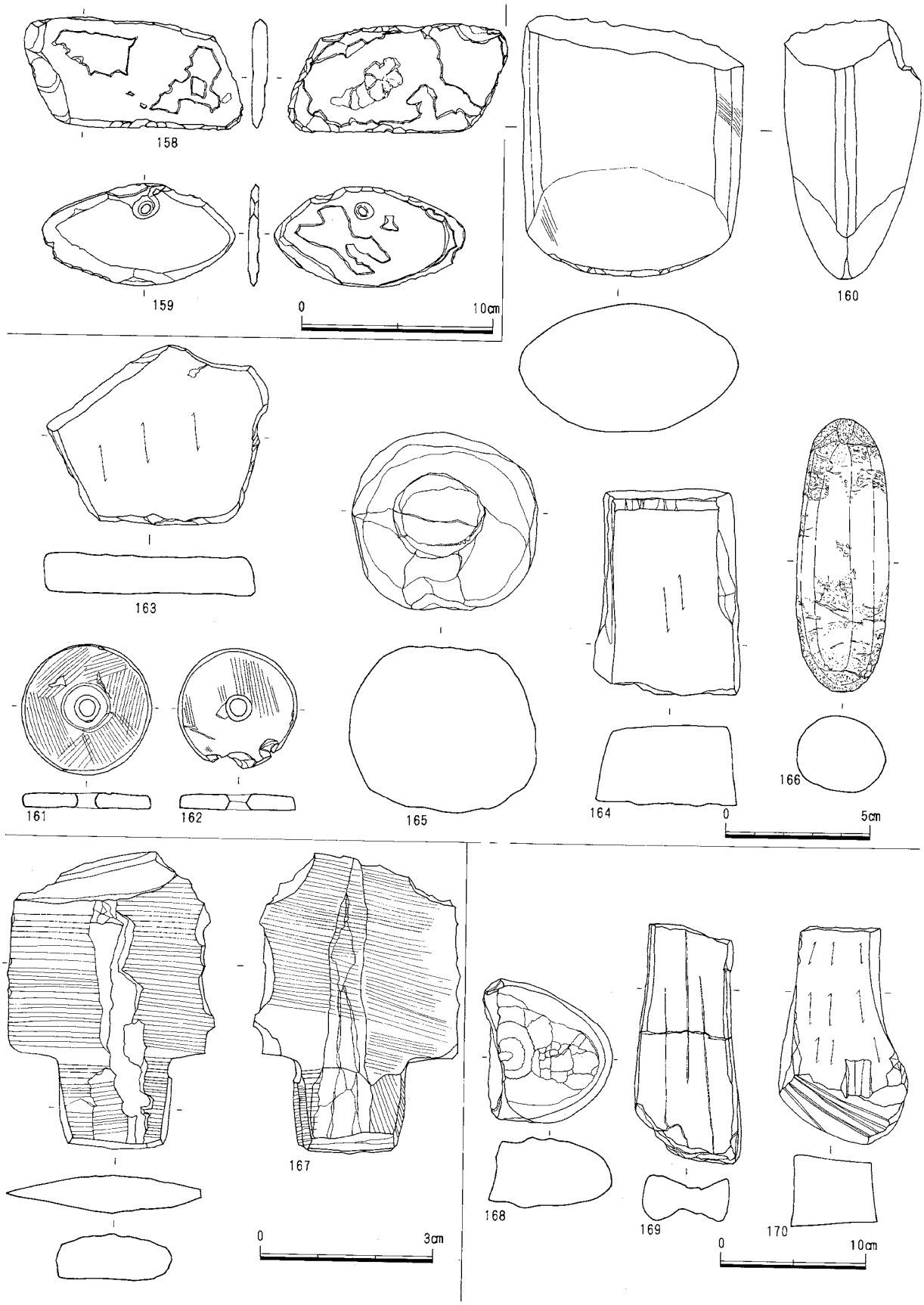
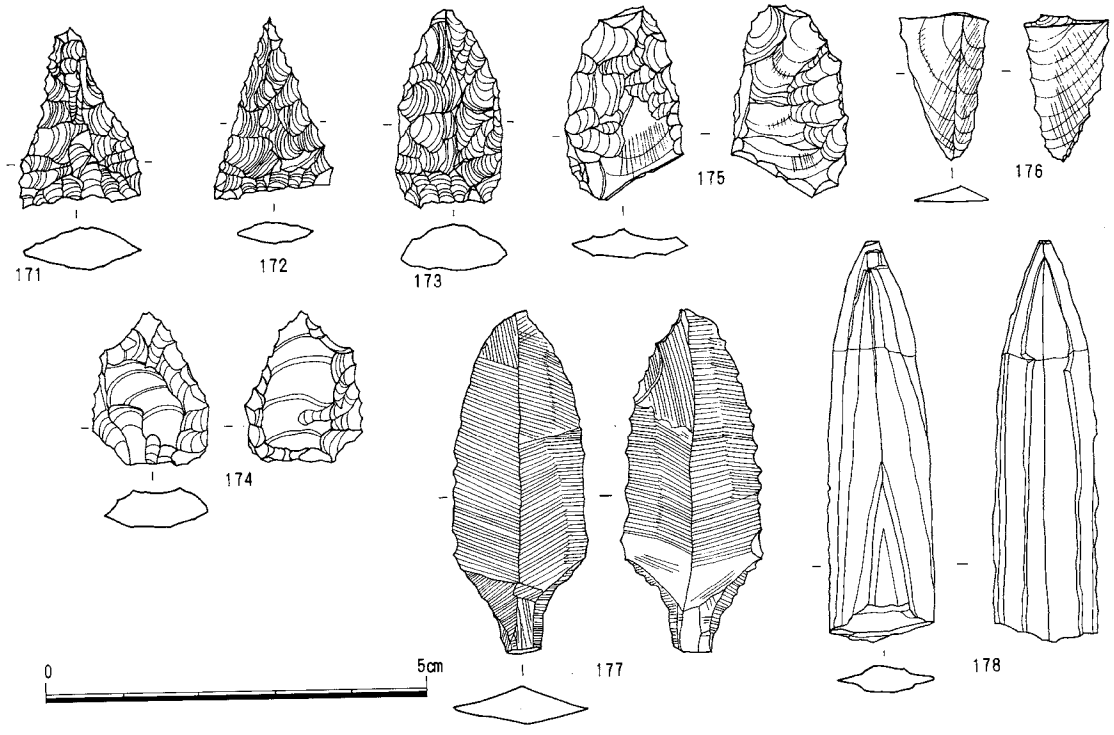


Fig.154　第９次調査包含層出土石器実測図３（1/1,1/2,1/3,1/4）

た痕跡がある。165　花崗岩製の球形に近い形態の磨石で、一部に研磨を施す。166　玄武岩製の棒状の磨石で、上下端に打裂痕を有する事から叩き石としての用途もある。167　凝灰岩製の石剣で、先端部は欠損している。中央の鏑は意識的に削り取られた痕跡が残る。断面菱形を呈し、右側辺部には刃こぼれがある。茎の断面は方形に近い形状を呈する。茎との境は抉りを右側に持つ。研磨は横位が主体である。168　花崗岩製の扁平な楕円形の半割品で、中央部に丸い凹みを有する。凹みの周りは敲打痕が広い範囲に認められ、又、裏面及び上下端にも敲打痕を伴う浅い凹みを有する。169　砂岩製の砥石で、四面を使用しているが、特に表裏面の使用頻度は高く、中央が極端に薄くなるほど使用している。170　使用頻度の高い砂岩製の砥石で上部は欠損。下端は鋭利な物を研いだ溝を数条有し、裏面一部には敲打痕を有する。171～173　黒耀石製の平基無茎式石鏃で、基部は平坦である。連続する丁寧な剥離を両面に施す。先端部は急激に尖る。断面は凸レンズ状を呈する。174･175　加工途中と考えられる石鏃の未製品で、両面とも第一剥離面を有する。黒耀石製で風化が著しい。176　黒耀石製の切断剥片で、表面からの加撃によって切断し、裏面右下端に使用痕が認められる。177　有茎式の磨製石鏃で、全体に粗い横位の研磨を施す。先端のみ縦方向の研磨が加わっている。断面菱形を呈し、茎部は面があるものの円形に近い形状を呈する。石材は粘板岩である。長さ4.6cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重さ3.45g。178　頁岩製の磨製石鏃で、基部は破損している。断面菱形を呈するものと思われるが、風化が著しく両側辺は薄くなる。179　桂岩製の剥片であるが、加工の具合から柱状石斧を製作する途中と考えられる。打面側及び側辺に二次加工を施す。下端は折断している。180　桂化木製の砥石で四面を使用している。下端は刃部状を呈する。火を受けたため黒色に変色している。181　頁岩製の扁平柱状片刃石斧でほぼ完形品である。全面に丁寧な研磨を施す。刃部角度は53度。182　桂岩製の小型柱状片刃石斧で、研磨は刃部に近い部位が丁寧で、基部側はやや甘い。基部は一部欠損するが、ほぼ完形品である。刃部角度は72度。183　玄武岩製の太型蛤刃石斧の刃部部分で、基部・裏面が欠損する。研磨は丁寧で、刃縁は広く摩耗し、使用頻度の高さが窺える。刃部角度55度。184　大型の硬質砂岩製の砥石で、三面の砥石面を有する。表面には数条の浅い溝を有し、鋳型の転用砥石とも考えられる。185　黒耀石製の剥片鏃で、表面は全面に調整を施すが、裏面は周縁部からの剥離のみで、主要剥離面を大きく残す。基部は平坦で、打点を右側基端部におく。186　先端部を欠損する黒耀石の石鏃で、いわゆる三角鏃と称する部類に属する。187　縞状に透明感のある黒耀石製の平基無茎式石鏃に近い部類の基部に舌を持つタイプである。調整は丁寧で全面におよぶ。188　細身で長身の石鏃で、基部は欠損している。周縁部は丁寧な押圧剥離によって仕上げている。189　碧石製の小型管玉で、約2/3が欠損している。復元径0.4cm、長さ1.0cmである。190　滑石製の勾玉で、頭部は欠損している。緑がかった白色を呈し、全体に丁寧な研磨を施す。191　頁岩製の磨製石剣の柄の部分で、下端は八状に開く。先端部は欠損する。左右の下端は形状が異なるが、右端部は再生された可能性がある。風化が著しいが、一部に研磨が残る。192　桂岩製の扁平片刃石斧で、基部を欠損する。研磨は丁寧で全面におよぶ。193　滑石製紡錘車で中央の孔は片面より穿つ。研磨は全面で側辺に丸味をもつ。194　硬質砂岩の磨石で、面取り後研磨を施す。下端は欠損するが、上端は擦痕が確認できる。195　凝灰岩製太型蛤刃石斧で、刃部は欠損する。敲打を終了し研磨段階に入った直後のもので、基端の調整がなされていないことから、製作途中と考えられる。196･197　扁平な円礫の中央部に丸い凹みを有する凹石である。裏面も凹みを有し、表裏面同じ所に凹みを持つ。側辺の一部は欠損するが、残る一部には潰れ痕が認められる。196は玄武岩製、197は凝灰岩製である。



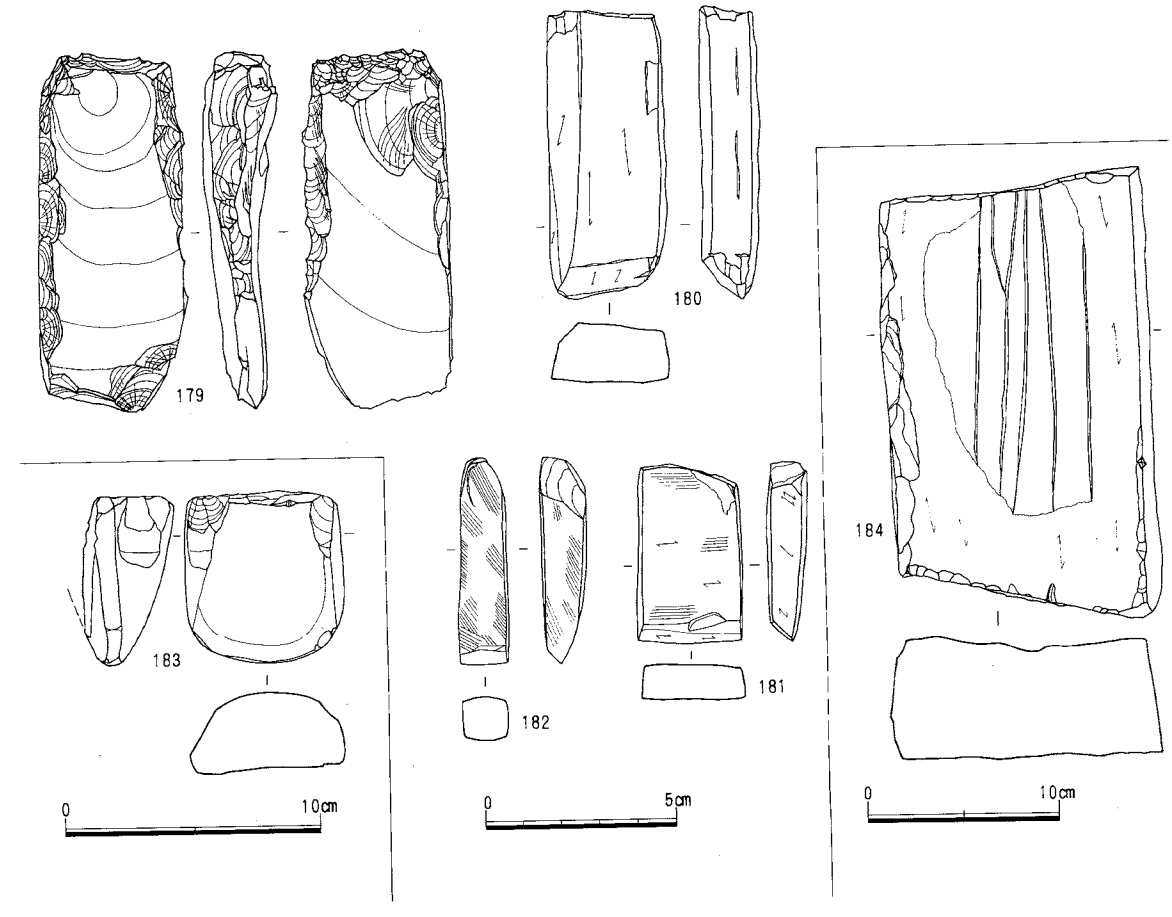


Fig.155　第9次調査包含層出土石器実測図4（1/1,1/2,1/3,1/4）

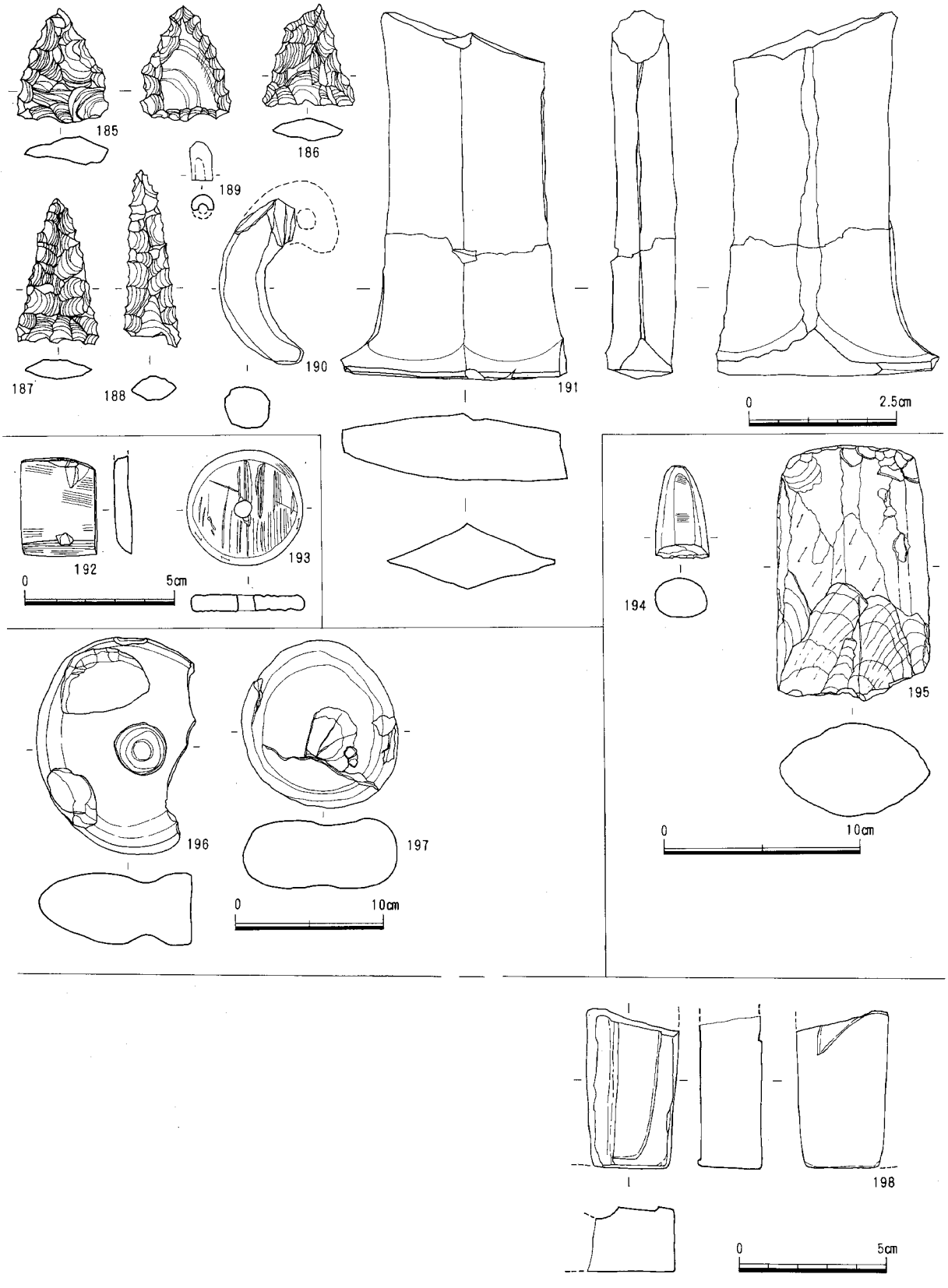


Fig.156　第9次調査包含層出土石器実測図5（1/1,1/2,1/3,1/4）

まとめ

今回の調査で空港西側の調査は９回目となるが、縄文時代晩期から弥生時代前期～古墳時代に至る集落跡が確認されたのは４・５次調査に次いで２ヶ所目となる。直線距離にして僅か３００メートルしか離れていない距離であることを考えるとほぼ同時にこの地への進出が開始され、また、ほぼ同時にこの地を放棄しているといえる。突帯文土器の時期から定住が始まり古墳時代前期の布留式土器の時期で突然遺構が消滅している。この２地点では遺跡の在り方がやや異なっている。以下両遺跡を比較しながらその違いを見ていきたい。

７・９次調査では縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構、遺物が相当の量出土している。稲作開始時期の当初からこの低湿地の中の微高地に初めて当時の人々が進出してきたことが窺える。４・５次調査では墓地の確認は出来なかったが、７・９次の調査では甕棺と土壙墓を確認できた。前期中頃から前期後半にはおそらくは集落の端部（住居跡は検出できなかったが微高地の中央部には集落が形成されていたものであろう。）に墓地が形成されている。土壙墓９基、甕棺墓８基の小規模な墓地を形成している。土壙墓の人骨は埋葬した当時のままの形態を保っているものは少なく、６・９号土壙墓の人骨は双方が接する部分で下肢部の骨が錯綜している。このような人骨の乱れは遺体が骨だけになるまで木棺などでその間に空間などが存在するか、あるいは埋葬後に二次的な行為がなければそのような状況にはならないのではないかという意見もあるが土壙の掘り方が不明瞭であり、その状況を明瞭には捉えられないが、低湿地に位置しながら木棺の残欠も確認できなかったことから土壙墓と考えたい。ただ当時は乾燥した地域で、木棺が腐朽した後湿地になったとすれば木棺が残らなくてもよく、木棺墓の可能性もある。副葬遺物はほとんどないが５号土壙墓の頭蓋骨の南側から小壷が１点（Fig.８）出土している。押し潰されて周辺に破片が散乱しているが、ほぼ完形品に復元できた。板付Ⅱ式の小壷である。底部は円盤貼り付け状の厚い底部であるが胴部との接合面はなだらかで肩部の模様も乱れている。

甕棺は下甕に大型の壷の口縁部を打ち欠いたもの、上甕には同様の壷の胴部上半を同じように打ち欠いた壷を用いている。板付Ⅱ式併行期の甕棺で新しいものでは伯玄式～金海式の時期まで甕棺がある。２号甕棺の副葬小壷（Fig.11）は棺として利用した土器よりやや古く疑問が残らないわけではないが副葬小壷だけで考えると２号甕棺が古く、その後５号土壙墓が築かれたことになる。５号土壙墓の下から７・８号土壙墓が検出したこと、遺構のあり方、切り合い関係を考慮すると最初にまず土壙墓が築かれ、その後甕棺が埋葬され前期後半までの時期の墓地を形成していたものであろう。出土した人骨の検討により縄文人とは異なる特徴があるが縄文晩期集団に見られる抜歯風習が認められるという。弥生時代中期の遺構はⅠ区Ⅰ面の４号溝状遺構やⅡ区Ⅱ面の14号～17号住居跡があるに過ぎない。土器などは包含層などから相当出土している。前期と比較すると貧弱で細々と小規模の集落が展開していたものと考えられる。後期になると４・５次調査では環濠を巡らしその内部に大型掘立柱建物をもち、短甲、盾などの遺物を出土している。７・９次調査では遺物もほとんどなく、ましてや環濠、掘立柱建物はなく、その様相が一変している。集落が消滅したのかあるいは二つの集落が一箇所に集中して環濠をめぐらせるような社会情勢の変化が生じたのか今後検討していかなければならない。

古墳時代前期、庄内～布留式の時期になると両地点とも大規模な集落となる。今回の調査では微高地の縁の東側と西側に大量に土器を廃棄している。出土遺物の８割を超す量で報告書に示したのは完形品もしくは特徴のあるものである。集落の規模62×48mの広さを測る。外来系の遺物も多く、検討すべき問題も多いがそれらについては今後進めていきたい。

4．付論 福岡市雀居遺跡（第7・9次調査）出土の弥生前期人骨

中橋孝博（九州大学）

はじめに

縄文晩期から弥生初期にかけての頃、北部九州にはどのような人々が居住していたのか。従来より資料空白期となっている縄文～弥生移行期の人骨を充実させ、この間の推移を人類学的な側面から具体的に追跡することは、当地における人類学上の懸案の一つとなっている。これまでのところしかし、糸島半島・新町遺跡の支石墓から、土着タイプの骨形態と抜歯風習を持った弥生早・前期人骨（中橋・永井、1987）が出土するなど、解釈を混乱させるような出土例もみられ、依然として疑問点が山積した状況が続いている。先に筆者らは（中橋・飯塚、1998）、骨形態と人口学的な分析によってこの間の推移を考察し、一つのモデルを提出したことがあるが、その是非もまた、今後の出土資料による検証を経なければならないことは言うまでもない。

福岡空港内に位置する雀居遺跡は、こうした問題を考える上で非常に有益な情報をもたらす可能性を秘めた遺跡である。当遺跡は、最古期の水田遺構が検出されたことで知られる板付遺跡にも近く、実際にこれまでの発掘調査によって、縄文～弥生移行期の環濠や大量の木製品など、注目すべき遺物、遺構が多数検出され、当該期の状況を考える上で好適の遺跡として注目されている。平成3年度の試掘調査を皮切りに、福岡市教育委員会による調査が永年に渡って実施されているが、第7次、第9次調査によって懸案の人骨資料も出土したので、ここにその人類学的な検討結果を報告する。

遺跡・資料・方法

雀居遺跡は、福岡空港の南西端近く、滑走路と空港の外周道路の間に位置する。当地は米軍接収以前は水田地帯で、戦前の地図などから、その中に幾つか微高地が点在してそこに集落が展開していた状況が推察されている。自衛隊西部航空隊の移転に伴って、平成4年以降、福岡市教育委員会による発掘調査が実施され、主に縄文晩期から弥生時代にかけての環濠や大型の掘立柱建物跡、木製農耕具や石包丁、漆製品、紡錘器、大陸系の磨製石器などが大量に出土している。

本報告で取り扱う人骨資料は、第7次（1994年）、及び第9次調査（1995年）で出土したもので、表1に示すように、土壙墓9基、甕棺墓4基から検出されたものである。それぞれの所属時代も表1に示したが、考古学的な検証によって、土壙墓については弥生時代前期中頃、甕棺墓についてはいずれも前期後半のものと考えられている。

人骨の保存状態は全般的に不良である。通常の腐食に加えて、土圧や、人為的攪乱による歪みや破損が著しく、詳しい計測、観察に供し得る資料は一部に限られた。

計測は主に Martin-Saller（1957）に従い、鼻根部については鈴木（1963）の、性判定には筆者らの方法（中橋、1988）を援用した。

結果

A．頭蓋骨

頭蓋骨の形態的特徴について分析が可能であったのは、2号土壙墓人骨（女性、成年）に限られた。土圧による変形が認められたので、復元後、歪みの影響のない部分について計測した結果を表2に示した（図版参照）。

かなりの高顔傾向が認められ、例えばその上顔高は比較群を上回って、各示数も著しい高顔型を示

している。眼窩型、鼻型にも同傾向が見られ、鼻根部の扁平性（鼻根彎曲指数：95.8、なお、北部九州弥生人女性の平均は90.5；中橋・永井、1989）においても、従来よりこの地域の甕棺墓から出土している、いわゆる渡来系弥生人と共通する特徴を見せている。金隈弥生人（中橋、他、1985）や縄文人骨と共に主成分分析を行った結果を図1に示したが、当人骨は明らかに縄文人とは異なる特徴を持つことが見て取れよう。なお、この女性には、後述のように西日本縄文後晩期集団に多く見られるような型式の抜歯風習が認められた（表8、図版参照）。

B．四肢骨

計測結果を、比較群と共に表3，4，5，6に示した。

1．上肢骨

計測、観察可能であった男性上腕骨2例では、いずれもやや頑丈な傾向が窺えたが、骨体に扁平傾向などは認められない。女性3例では個体差があるが、いずれもかなり長く、縄文人などに較べるとその最大長は大きく上回っている。また骨体に目立った扁平性などはなく、男性同様やや頑丈な傾向が見られた。

2．下肢骨

男性1体の大腿骨は、長く太い骨体を持ち、比較群の中ではやはり北部九州弥生人などに近い傾向を見せている。骨体上部にやや扁平性が認められたが、中央部の断面示数は土井ヶ浜に近い。女性では、上肢とは少し異なって、比較群より幾分華奢な特徴を見せ、その最大長（大腿骨、腓骨）も北部九州弥生人などより短い。大腿骨、脛骨ともに、骨体断面に柱状性や扁平性は見られない。

3．推定身長

表7に、大腿骨最大長にピアソンの式を適用して推定した身長を示した。男女各1体ずつ（9-8号と7-2号）であるが、比較的高身長である。なお、発掘現場での計測によって、161.6cm（9-7号、上腕骨より）、154.2cm（7-6号、大腿骨より）といった結果も得ているが、やや不正確な数値なので、表示しなかった。いずれにしても、K-7号女性がやや低身長（146.3cm、上腕骨より）の可能性を持つ他は、概ね高身長傾向が窺える。

C．抜歯風習

当集団には、表8に示したように、女性3体に抜歯風習の痕跡が確認された。注目されるのはその型式で、明らかになった7-2号では、上顎両犬歯と下顎切歯4本を抜いており、K-7号にも、同型式での抜歯の可能性が窺えた。7-1号については残念ながら左上犬歯以外の部位での歯槽観察ができなかった。

考察

福岡空港内に位置する雀居遺跡は、まだ水田遺構こそ確認されていないものの、その出土遺物、遺構の内容から見て近隣の板付遺跡と同様、北部九州における初期農耕社会の実態を探る上で非常に重要な情報を内包している遺跡と考えられる。最初にも触れたように、この時期の人骨資料は、新町遺跡の支石墓人骨以外はこれまでほとんど出土しておらず、今回、少数ではあるがそうした遺跡から初めて特徴の明らかな人骨が出土したことは非常に意義深い。とりわけ、時代的に従来の甕棺墓人骨よ

り先行する前期中頃に、「渡来系弥生人」的特長をもった人々がこの地に居住していた事実が明らかになった点に注目したい。もとより形態的特徴が確認できたのはこの集団の一部にすぎず、まだまだ重大な資料空白期が残されている状況に変わりはないが、しかしわずかながら今回明らかになった事実は、縄文から弥生へという大きな変革を担った人々に関する近年の議論（金関、他、1995；中橋・飯塚、1998）にも一石を投じることとなろう。

また、こうした形態上の問題と同時に、この雀居遺跡の住人が、縄文集団に頻繁に見られるような抜歯型式を採用していた事実もまた、少々意外な、興味深い新知見である。先に報告した新町遺跡では、渡来系の支石墓に縄文的形態と抜歯風習をもった人が埋葬されていたことで論議を呼んだ訳だが、今回は、いわゆる渡来系弥生人的な特徴に、縄文的抜歯を施行しており、あらためて当時の複雑な状況を如実に示すような結果となった。こうした事実をどのように理解すべきなのか、おそらくまた様々な解釈が入り乱れることになろうが、いずれにしろ現実の僅かな事例に基づく結論付けは困難であり、今回の出土を一つの励みとして、今後とも当該期の資料充実に努め、この懸案解決にむけて取り組んでいきたいと考える。

文　献

阿部英世（1955）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究２。

原田忠昭（1954）：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」、人類学研究１。

池田次郎（1988）：「吉備地方海岸部の縄文時代人骨」、考古学と関連科学（鎌木義昌先生古希記念論集）

鐘鍋命達（1955）：「九州人下腿骨の研究」、人類学研究２。

金関恕・大阪府立弥生文化博物館編（1995）：「弥生文化の成立－大変革の主体は縄文人だった」、角川書店。

金関丈夫・永井昌文・佐野一（1960）：「山口県豊北町土井ヶ浜遺跡出土の弥生式時代人頭骨」、人類学研究７。

金高勘次（1928）：「吉胡貝塚人骨の人類学的研究」、人類学雑誌４３。

清野謙次・宮本博人（1926）：「津雲貝塚人人骨の人類学的研究、第２部、頭蓋骨の研究」、人類学雑誌４１。

Martin-Saller（1957）：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.I.Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

松下孝幸（1981）：「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」、大友遺跡、佐賀県呼子町文化財調査報告書１。

溝口静男（1957）：「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」、人類学研究４。

内藤芳篤（1971）：「西北九州出土の弥生時代人骨」、人類学雑誌７９。

中橋孝博（1988）：「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）、六興出版。

中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。

中橋孝博・永井昌文（1987）：「福岡県志摩町新町遺跡出土の縄文・弥生移行期の人骨」、志摩町文化財調査報告書７。

中橋孝博・永井昌文（1989）：「弥生人の形質、男女差、寿命」、弥生文化の研究１、雄山閣出版。

中橋孝博・土肥直美・永井昌文（1985）：「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」、史跡金隈遺跡、福岡市埋蔵文化財調査報告書123。

中橋孝博・飯塚勝（1998）：「北部九州の縄文～弥生移行期に関する人類学的考察」、Anthropological Science,106.

専頭時義（1957）：「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」、人類学研究４。

鈴木尚（1963）：「日本人の骨」、岩波新書477。

表1．福岡市雀居遺跡第7・9次調査出土弥生時代人骨

番号	時代	性	年齢	埋葬姿勢	抜歯	備考
第7次						
7-1号土壙墓	前期中頃	女？	成年	不明	有？	集骨
7-2号土壙墓	前期中頃	女	成年	仰臥屈肢	有	
7-3号土壙墓	前期中頃	男？	成人	不明	？	散乱状態
7-4号土壙墓	前期中頃	？	成年	不明	？	集骨
7-5号土壙墓	前期中頃	？	熟年	仰臥屈肢	？	
7-6号土壙墓	前期中頃	女	成年	仰臥	？	体部骨散乱、小壺副葬
K－2号甕棺	前期後半	？	小児		？	
K－6号甕棺	前期後半	？	若年？		無	
K－7号甕棺	前期後半	女	熟年		有	
K－8号甕棺	前期後半	男	熟年～		？	
第9次						
9-1号土壙墓	前期中頃	男？	成年	仰臥屈肢	？	
9-2号土壙墓	前期中頃	男	熟年	仰臥屈肢	？	
9-3号土壙墓	前期中頃	男	成人	不明	？	集骨

表2．主要頭蓋計測値の比較（女性）

		雀居（弥生）7-2号	北九州[1]（弥生） N	北九州[1]（弥生） M	土井ケ浜[2]（弥生） N	土井ケ浜[2]（弥生） M	西北九州[3]（弥生） N	西北九州[3]（弥生） M	広田（弥生） N	広田（弥生） M	津雲・吉胡[4]（縄文） N	津雲・吉胡[4]（縄文） M	西南日本[5]（現代） N	西南日本[5]（現代） M
45	頬骨弓幅	-	61	131.3	20	131.9	6	130.2	4	126.0	10	132.6	57	123.9
46	中顔幅	96	67	99.8	23	98.5	11	95.9	6	91.8	23	99.7	57	93.4
47	顔高	(127)	45	116.3	23	114.2	9	104.9	4	105.3	14	105.1	14	112.9
48	上顔高	74	66	70.1	22	68.3	12	60.9	4	62.0	17	62.0	55	68.2
47／45	顔示数（K）	89.8	34	88.7	17	86.6	6	81.7	3	81.1	7	79.2	14	90.8
47／46	顔示数（V）	132.3	39	116.7	21	115.9	9	109.5	4	110.8	13	106.8	14	119.0
48／45	上顔示数（K）	-	49	53.7	17	51.8	6	47.6	3	47.9	7	48.0	55	55.0
48／46	上顔示数（V）	77.1	57	70.2	21	69.3	11	63.5	4	65.3	14	62.3	55	72.9
51	眼窩幅（左）	41	66	41.6	24	40.3	10	41.1	4	39.3	22	41.7	57	40.5
52	眼窩高（左）	33	65	34.1	25	33.3	10	31.2	4	30.3	14	32.6	57	34.0
52／51	眼窩示数（左）	80.5	62	82.0	24	82.6	10	75.9	4	77.7	13	78.0	57	83.9
54	鼻幅	27	72	26.6	20	26.0	12	26.6	5	24.8	27	25.4	57	25.0
55	鼻高	52	71	49.8	23	49.0	12	46.3	4	44.0	21	44.9	57	48.6
54／55	鼻示数	51.9	69	53.5	20	53.0	12	57.4	4	58.0	20	56.1	57	51.4

1)中橋・永井（1989）、 2)金関、他（1960）、 3)内藤（1971）、 4) 清野・宮本(1925) ；金高（1928）、 5)原田(1954)

表3．上肢骨計測値（男性、左）

		雀居（弥生） K-8	雀居（弥生） 9-8	北部九州[1]（弥生） N	北部九州[1]（弥生） M	山口[1]（弥生） N	山口[1]（弥生） M	大友[2]（弥生） N	大友[2]（弥生） M	津雲[3]（縄文） N	津雲[3]（縄文） M	九州[4]（現代） N	九州[4]（現代） M
上腕骨													
1	最大長	-	-	22	302.6	29	305.3	11	291.4	36	284.3	106	295.3
2	全長	-	-	17	296.8	23	300.0	8	285.8	35	280.6	106	290.6
5	中央最大径	23	25	76	23.3	61	23.1	34	23.4	50	24.1	106	21.9
6	中央最小径	19	20	76	17.4	61	17.6	33	17.6	50	17.8	106	16.9
7	骨体最小周	-	68	81	63.9	66	63.7	33	63.5	50	64.0	106	61.8
7a	中央周	(72)	72	75	67.8	57	67.5	33	68.2	50	69.3	106	63.7
6/5	骨体断面示数	82.6	80.0	76	74.9	61	76.5	33	75.0	50	73.9	106	79.1
7/1	長厚示数	-	-	22	21.3	28	20.8	11	22.4	36	22.7	106	20.9
橈骨													
4	骨体横径	-	19	79	17.2	51	17.4	25	17.1	42	17.1	63	16.0
5	骨体矢状径	-	12	79	12.5	51	12.0	25	12.4	42	12.0	63	11.7
5/4	骨体断面示数	-	63.2	79	72.6	51	69.6	25	72.3	42	70.2	60	71.4

1)中橋・永井(1989)、 2)松下（1981）、 3)池田(1988)、 4)專頭(1957)、溝口(1957)

表4．上肢骨計測値（女性、左）

	雀居（弥生） 7-2	7-6	K-7	北部九州（弥生） N	M	山口（弥生） N	M	大友（弥生） N	M	津雲（縄文） N	M	九州（現代） N	M
上腕骨													
1 最大長	286	(299)	272	11	283.2	31	284.4	4	262.3	21	264.4	36	271.7
2 全長	283	-	-	8	282.3	29	279.4	4	257.8	19	259.6	36	268.6
5 中央最大径	22	-	21	35	21.0	43	20.4	20	21.0	40	19.7	36	19.8
6 中央最小径	17	-	16	36	15.3	43	15.4	20	15.8	41	14.0	36	14.8
7 骨体最小周	59	-	59	47	56.9	49	56.0	19	57.6	42	53.9	36	54.8
7a 中央周	62	-	63	33	60.7	41	59.1	19	61.8	40	56.5	36	56.9
6/5 骨体断面示数	77.3	-	76.2	35	73.2	43	75.9	20	75.9	40	71.3	36	75.3
7/1 長厚示数	20.6	-	-	11	19.8	31	19.6	11	22.4	21	20.4	106	20.9
橈骨													
1 最大長	217	-	-	17	215.1	21	219.1	2	207.0*	24	208.2	12	199.2
2 機能長	-	-	-	11	204.3	20	208.2	2	194.0*	26	196.4	12	187.0
3 最小周	-	-	39	52	37.9	36	37.4	9	40.4	30	36.4	12	34.7
4 骨体横径	17	-	15	56	15.7	39	15.4	11	16.4	34	14.6	12	14.5
4a 骨体中央横径	-	-	-	24	14.3	28	14.2	11	15.9	-	-	12	13.5
5 骨体矢状径	12	-	10	56	10.9	39	10.4	11	11.2	34	9.8	12	9.7
5a 骨体中央矢状径	-	-	-	24	10.8	28	10.6	12	10.9	-	-	12	9.7
3/2 長厚示数	-	-	-	11	17.7	19	17.9	1	19.7*	25	18.2	11	18.1
5/4 骨体断面示数	70.6	-	66.7	56	69.3	39	68.1	11	68.7	34	67.5	10	68.3
5a/4a 中央断面示数	-	-	-	24	75.7	28	75.2	11	69.7	-	-	-	-
尺骨													
1 最大長	-	-	(231)	6	236.5	24	236.9	1	223.0	12	227.2	12	215.0
2 機能長	-	-	-	8	207.6	25	208.0	2	207.0	12	198.6	12	189.2
3 最小周	44	-	36	34	34.4	30	34.2	7	33.9	24	32.8	12	32.1
11 矢状径	12	-	10	54	11.2	41	11.3	12	12.8	37	11.3	12	10.9
12 横径	16	-	18	54	16.0	41	15.5	11	15.9	37	13.6	12	13.9
3/2 長厚示数	-	-	-	7	16.5	25	16.4	2	16.7	12	16.4	12	16.8
11/12 骨体断面示数	75.0	-	55.6	54	70.4	41	73.4	11	82.0	37	83.5	12	77.5

表5．下肢骨計測値（男性、左）

	雀居（弥生） 9-8	北部九州（弥生） N	M	山口（弥生） N	M	大友（弥生） N	M	津雲（縄文） N	M	九州[1]（現代） N	M
大腿骨											
1 最大長	426	60	430.9	37	434.4	15	420.1	19	414.1	59	406.5
2 自然位長	-	18	427.7	26	432.8	17	413.9	19	411.0	59	403.2
6 中央矢状径	28	162	29.7	72	29.1	41	28.6	47	29.0	59	26.5
7 中央横径	26	166	28.0	72	27.2	42	26.4	47	26.0	59	25.6
8 中央周	89	161	90.8	72	88.9	41	87.0	47	87.4	59	82.4
9 骨体上横径	32	115	32.6	74	32.7	38	31.6	43	30.7	59	29.4
10 骨体上矢状径	24	115	26.2	74	26.0	38	25.2	43	25.5	59	24.3
8/2 長厚示数	-	18	21.4	26	20.5	16	21.4	19	21.2	59	20.4
6/7 中央断面示数	107.7	162	106.4	72	107.6	41	108.6	47	111.8	58	103.8
10/9 上骨体断面示数	75.0	115	80.5	74	80.0	39	80.1	43	83.1	58	82.8

1)阿部(1955)、鐘鍋(1955)

表6．下肢骨計測値（女性、左）

		雀居（弥生） 7-2	雀居（弥生） K-7	北部九州（弥生） N	北部九州（弥生） M	山口（弥生） N	山口（弥生） M	大友（弥生） N	大友（弥生） M	津雲（縄文） N	津雲（縄文） M	九州（現代） N	九州（現代） M
大腿骨													
1	最大長	(398)	-	34	405.5	30	403.9	5	386.8	22	388.2	13	380.1
2	自然位長	-	-	11	403.0	26	399.5	4	378.3	22	381.7	13	375.9
6	中央矢状径	23	22	112	25.7	50	25.5	30	25.5	45	25.2	13	23.6
7	中央横径	26	25	112	26.3	50	26.2	30	25.2	45	24.2	13	23.2
8	中央周	79	77	111	81.5	50	80.9	29	80.4	45	78.0	13	74.2
9	骨体上横径	31	29	86	30.5	50	31.0	30	29.7	42	28.4	13	27.5
10	骨体上矢状径	21	21	86	23.2	50	23.0	30	22.7	42	22.2	13	21.3
8/2	長厚示数	-	-	11	20.8	26	20.2	4	20.3	21	20.3	13	19.8
6/7	中央断面示数	88.5	88.0	112	98.3	50	97.5	31	102.1	45	104.5	13	102.0
10/9	上骨体断面示数	67.7	72.4	86	76.4	50	74.5	30	76.5	42	78.2	13	77.1
脛骨													
1	全長	-	-	20	324.3	20	326.8	3	313.0	17	319.8	14	301.0
1a	最大長	-	-	30	329.3	23	331.0	4	324.8	17	324.4	14	306.6
8	中央最大径	-	28	46	27.0	31	26.9	24	27.6	42	27.3	14	24.7
8a	栄養孔位最大径	27	30	97	30.8	42	30.5	19	30.4	37	30.5	14	28.1
9	中央横径	-	20	46	20.4	31	19.1	26	19.7	42	17.9	14	18.8
9a	栄養孔位横径	20	22	98	22.3	42	21.6	20	21.1	36	19.4	14	21.1
10	骨体周	-	76	46	74.5	30	72.6	23	75.3	42	73.4	14	70.1
10a	栄養孔位周	74	82	96	83.2	42	82.2	18	81.6	35	81.3	14	78.2
10b	最小周	66	67	82	68.6	44	67.5	24	68.3	35	67.6	14	63.6
9/8	中央断面示数	-	71.4	46	75.7	31	71.1	23	72.1	42	65.8	14	76.3
9a/8a	栄養孔位断面示数	74.1	73.3	97	72.4	42	71.2	18	70.4	36	63.6	14	74.9
10b/1	長厚示数	-	-	20	21.3	20	20.3	3	21.4	17	21.1	14	21.2
腓骨													
1	最大長	-	302	2	328.0	17	324.0	-	-	8	316.9	14	300.6
2	中央最大径	13	14	34	14.7	29	14.8	-	-	32	14.7	14	12.9
3	中央最小径	10	9	34	9.8	29	9.6	-	-	32	10.0	14	8.6
4	中央周	42	41	34	40.7	28	41.0	-	-	32	42.8	14	36.8
4a	最小周	39	35	8	35.6	21	37.3	-	-	20	34.0	14	32.3
3/2	中央断面示数	76.9	64.3	34	67.3	29	65.2	-	-	32	68.3	14	67.6
4a/1	長厚示数	-	115.8	2	10.8	17	11.6	-	-	8	11.0	14	10.8

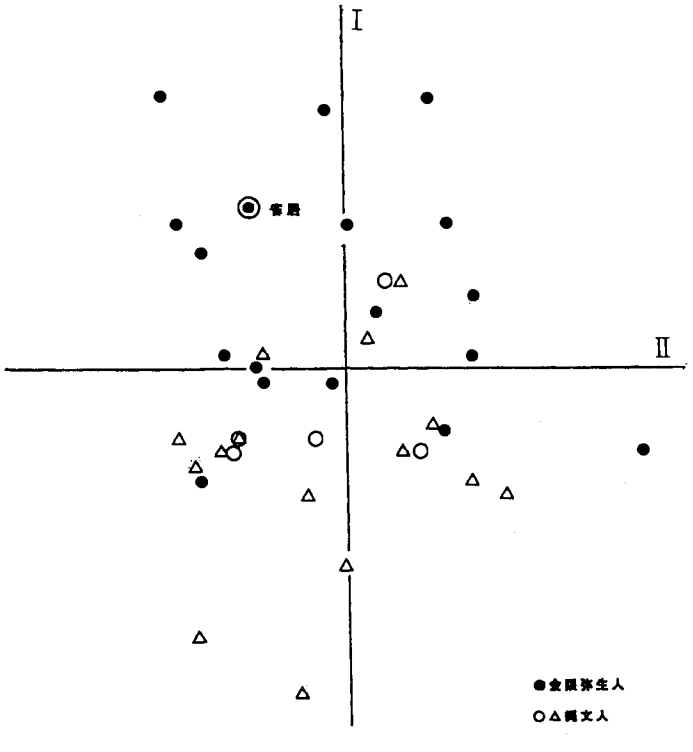


図1．主成分分析（顔面7項目、女性）

表7．推定身長の比較 (cm)

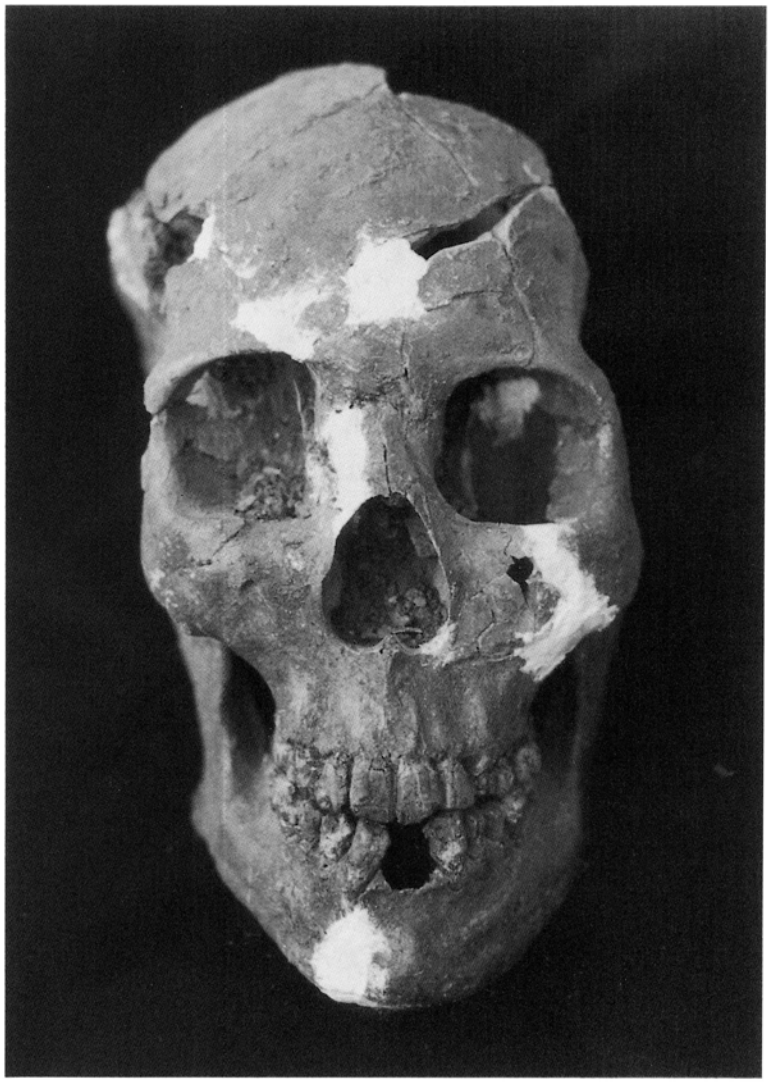
		男性 N	男性 M	女性 N	女性 M
雀居	(弥)	1	161.4	1	150.3
北部九州	(弥)	80	162.1	52	151.2
山口	(弥)	49	163.3	35	151.4
（土井ケ浜）		36	163.7	24	151.1
隈・西小田	(弥)	37	163.5	14	152.4
西北九州	(弥)	16	158.8	8	147.9
大友	(弥)	15	159.1	2	149.0
広田	(弥)	14	154.0	10	142.8
北部九州	(縄)	8	159.2	6	150.5
津雲	(縄) *	13	159.9	16	147.3
吉胡	(縄) *	22	158.9	18	147.7
北部九州・山口	(古)	40	162.8	15	150.2
吉母浜	(中) **	18	159.7	22	146.5

* 右大腿骨最大長の平均値より算出
** 中橋・永井(1985)

表8．抜歯

番号	性	年齢	型式	
7-1	女	成年	?	C
			?	?
7-2	女	成年	C	C
			I I	I I
K-7	女	熟年	C	C
			?	?

写真. 1



2号土壙墓出土人骨（女性成年）